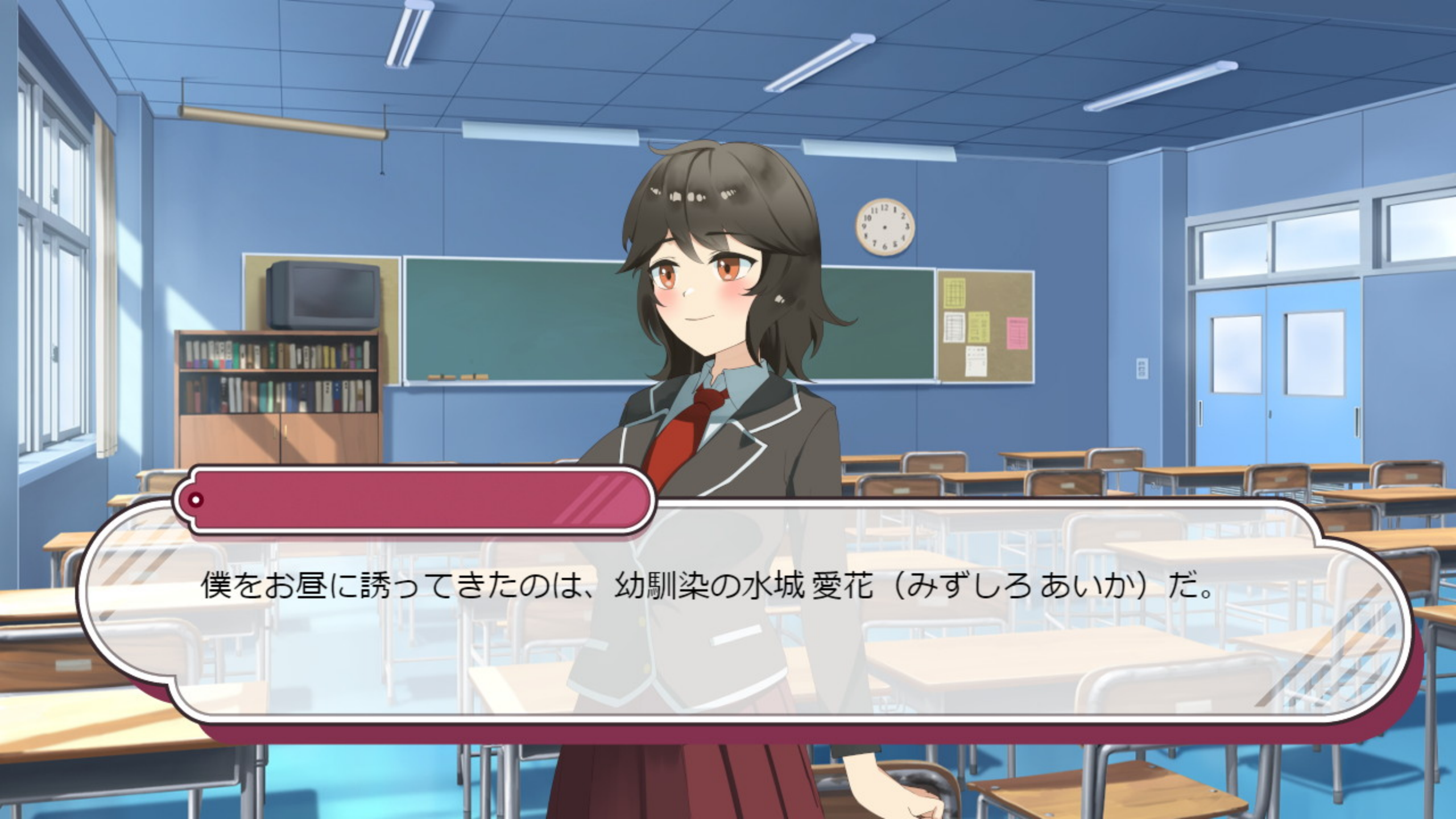
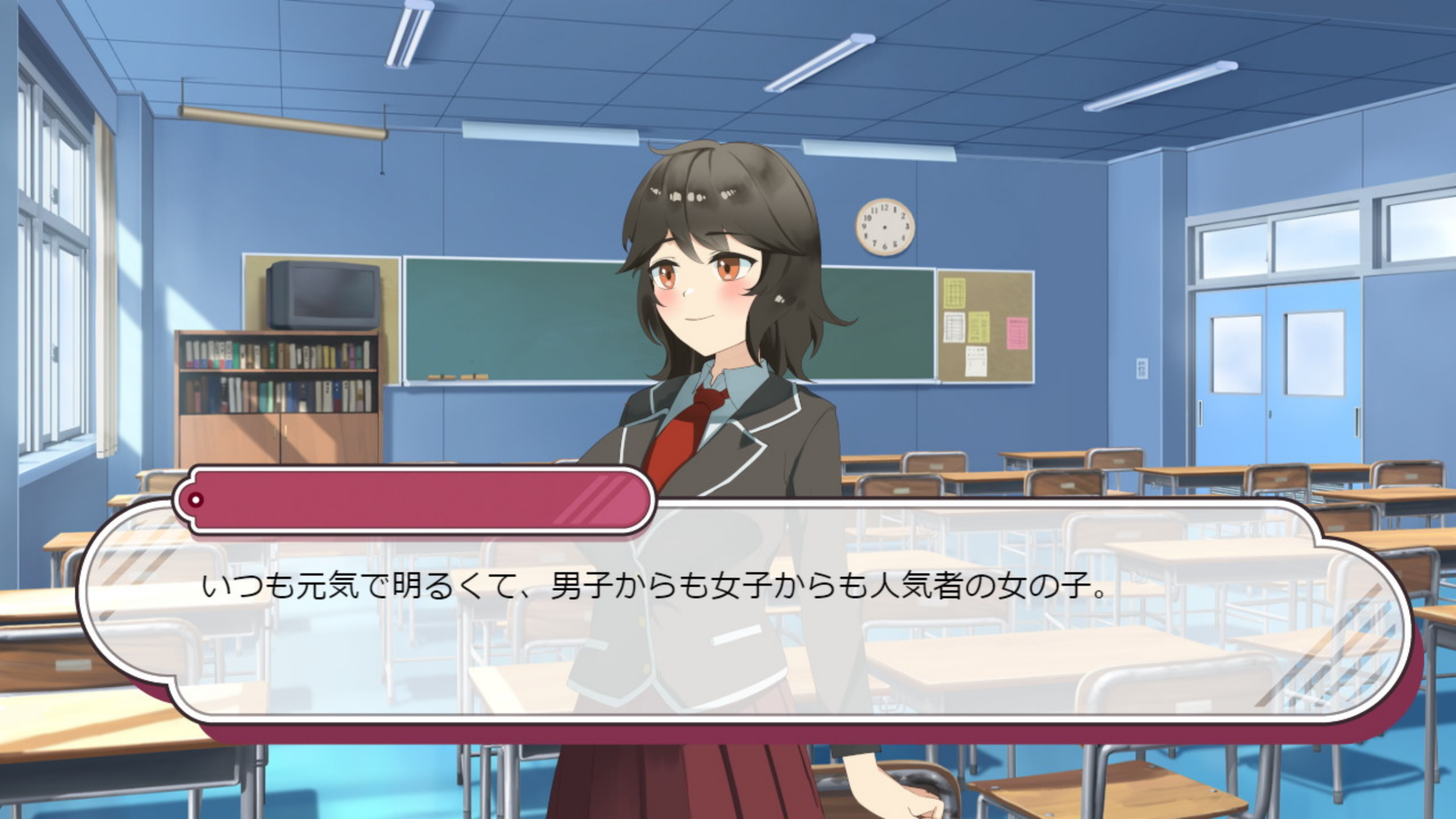
隠れビッチ彼女

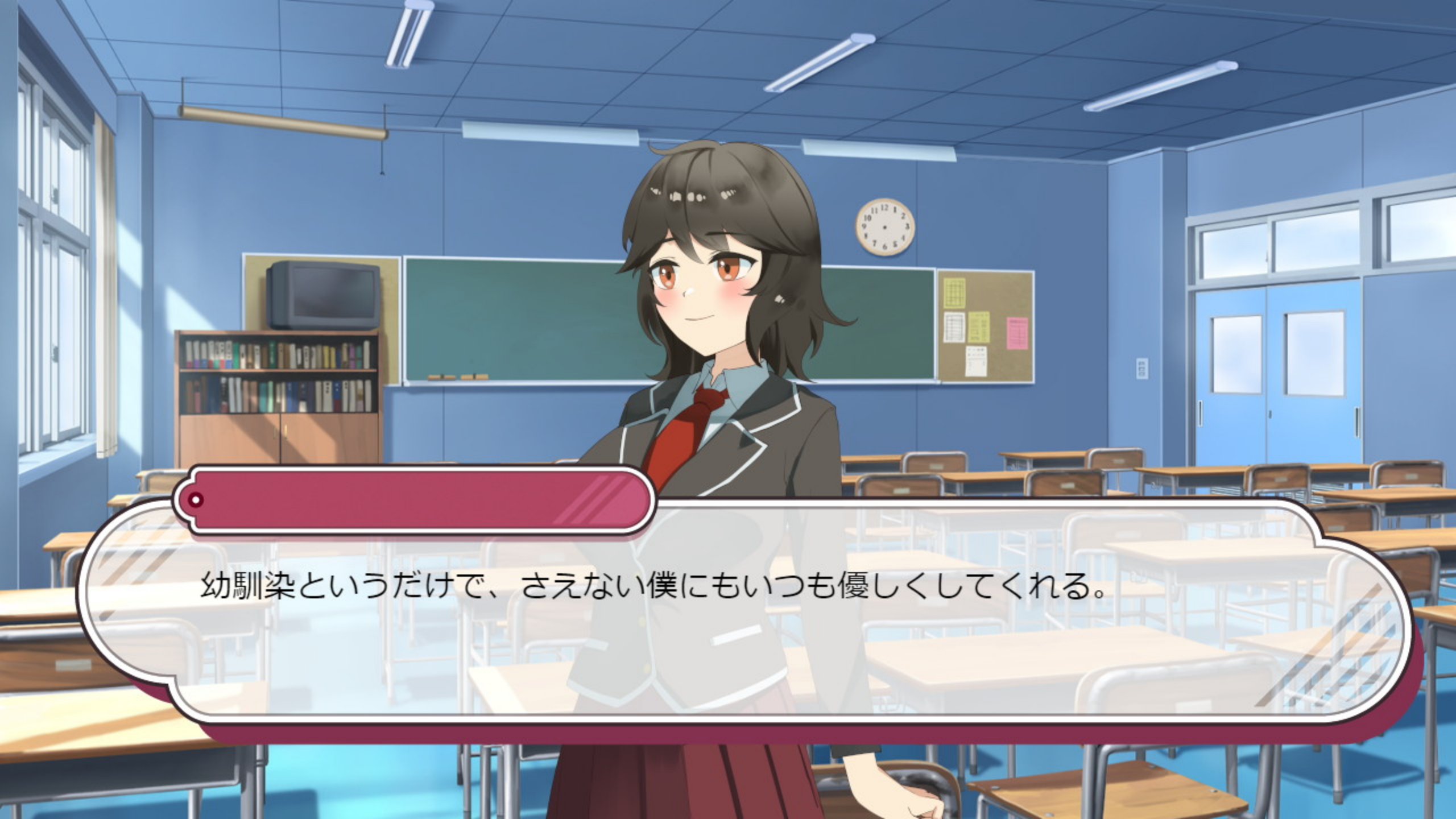
頼んだら誰とでも寝取らせHしてくれる幼馴染

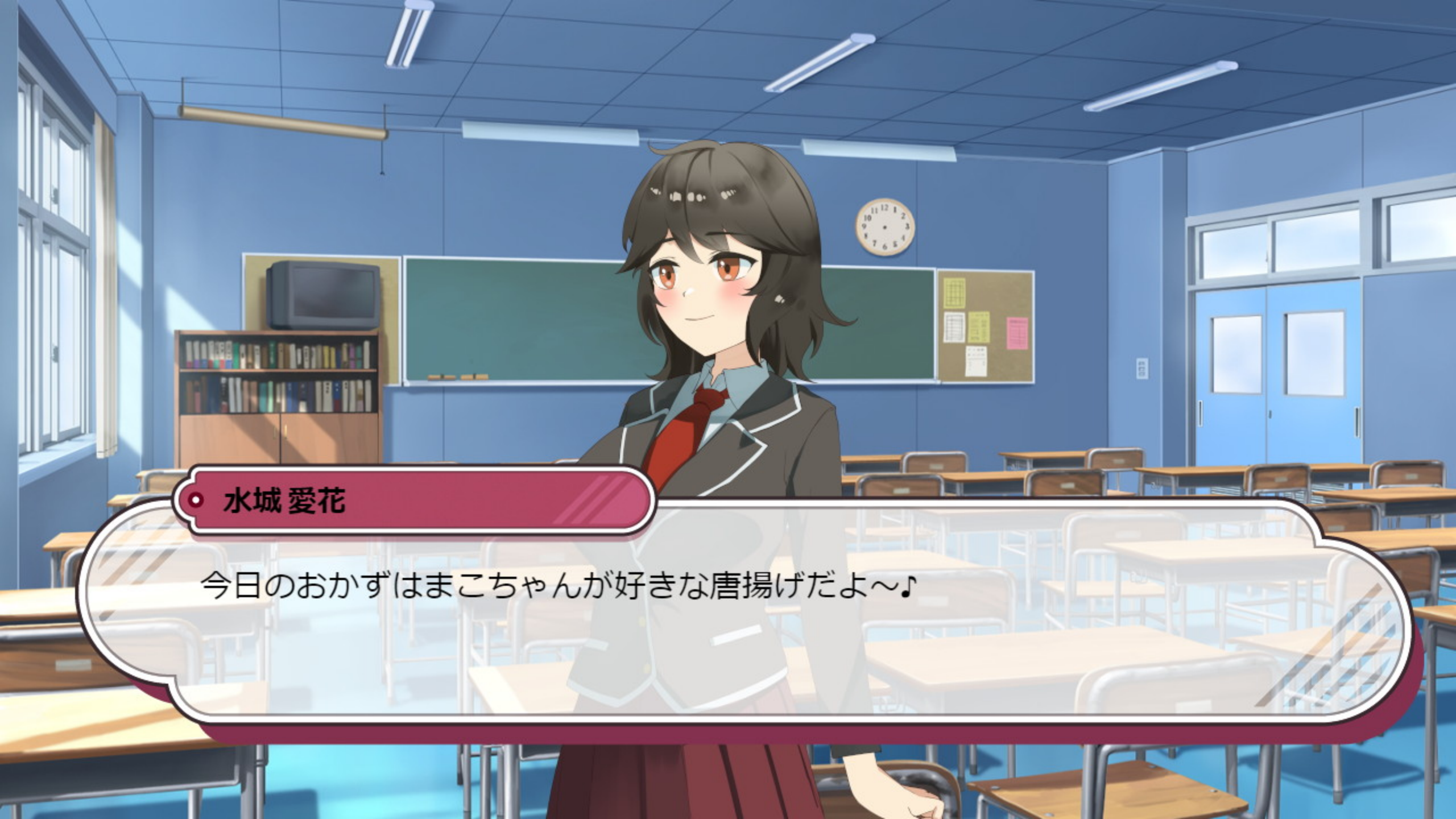
ある日の昼休み

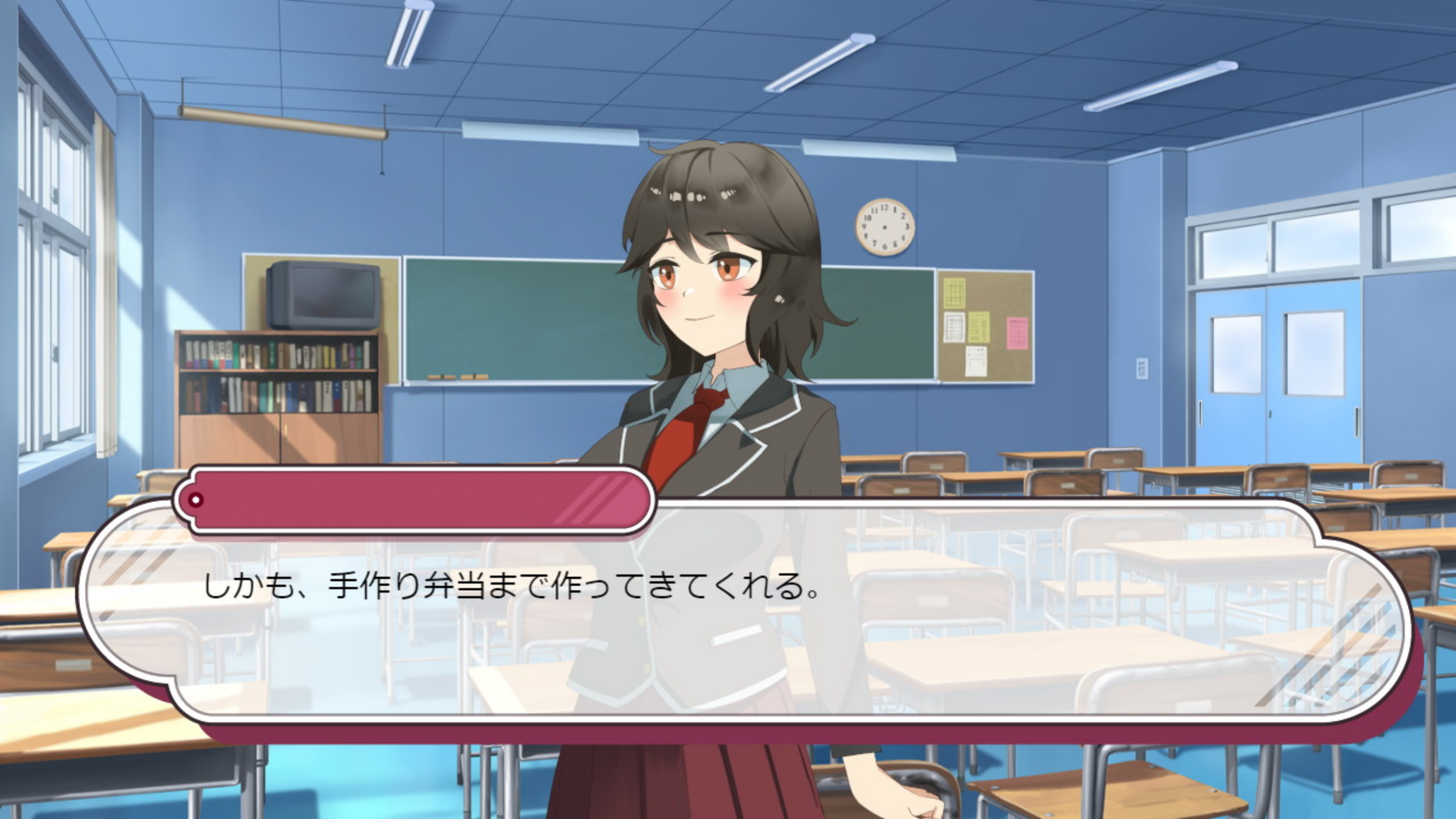
水城 愛花
まこちゃ～ん！ お昼一緒に食べよ！

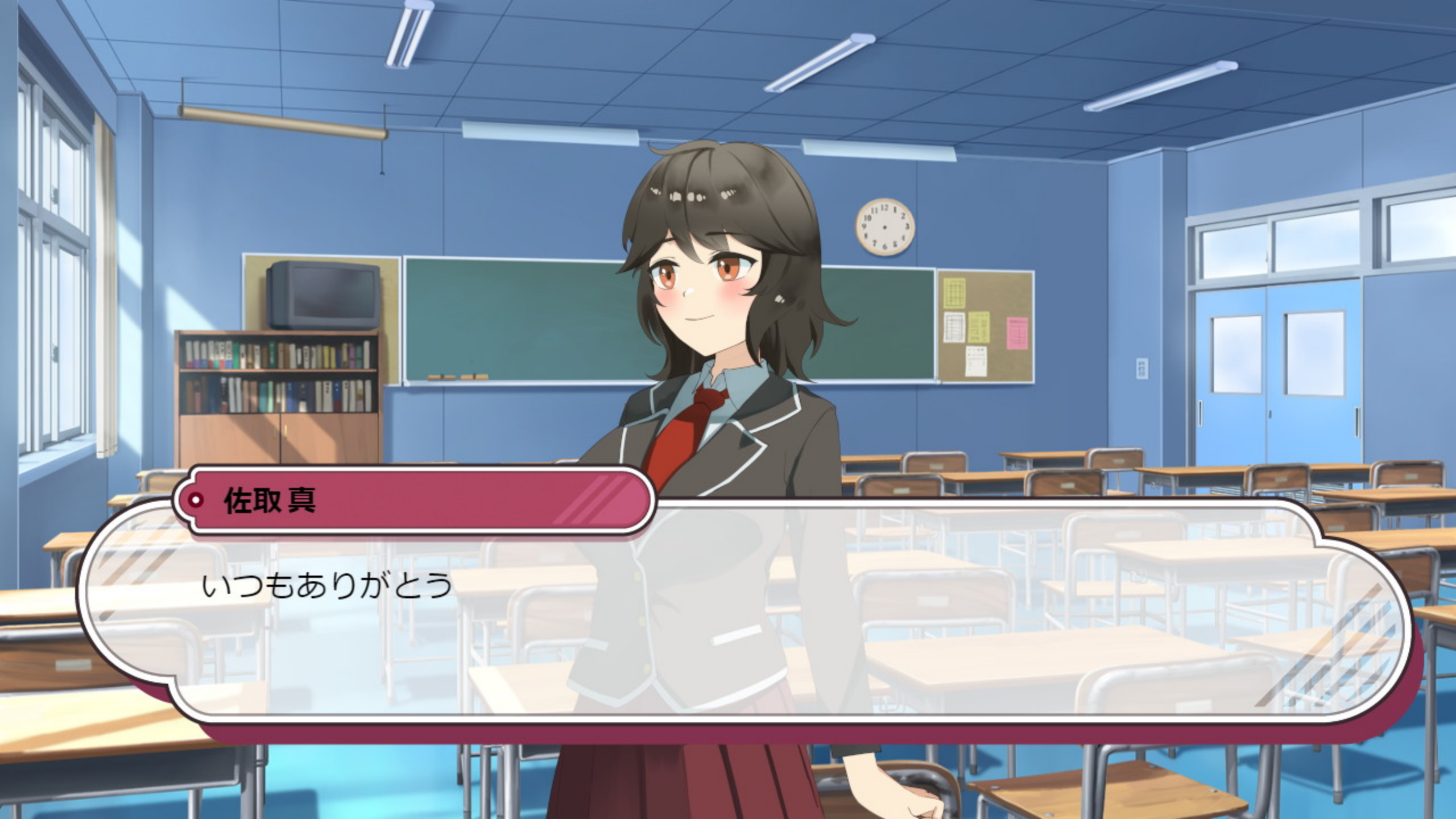

僕をお昼に誘ってきたのは、幼馴染の水城 愛花（みずしろ あいか）だ。

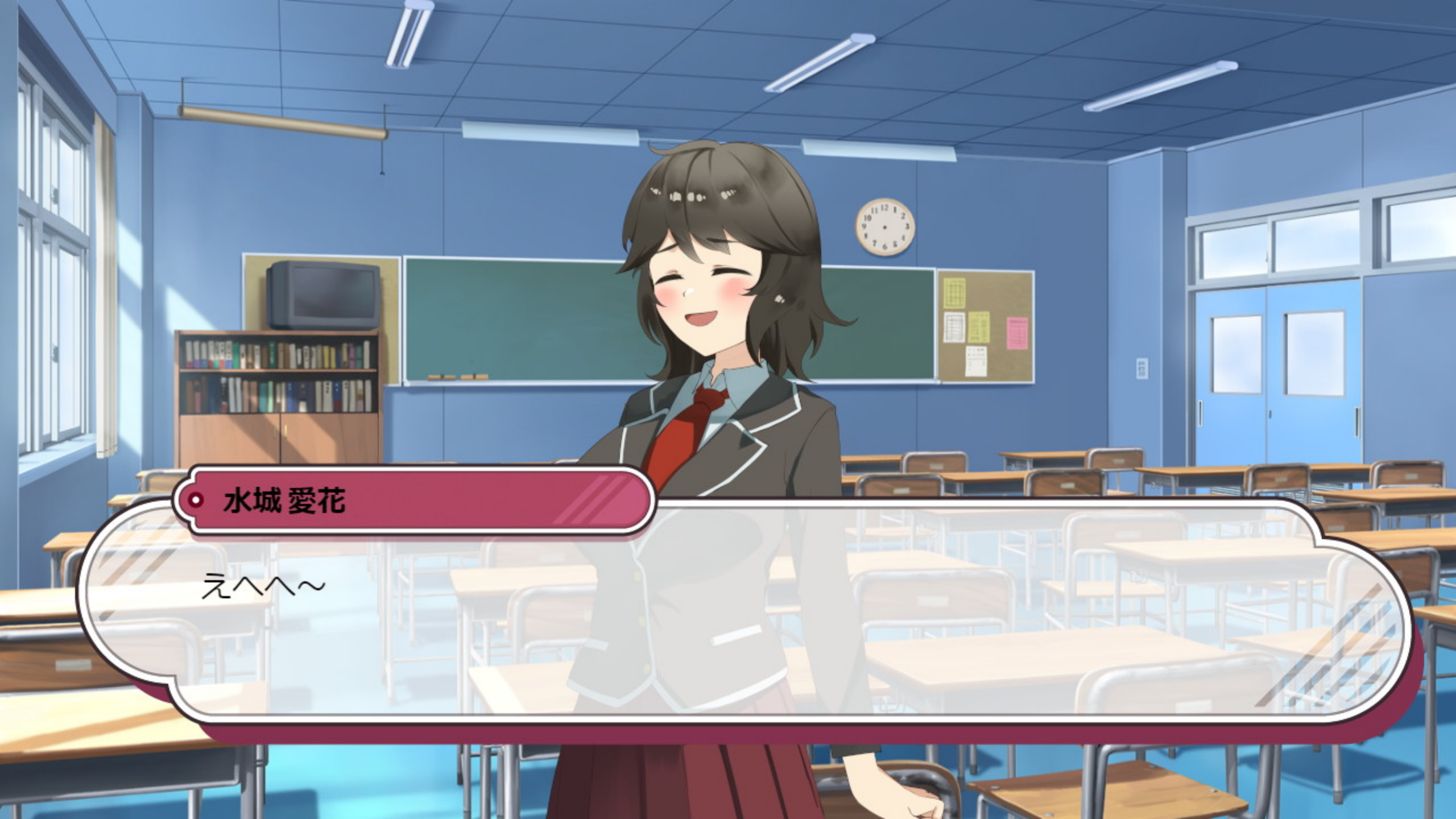

いつも元気で明るくて、男子からも女子からも人気者の女の子。

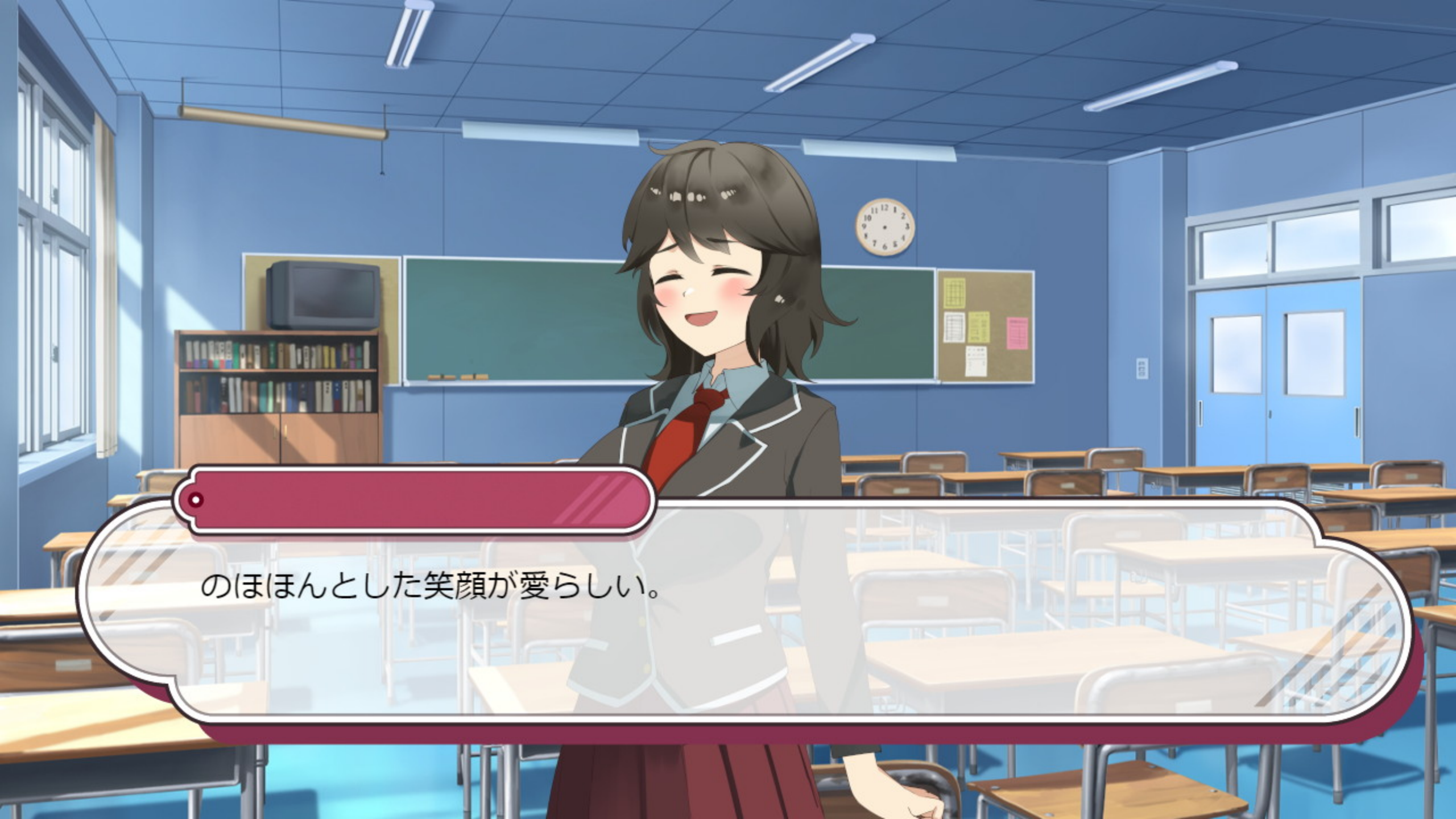

幼馴染というだけで、さえない僕にもいつも優しくしてくれる。

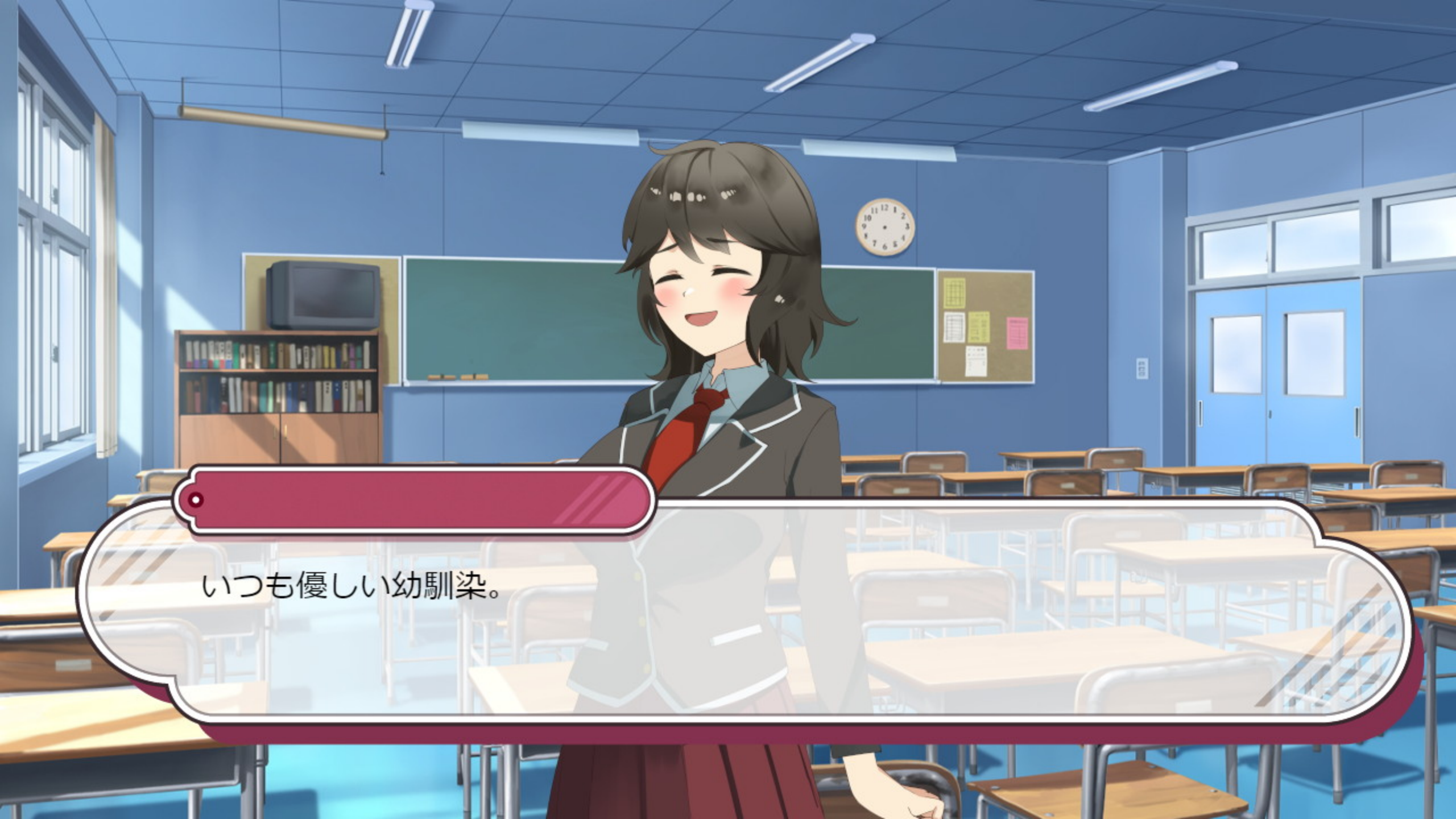

水城 愛花
今日のおかずはまこちゃんが好きな唐揚げだよ～♪

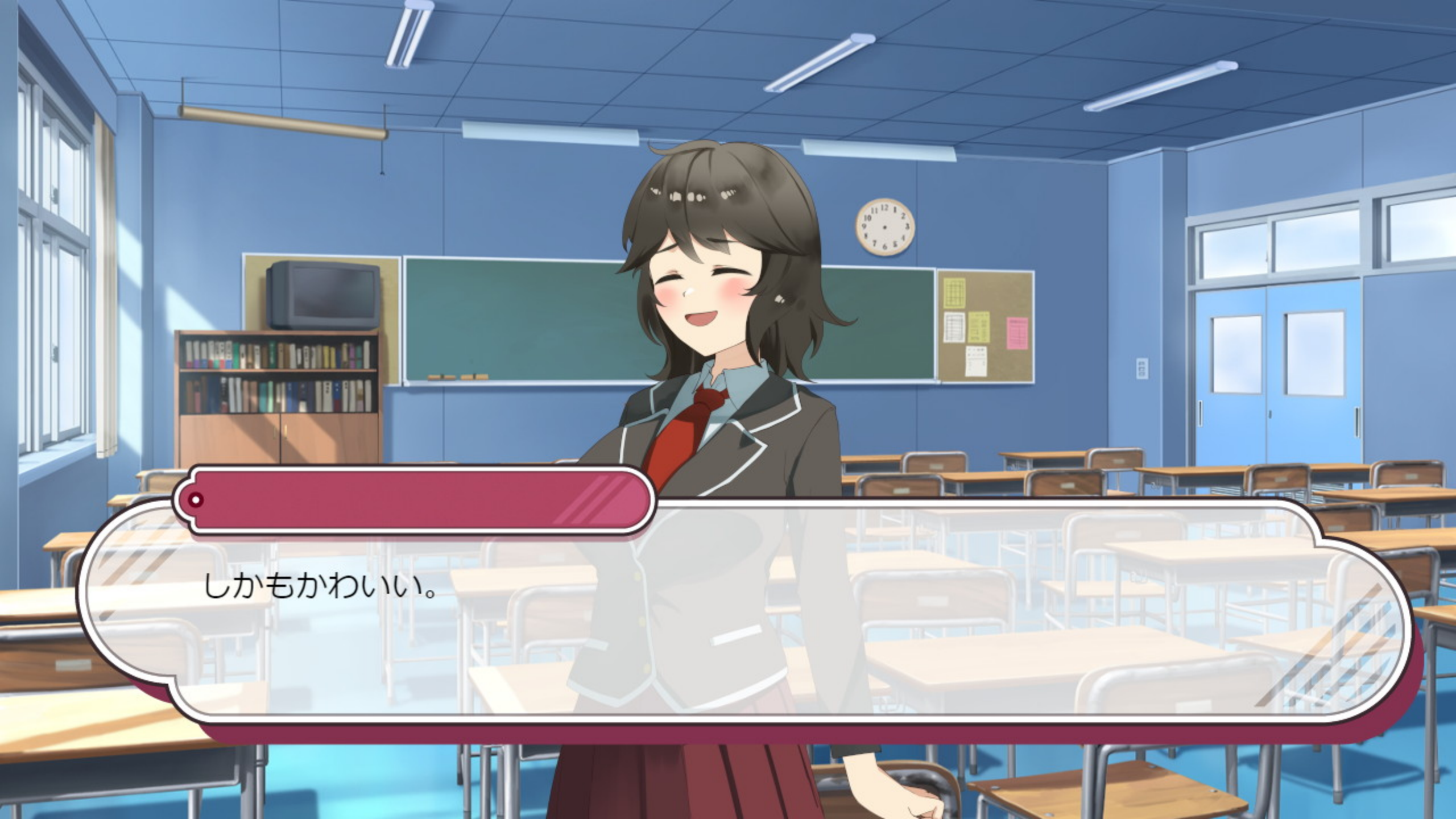

しかも、手作り弁当まで作ってきてくれる。

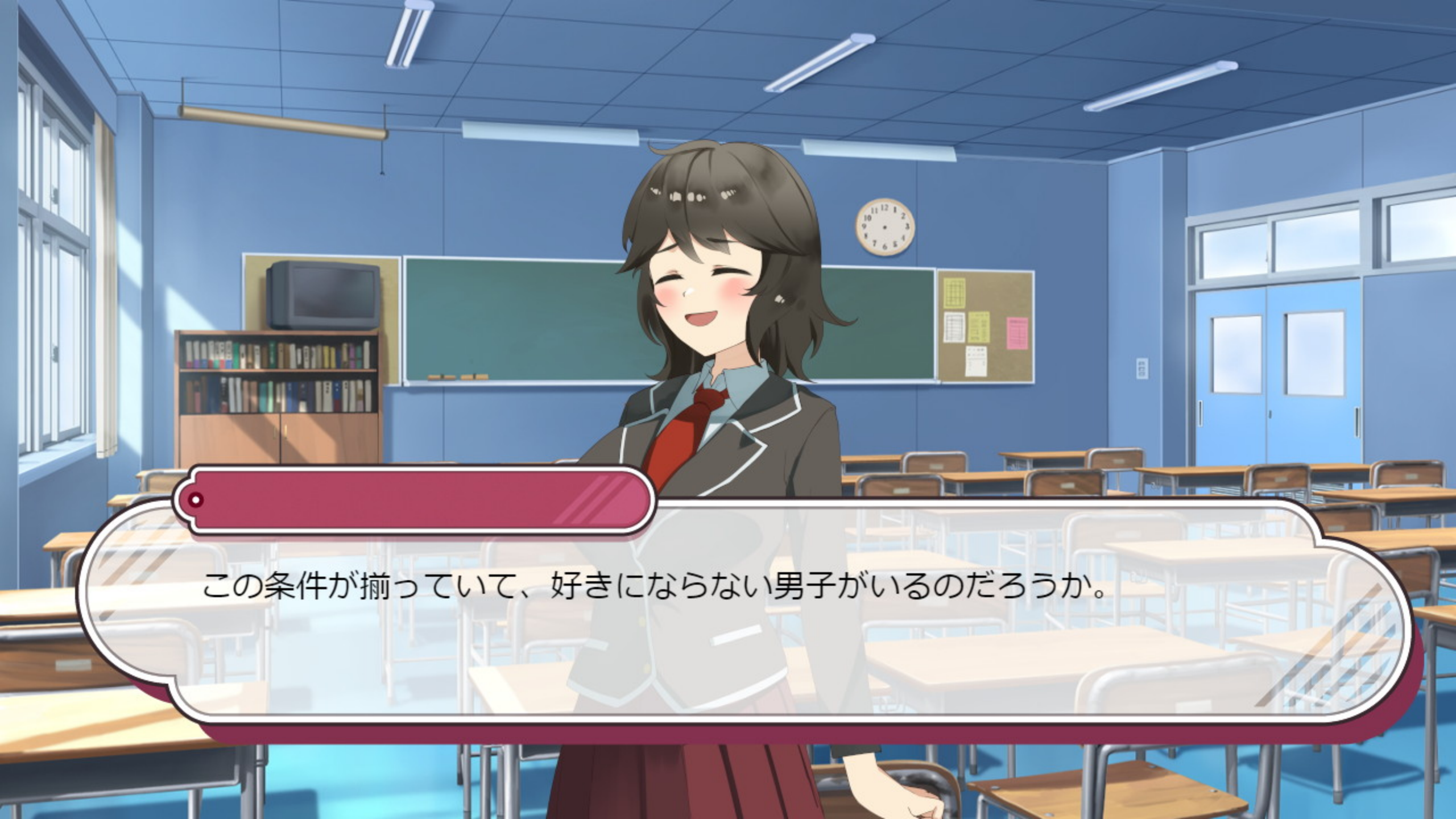

佐取 真
いつもありがとう

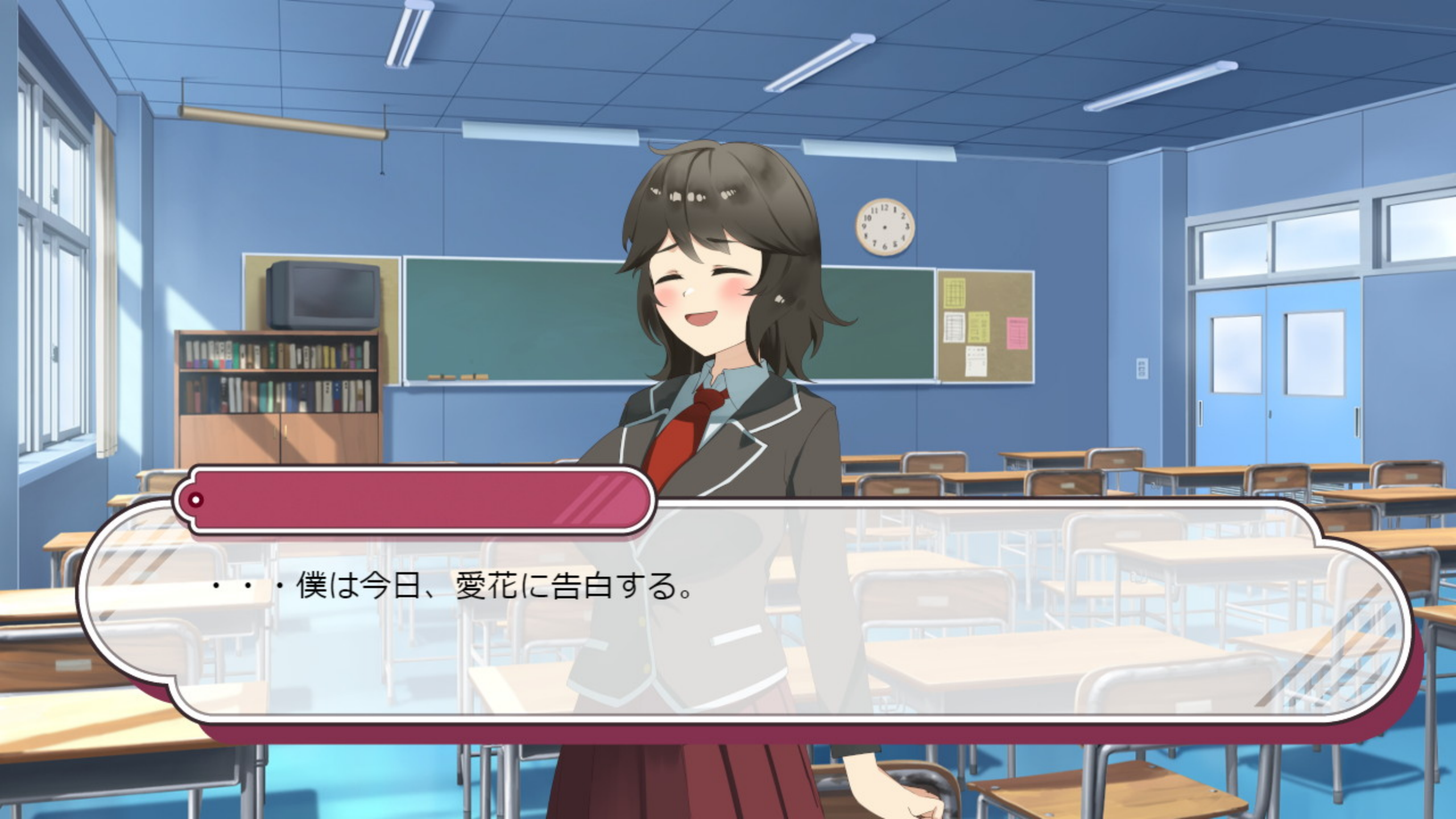

水城 愛花
えへへ～

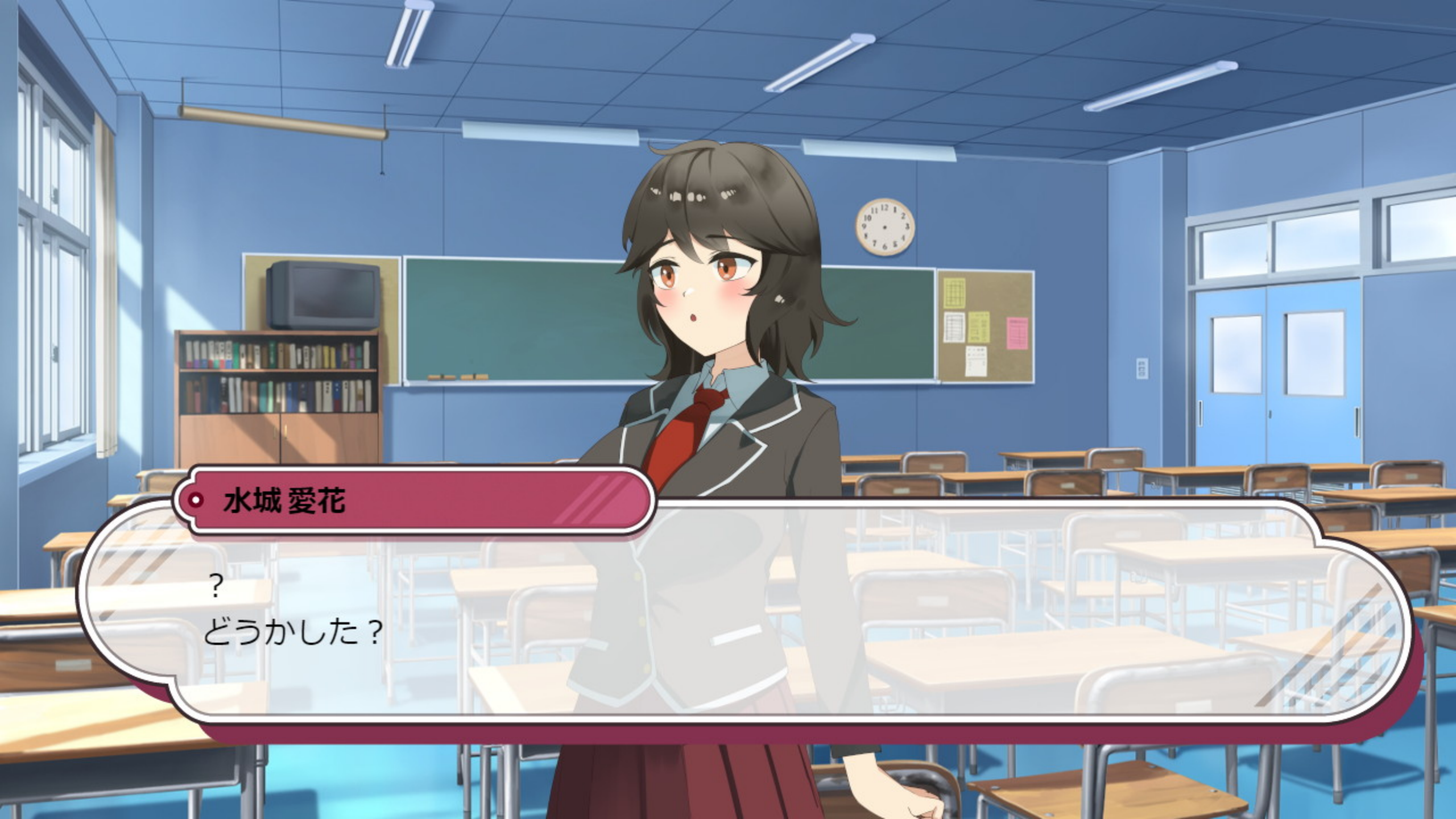

のほほんとした笑顔が愛らしい。

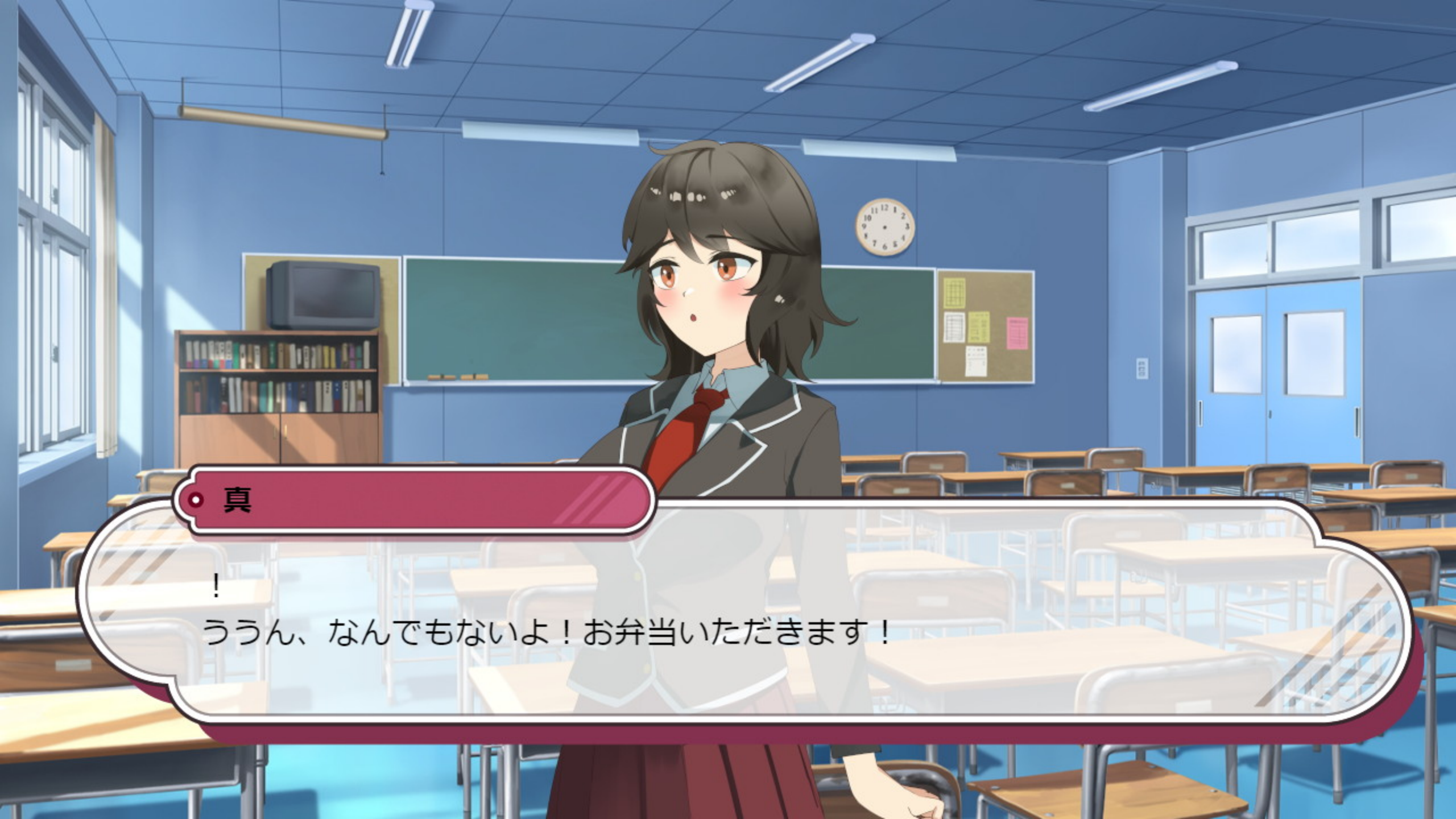

いつも優しい幼馴染。

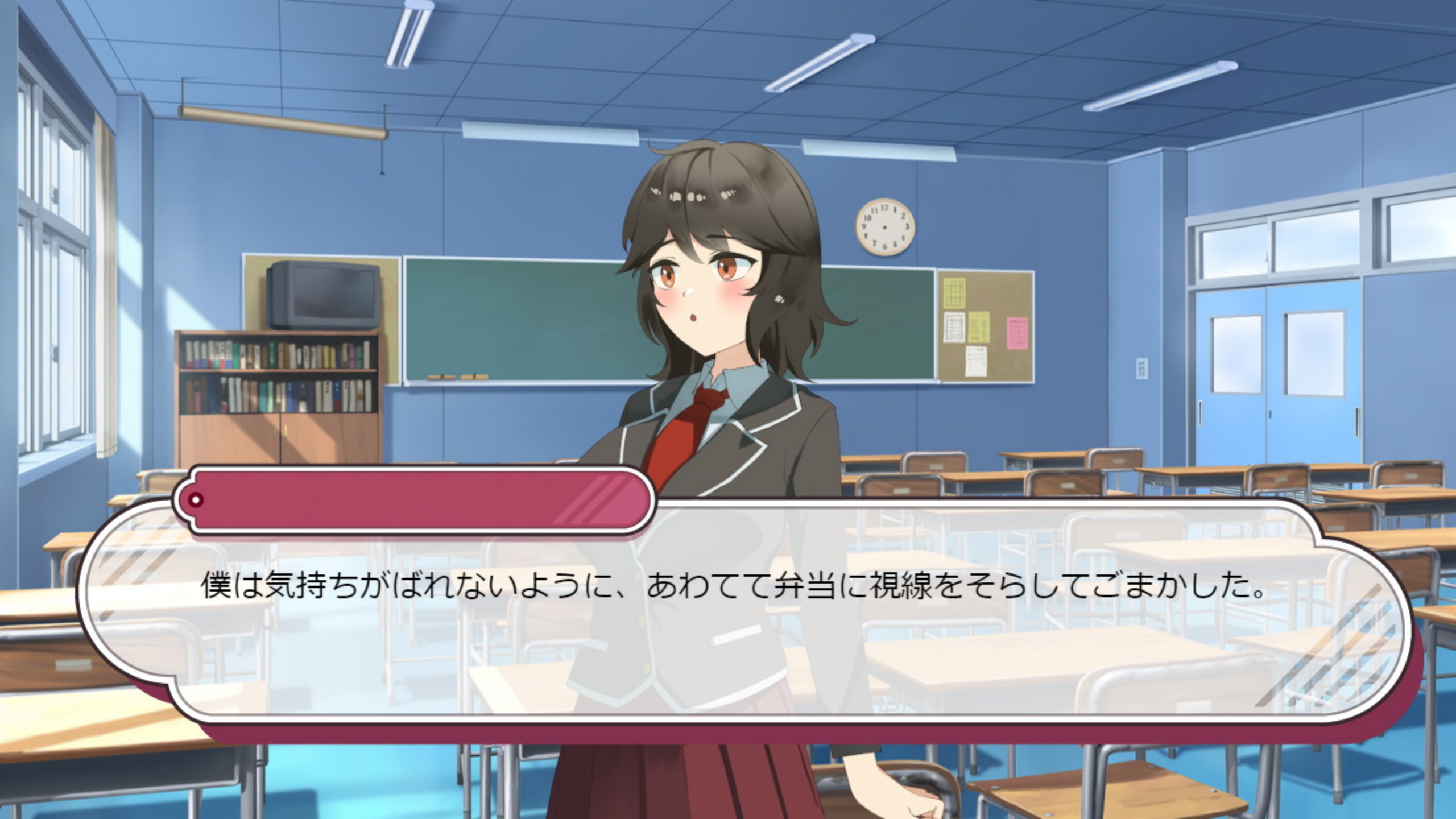

しかもかわいい。


この条件が揃っていて、好きにならない男子がいるのだろうか。

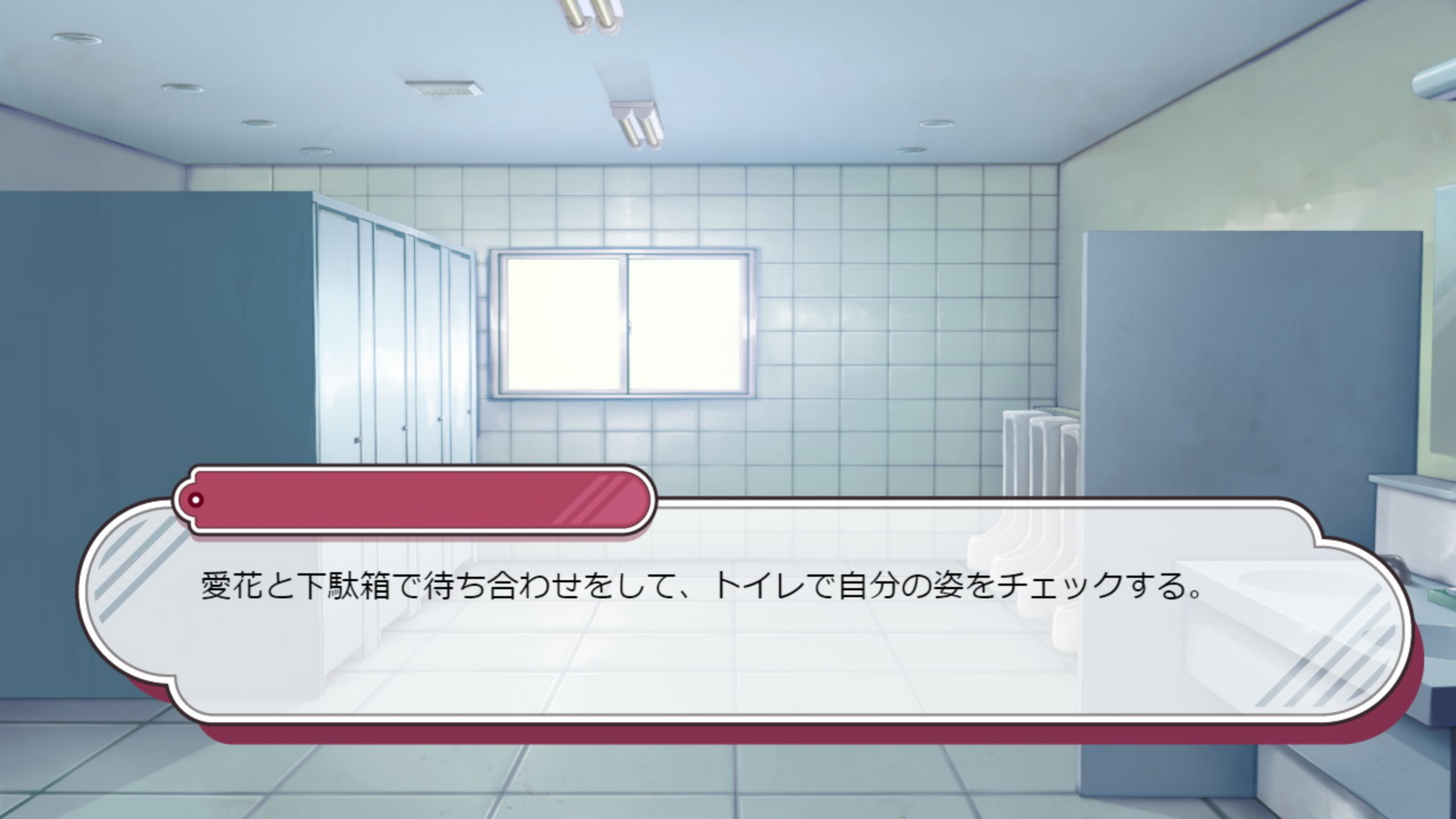

・・・僕は今日、愛花に告白する。


水城 愛花
？
どうかした？


真
！
ううん、なんでもないよ！お弁当いただきます！


僕は気持ちがばれないように、あわてて弁当に視線をそらしてごまかした。

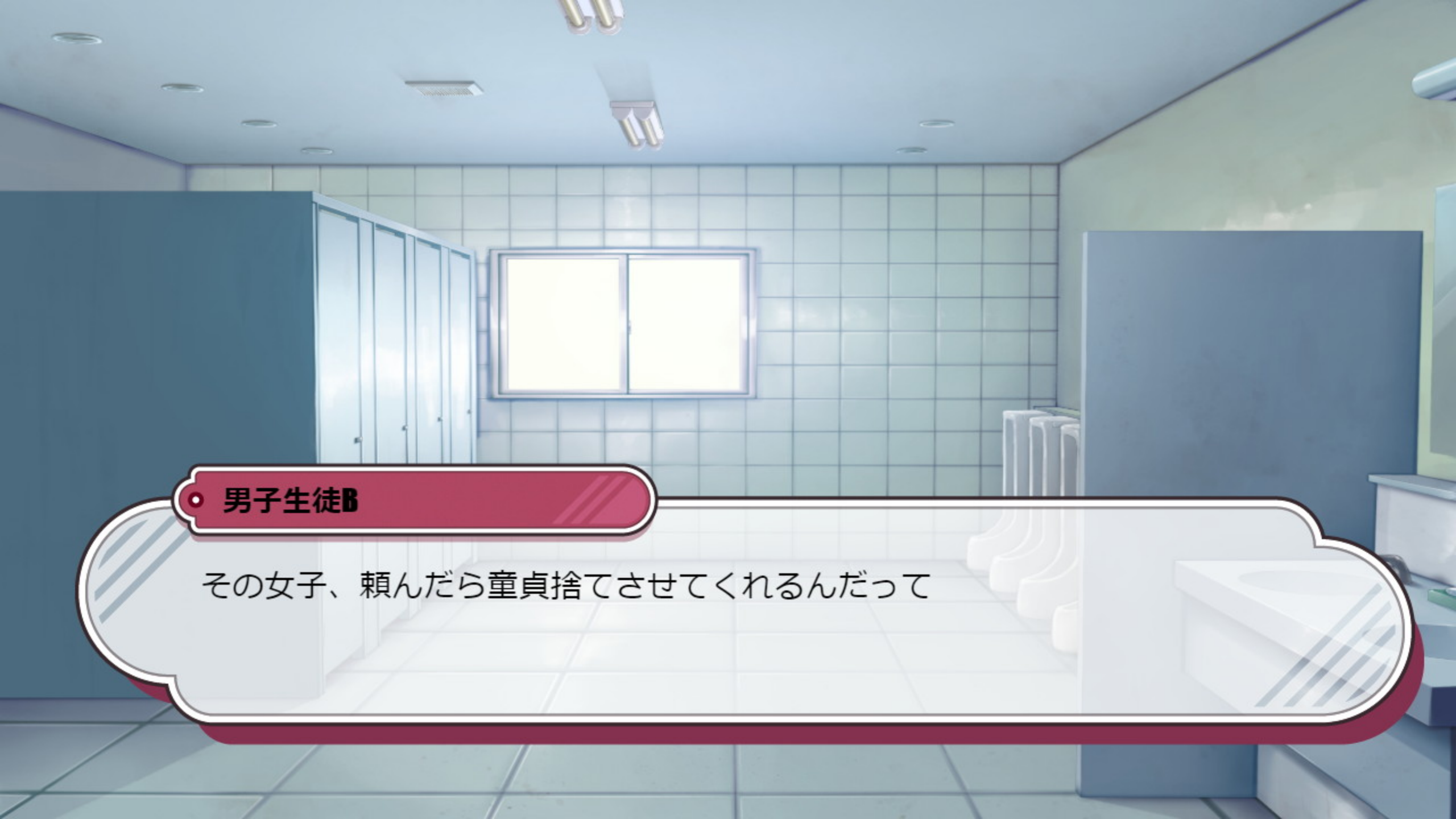
放課後になった。

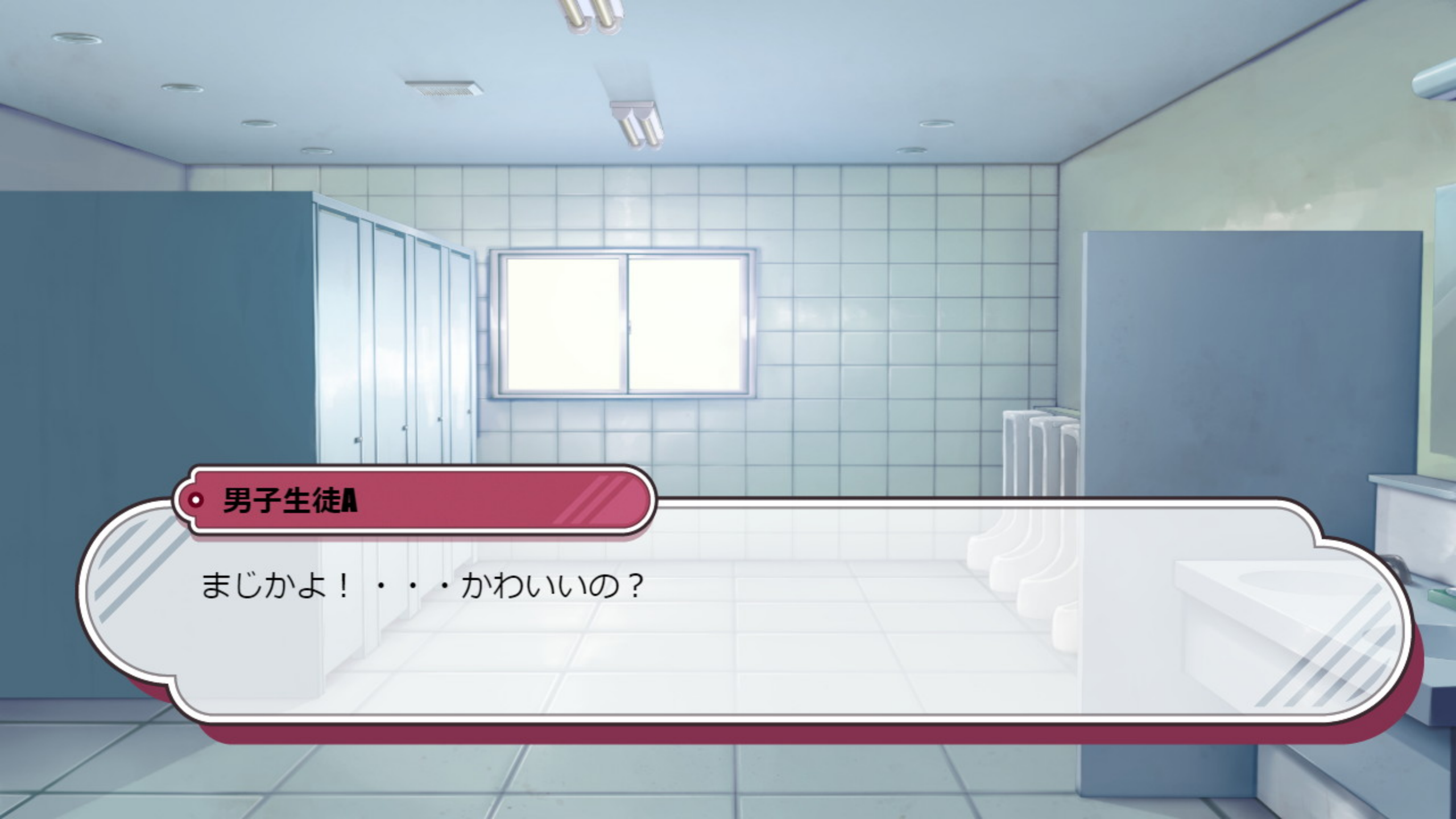

愛花と下駄箱で待ち合わせをして、トイレで自分の姿をチェックする。

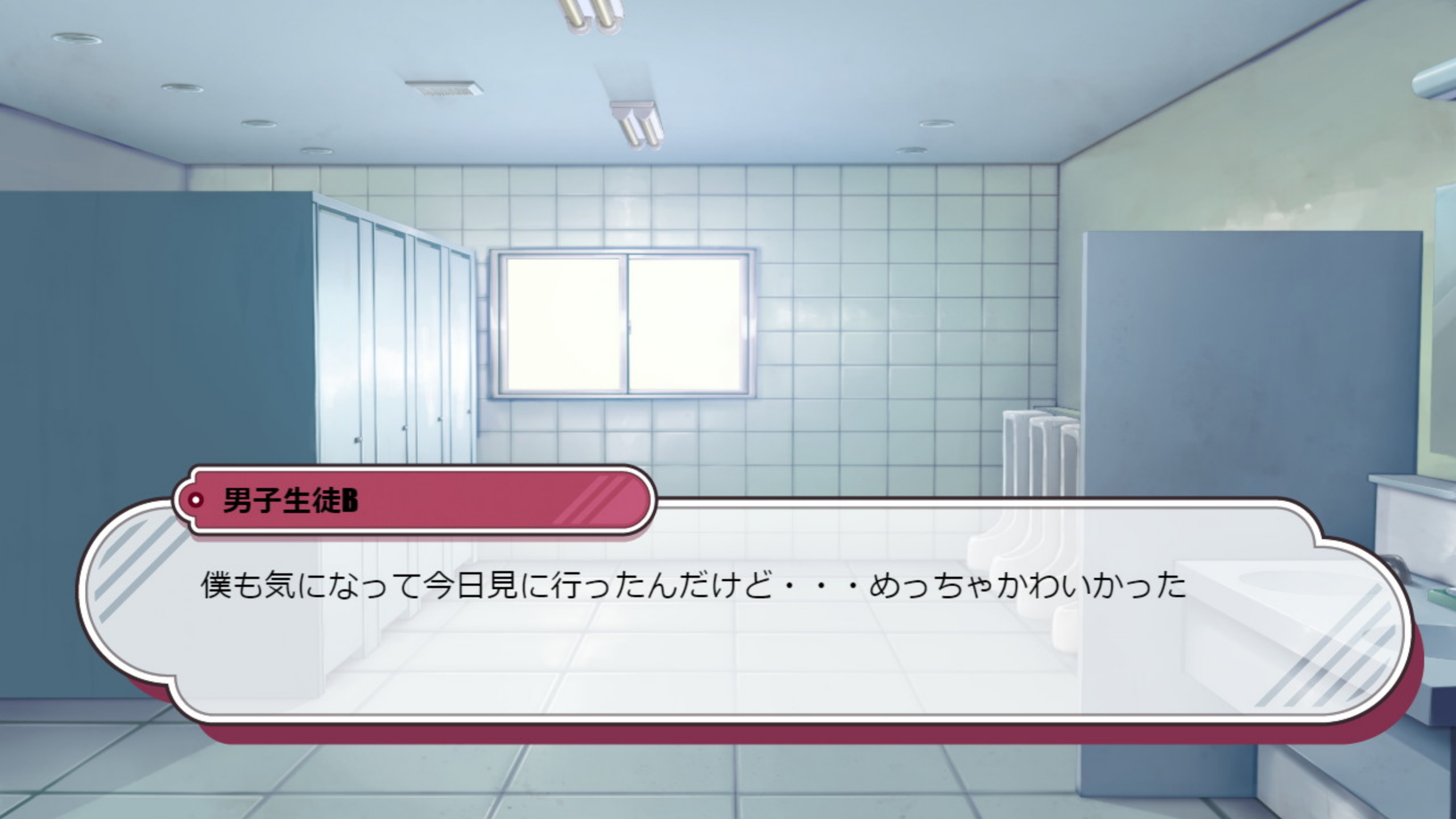
・・・よし、やるぞ

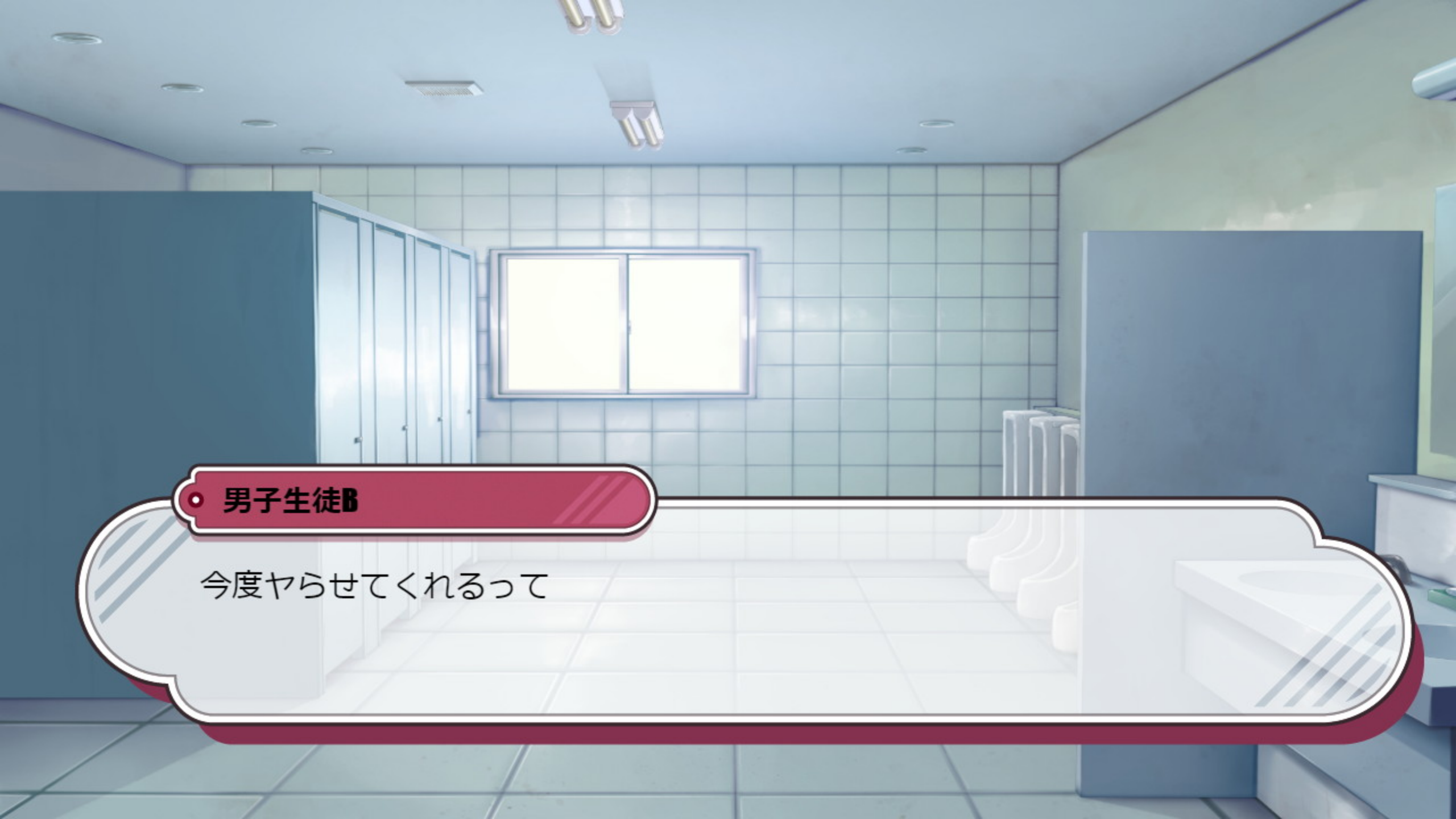
男子生徒A
・・・それでさー

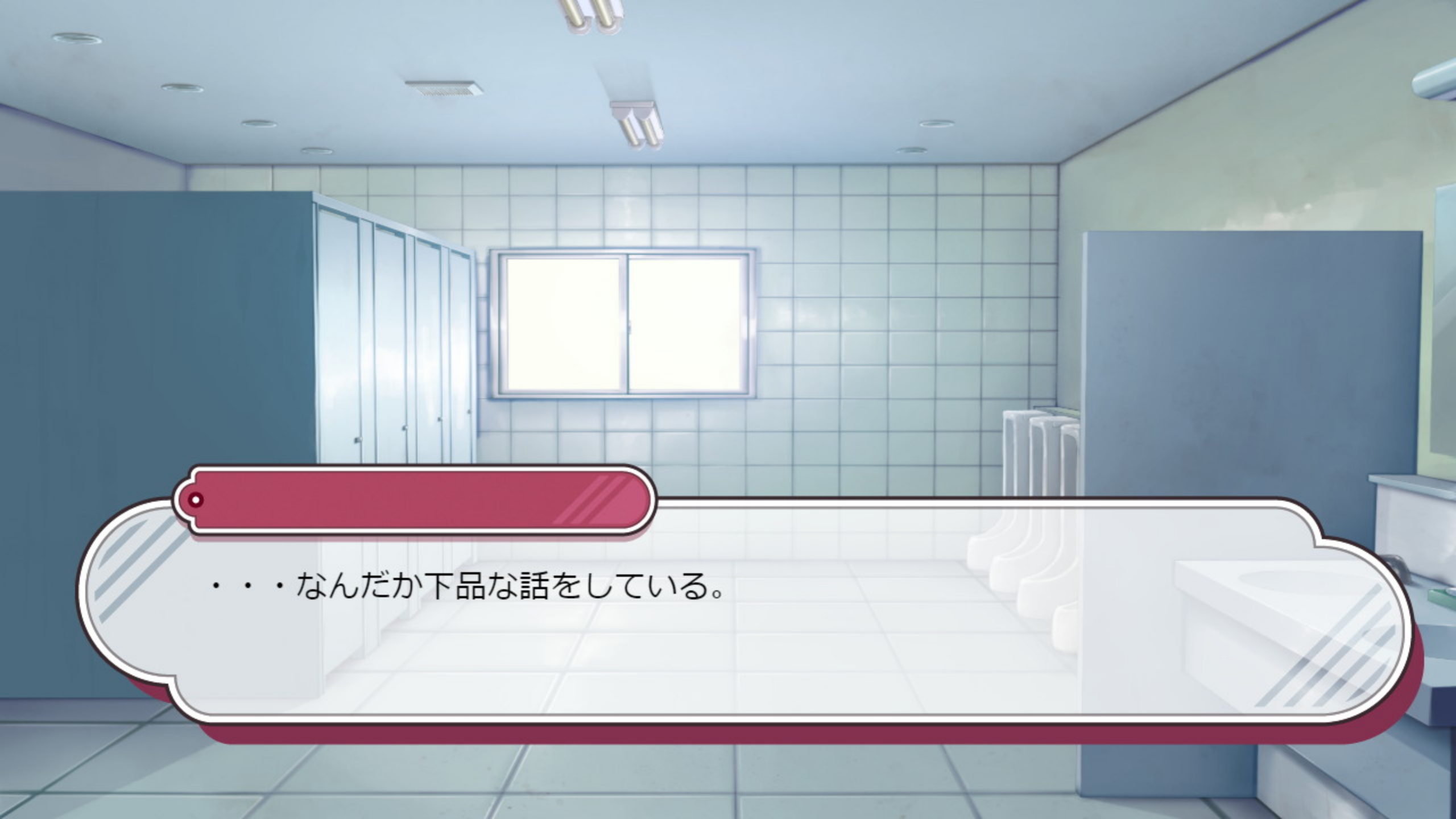
入れ違いで男子とすれ違う。

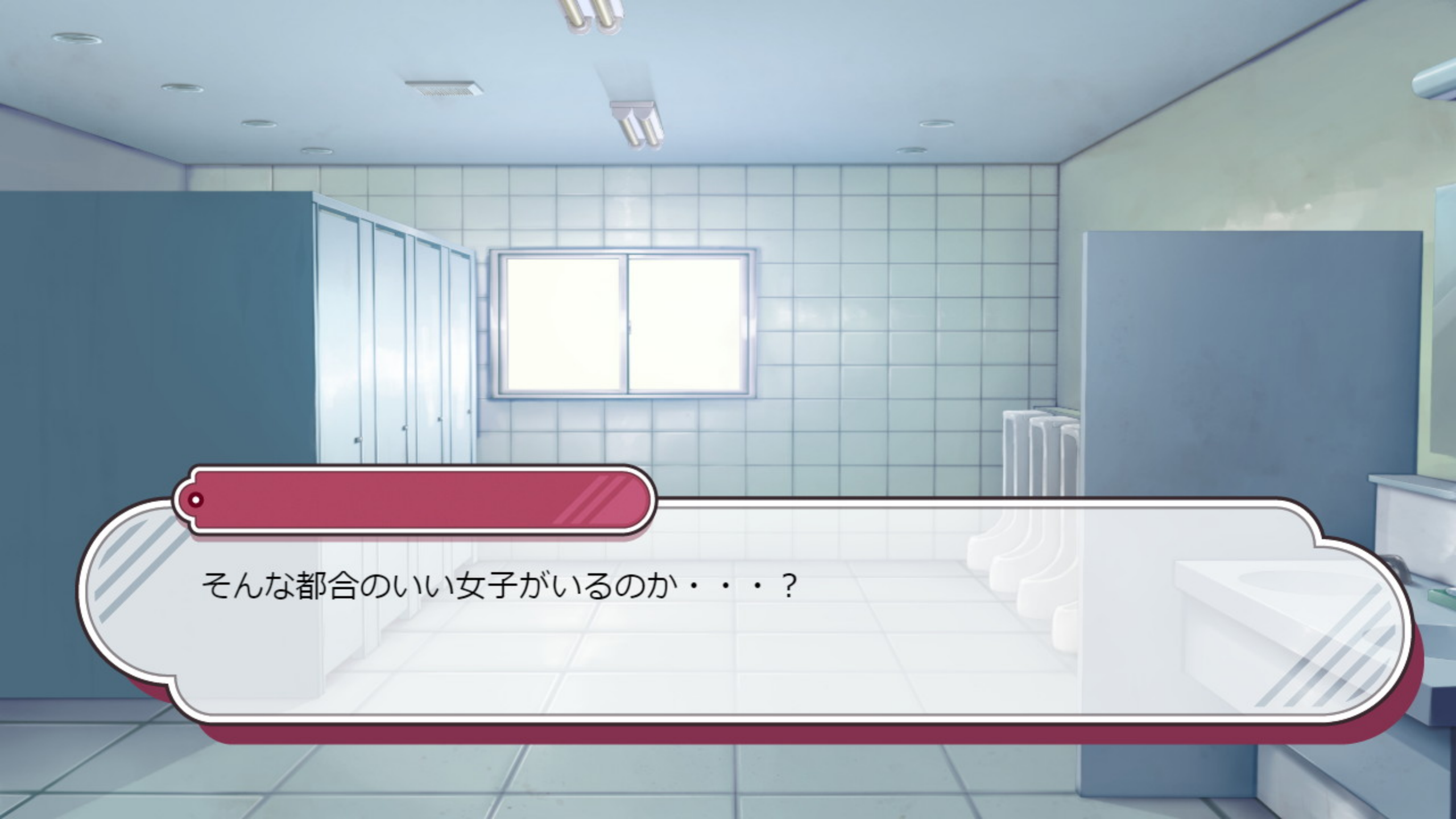

男子生徒B
その女子、頼んだら童貞捨てさせてくれるんだって

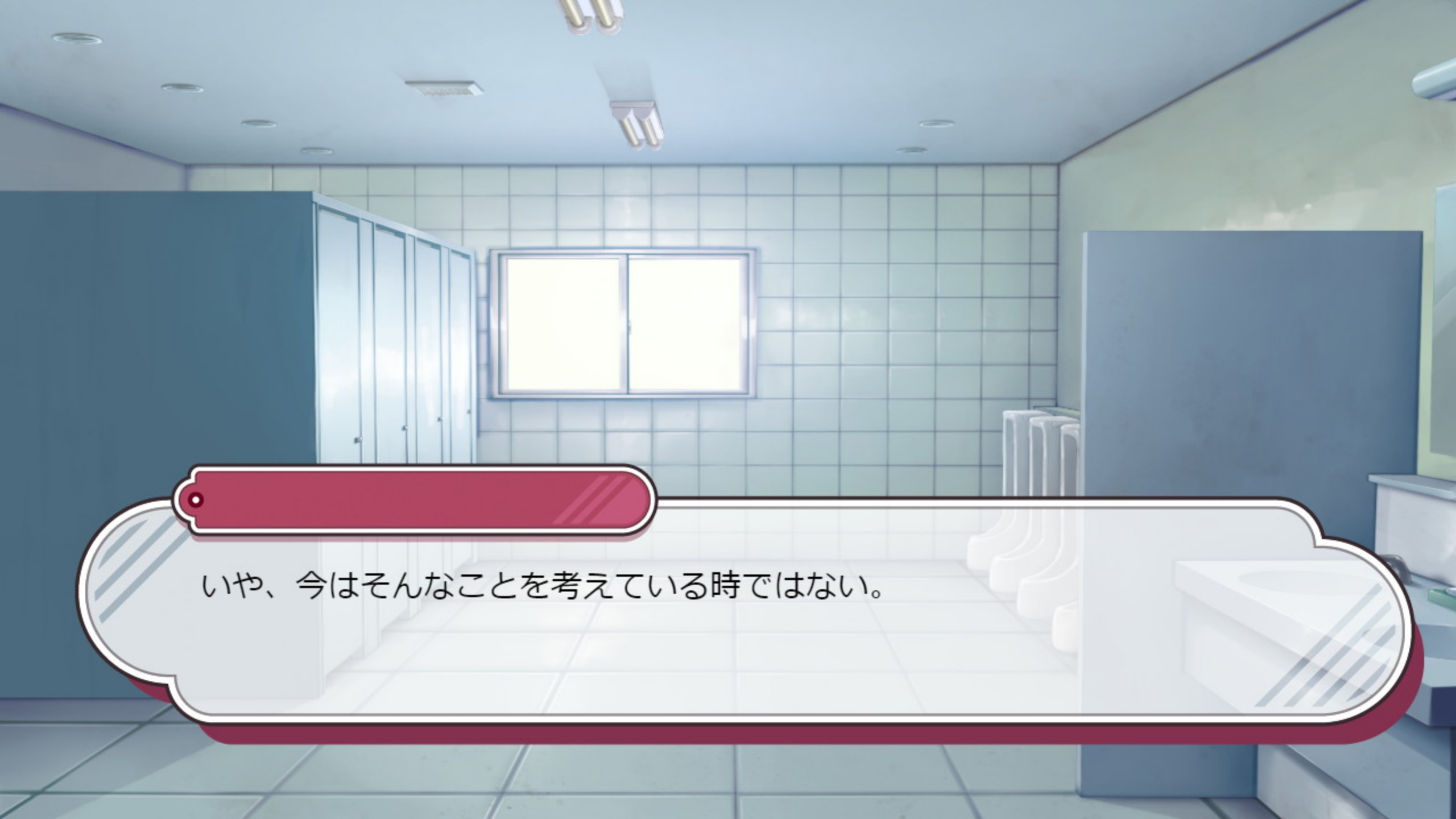

男子生徒A
まじかよ！・・・かわいいの？


男子生徒B
僕も気になって今日見に行ったんだけど・・・めっちゃかわいかった


男子生徒B
今度ヤらせてくれるって


・・・なんだか下品な話をしている。


そんな都合のいい女子がいるのか・・・？

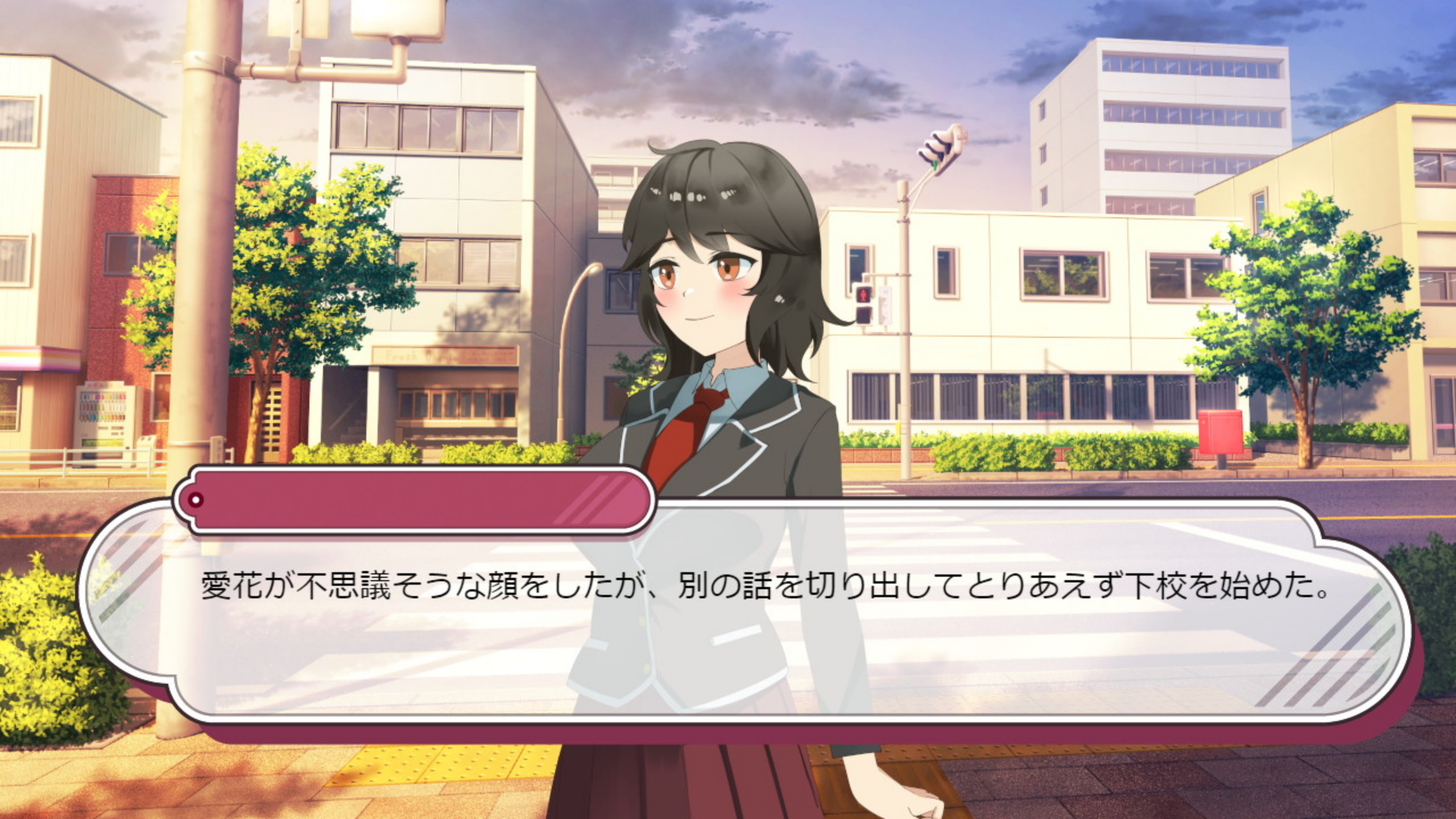

いや、今はそんなことを考えている時ではない。

とにかく告白を成功させるぞ・・・！

水城 愛花
まこちゃん！ 遅かったね

真
ごめんごめん、ちょっとね

水城 愛花
?


愛花が不思議そうな顔をしたが、別の話を切り出してとりあえず下校を始めた。

真
ちょっと公園によって行かない？

真
愛花が好きなオレンジジュースおごるよ

水城 愛花
え？ ほんと？
やったぁー

僕の決意を知らず、愛花は素直に喜んでいる。

ベンチで並んでジュースを飲みながら、
しばらく他愛のない話をして過ごす。

水城 愛花
・・・それで、今日はどうしたの？
・・・何か大事な話？

おしゃべりが一区切りついたタイミングで、愛花がそう切り出した。

・・・そろそろごまかせない。

僕は意を決して愛花に向き直った。

真
愛花！

水城 愛花
！・・・は、はい！

突然の大きな声に愛花が驚く。

真
僕と付き合ってください！

水城 愛花
・・・ほえ

きょとんとしている愛花の目を、じっと見つめる。

真剣な思いが伝わったのか、愛花もこちらをしっかりと見つめ返してきた。

水城 愛花
・・・その、気持ちは嬉しいんだけど

真
・・・そっか

必ず成功するとは思っていなかったが、
それなりに仲良くなっていたつもりだった。

正直かなりショックだ。

水城 愛花
いや！ そうじゃなくて！

真
え？

水城 愛花
その、私もできればまこちゃんとお付き合いはしたいんだけど・・・

真
本当！？

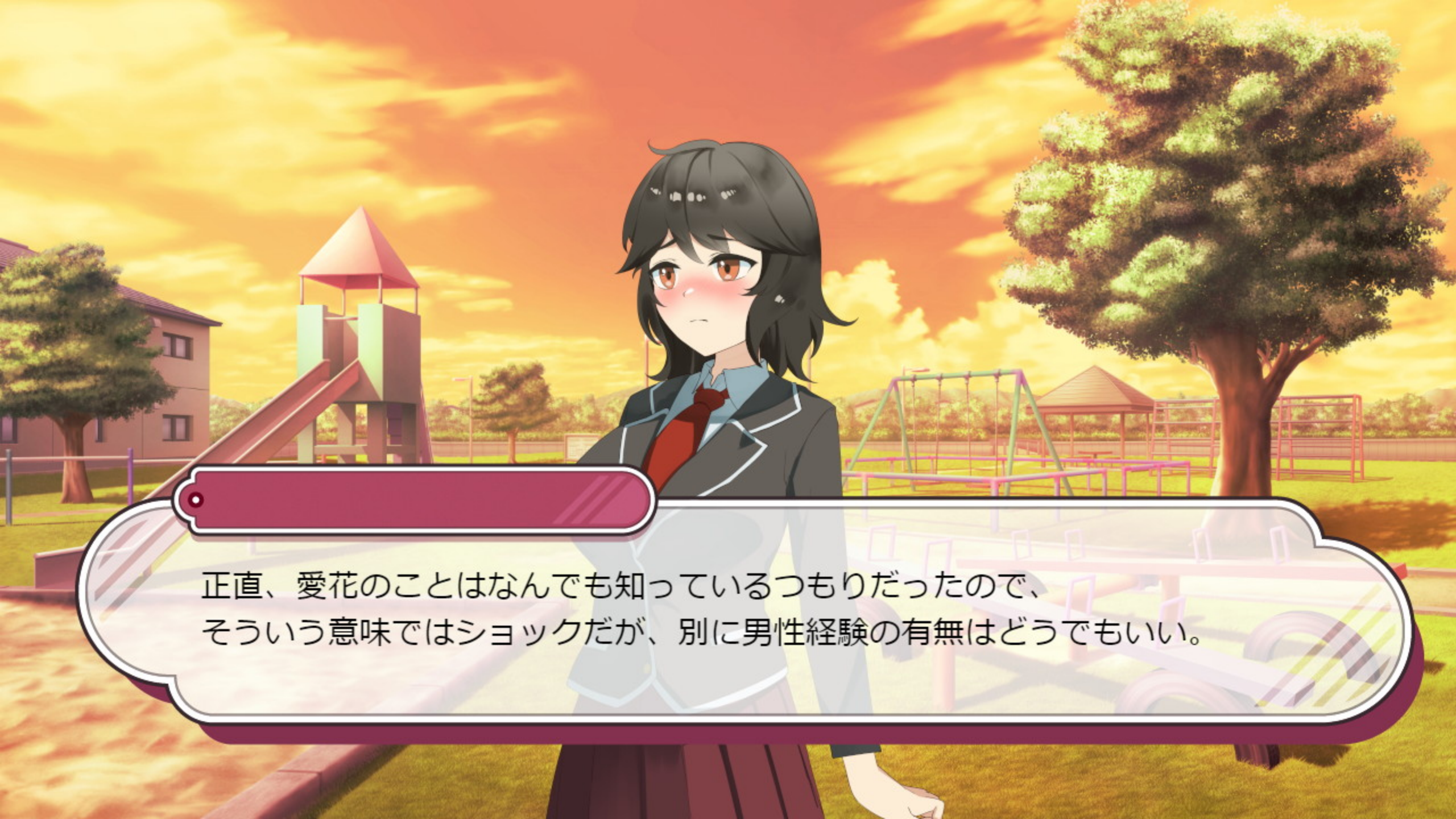
水城 愛花
うん、でもね・・・

水城 愛花
私、その、なんていうか・・・

水城 愛花
初めてじゃなくて・・・

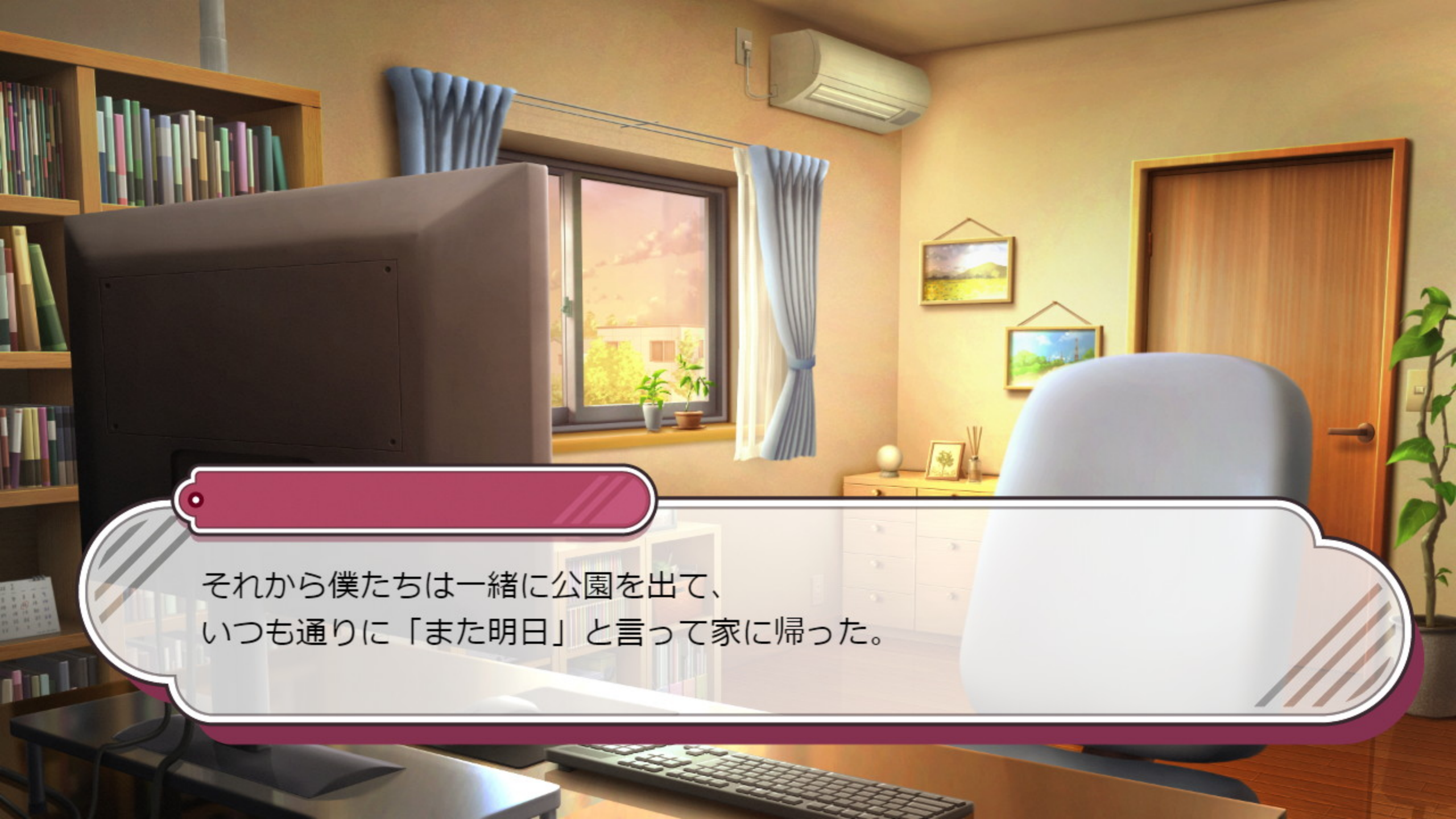
真
！

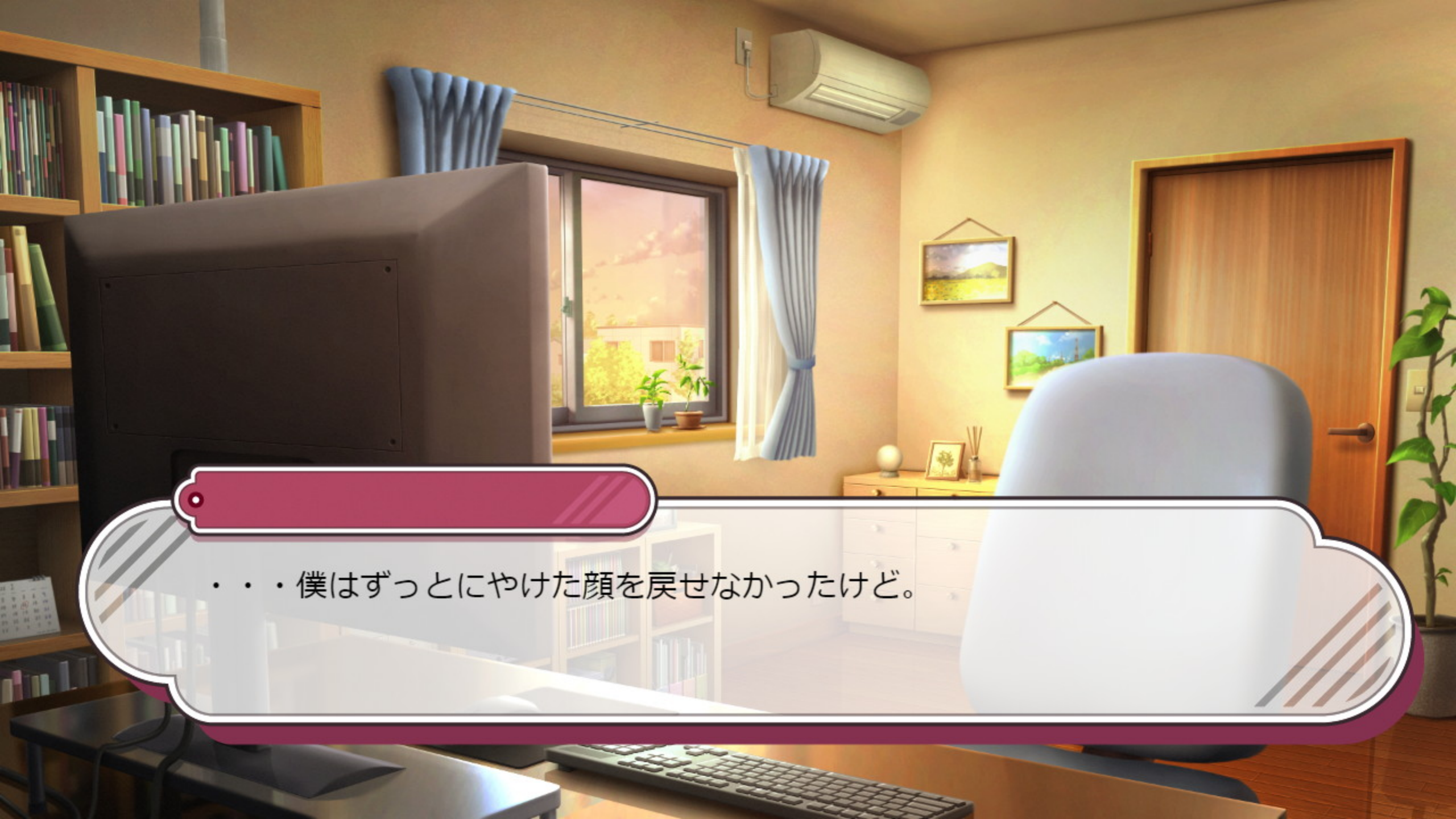
真
そんなこと全然いいよ！

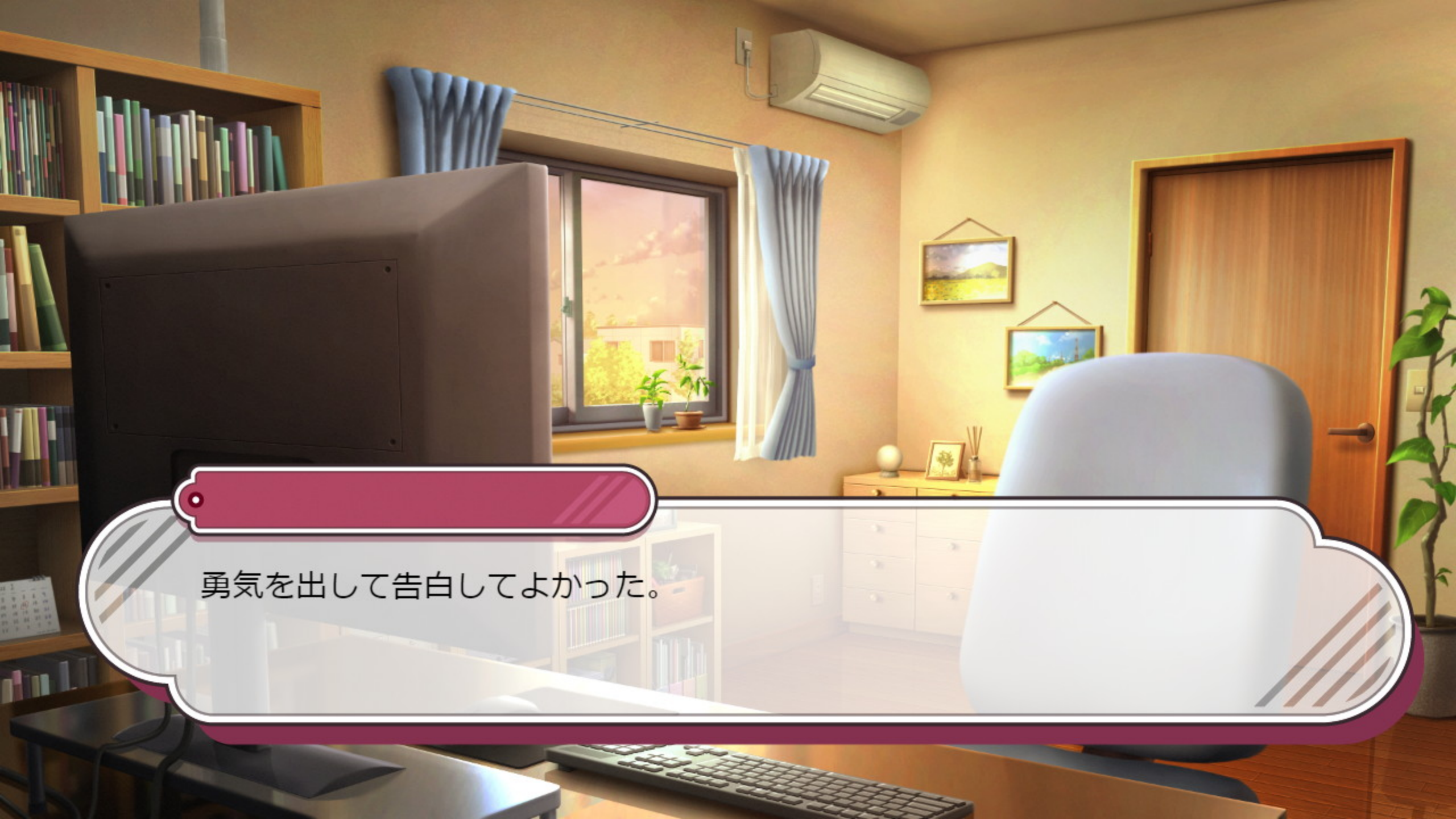

正直、愛花のことはなんでも知っているつもりだったので、
そういう意味ではショックだが、別に男性経験の有無はどうでもいい。

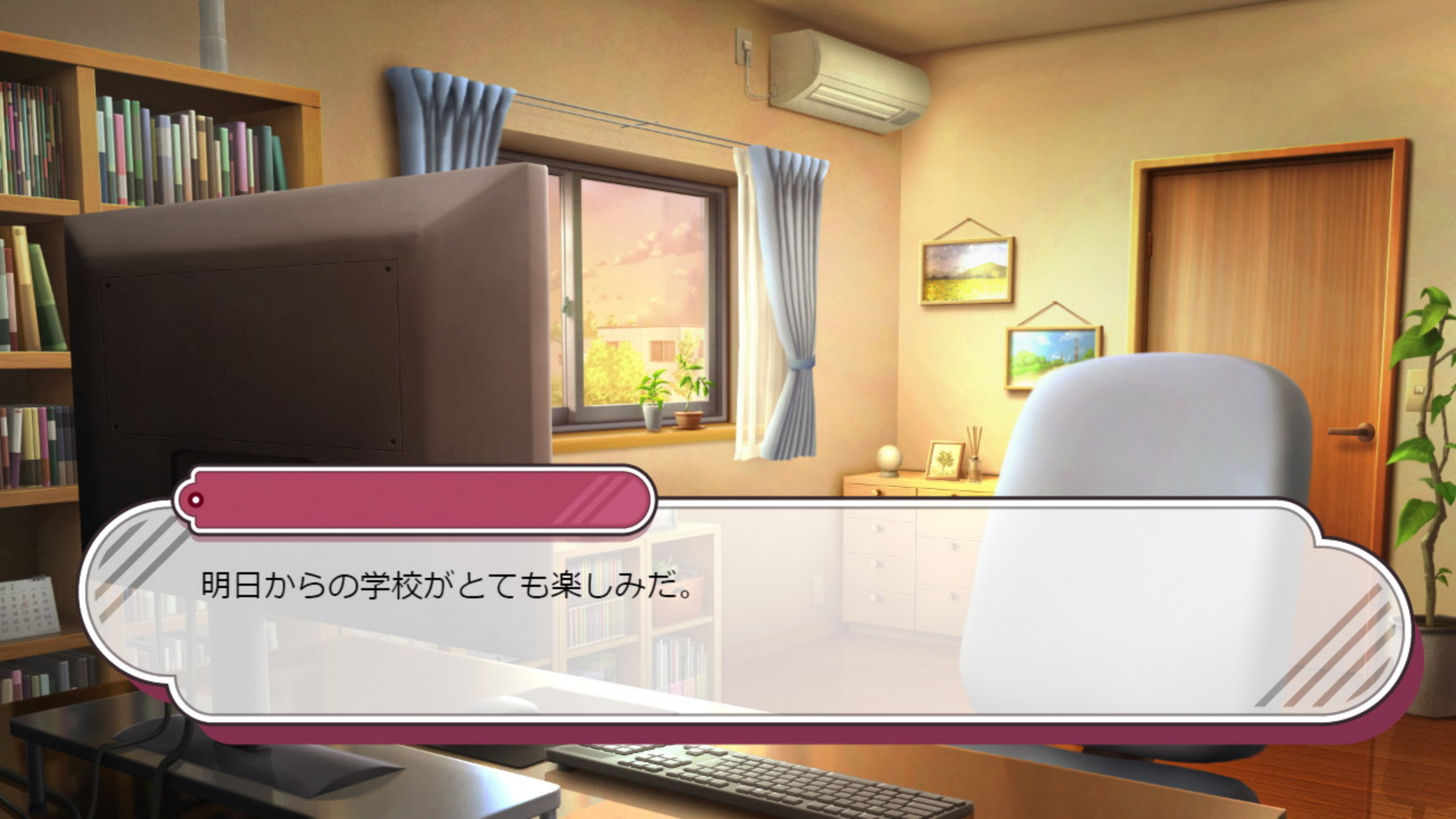
真
じゃあ、僕と付き合ってくれる？

水城 愛花
・・・はい


それから僕たちは一緒に公園を出て、
いつも通りに「また明日」と言って家に帰った。

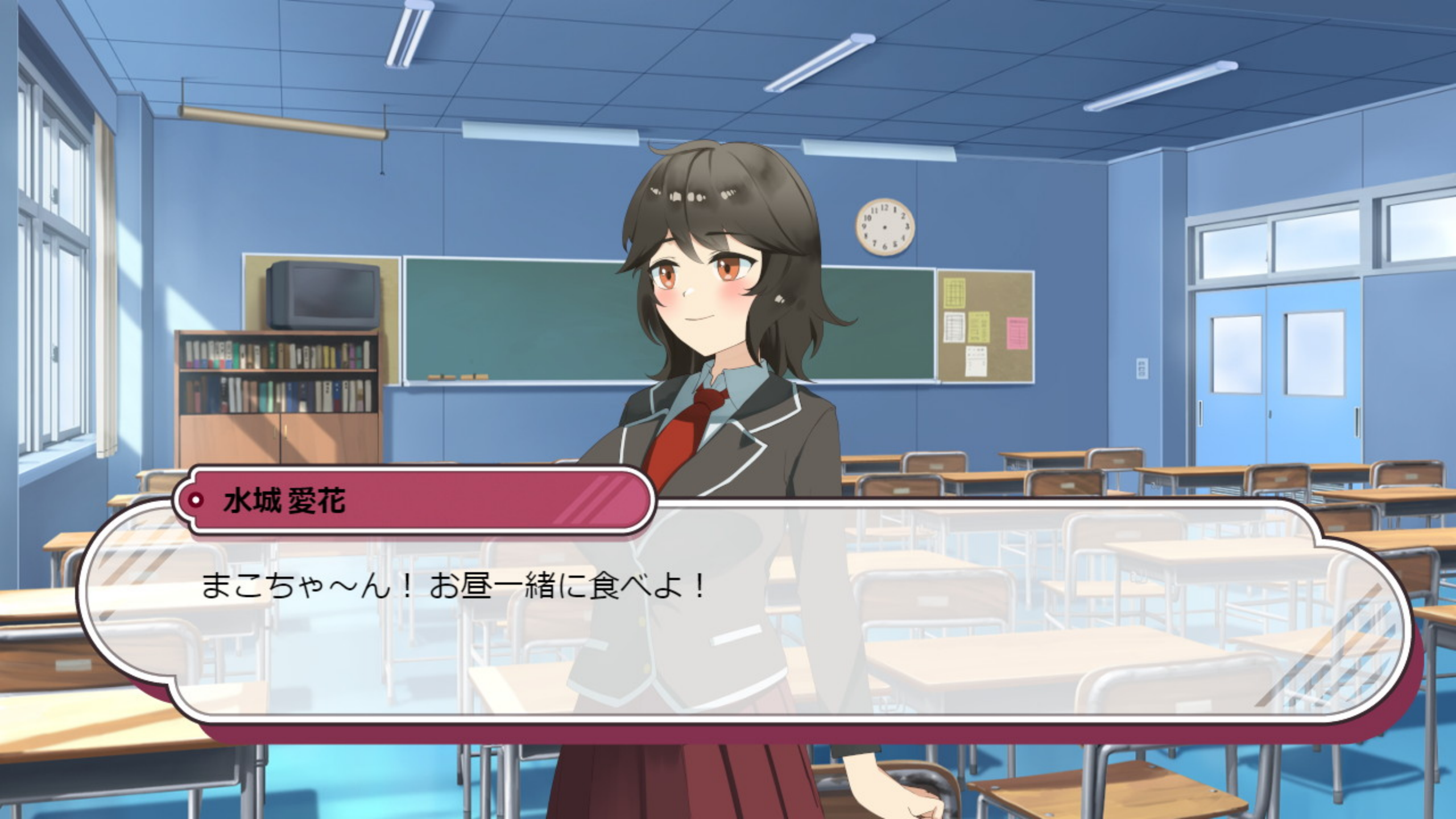

・・・僕はずっとにやけた顔を戻せなかったけど。

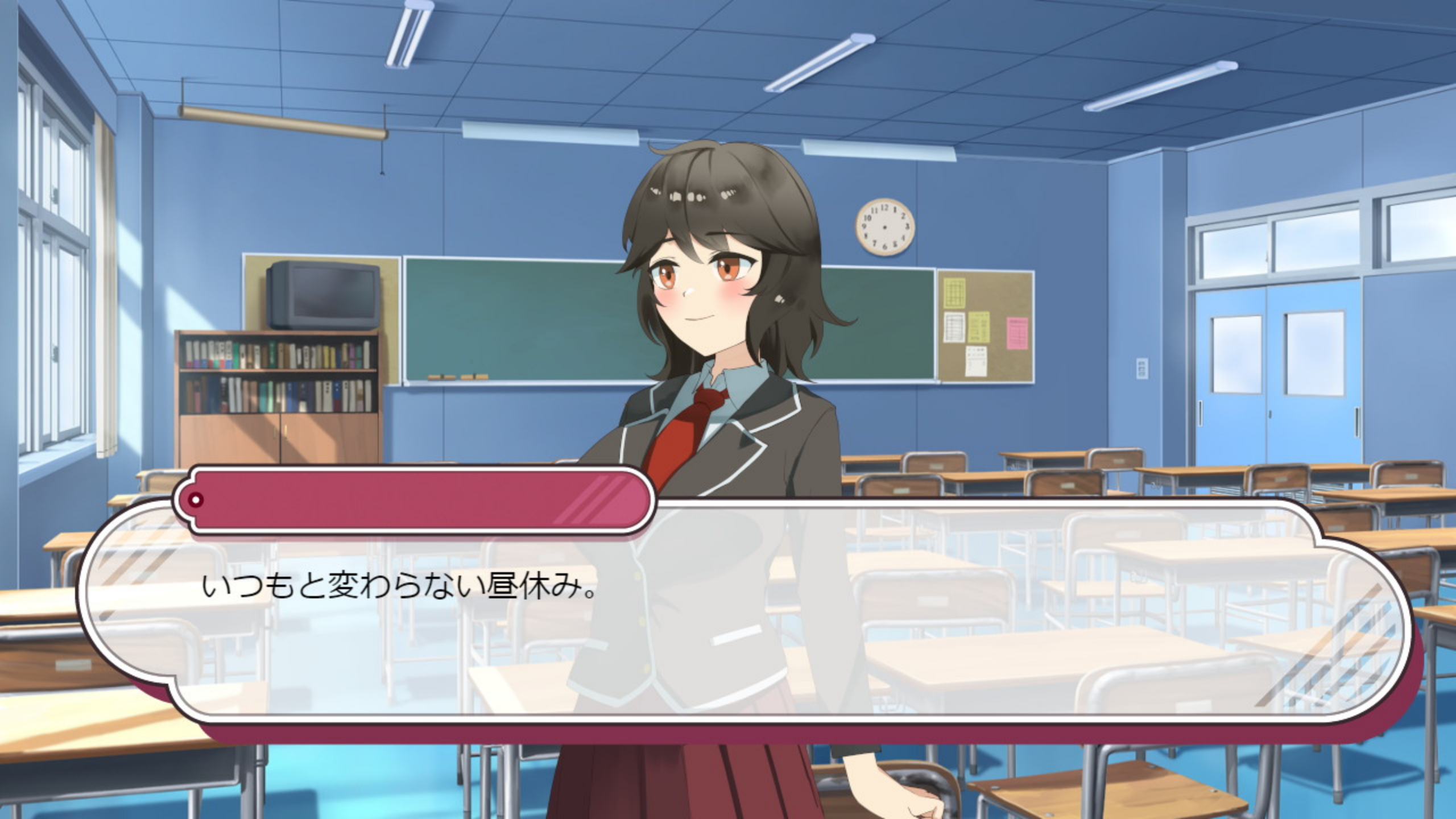

勇気を出して告白してよかった。

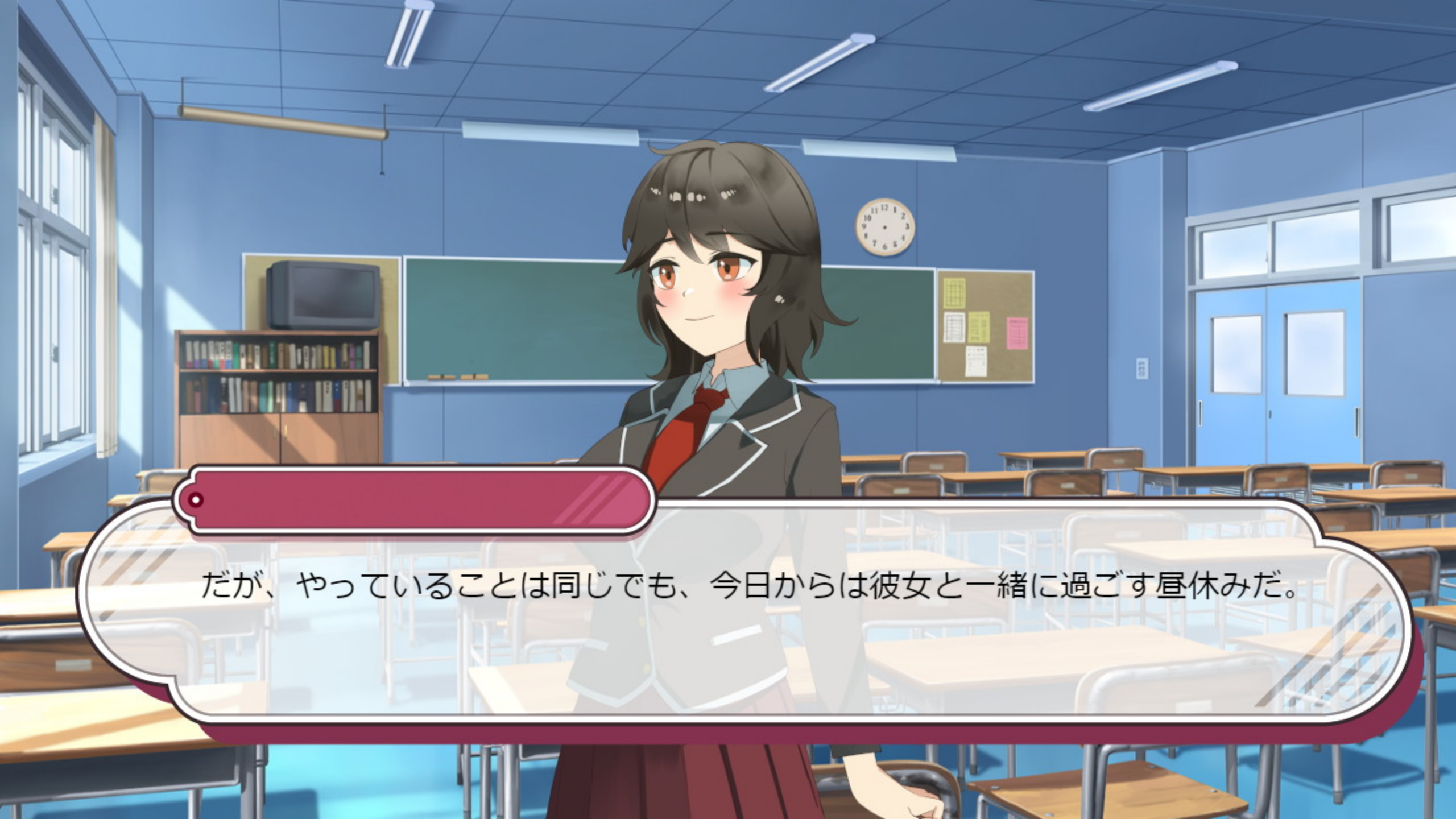

明日からの学校がとても楽しみだ。

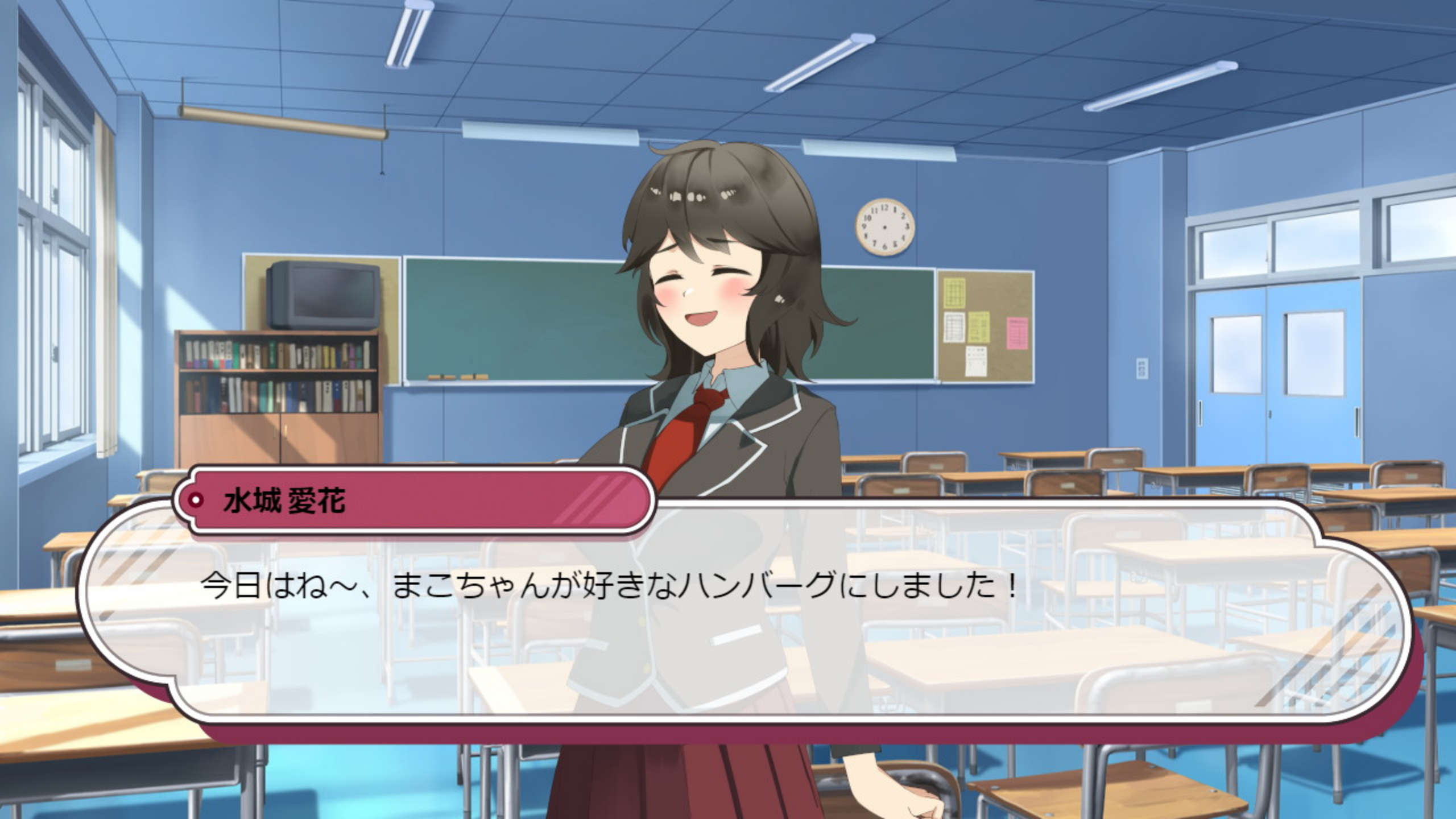
隠れビッチ彼女

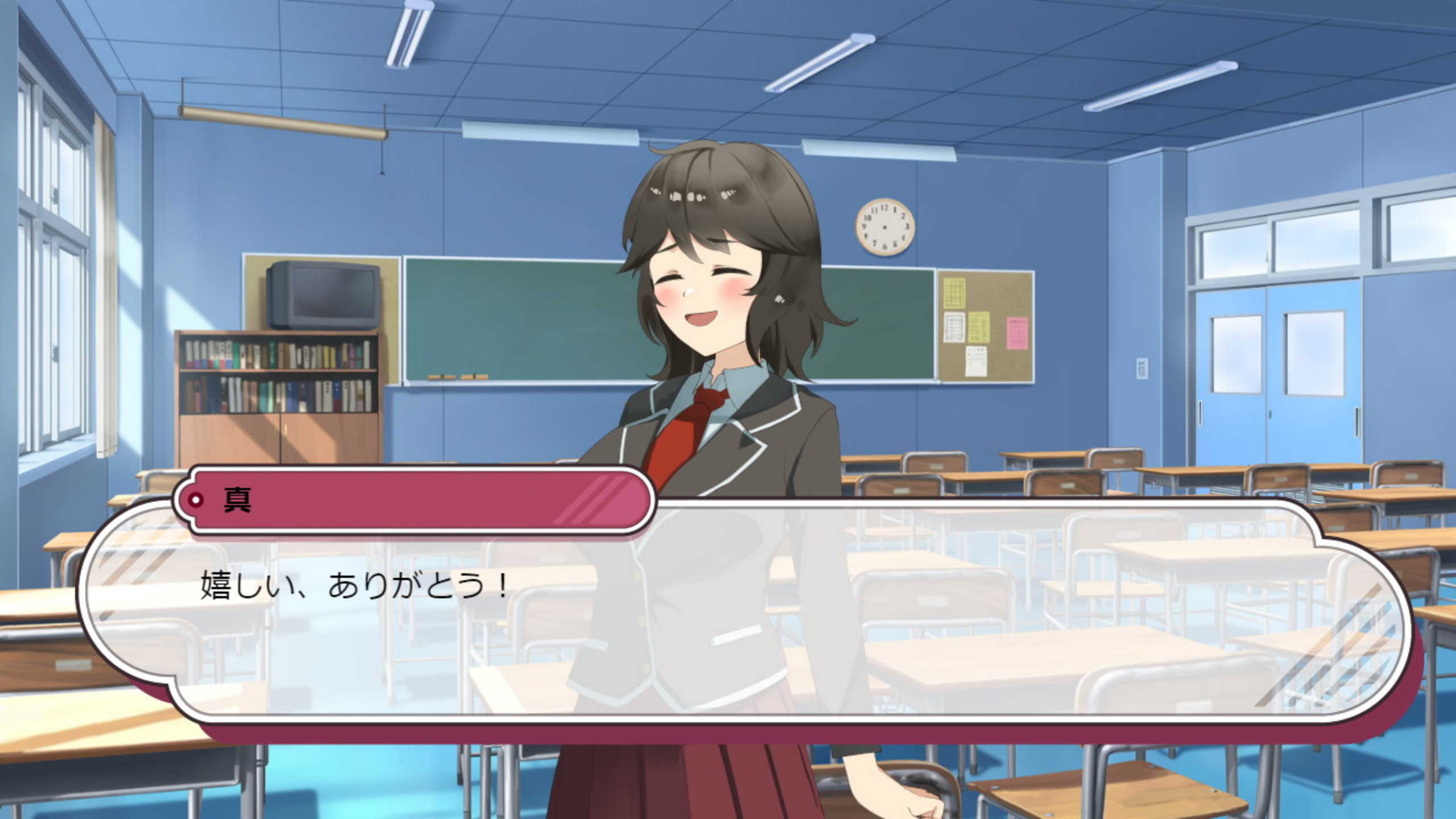
頼んだら誰とでも寝取らせHしてくれる幼馴染

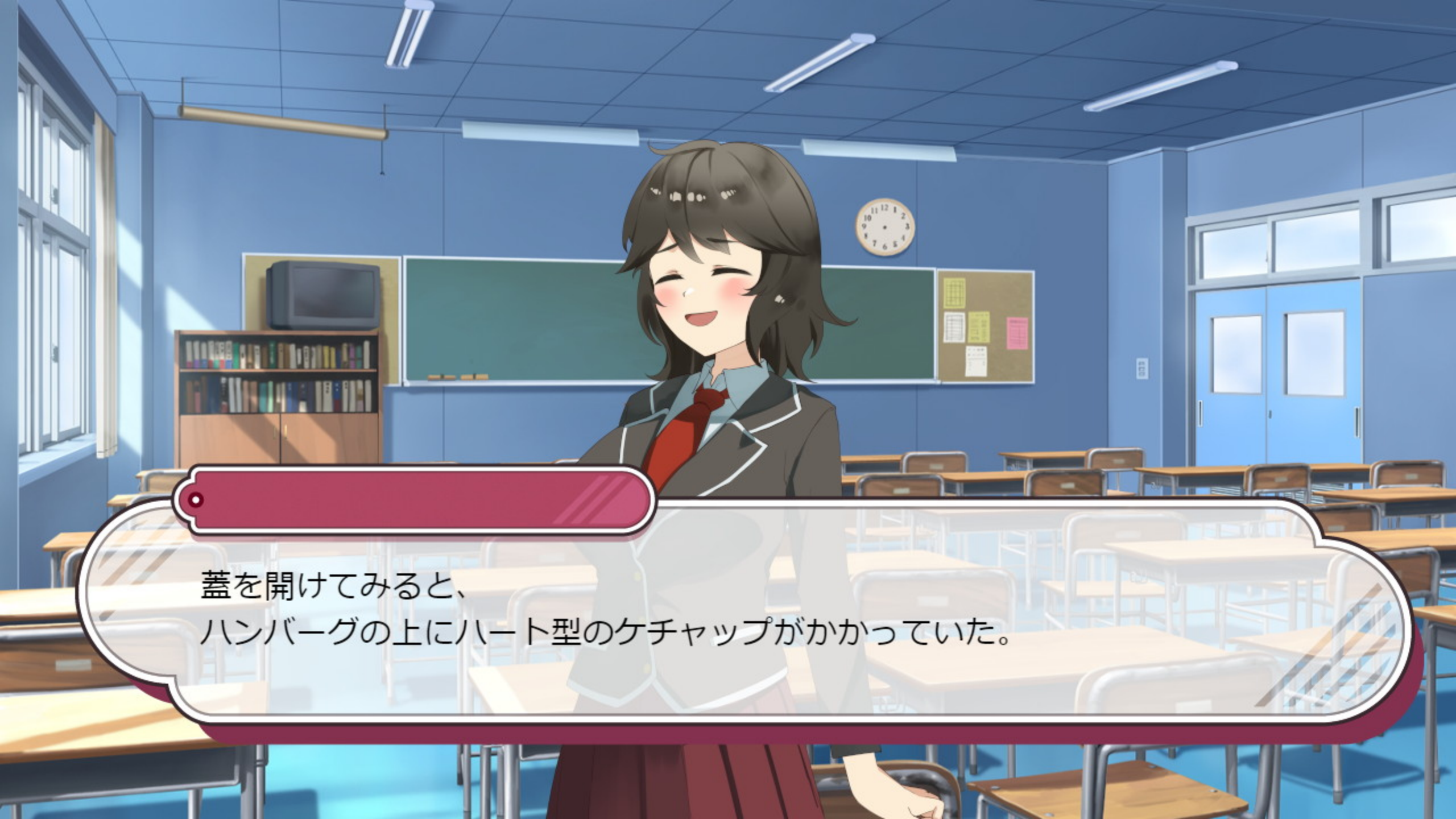

水城 愛花
まこちゃ～ん！ お昼一緒に食べよ！


いつもと変わらない昼休み。

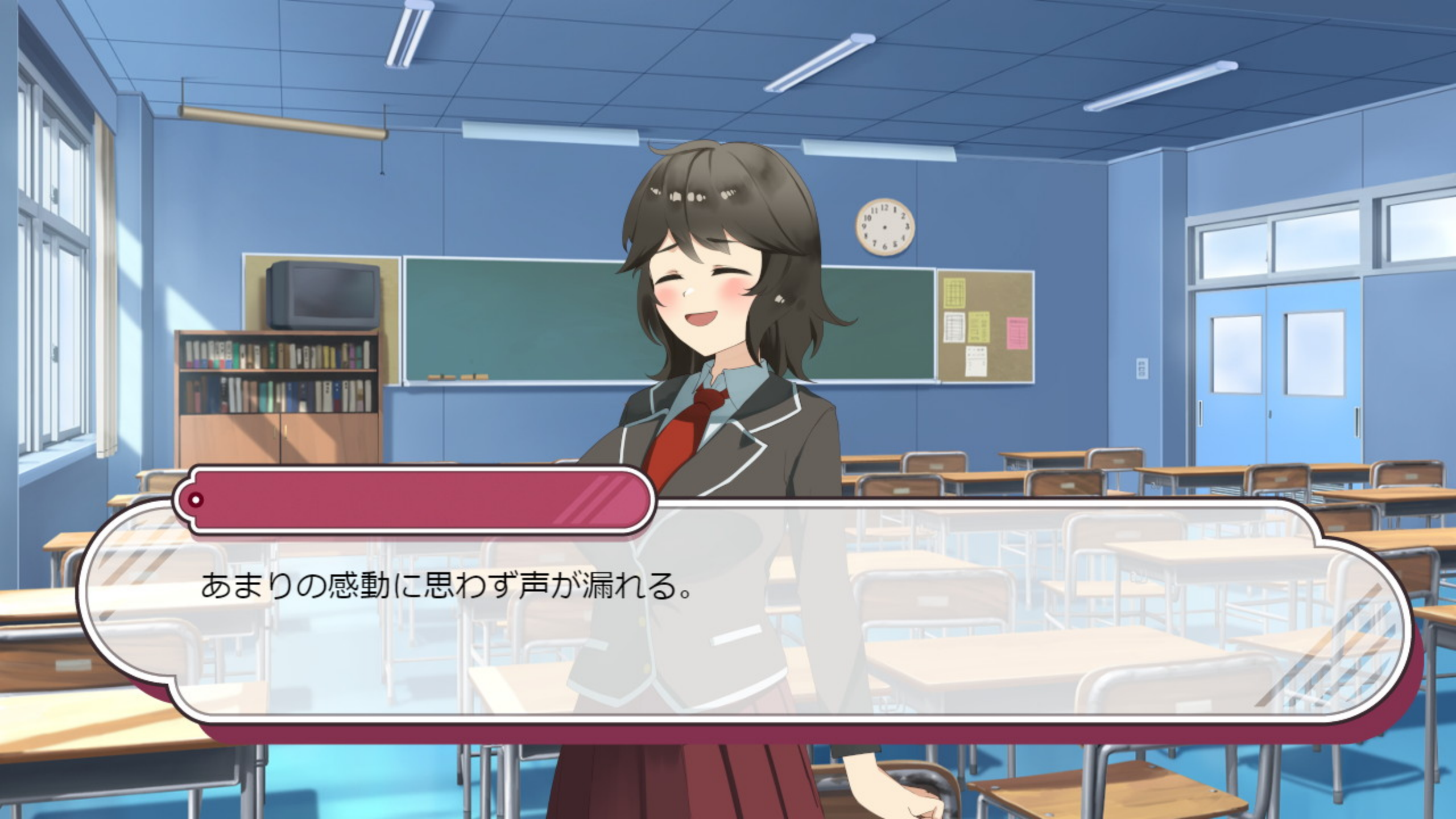

だが、やっていることは同じでも、今日からは彼女と一緒に過ごす昼休みだ。

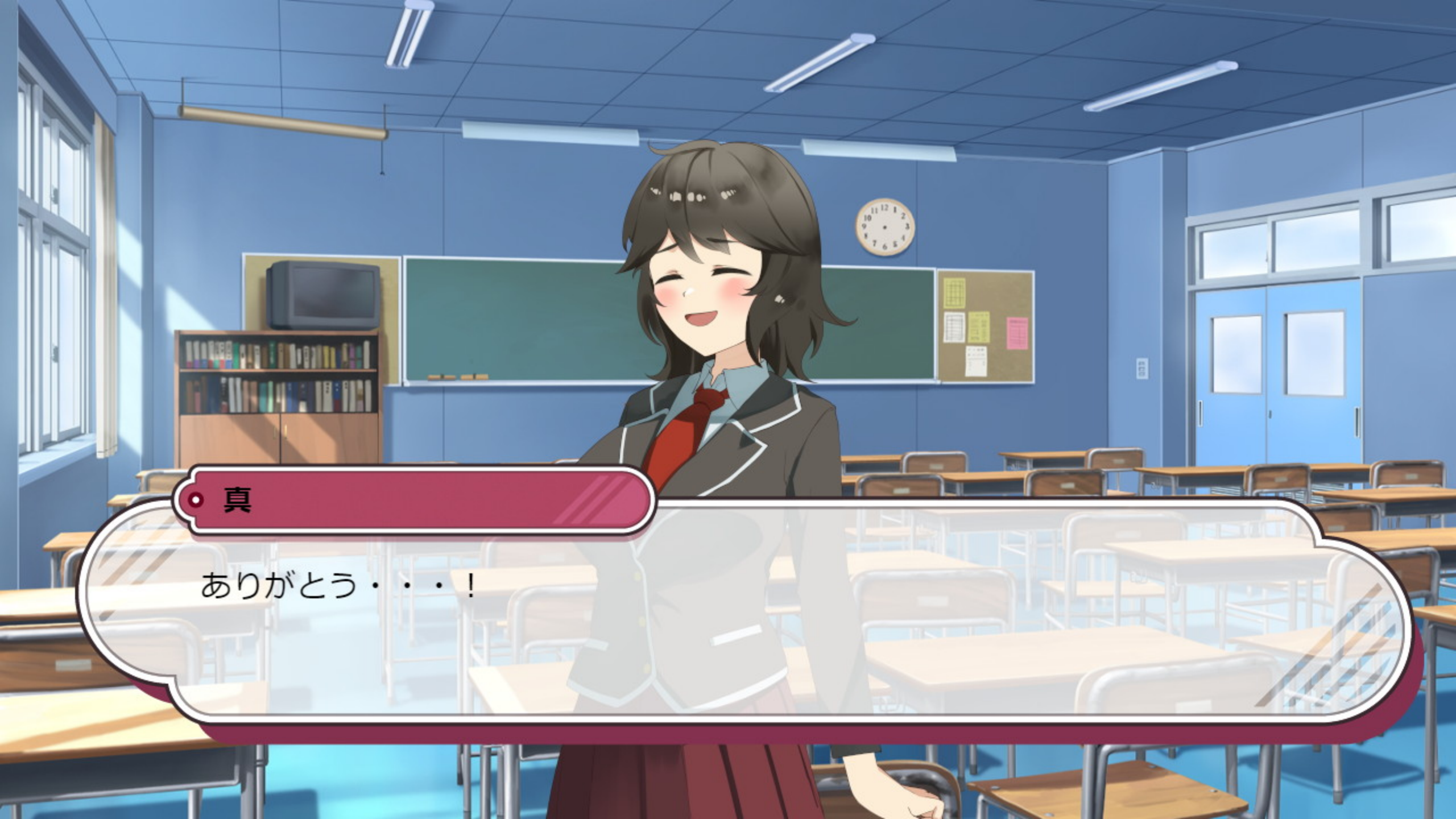

水城 愛花
今日はね～、まこちゃんが好きなハンバーグにしました！

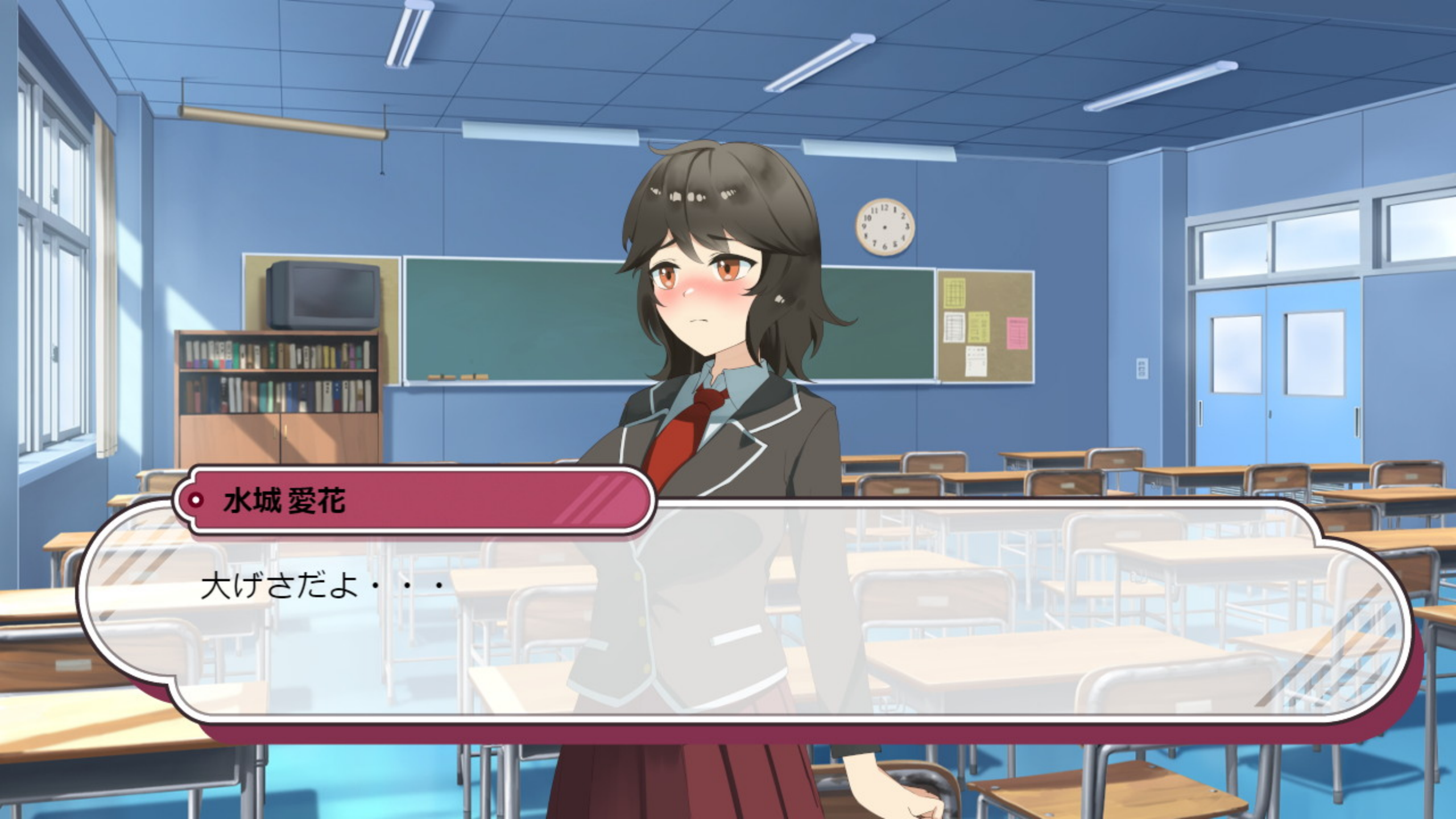

真
嬉しい、ありがとう！

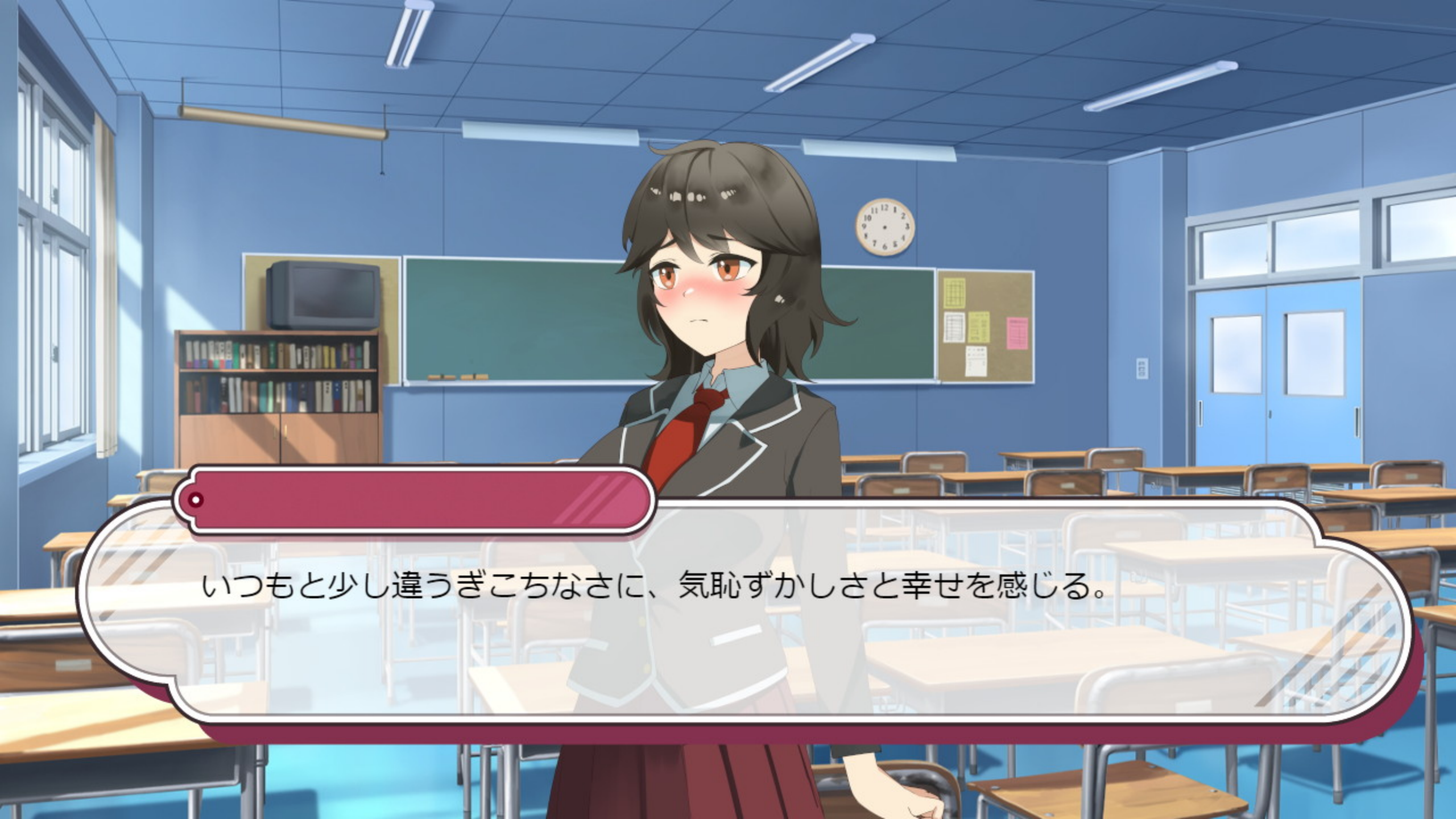

蓋を開けてみると、
ハンバーグの上にハート型のケチャップがかかっていた。

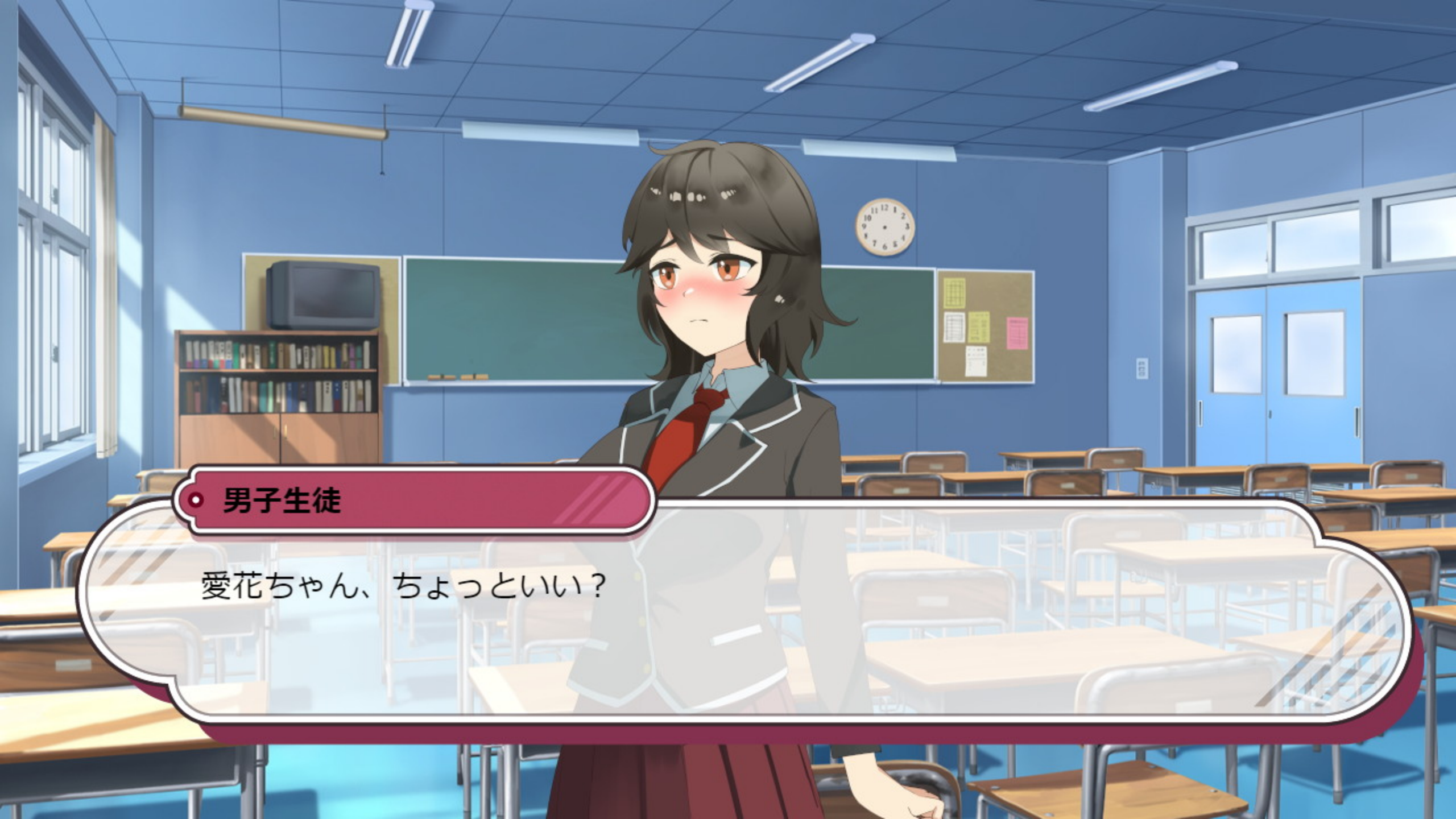
真
うおぉ・・・

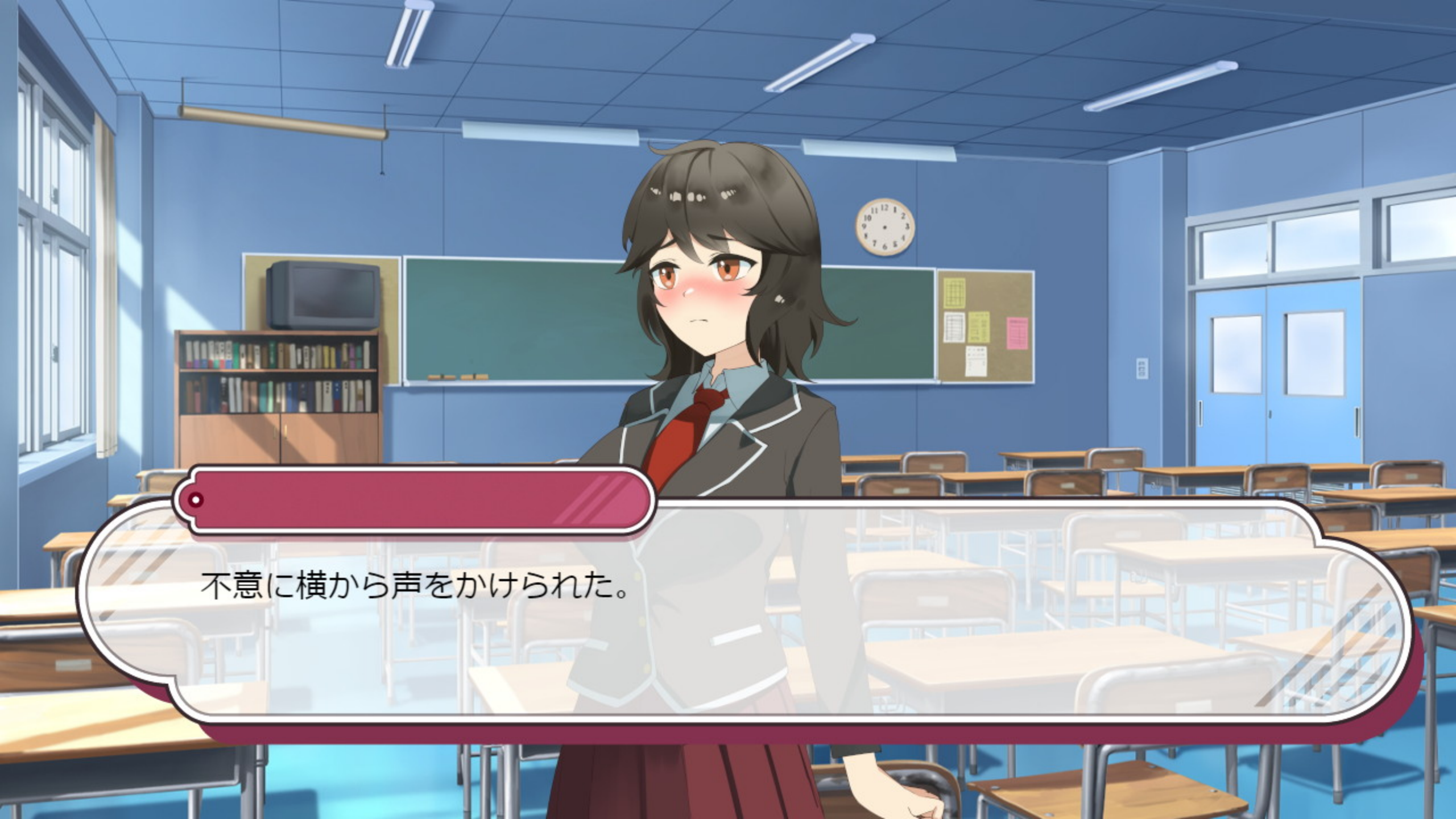

あまりの感動に思わず声が漏れる。

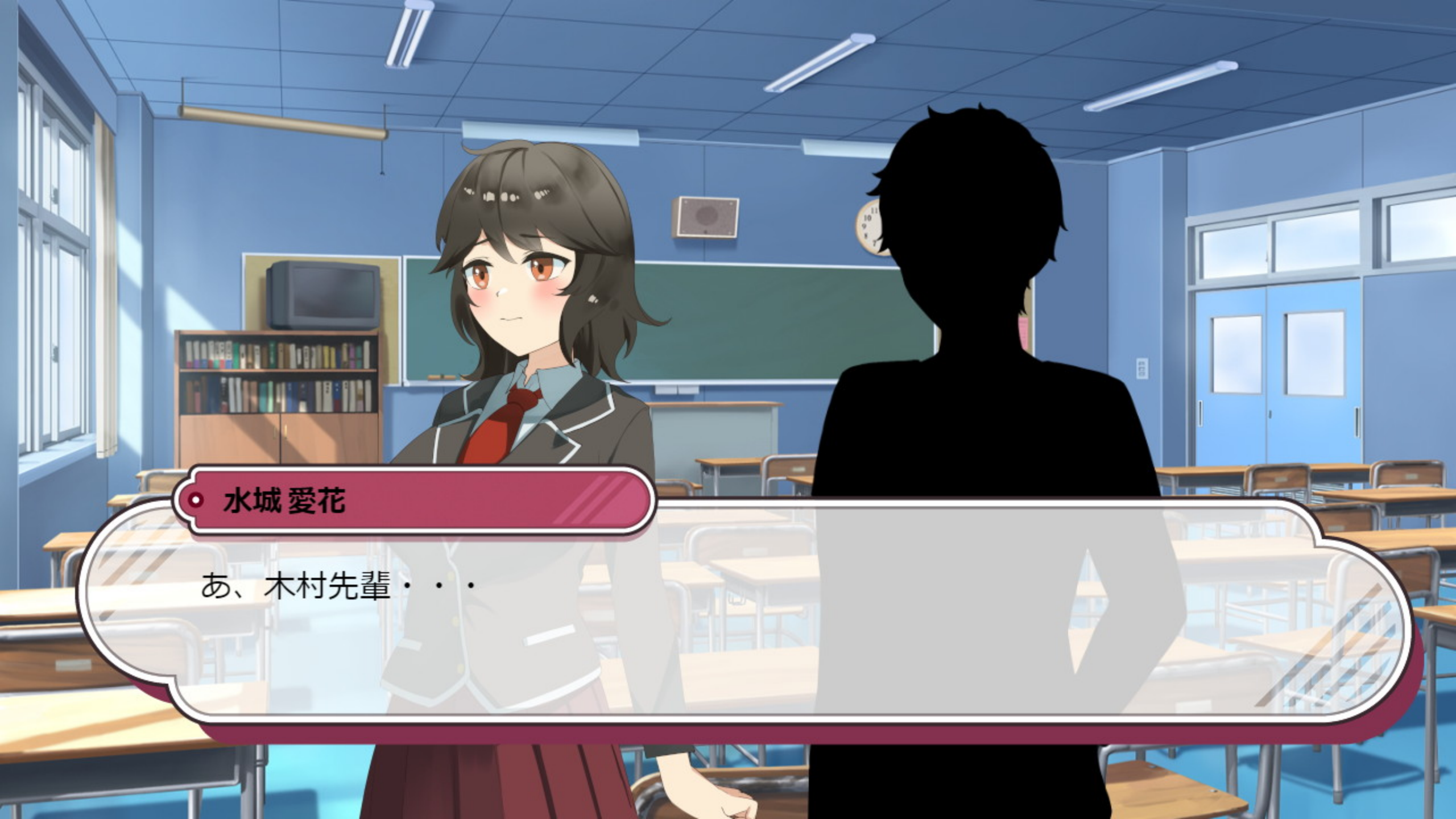

真
ありがとう・・・！

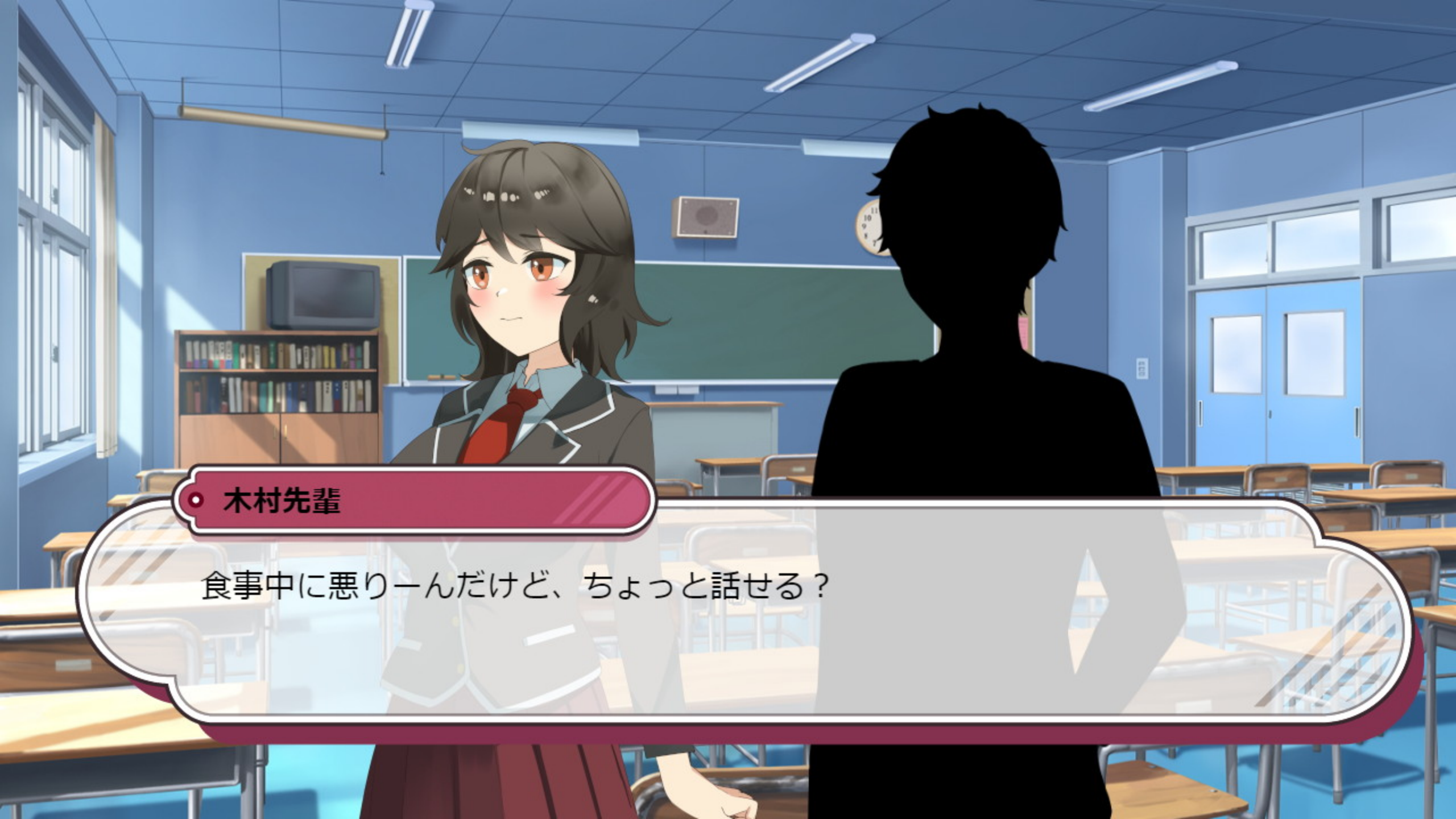

水城 愛花
大げさだよ・・・

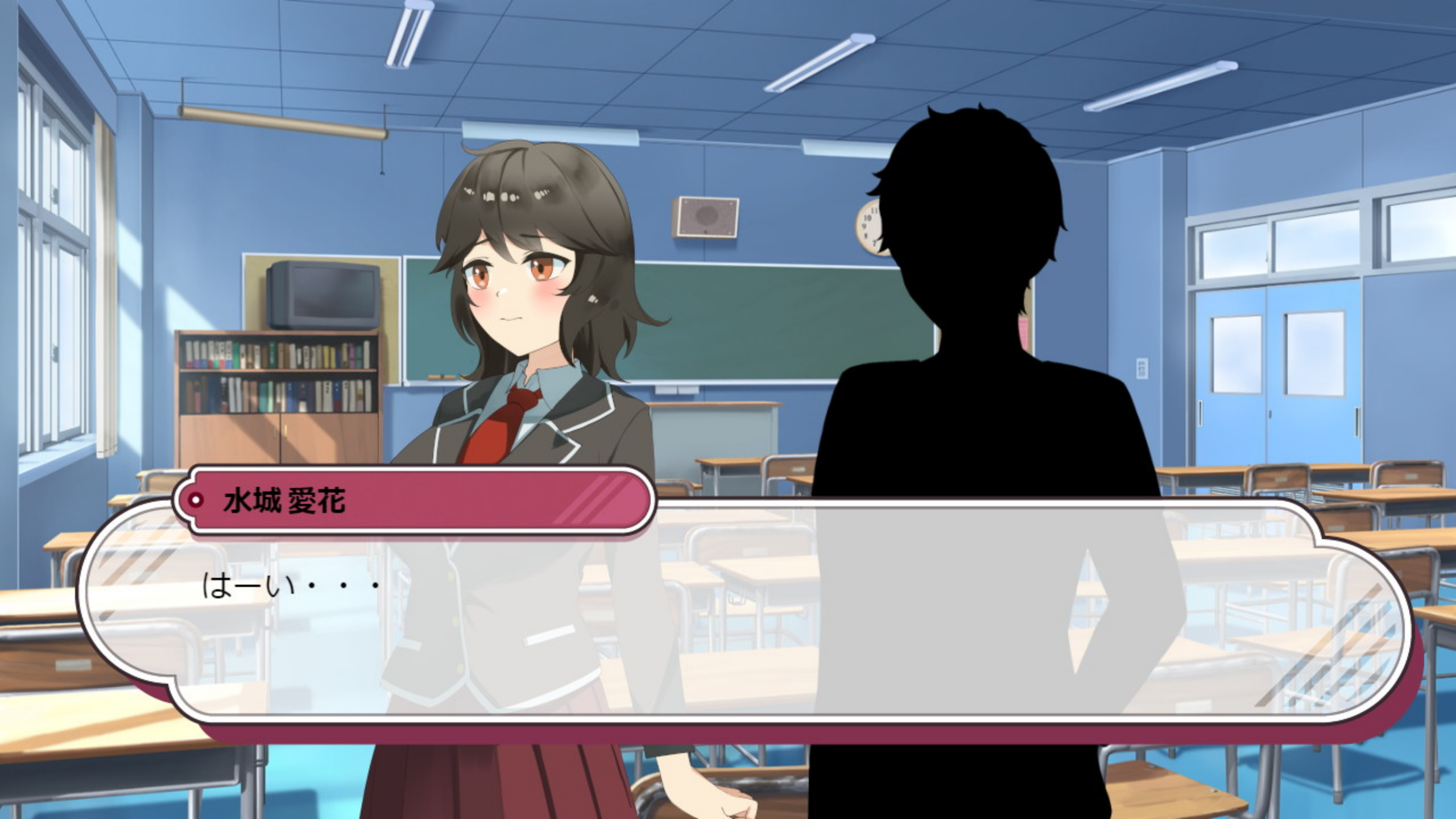

いつもと少し違うぎこちなさに、気恥ずかしさと幸せを感じる。

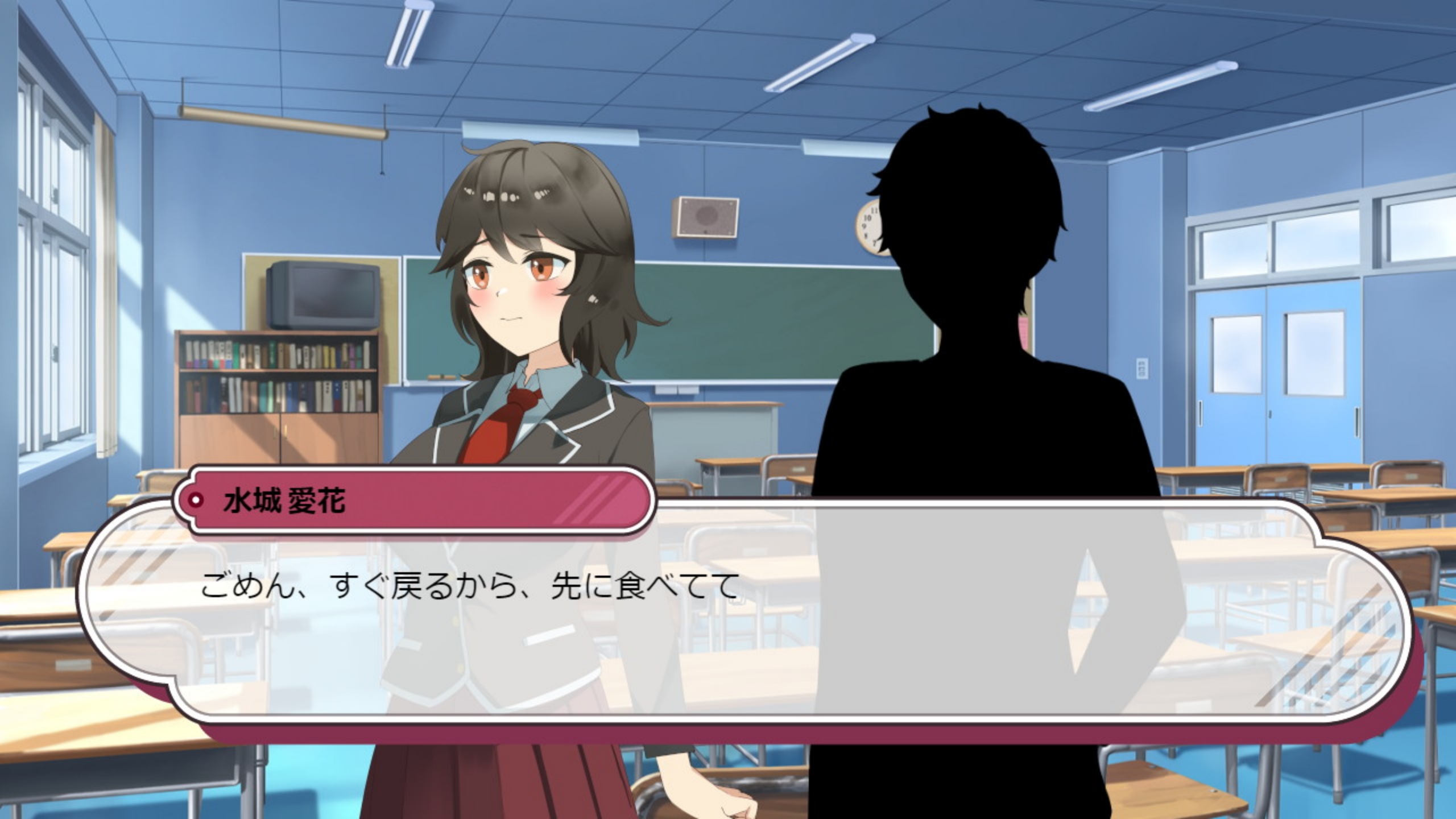

男子生徒
愛花ちゃん、ちょっといい？

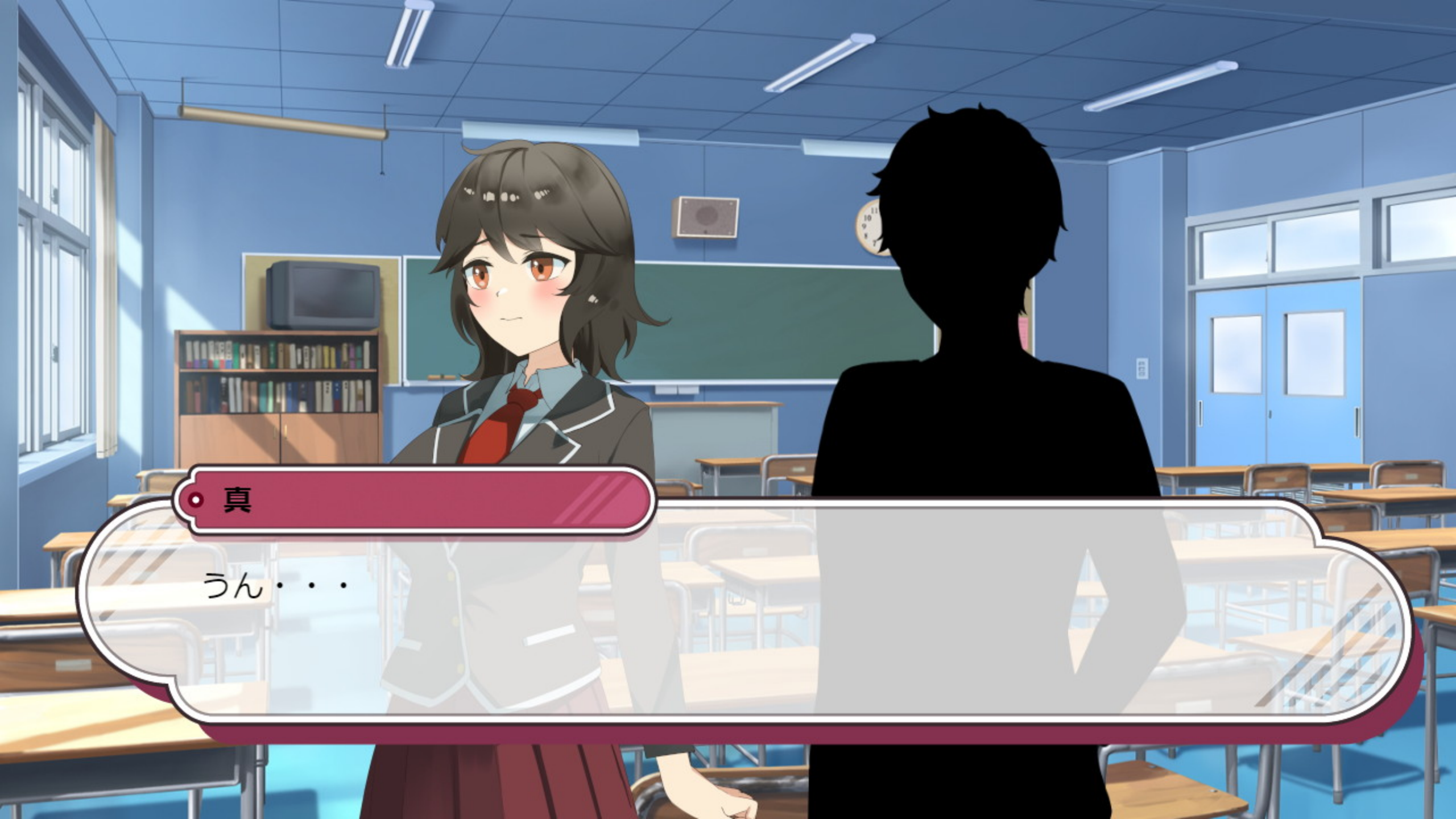

不意に横から声をかけられた。

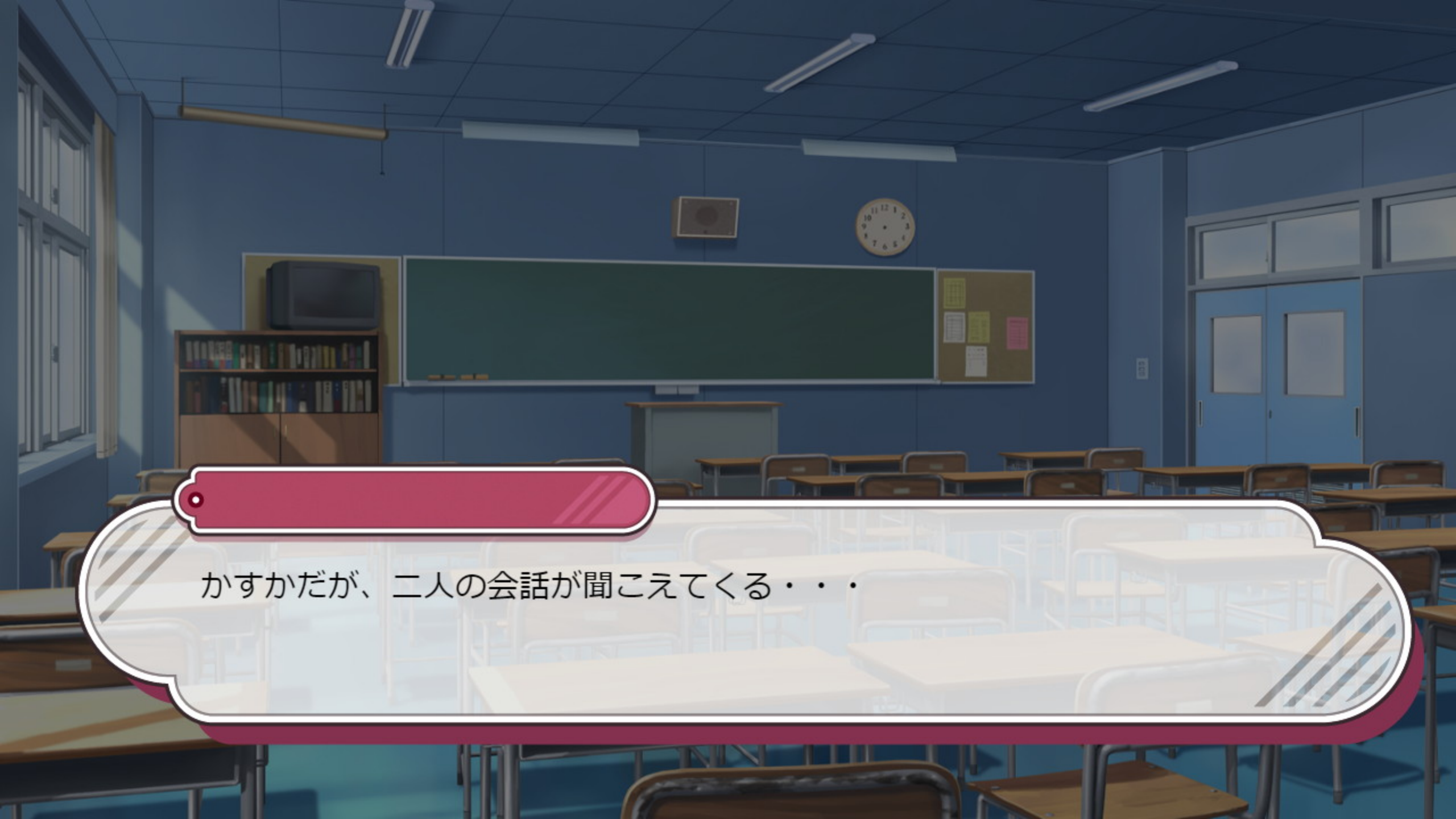

水城 愛花
あ、木村先輩・・・


木村先輩
食事中に悪りーんだけど、ちょっと話せる？

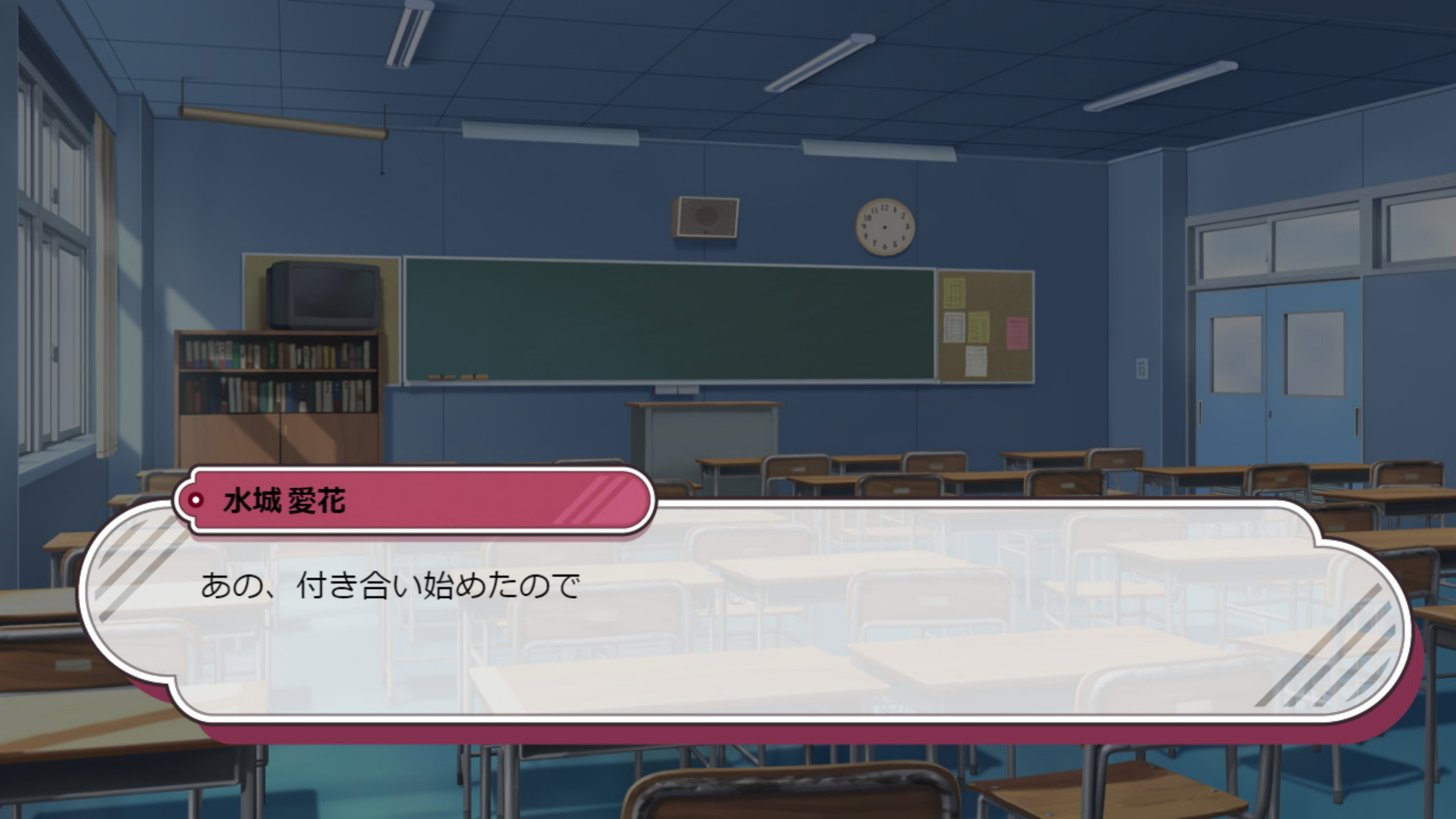

水城 愛花
はーい・・・

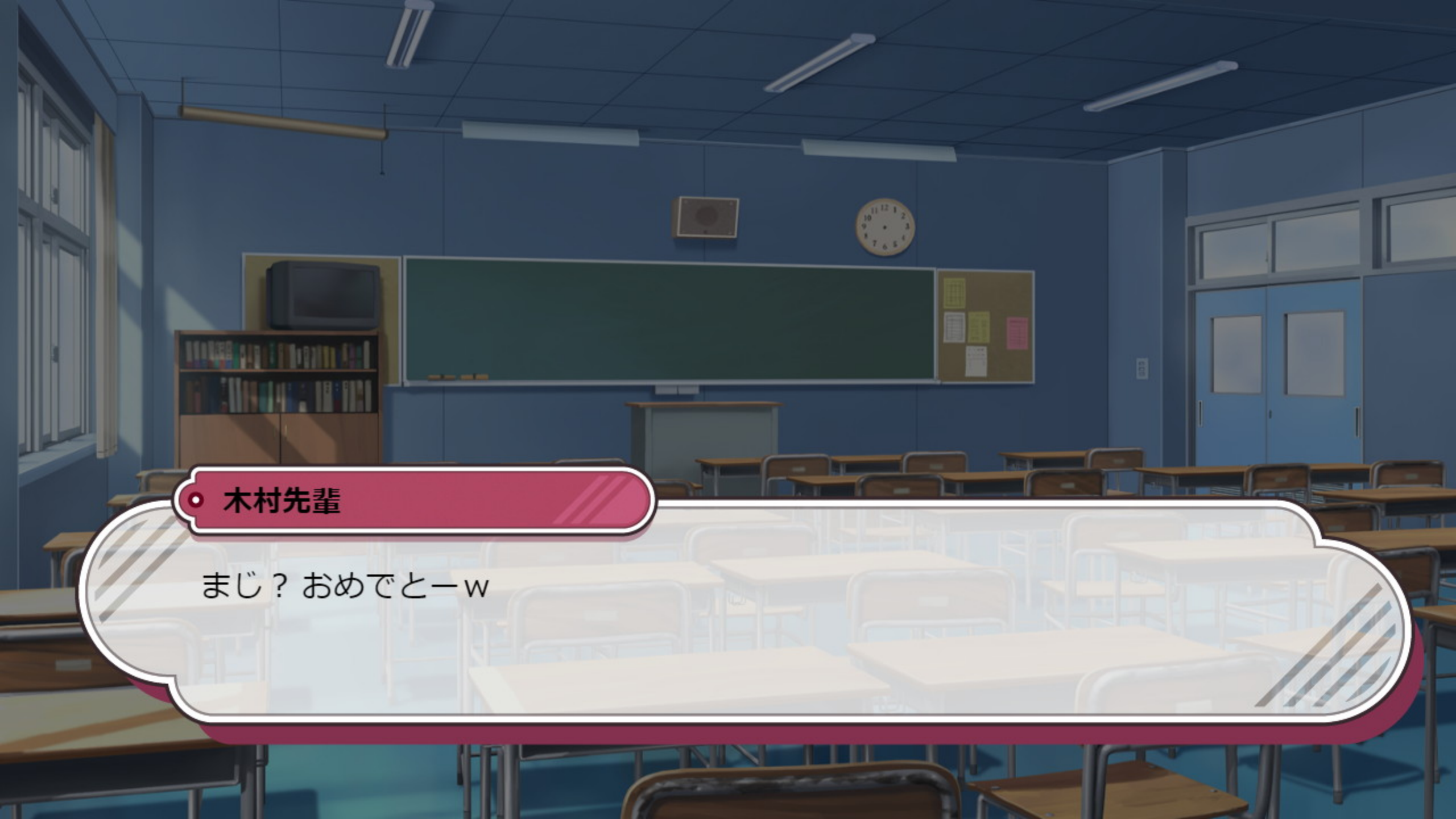

水城 愛花
ごめん、すぐ戻るから、先に食べてて

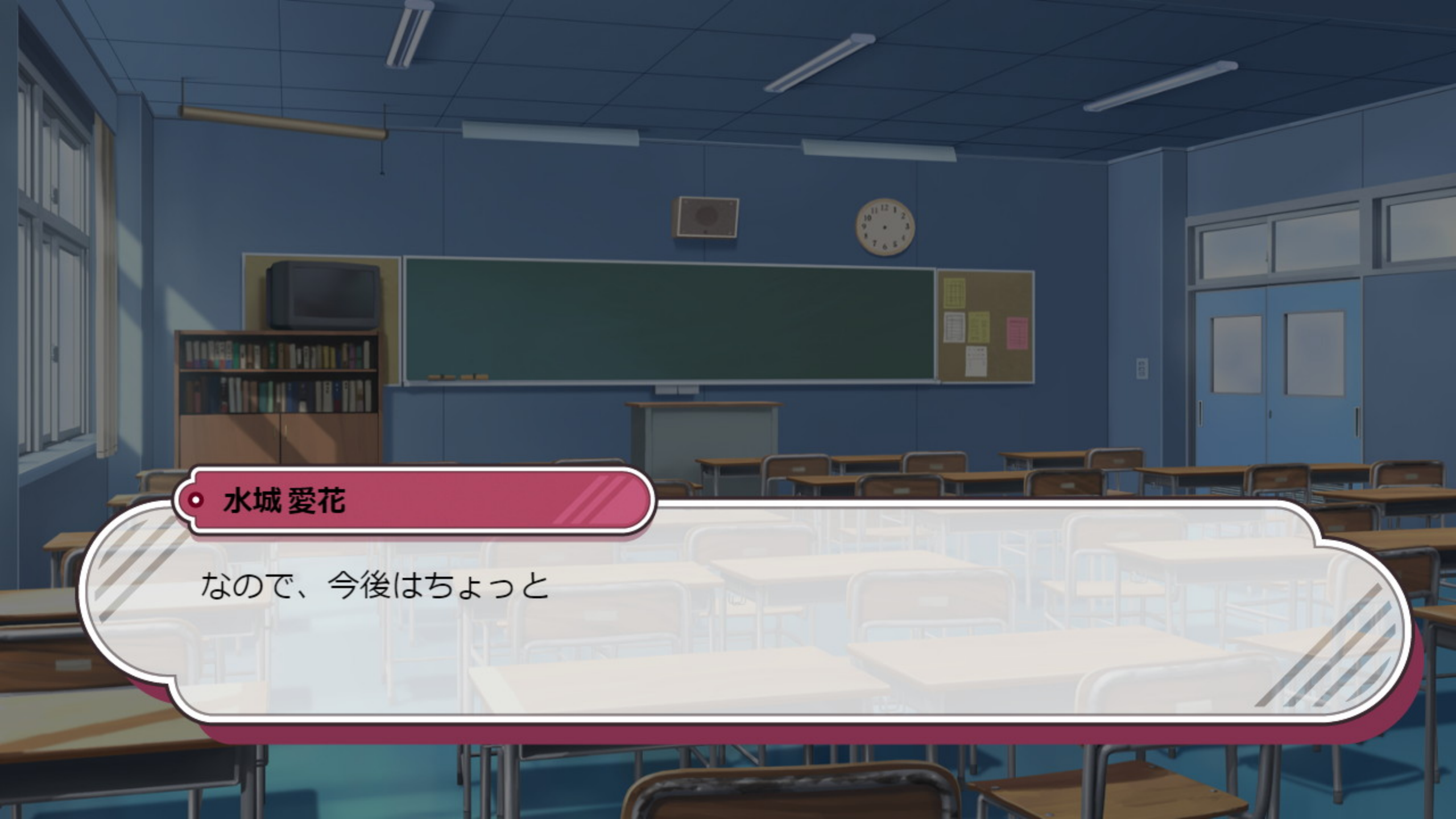

真
うん・・・

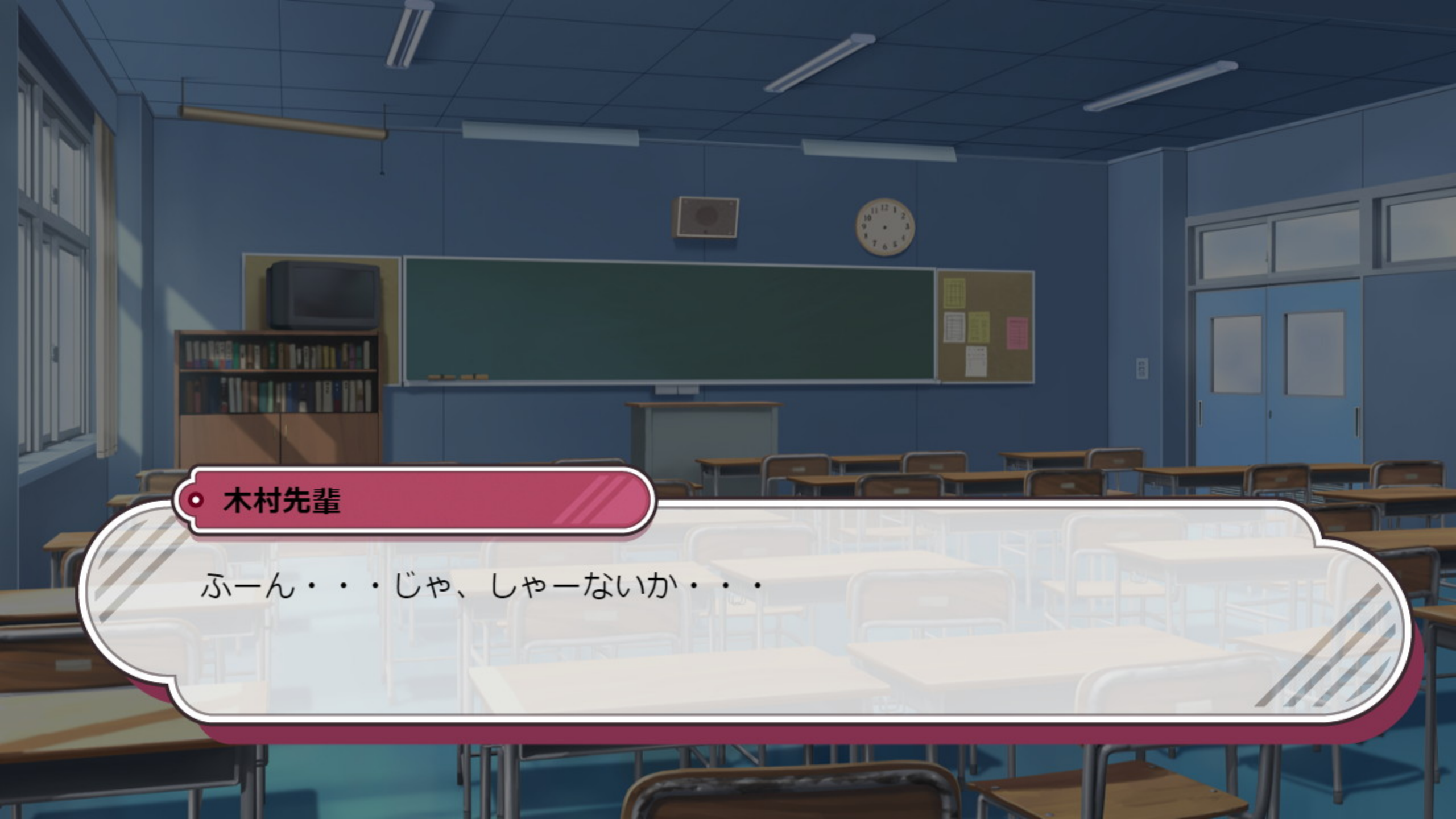


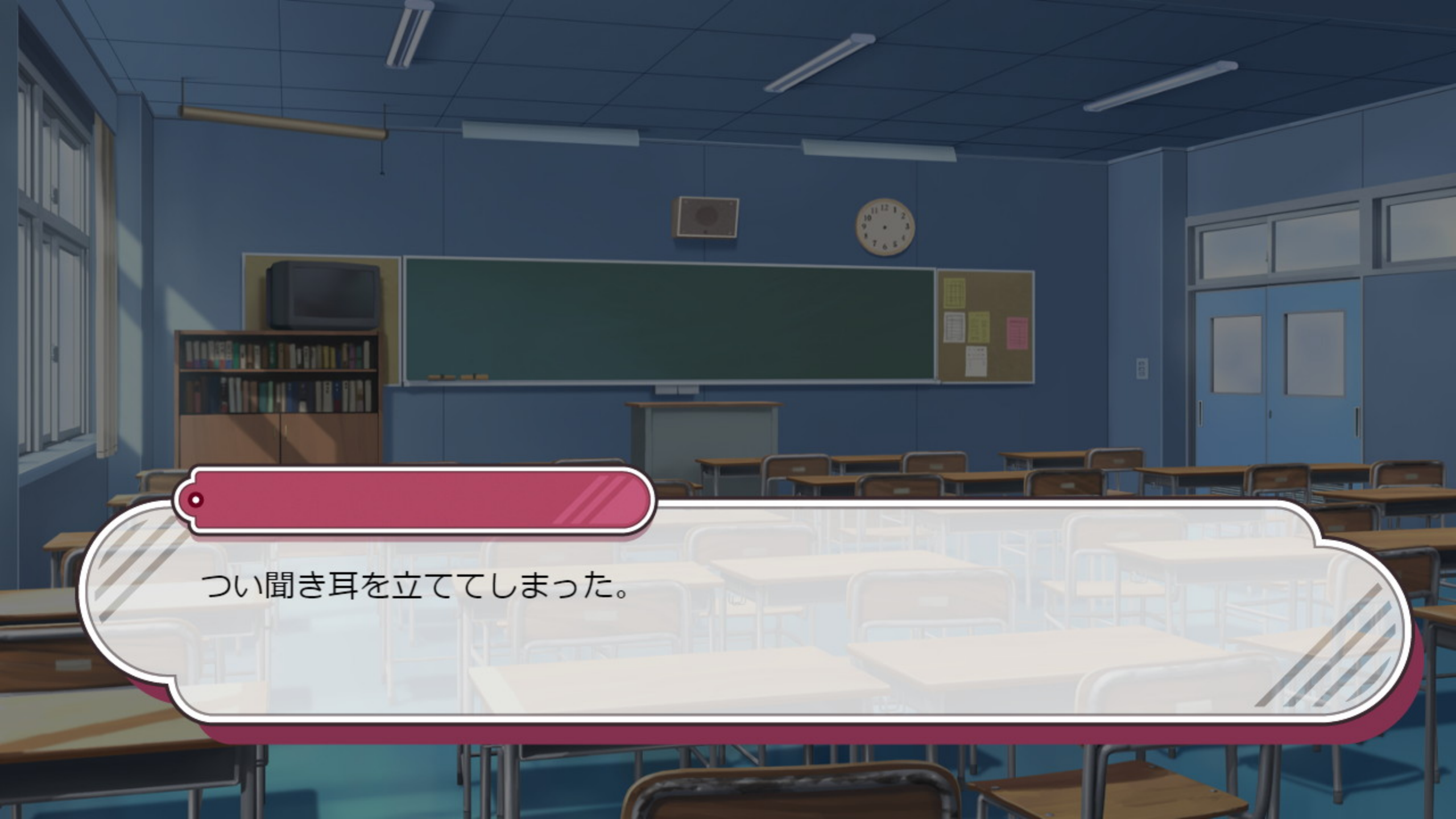
かすかだが、二人の会話が聞こえてくる・・・

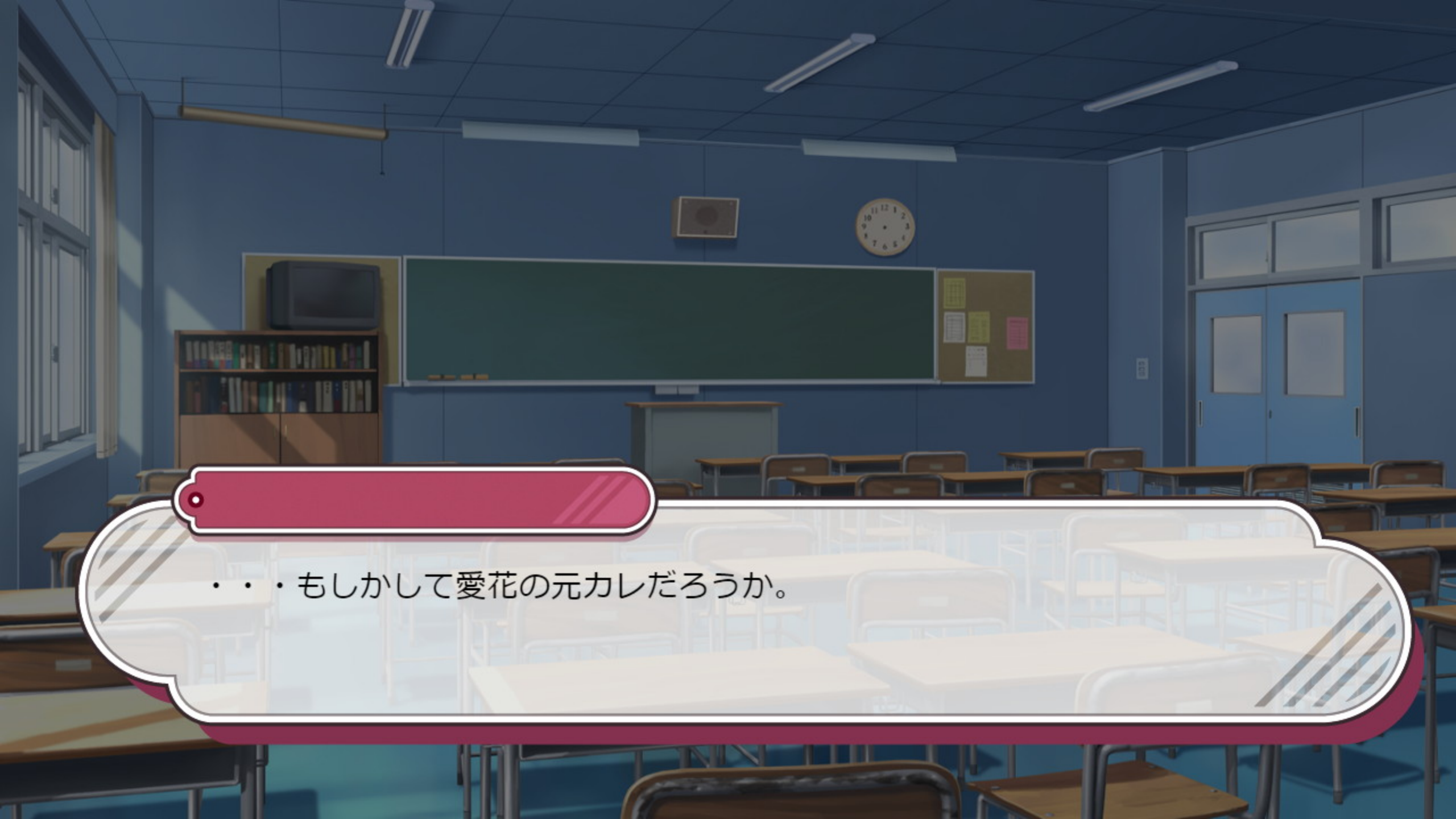

水城 愛花
あの、付き合い始めたので


木村先輩
まじ？ おめでとーw

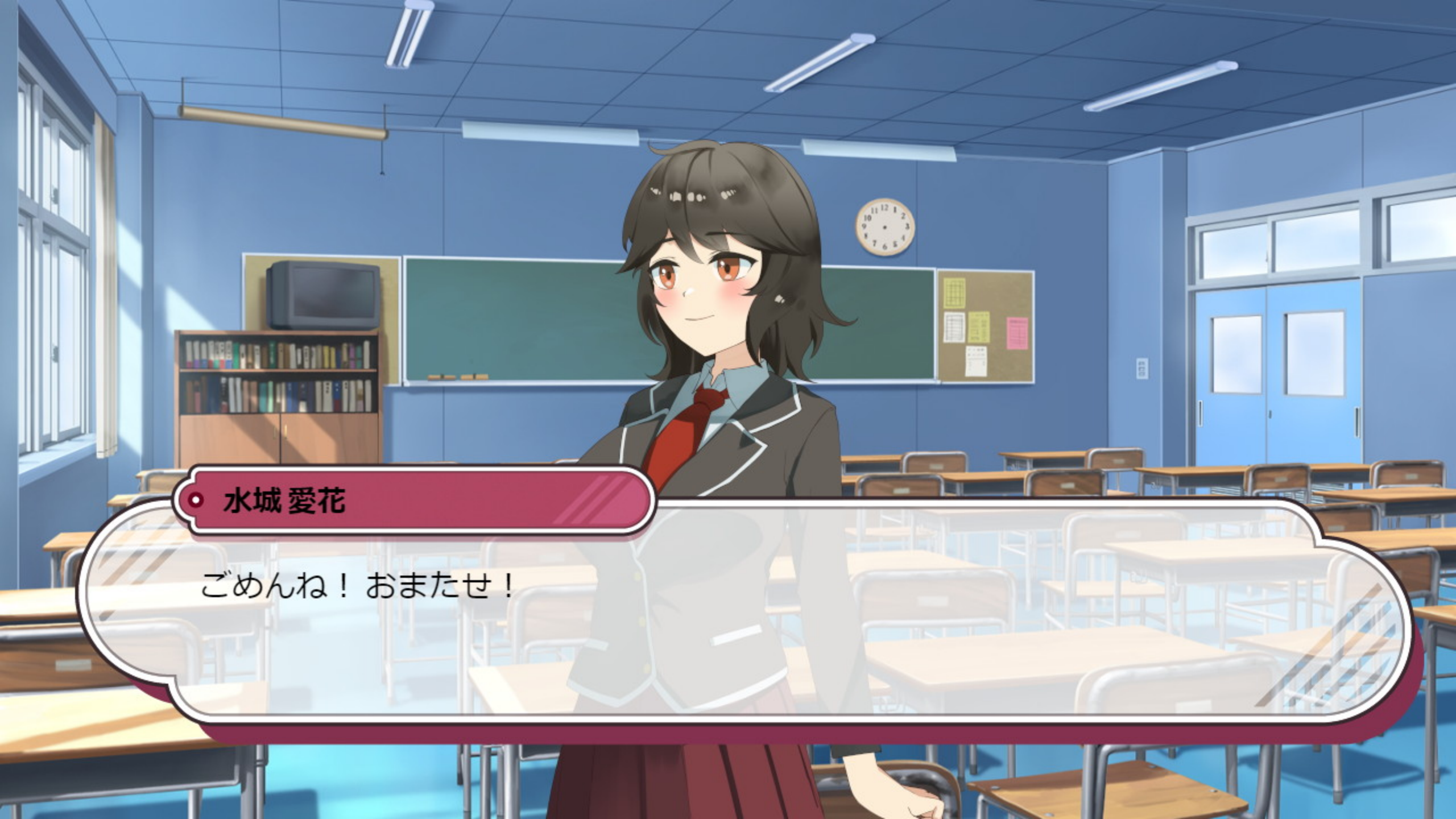

水城 愛花
なので、今後はちょっと

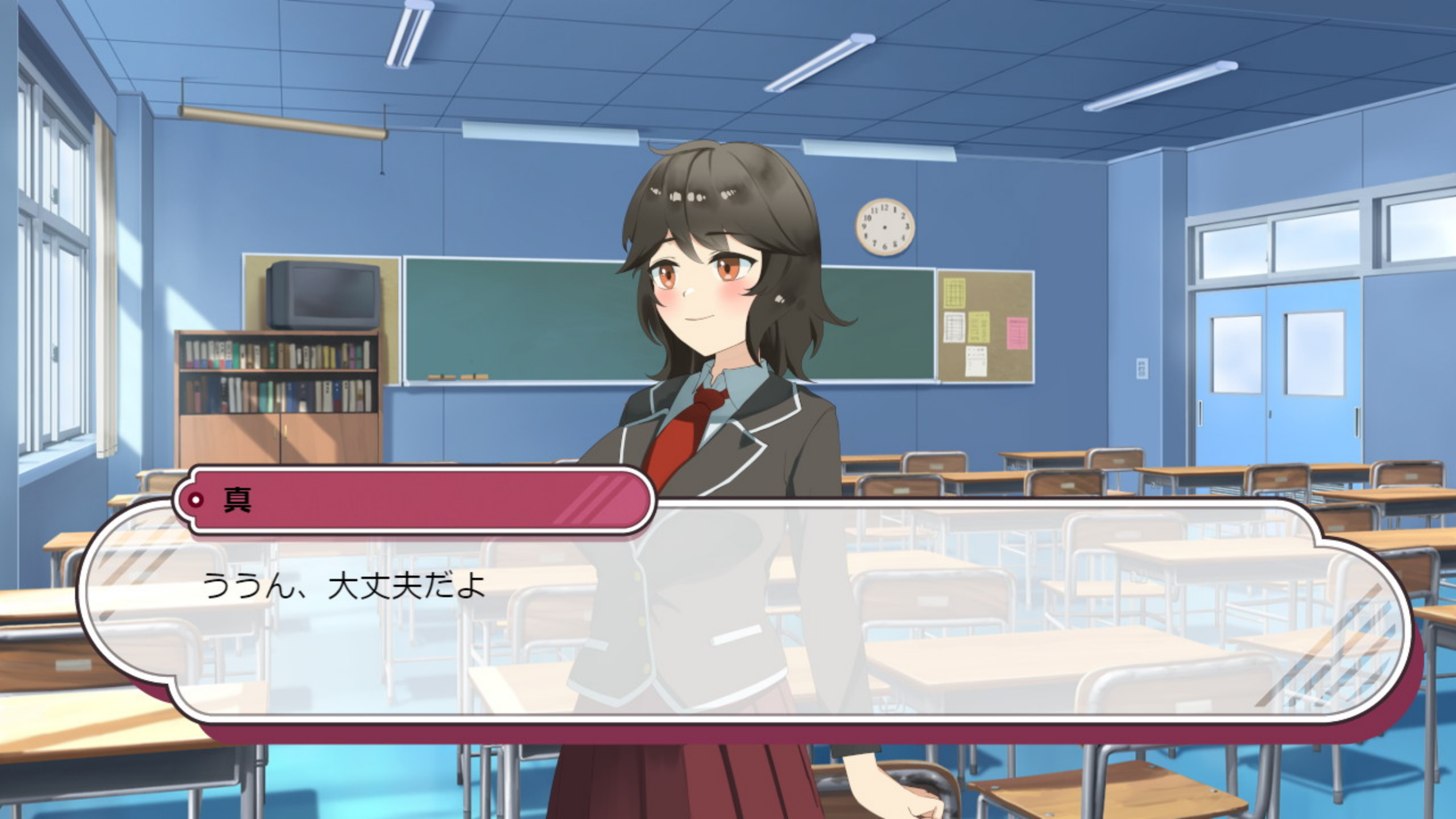

木村先輩
ふーん・・・じゃ、しゃーないか・・・

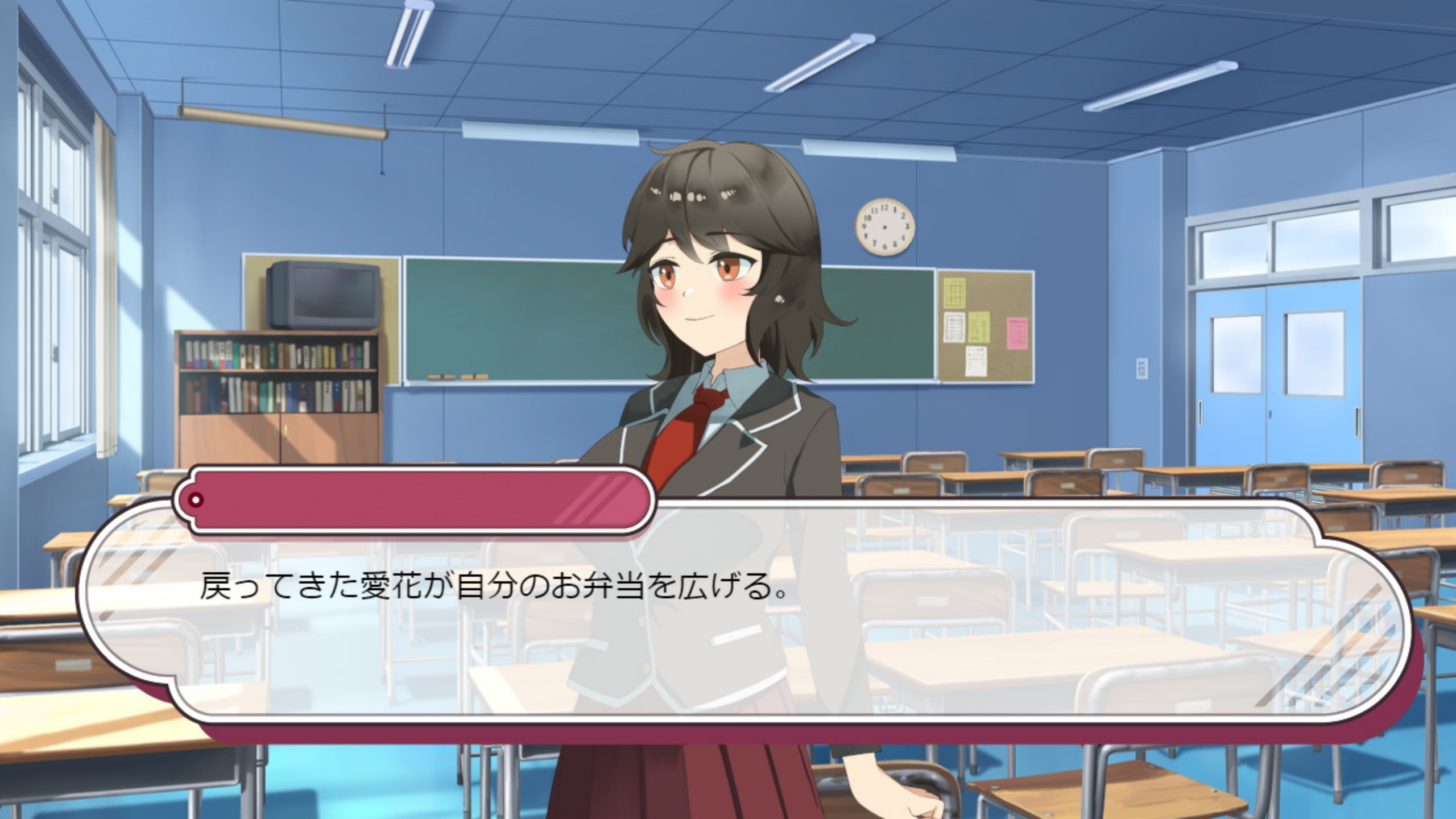

つい聞き耳を立ててしまった。

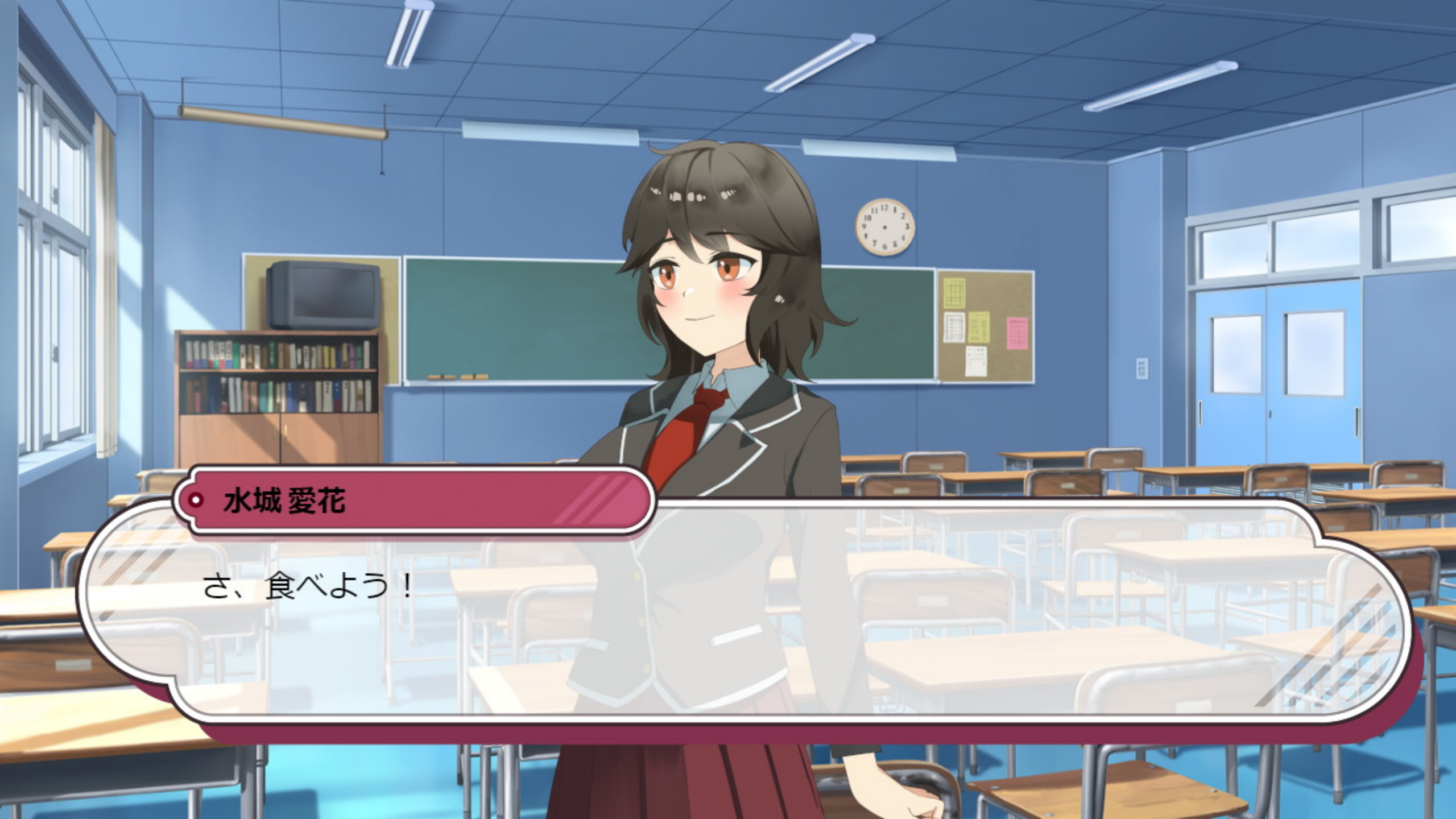


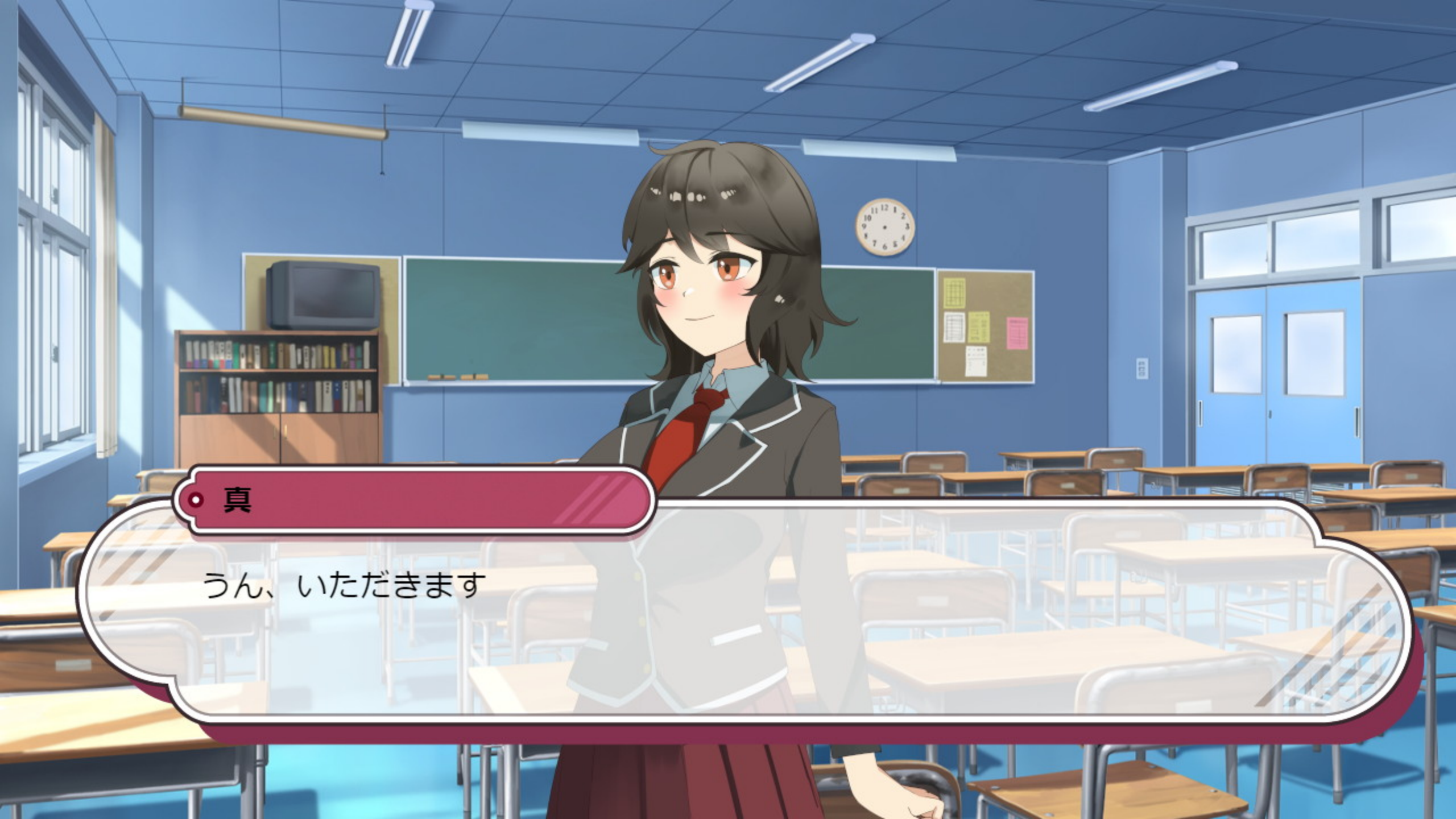
・・・もしかして愛花の元カレだろうか。


水城 愛花
ごめんね！ おまたせ！

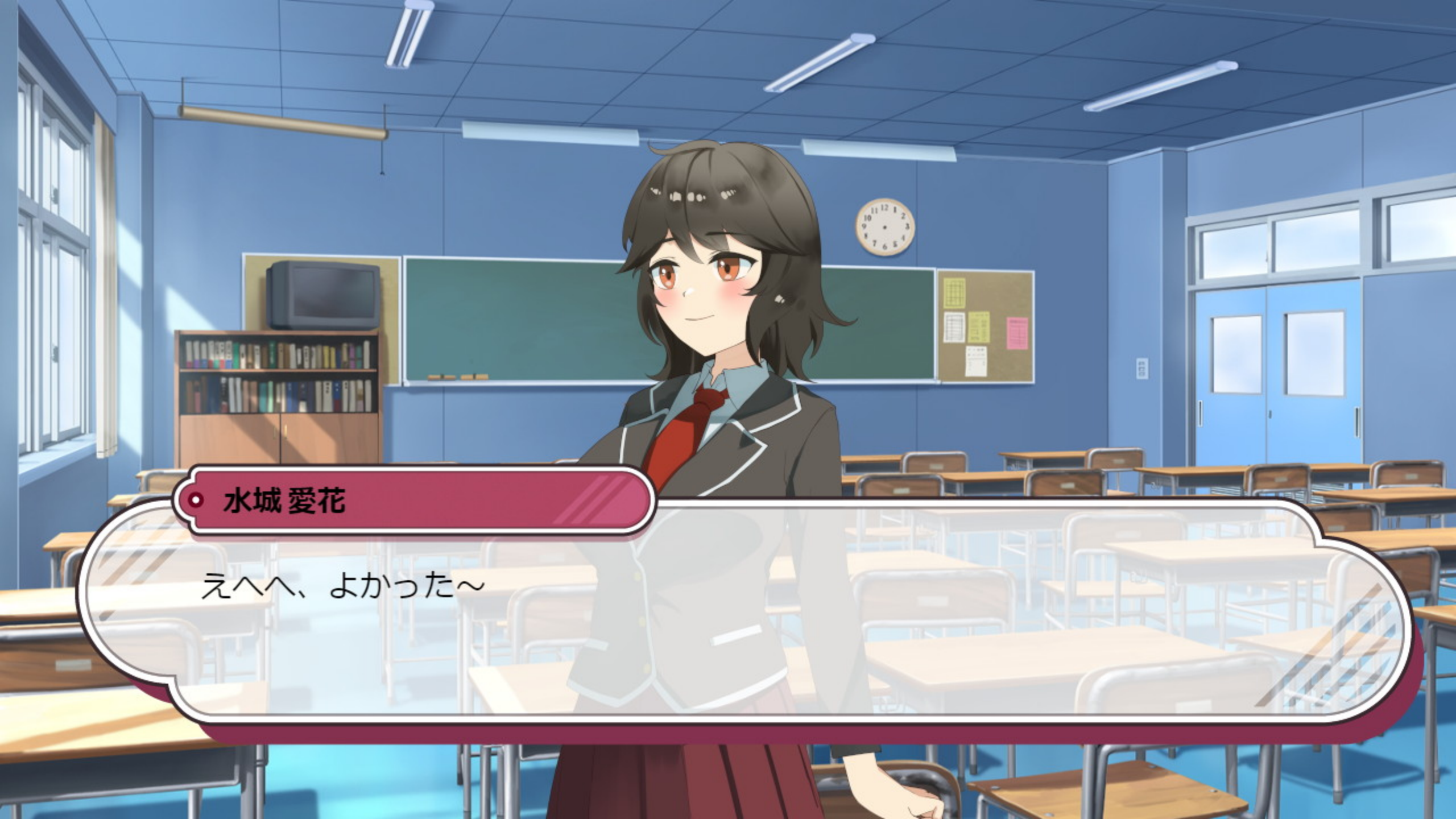

真
ううん、大丈夫だよ

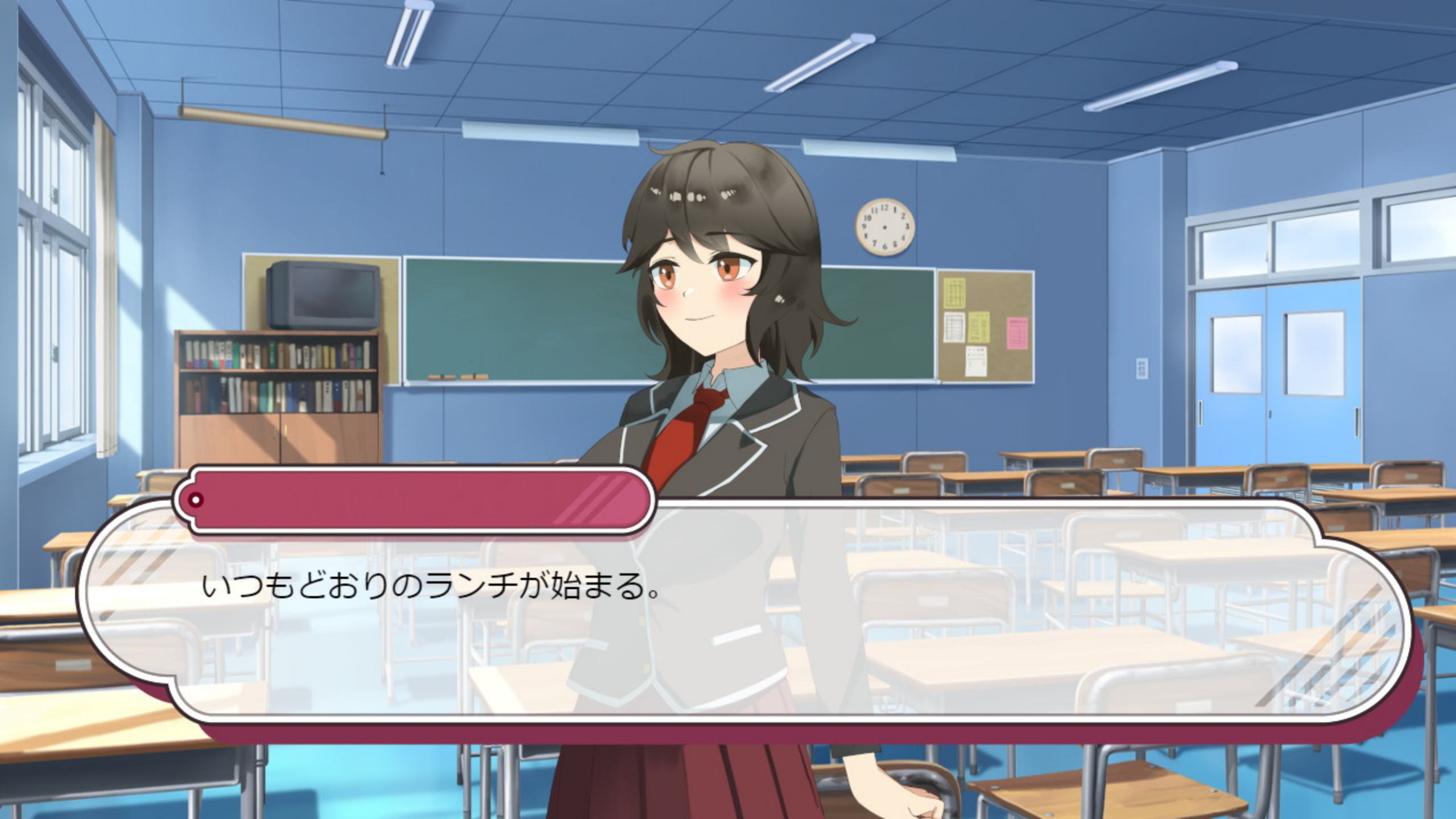

戻ってきた愛花が自分のお弁当を広げる。

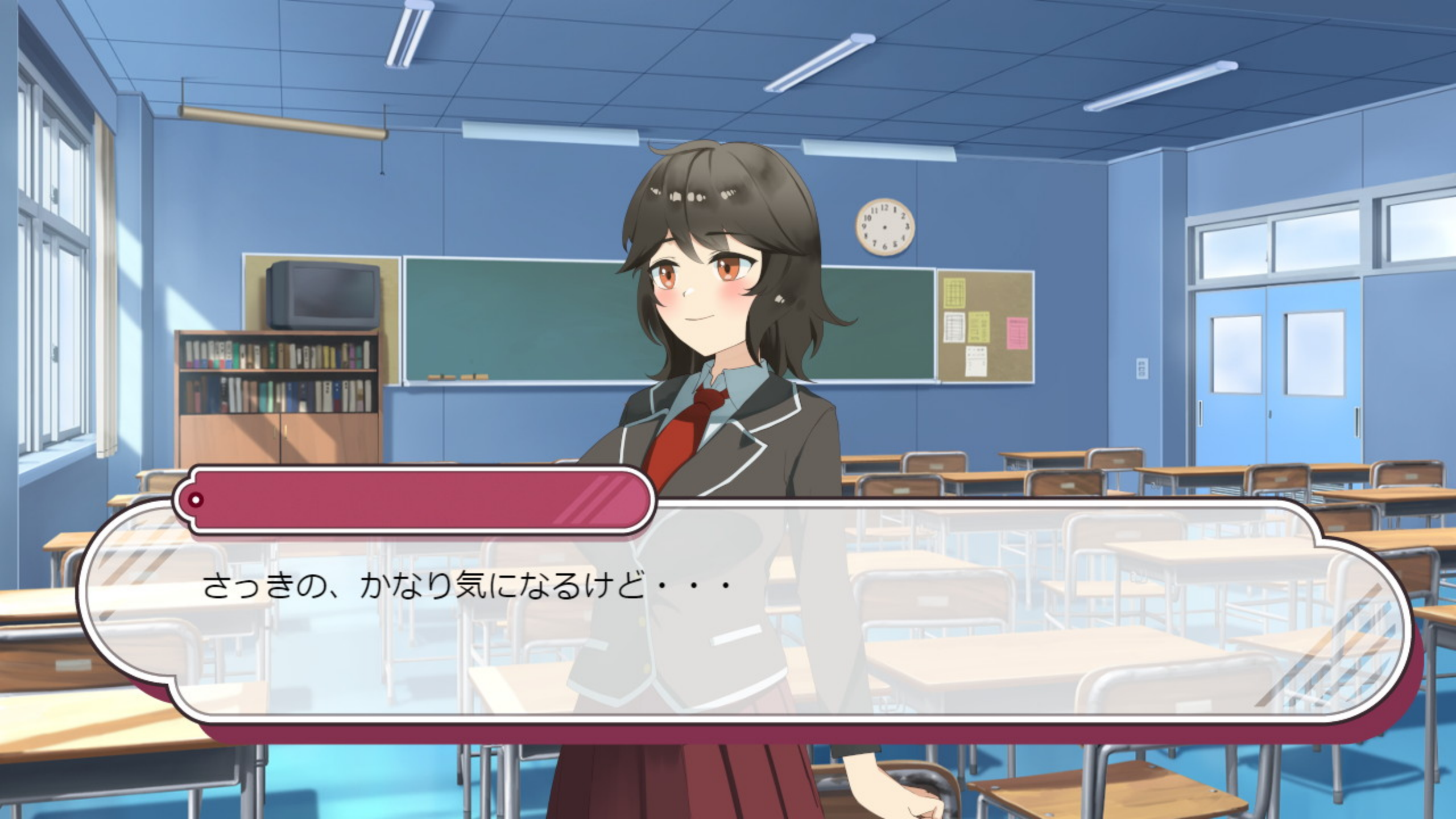

水城 愛花
さ、食べよう！

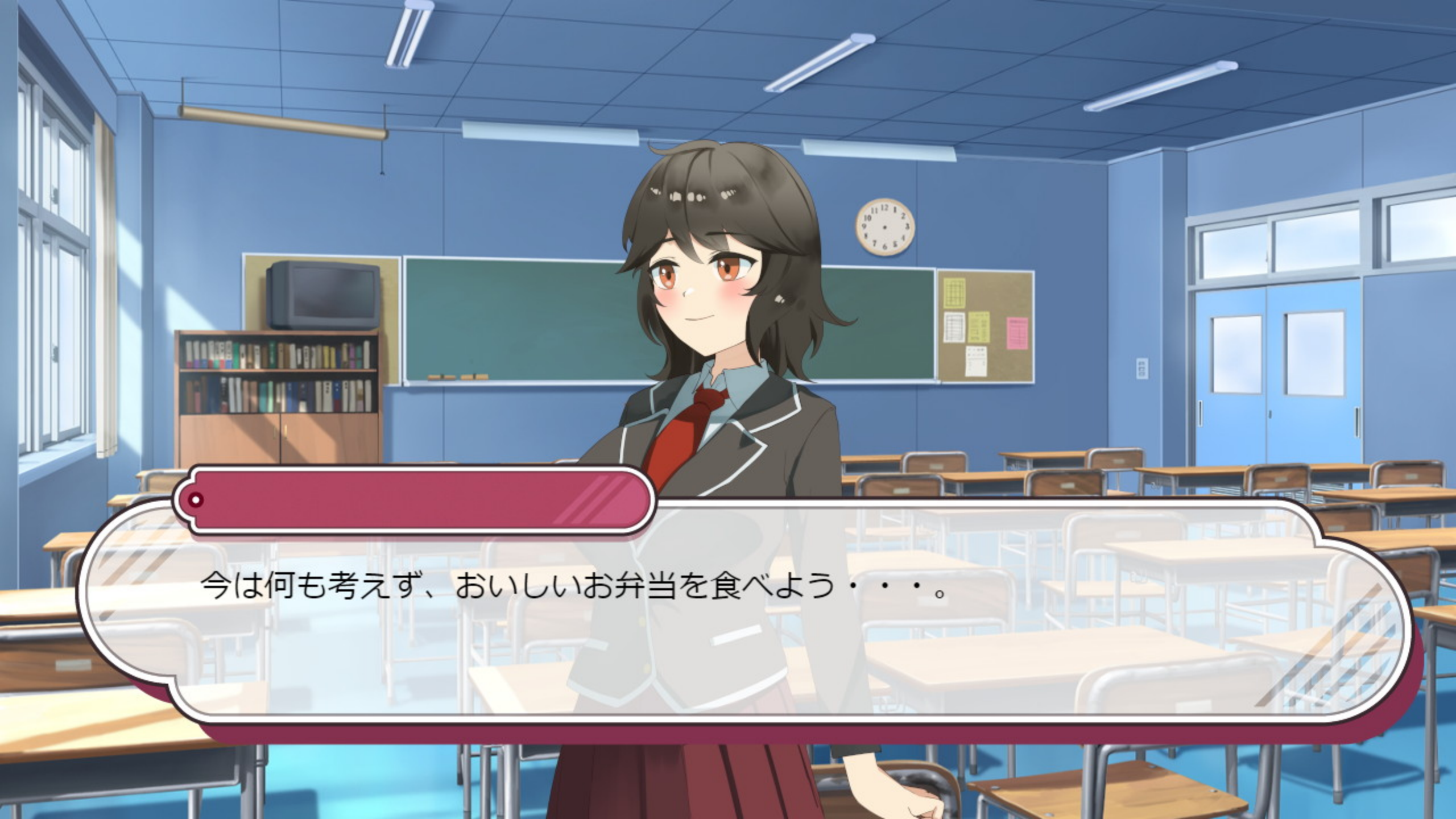

真
うん、いただきます

真
わ、このハンバーグすごくおいしいよ！


水城 愛花
えへへ、よかった～


いつもどおりのランチが始まる。


さっきの、かなり気になるけど・・・


今は何も考えず、おいしいお弁当を食べよう・・・。

放課後、校門で待ち合わせて一緒に帰る。

いままでに何度も繰り返したこの道のりも、
一歩一歩、幸せを踏みしめながら歩ける。

いつもと同じように他愛のない話をしながらしばらく歩いた。

ただ、なんとなく愛花の表情がいつもと違う気がする。

真
勘違いならいいんだけど・・・愛花、なにかあった？

水城 愛花
うーん、そのー・・・

真
・・・お昼の人と関係ある？

水城 愛花
・・・木村先輩のこと？

真
うん、たぶんそう

水城 愛花
木村先輩とは・・・なんていうか・・・

真
あの、僕は本当に気にしてないから・・・

真
元カレとか？

水城 愛花
ううん・・・付き合ったりはしてないんだけど・・・

珍しく愛花が言い淀む。

水城 愛花
えっと・・・とりあえず公園で座って話さない？

いつものジュースを飲みながら、並んでベンチに腰掛ける。

水城 愛花
えっと・・・お付き合いできたのは本当にうれしいんだけど、

水城 愛花
これから話すことで、もしまこちゃんが私のこと嫌いになったら、

水城 愛花
その・・・

よほど言いにくいことなのだろう。
愛花がめったに見せない暗い顔をしている。

真
・・・うん、ちゃんと聞くよ

水城 愛花
あのね、私・・・頼まれると断れなくて・・・

水城 愛花
その、いろんな人とHしたことがあるの

胸がぎゅっと締め付けられた。

昔から一緒に過ごしてきた幼馴染

恋心を自覚したのは１年ほど前だが、ずっと好きだった。

そんな愛花が僕の知らないところで知らない男と・・・

真
・・・

真
僕は・・・それでも構わない

真
愛花のことはずっと好きだったし、今も好きだ

真
僕が知らなかっただけで、
愛花はいろんな経験をしてきた上で、今の愛花でしょ？

真
それなら僕の、愛花を好きな気持ちは変わらないよ

水城 愛花
まこちゃん・・・

水城 愛花
ありがと・・・

愛花の目には涙がにじんでいる。

真
でも、これからはその・・・

水城 愛花
うん、まこちゃんと付き合ってるし、もう誰ともＨするつもりはないよ

真
うん、それなら全然大丈夫

真
大好きだよ、愛花

水城 愛花
うん・・・

水城 愛花
ありがとう、まこちゃん・・・

僕と愛花は抱き合って、そっと唇を重ねた。

幸せに包まれながらも、僕は同時に別のことも考える。

じゃあ、先輩とお昼に話していたのは、
ヤらせてくれないかというお願いだったのか。

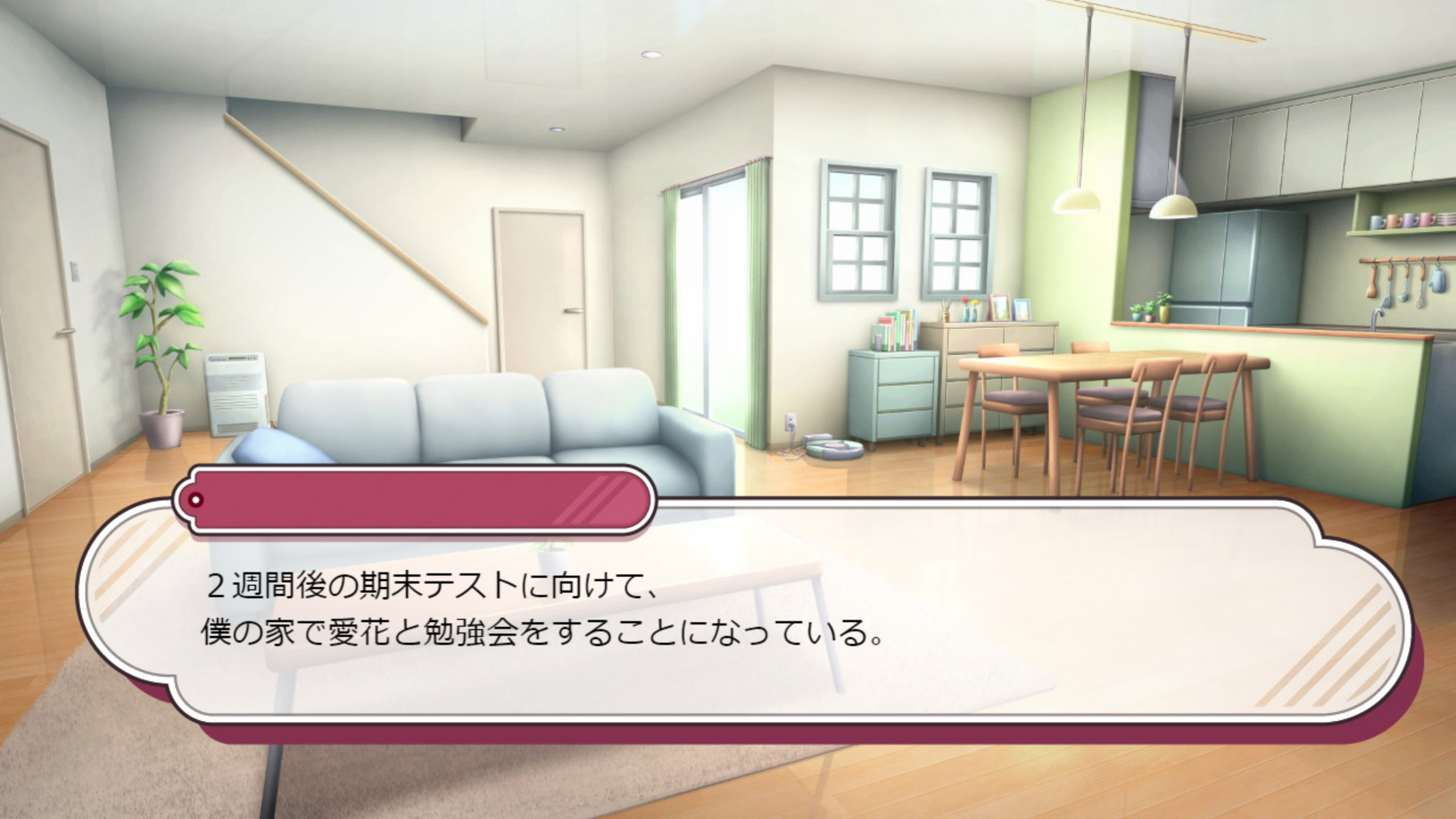
先日、後輩たちが噂していた、Ｈさせてくれる女の子というのも・・・。

水城 愛花
まこちゃん？

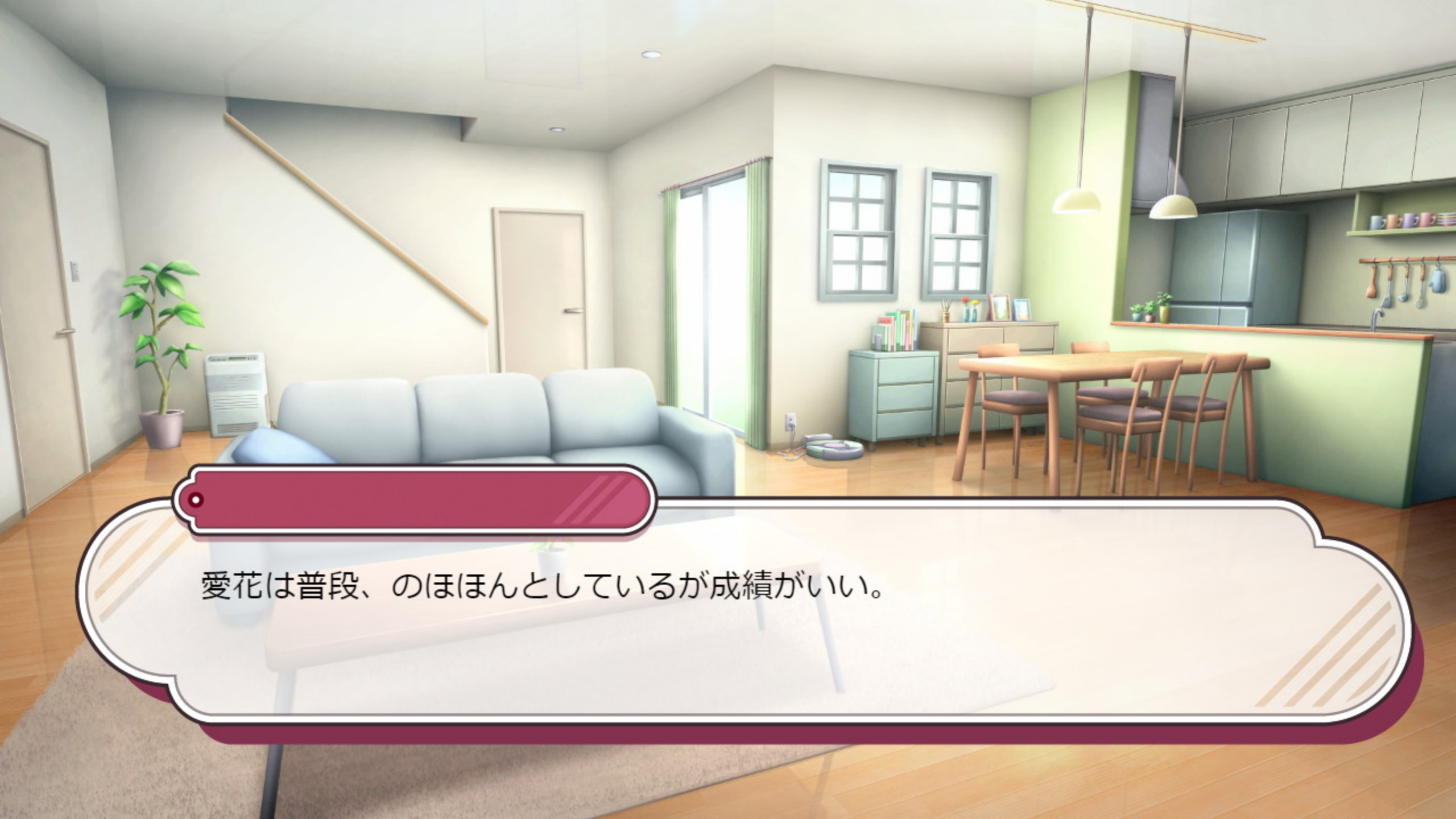
真
ううん、何でもないよ

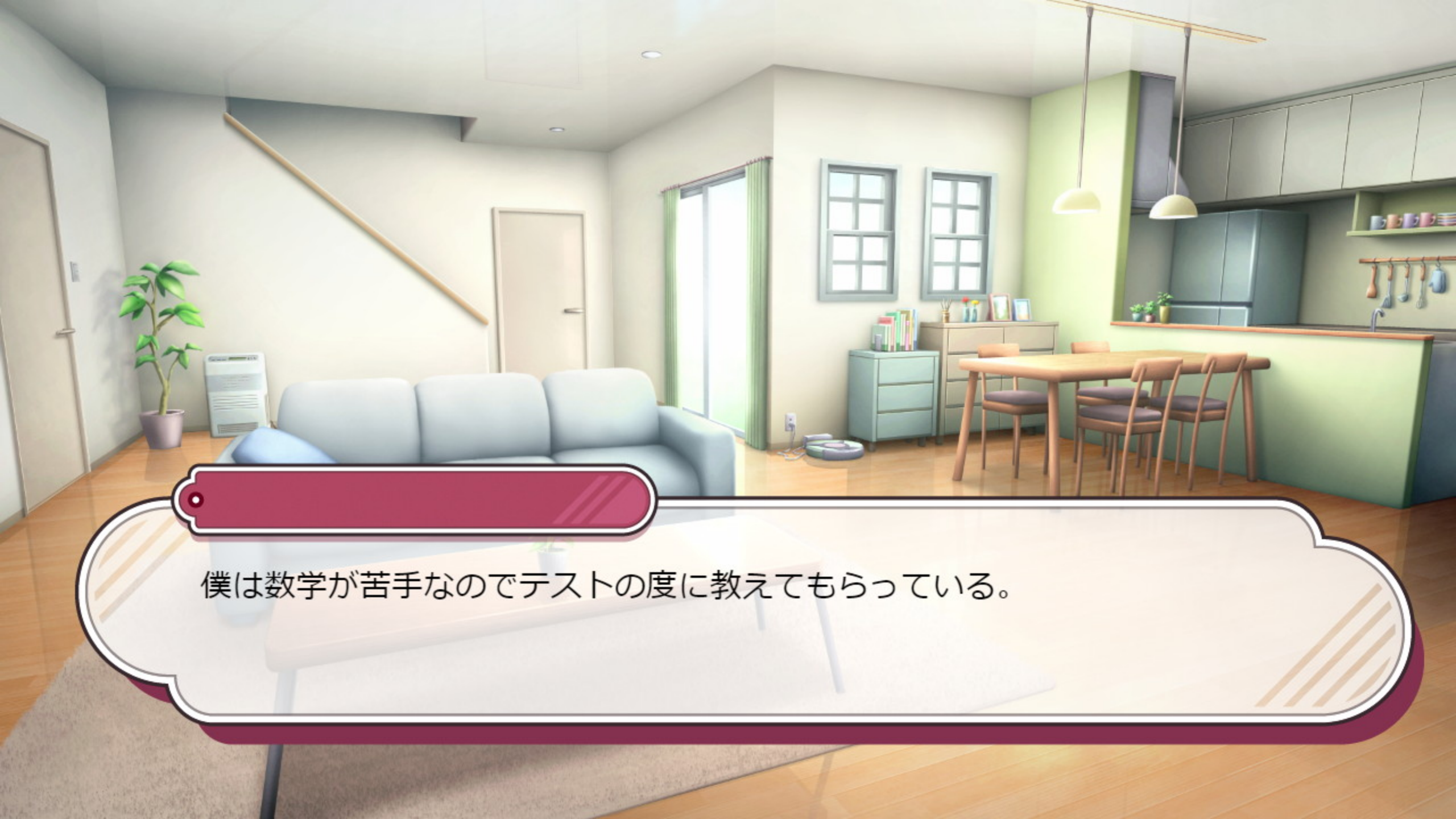
もやもやとした気持ちを振り払い、
僕は愛花を強く抱きしめた。

今日は土曜日



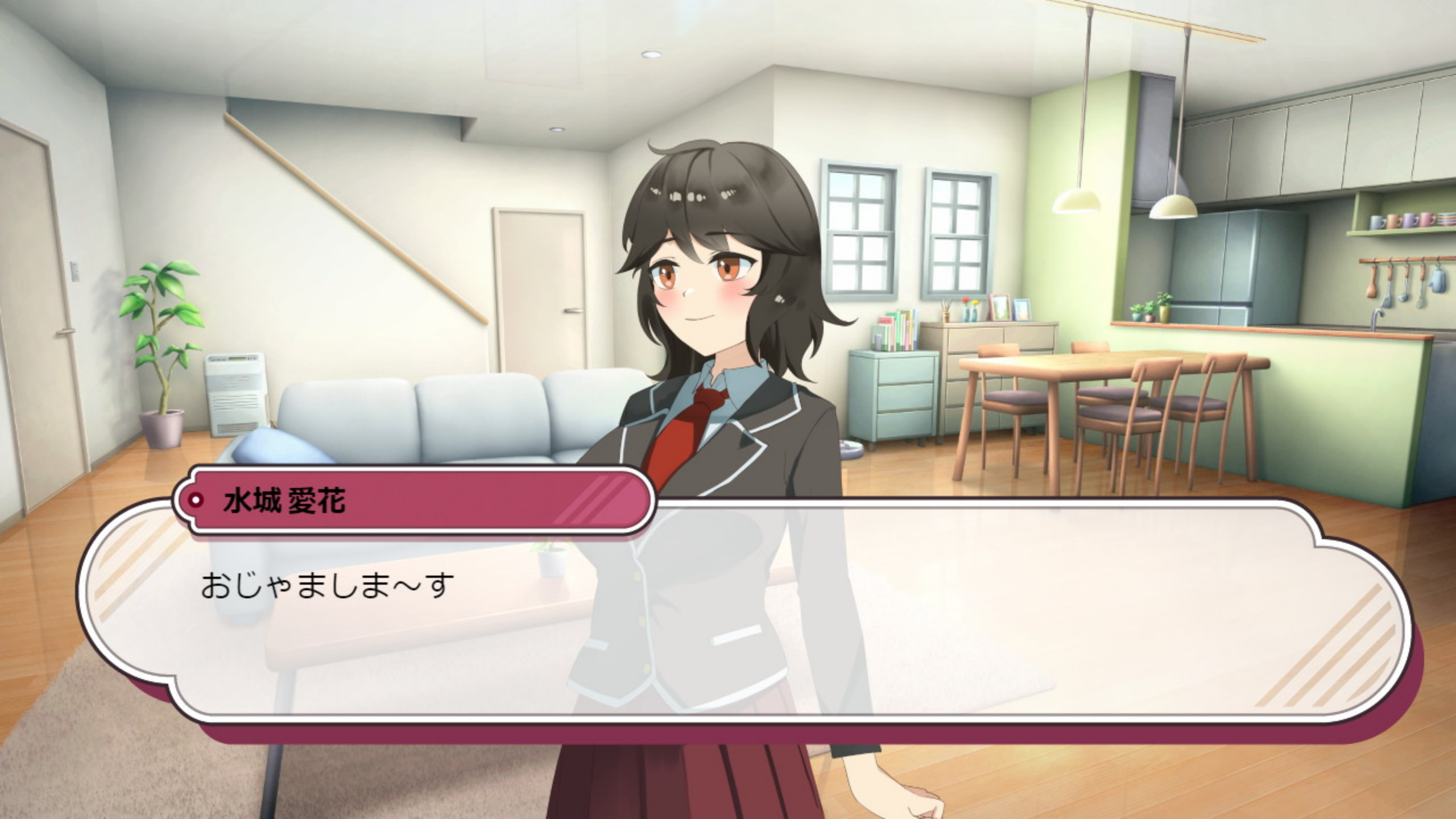
２週間後の期末テストに向けて、
僕の家で愛花と勉強会をすることになっている。


愛花は普段、のほほんとしているが成績がいい。

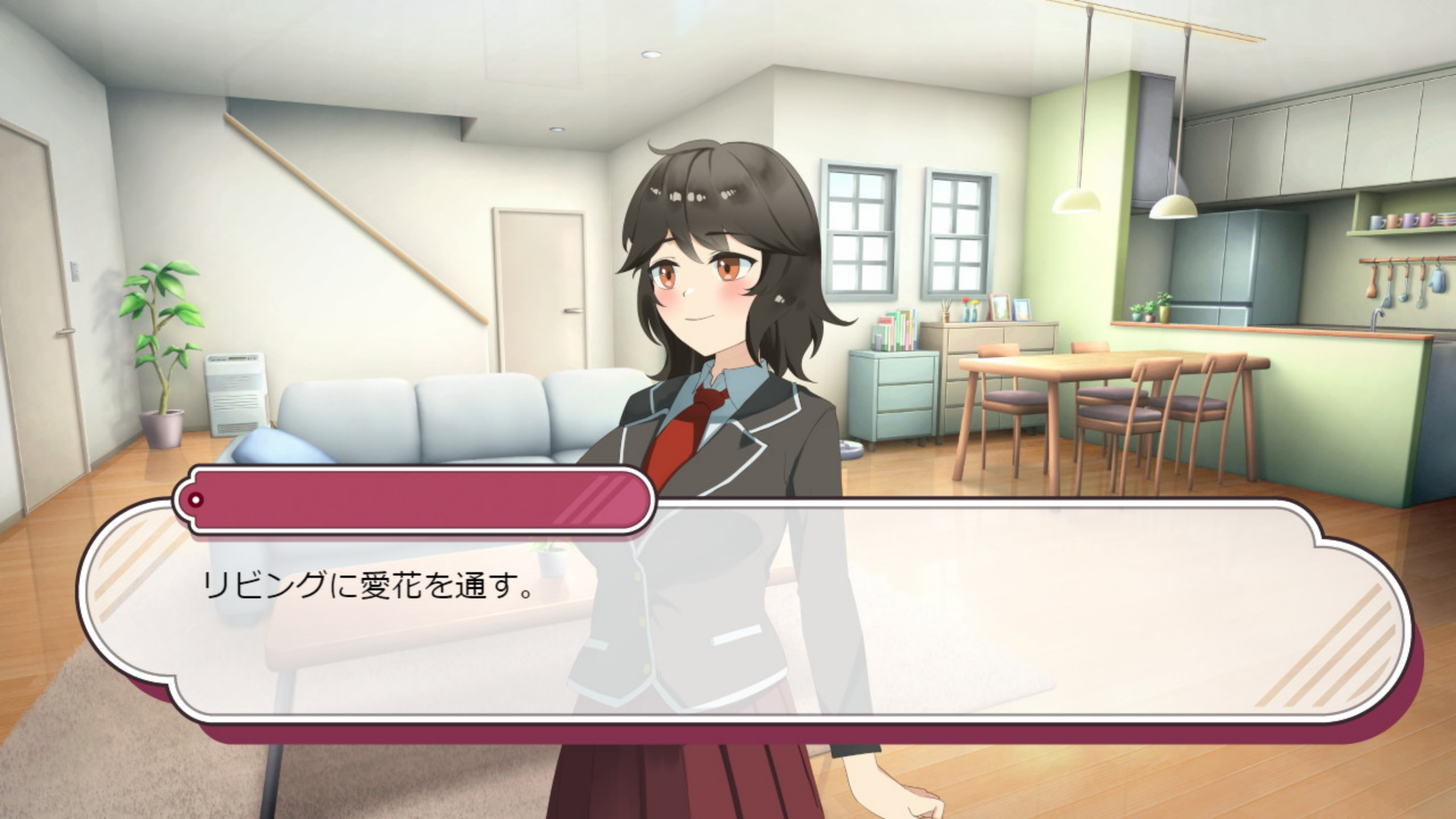

僕は数学が苦手なのでテストの度に教えてもらっている。

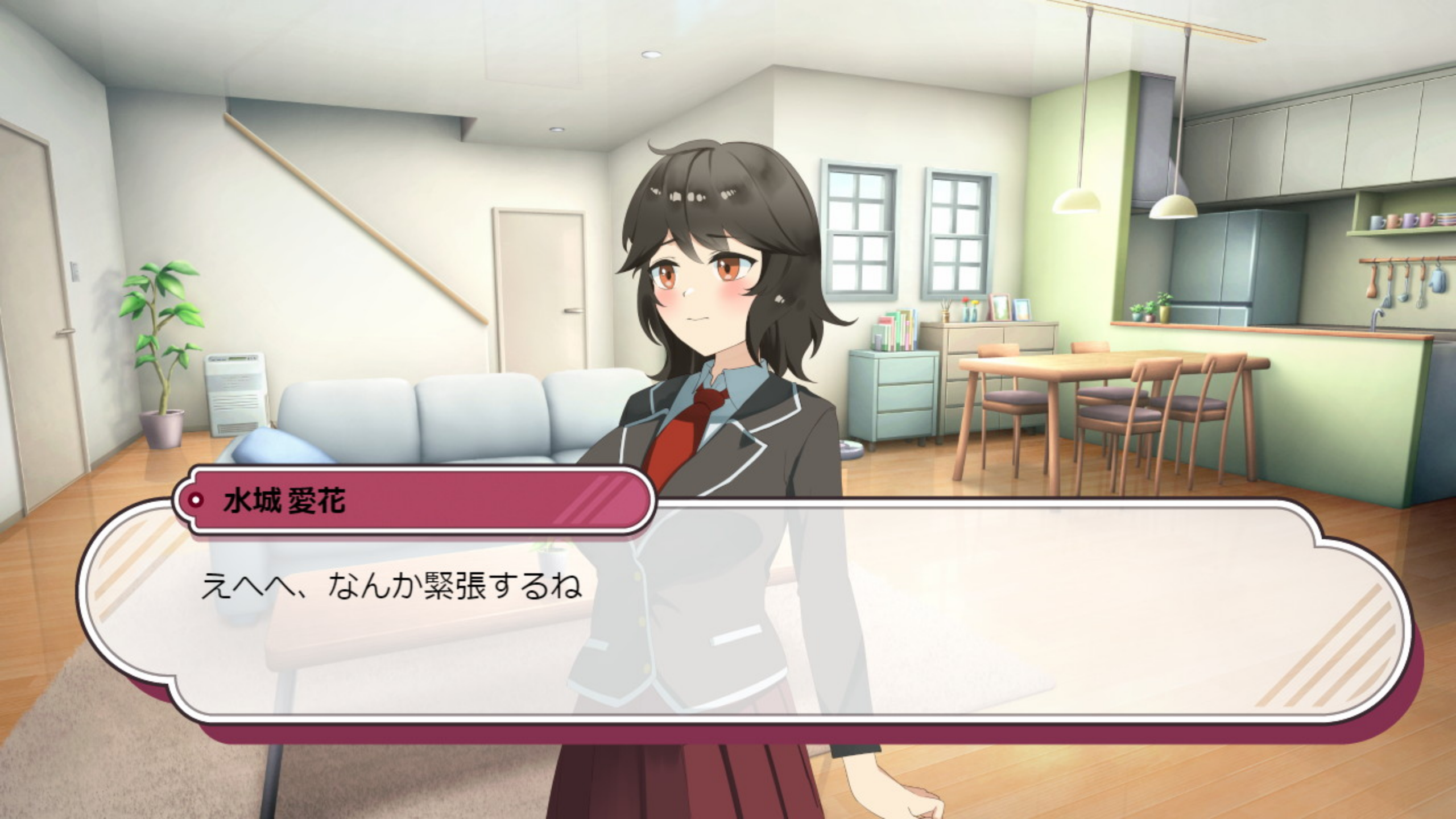
ピンポーン

愛花が来たようだ。

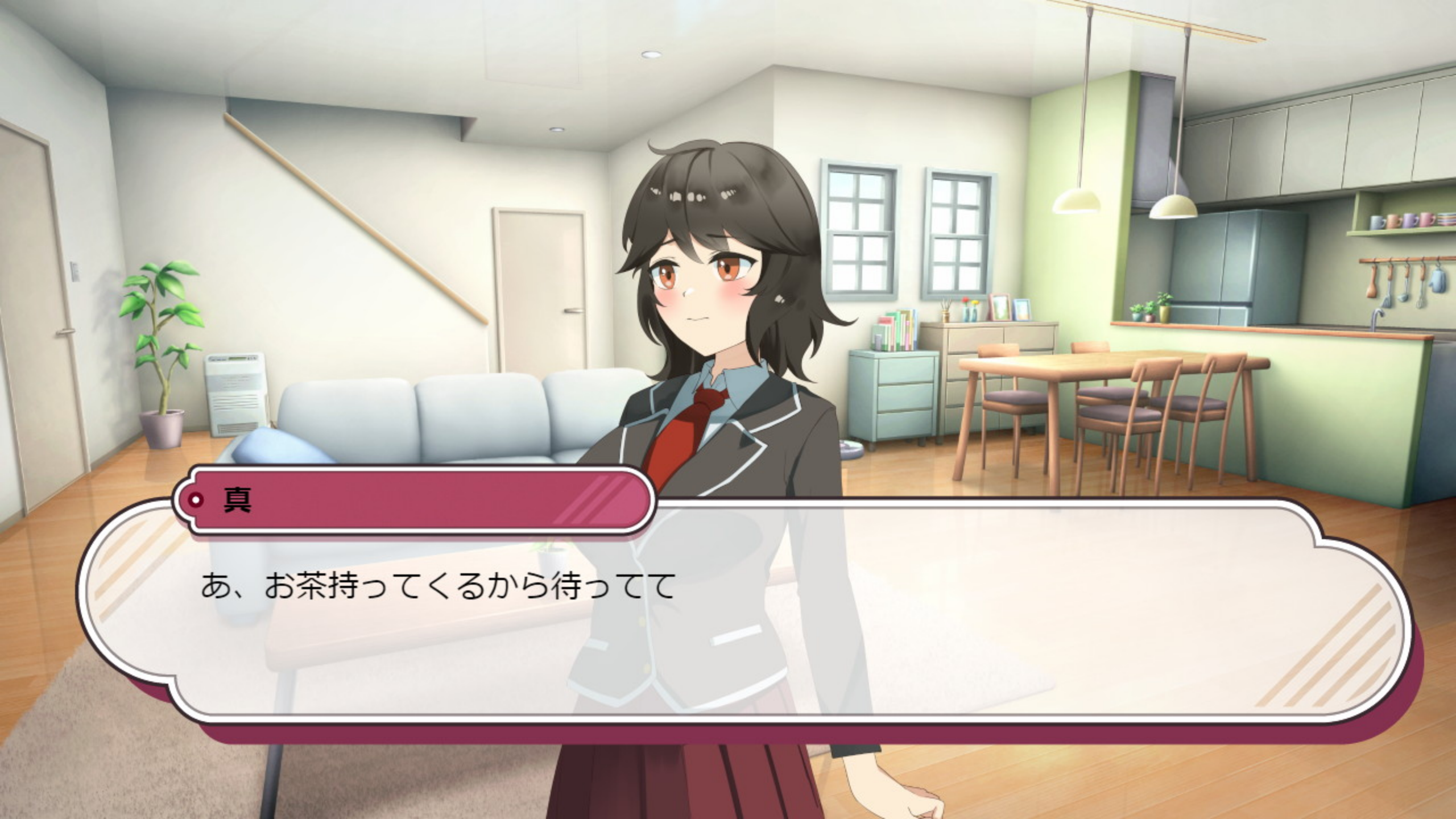

水城 愛花
おじゃましま～す

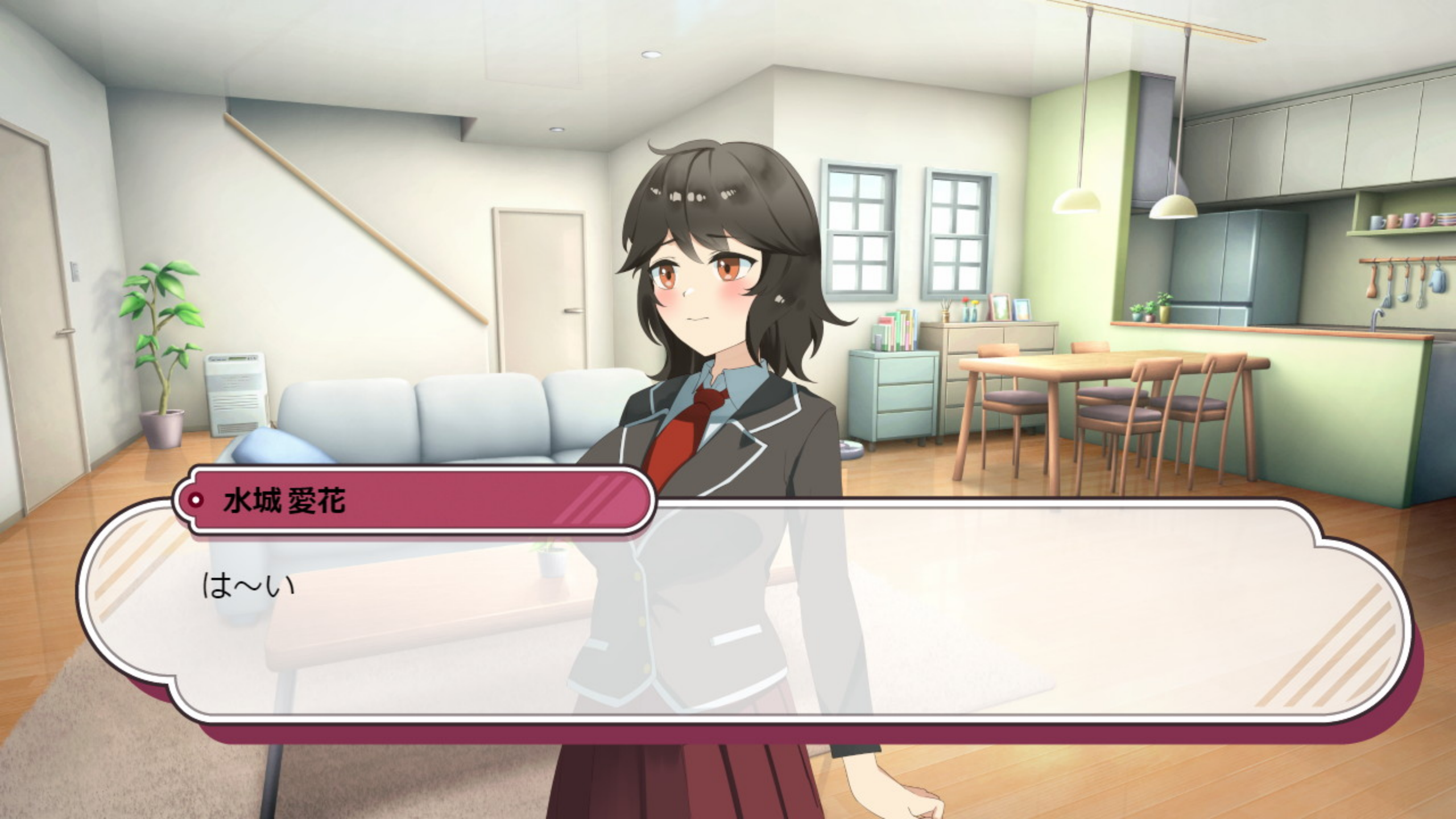
真
いらっしゃい


リビングに愛花を通す。

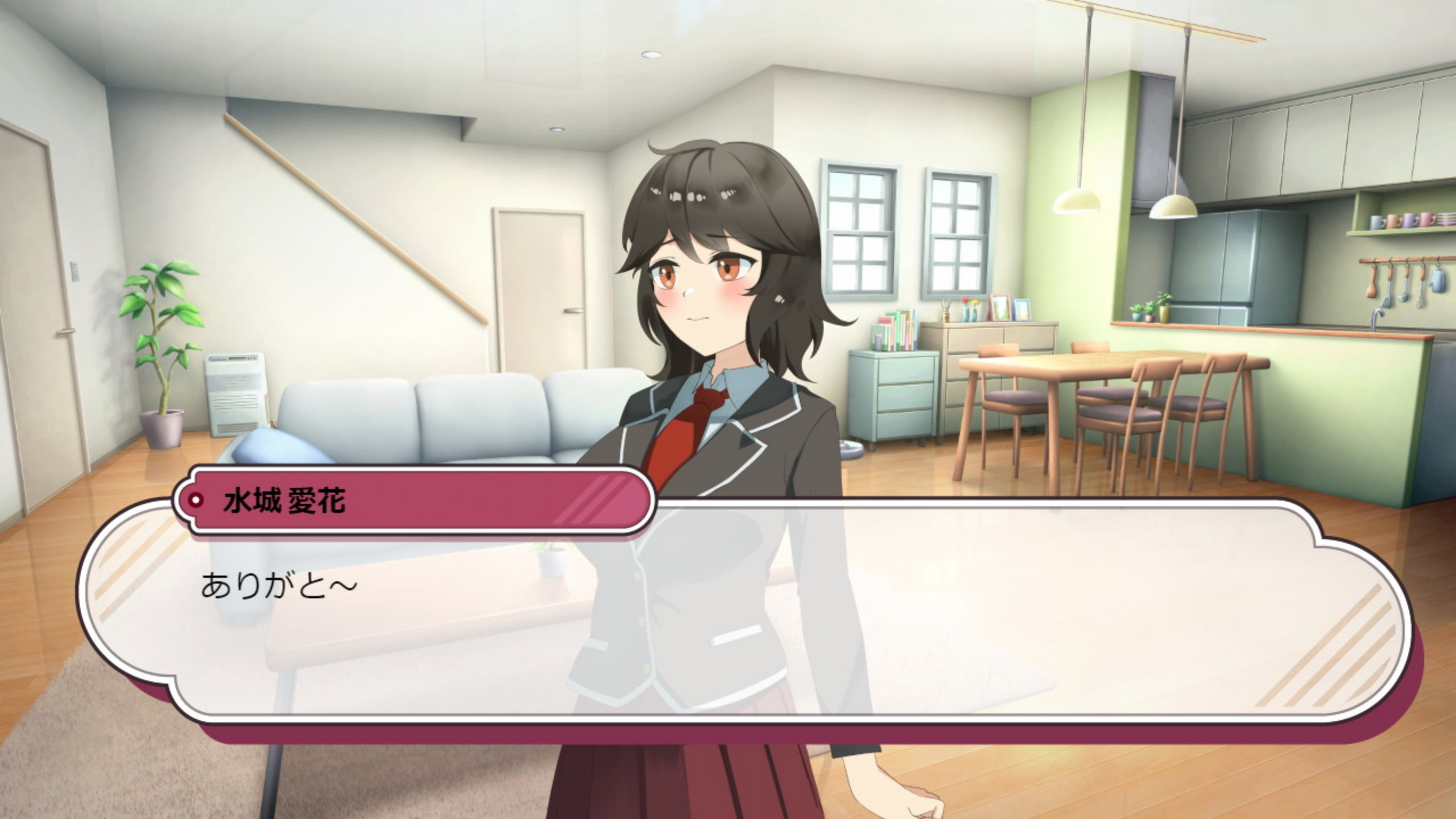

水城 愛花
えへへ、なんか緊張するね

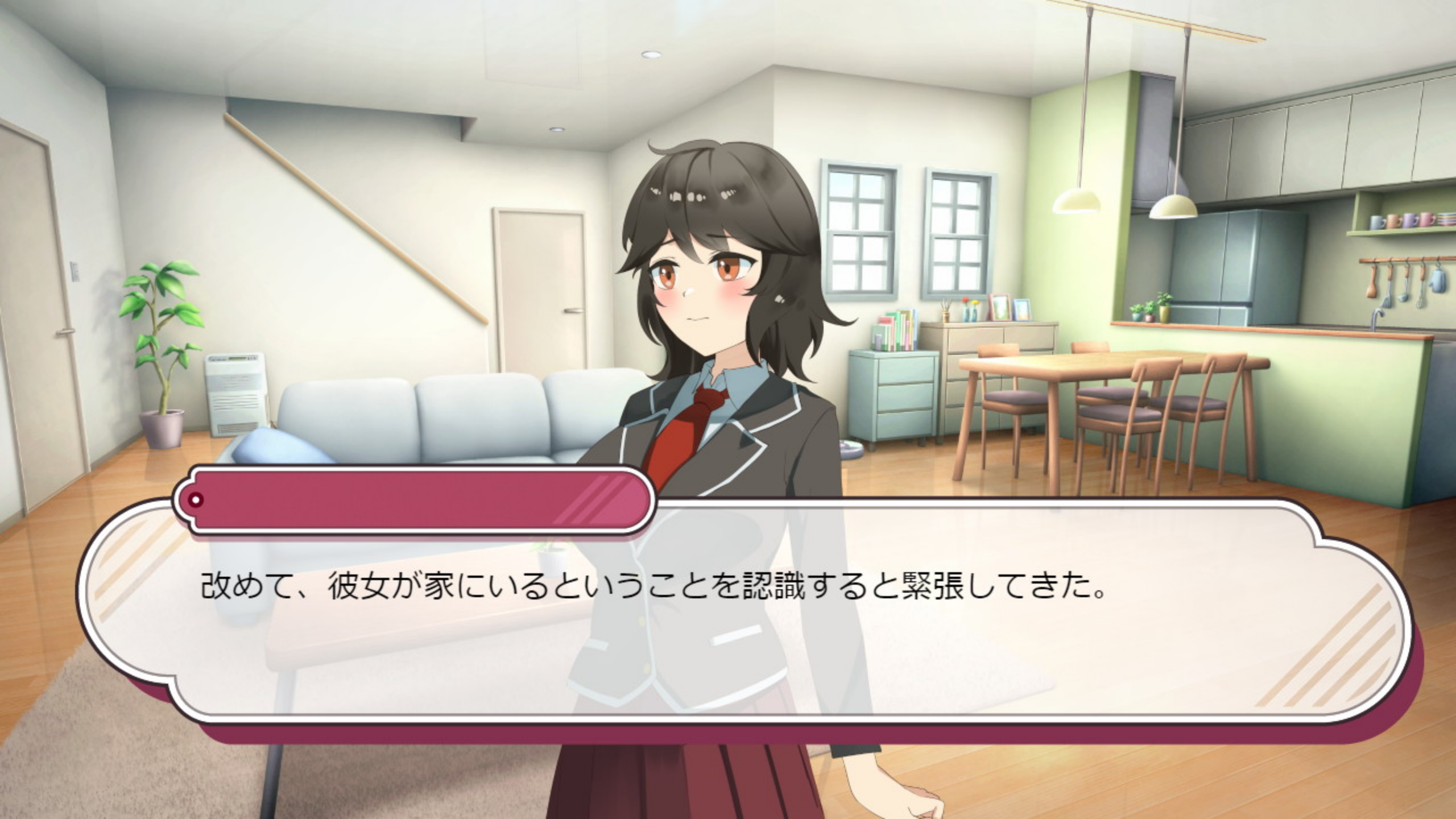
・・・かわいい

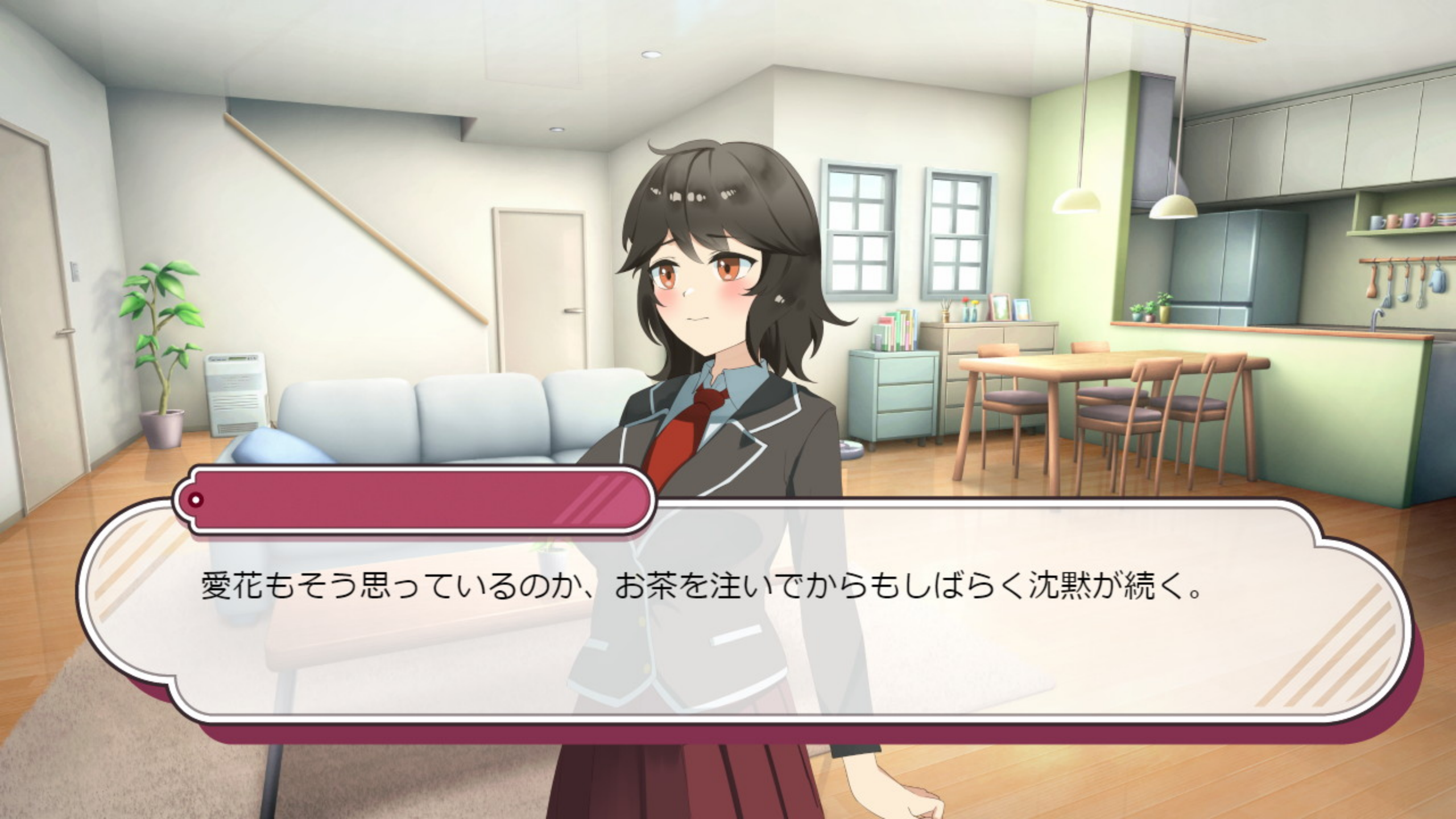

真
あ、お茶持ってくるから待ってて

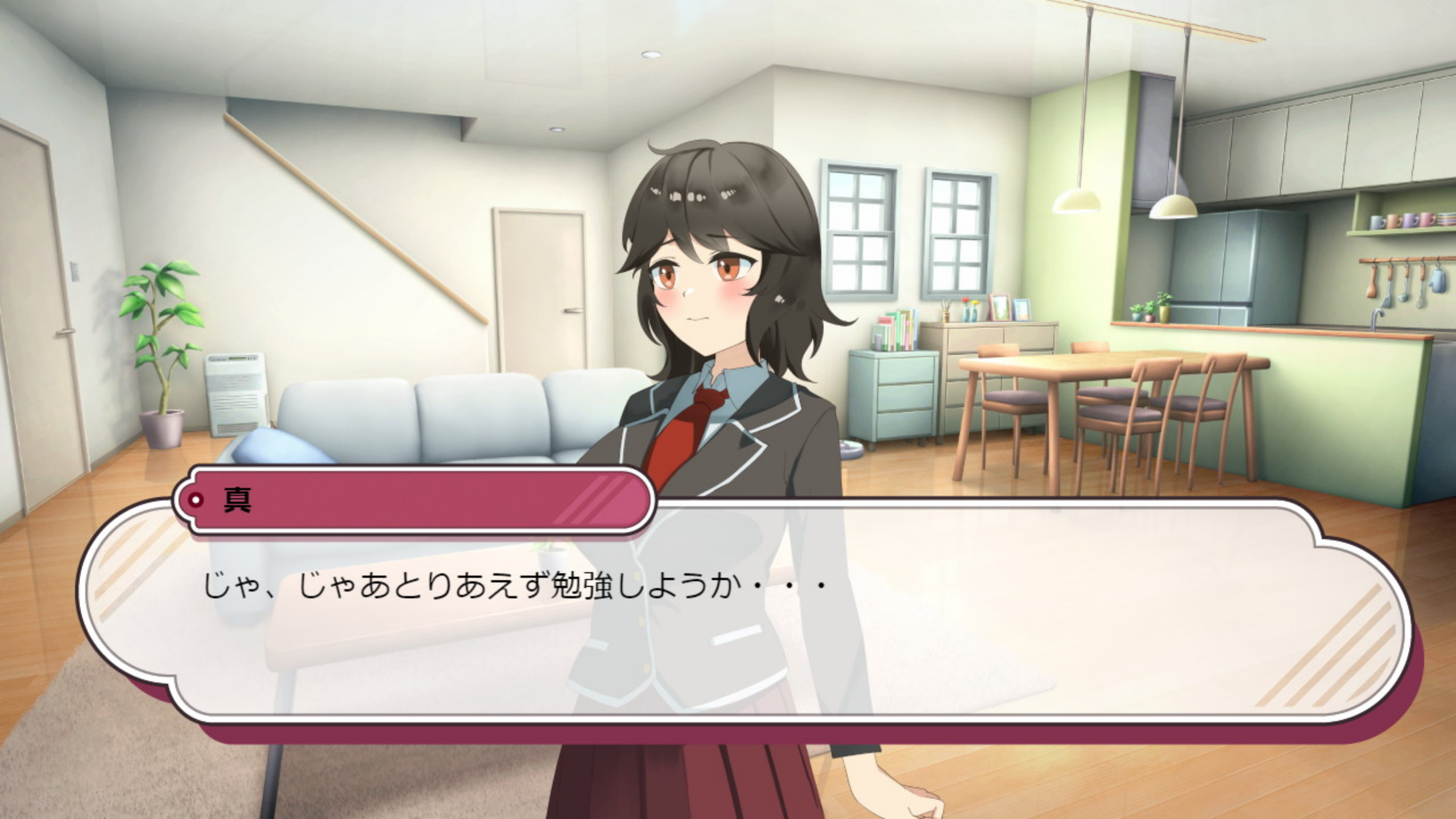

水城 愛花
は～い

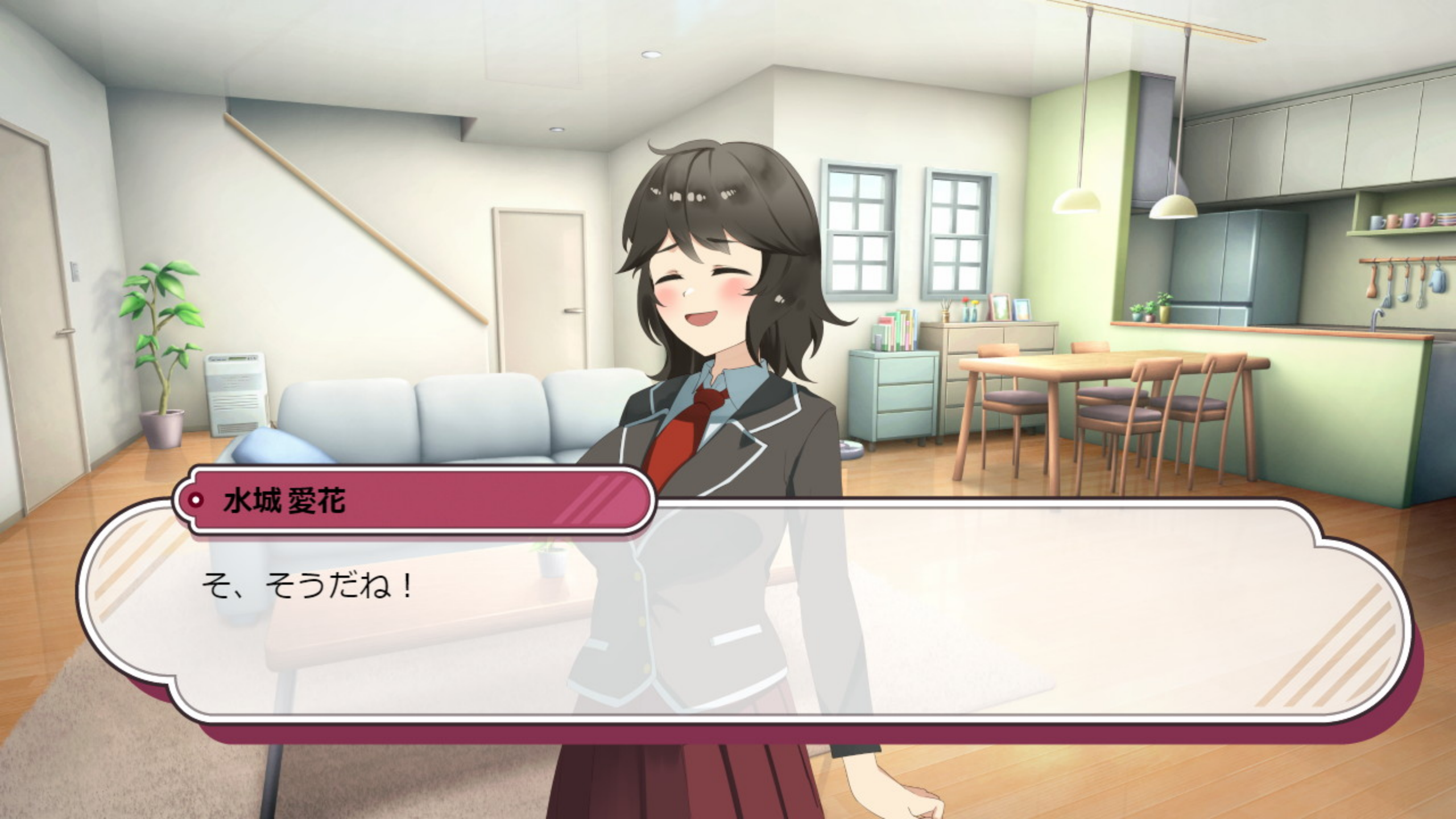
真
おまたせ

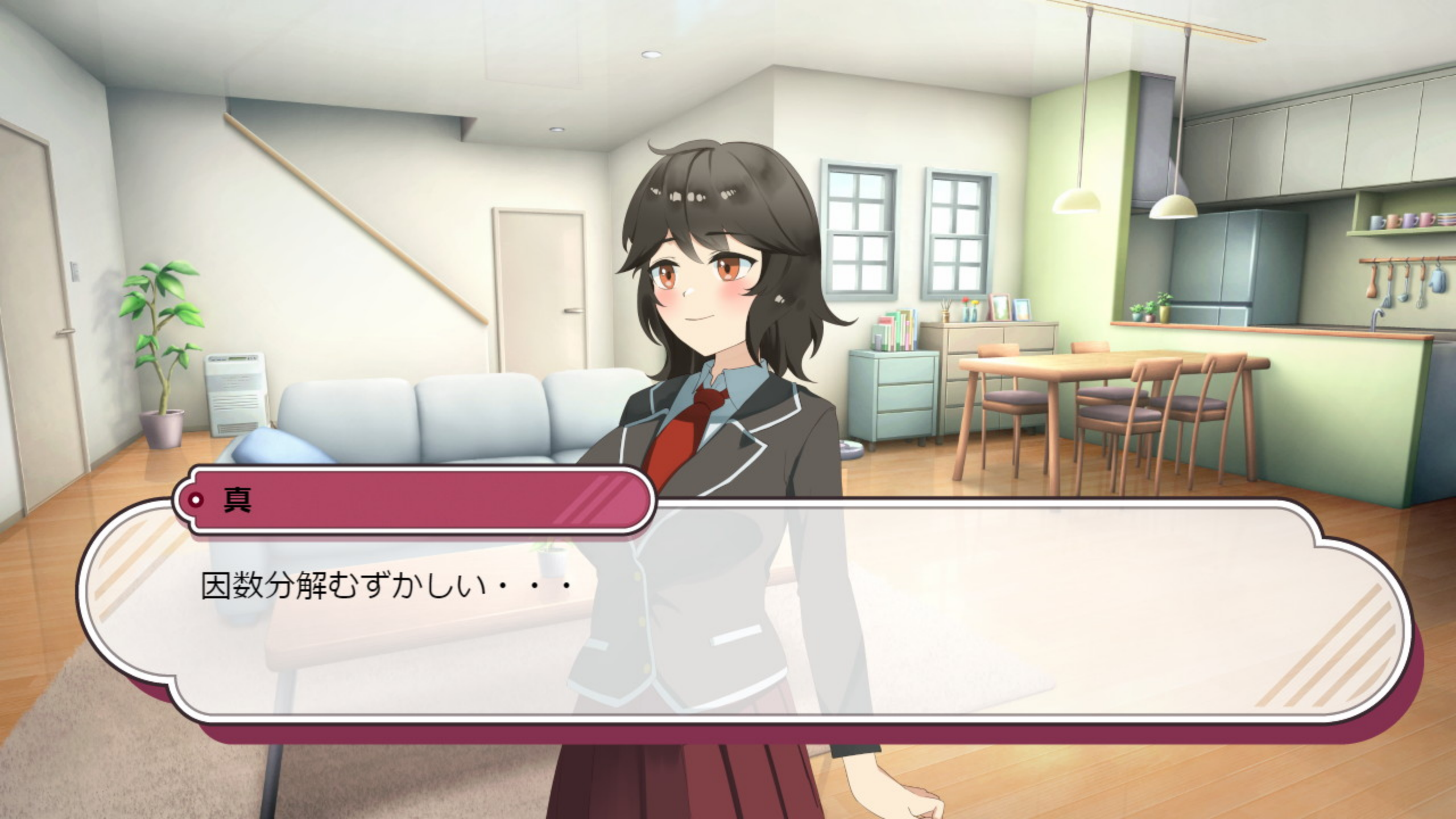

水城 愛花
ありがと～

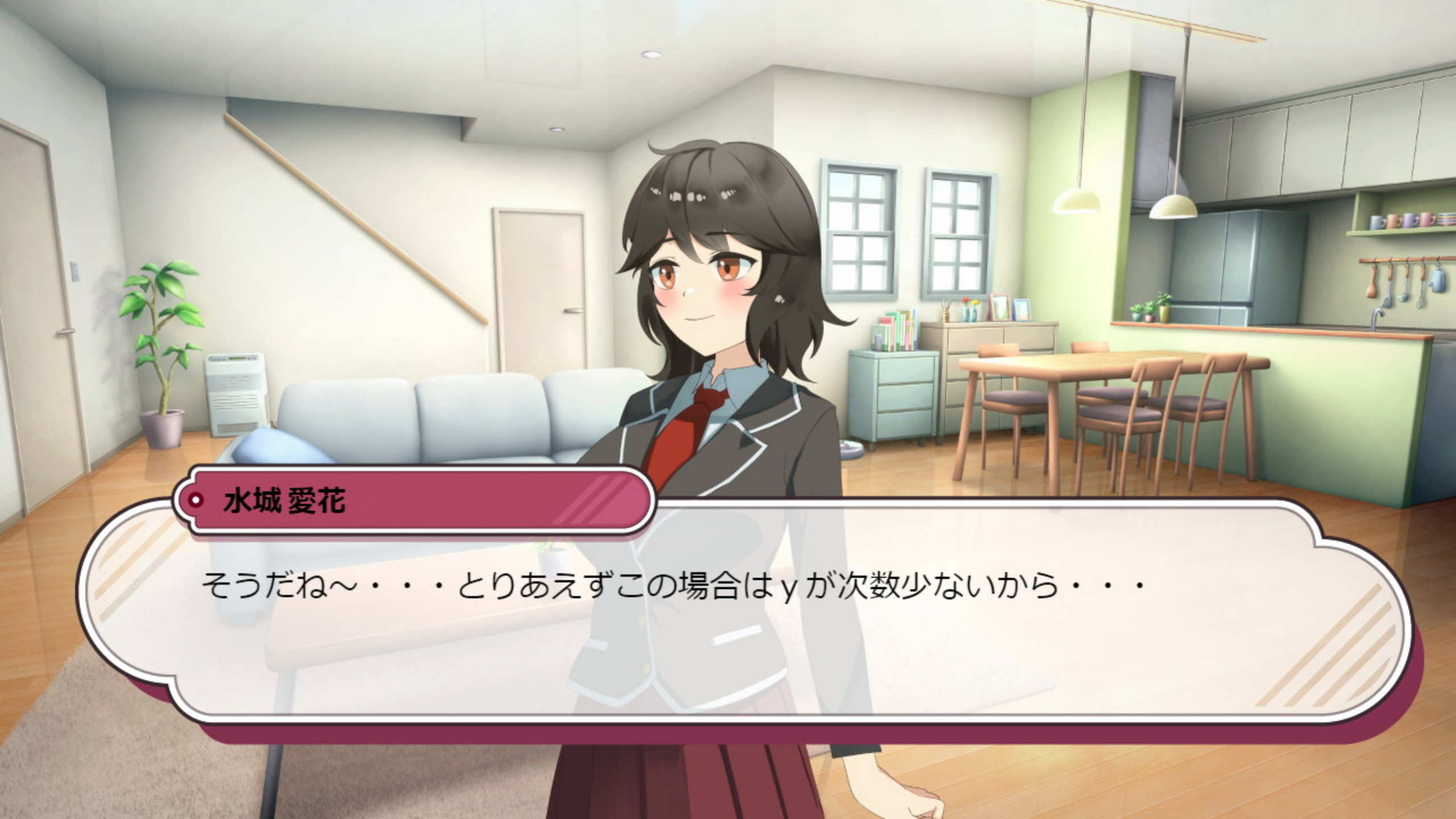

改めて、彼女が家にいるということを認識すると緊張してきた。


愛花もそう思っているのか、お茶を注いでからもしばらく沈黙が続く。


真
じゃ、じゃあとりあえず勉強しようか・・・

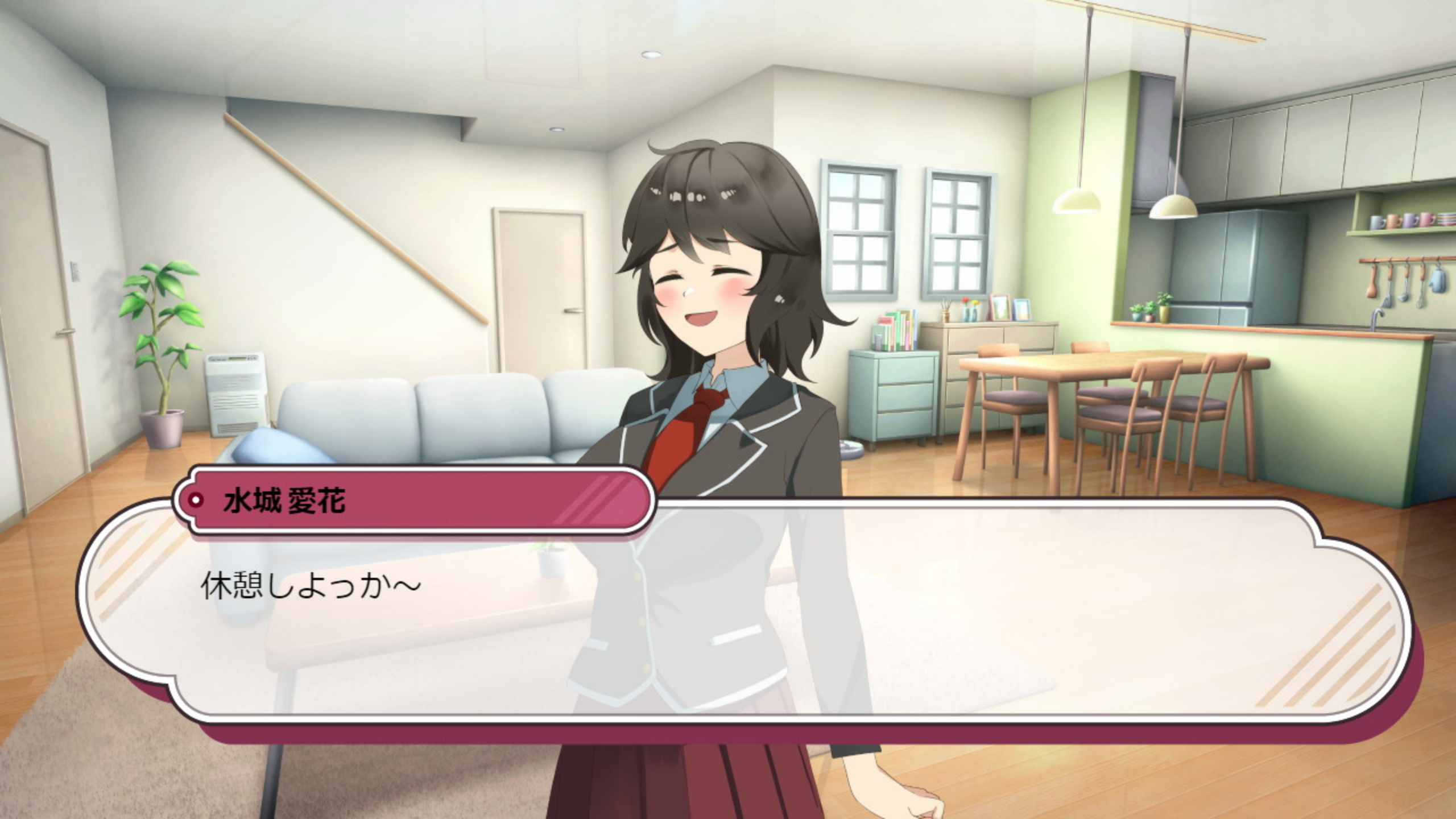

水城 愛花
そ、そうだね！

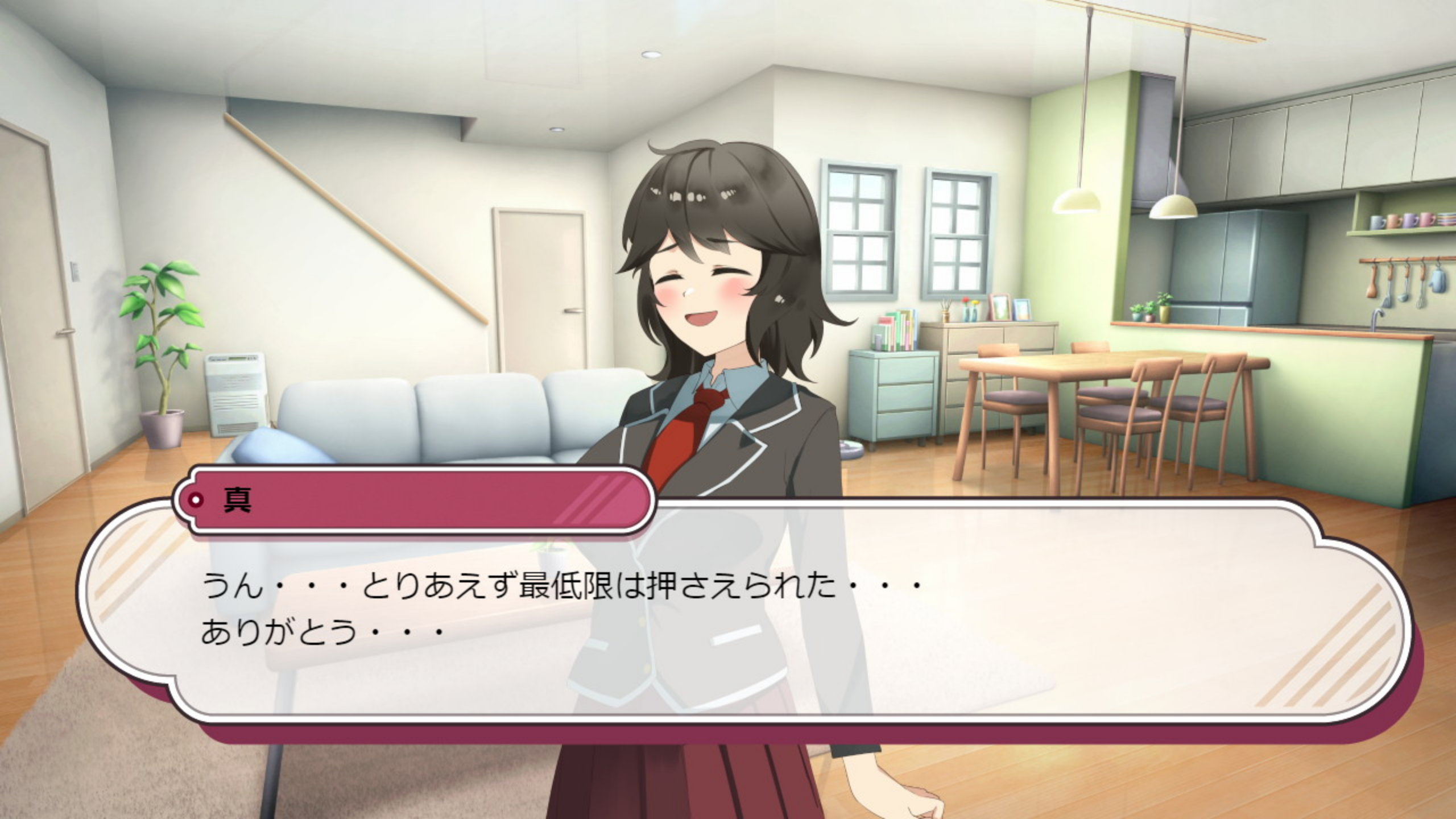

真
因数分解むずかしい・・・

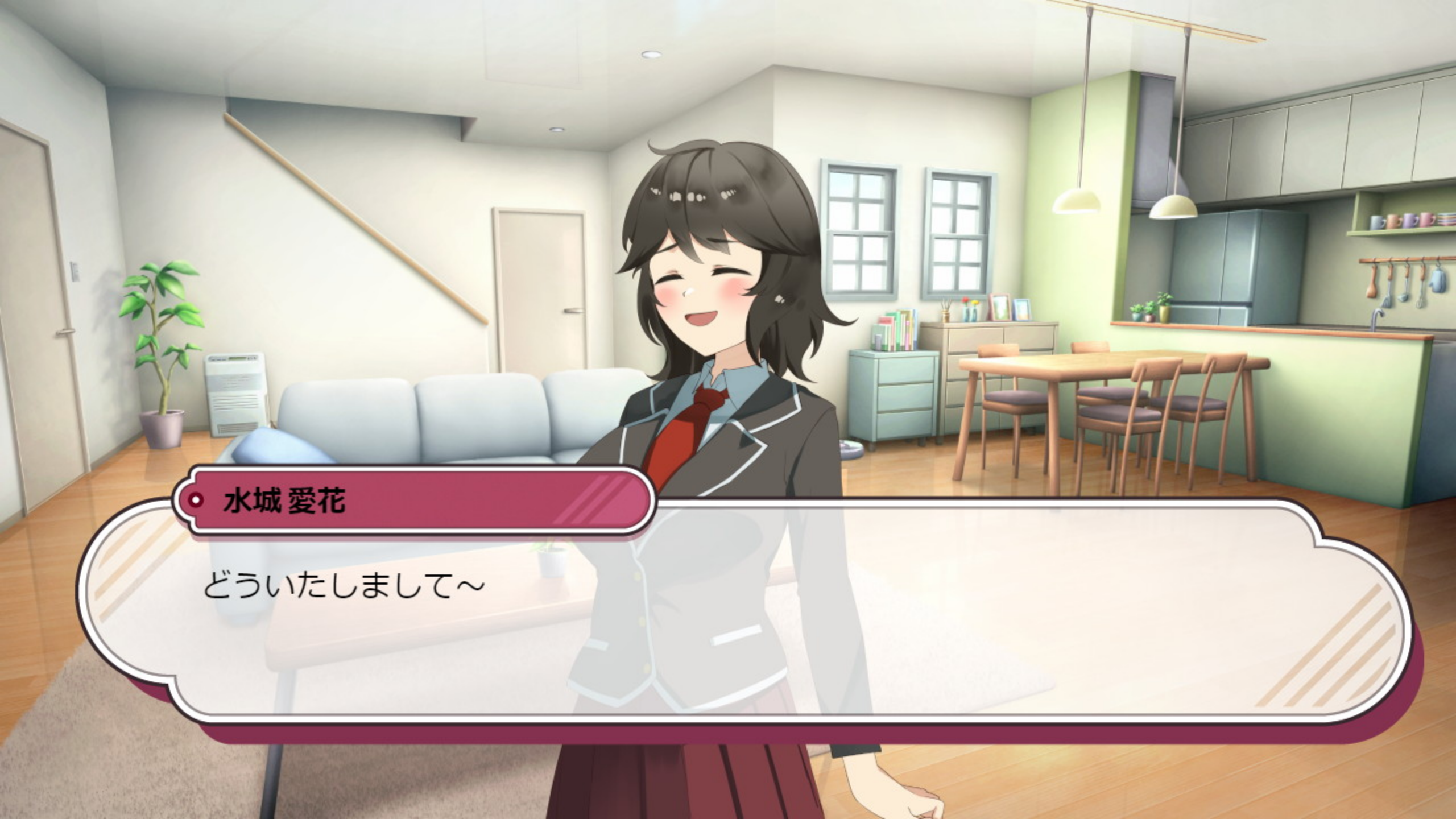

水城 愛花
そうだね～・・・とりあえずこの場合はｙが次数少ないから・・・

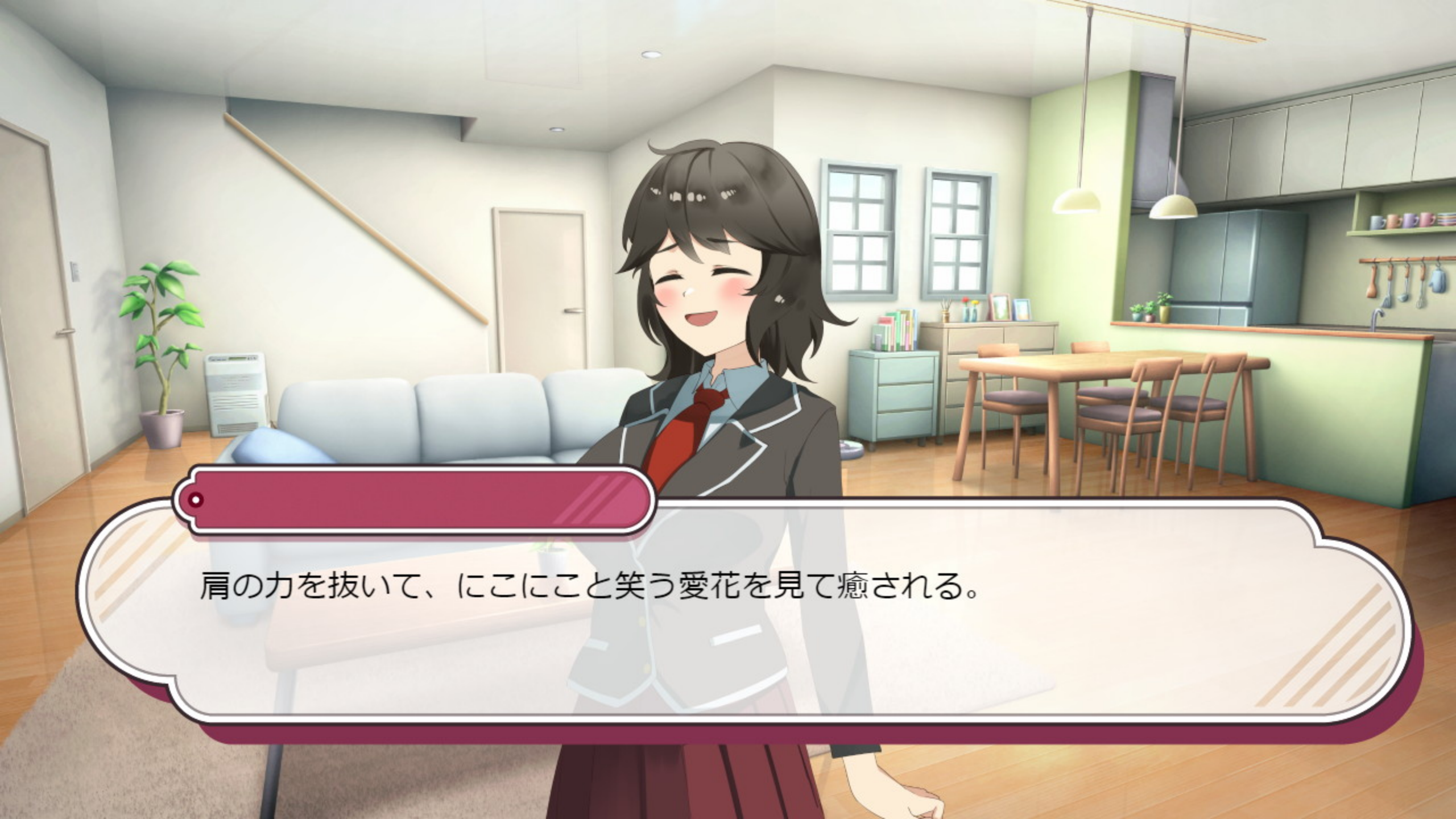
. . . . . .

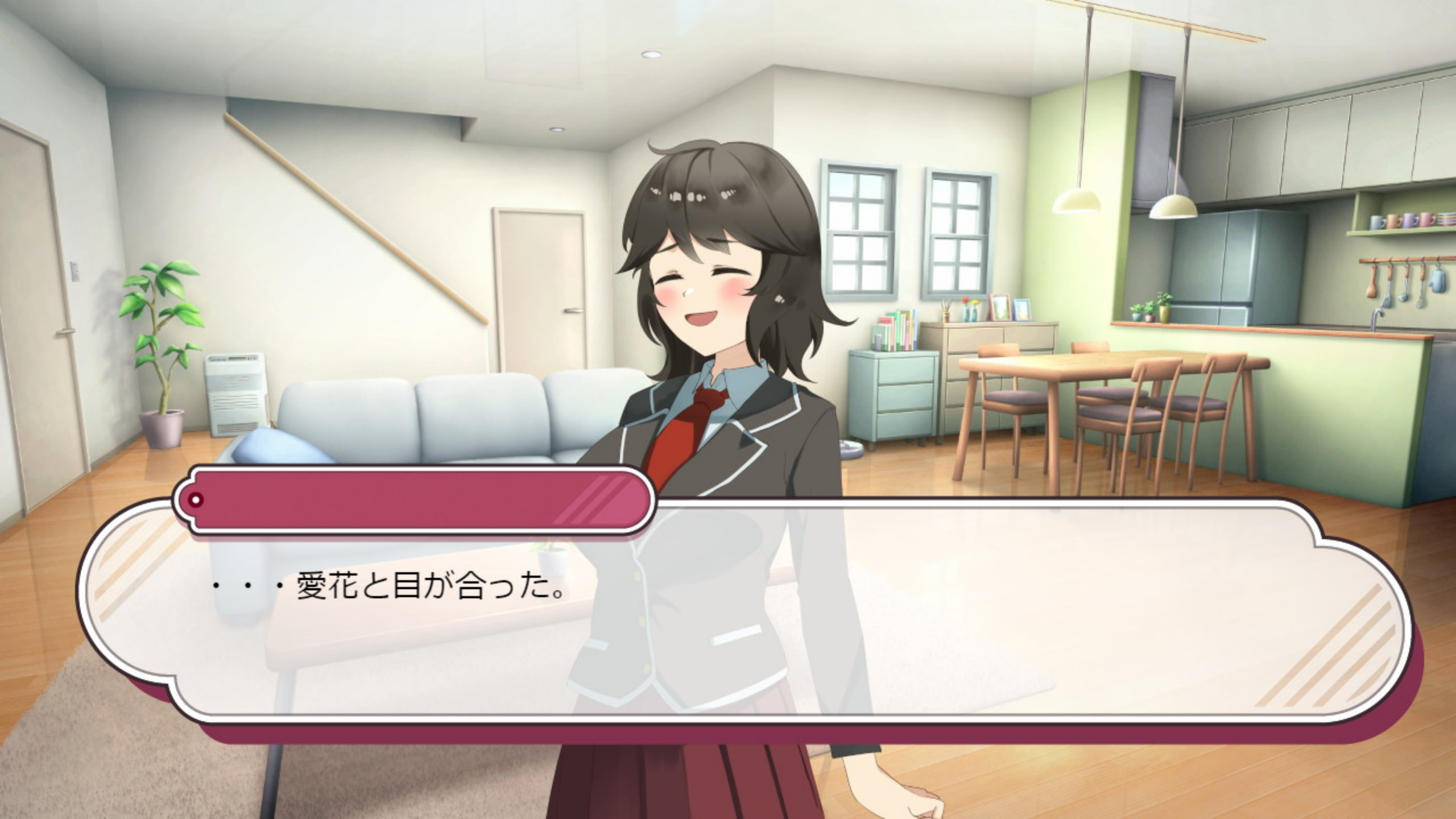
２時間後

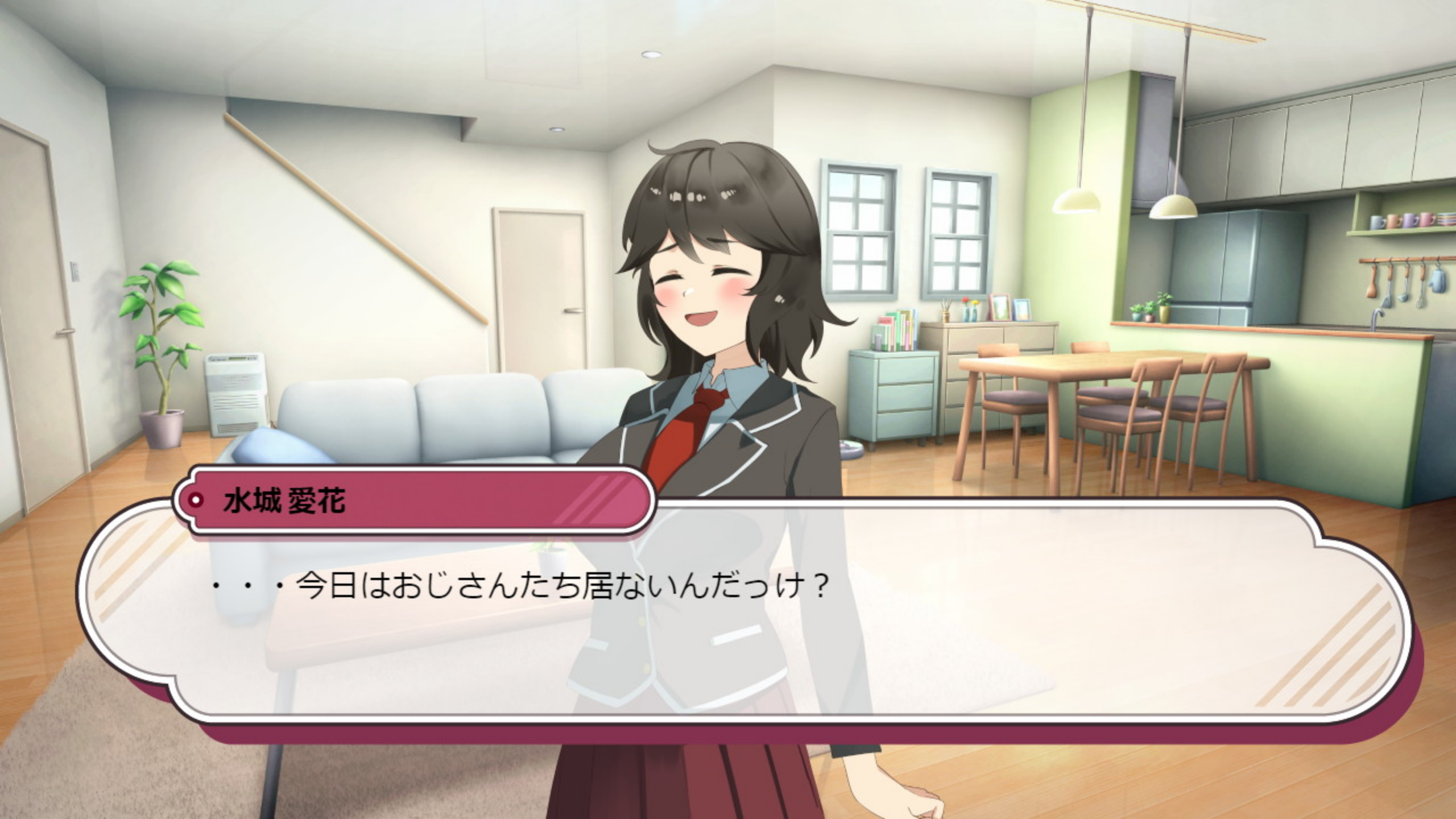

水城 愛花
休憩しよっか～

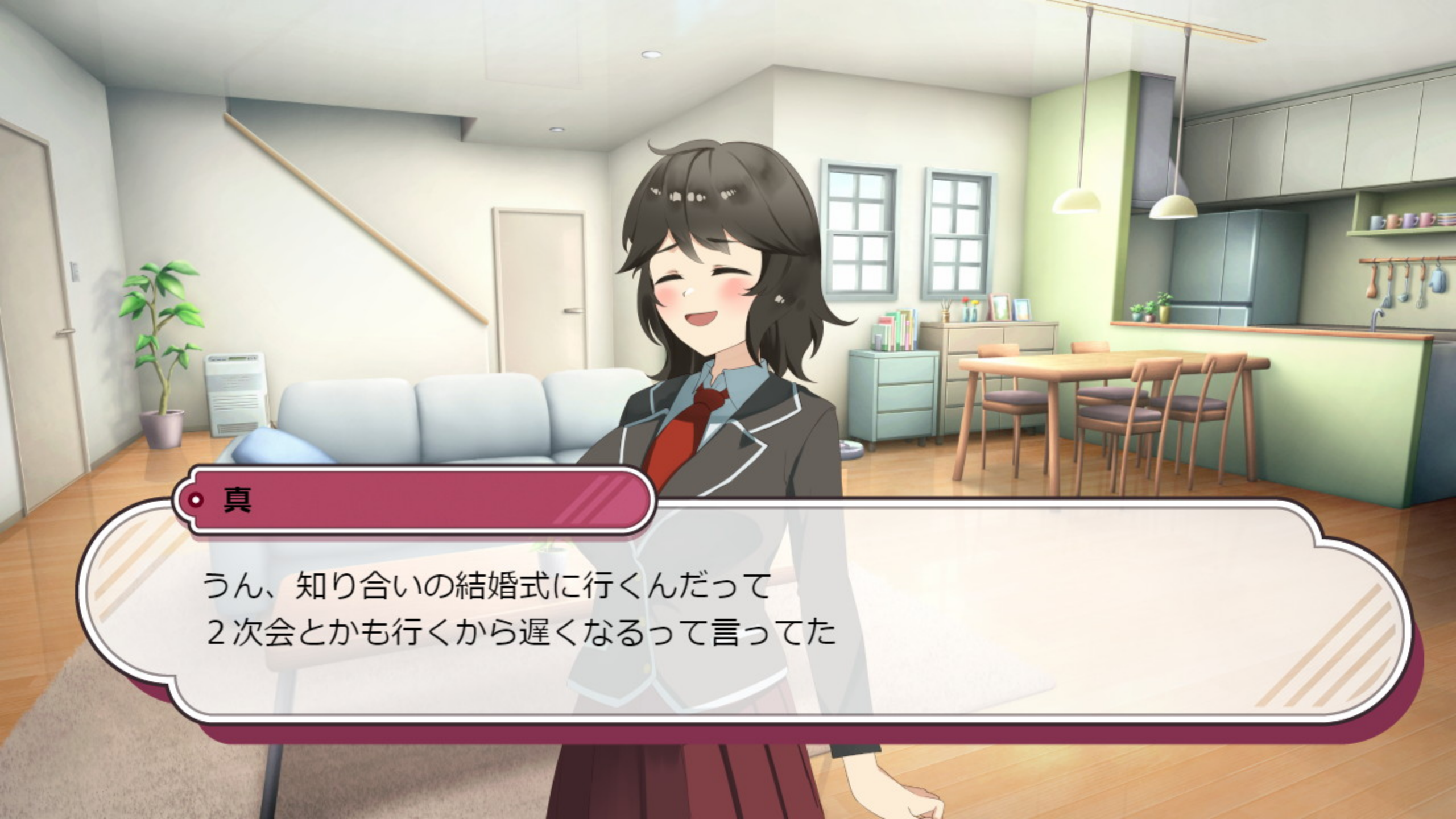

真
うん・・・とりあえず最低限は押さえられた・・・
ありがとう・・・

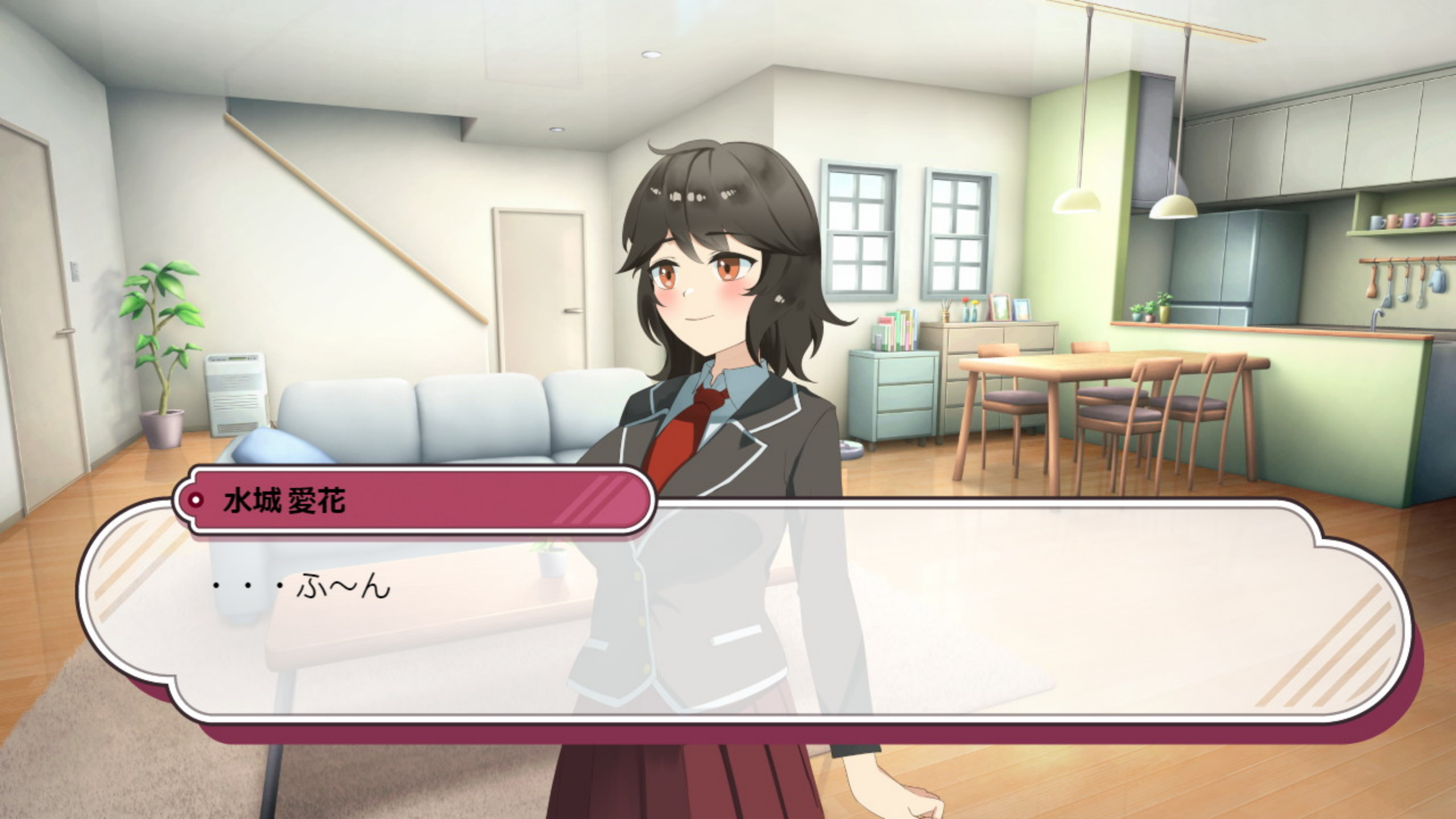

水城 愛花
どういたしまして～

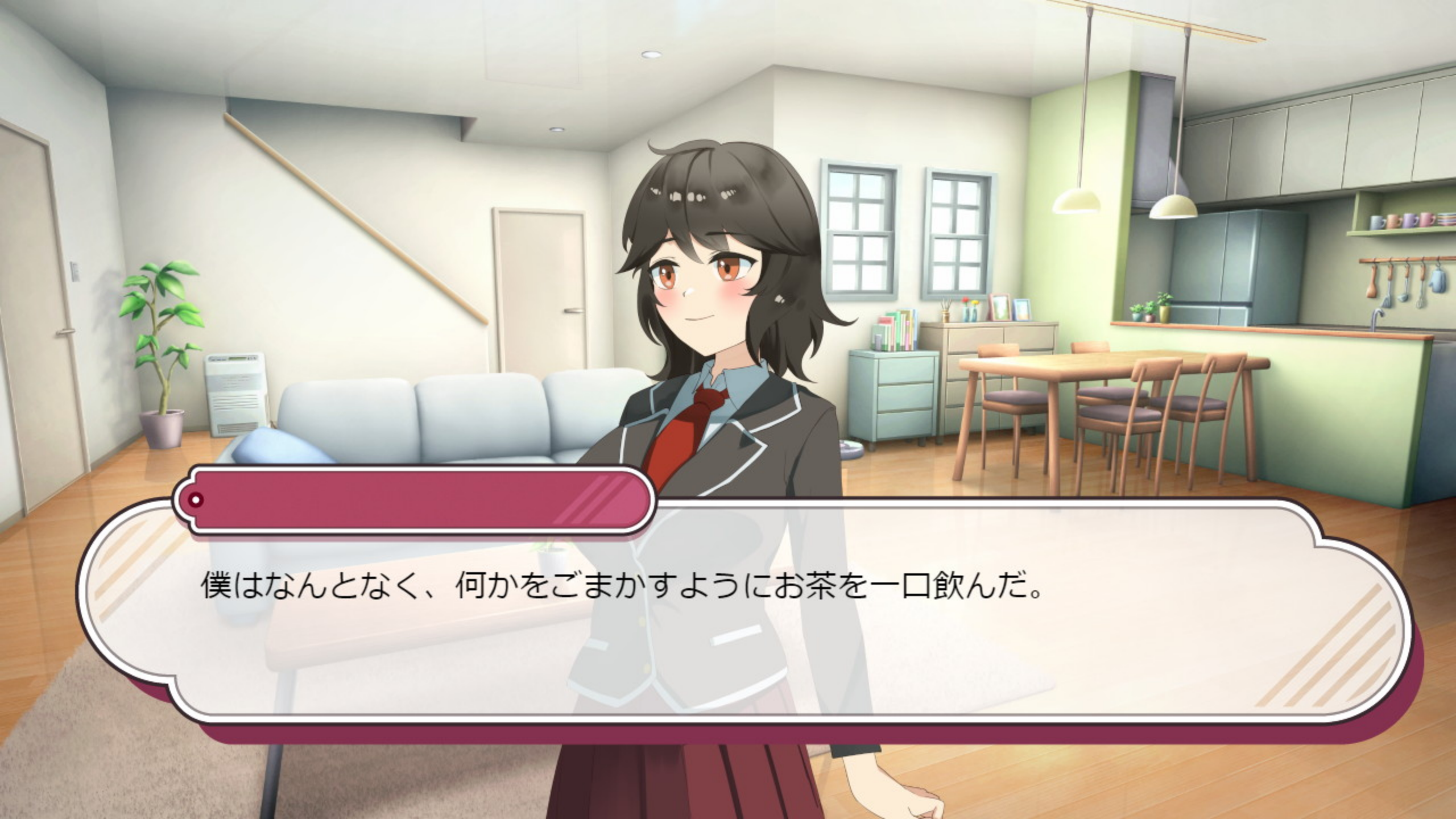

肩の力を抜いて、にこにこと笑う愛花を見て癒される。

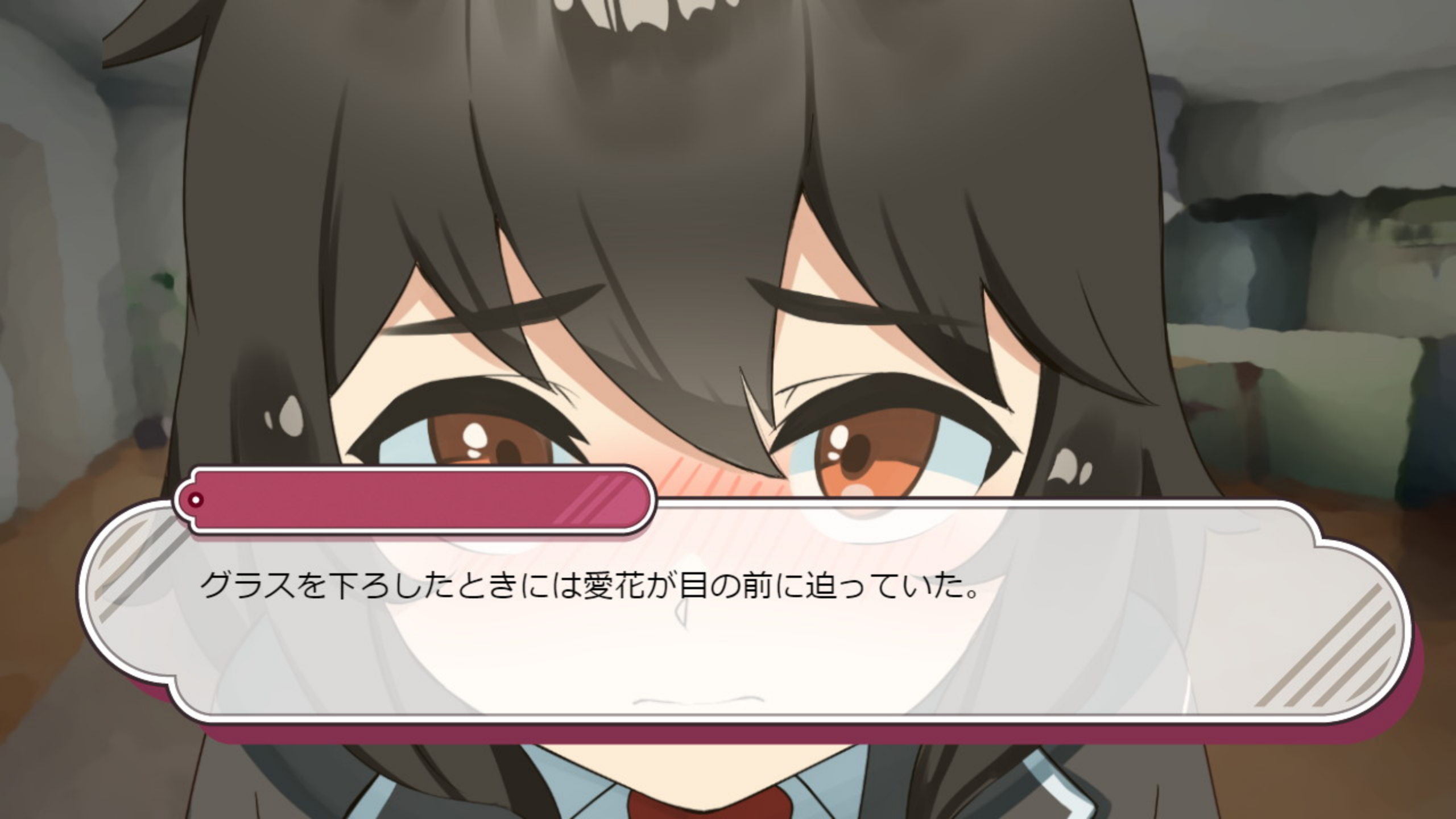

・・・愛花と目が合った。

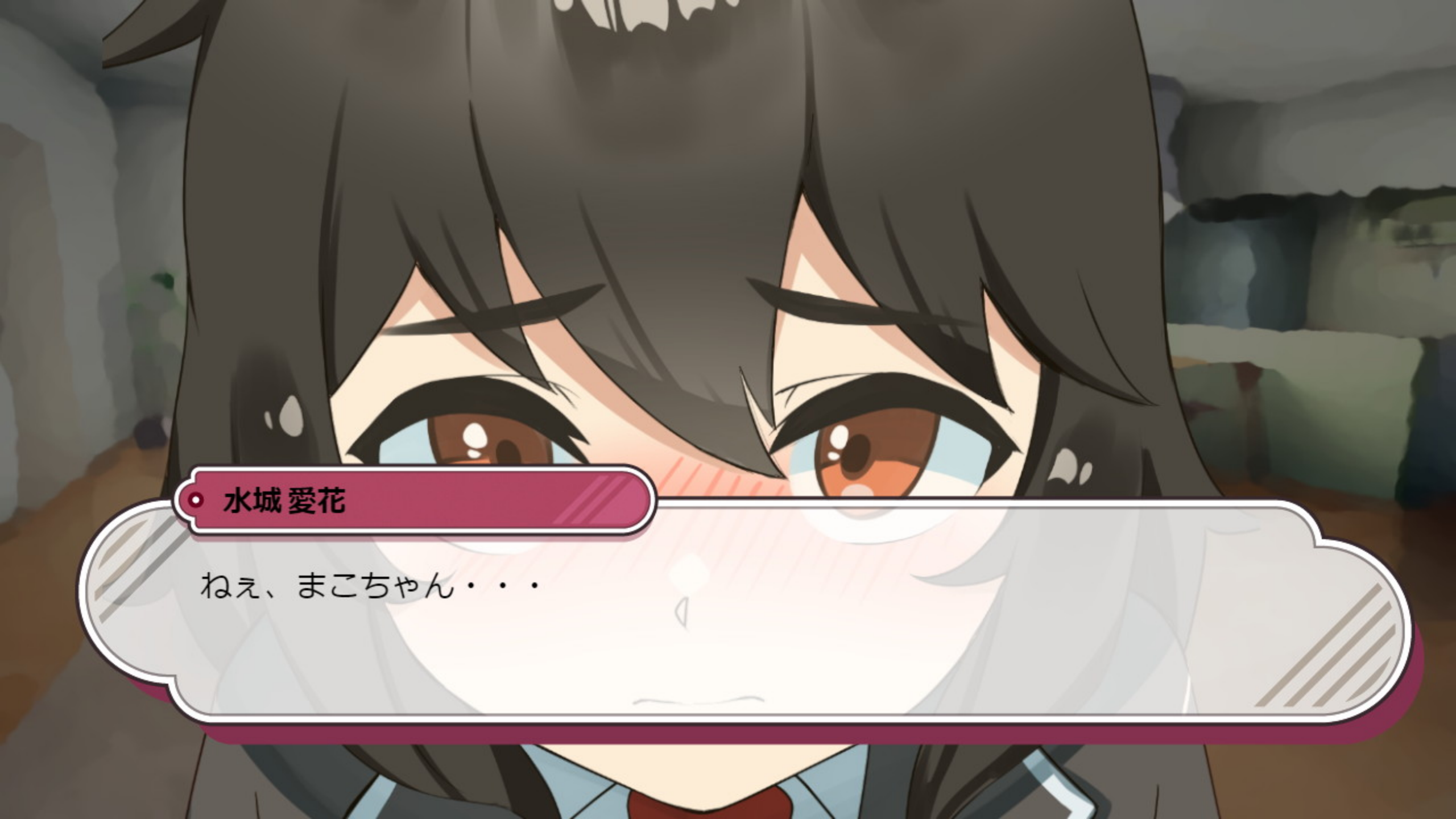

水城 愛花
・・・今日はおじさんたち居ないんだっけ？

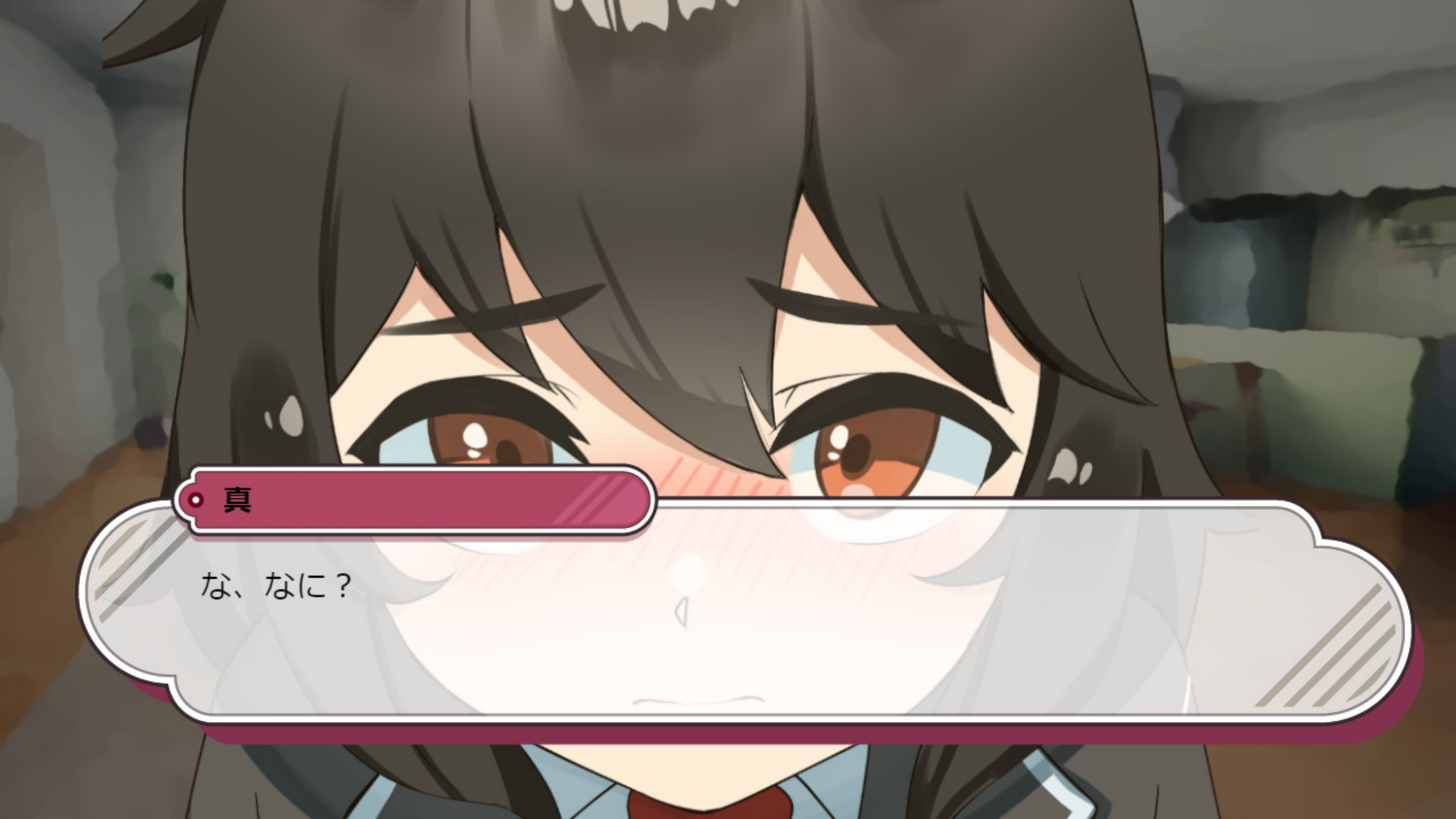

真
うん、知り合いの結婚式に行くんだって
２次会とかも行くから遅くなるって言ってた

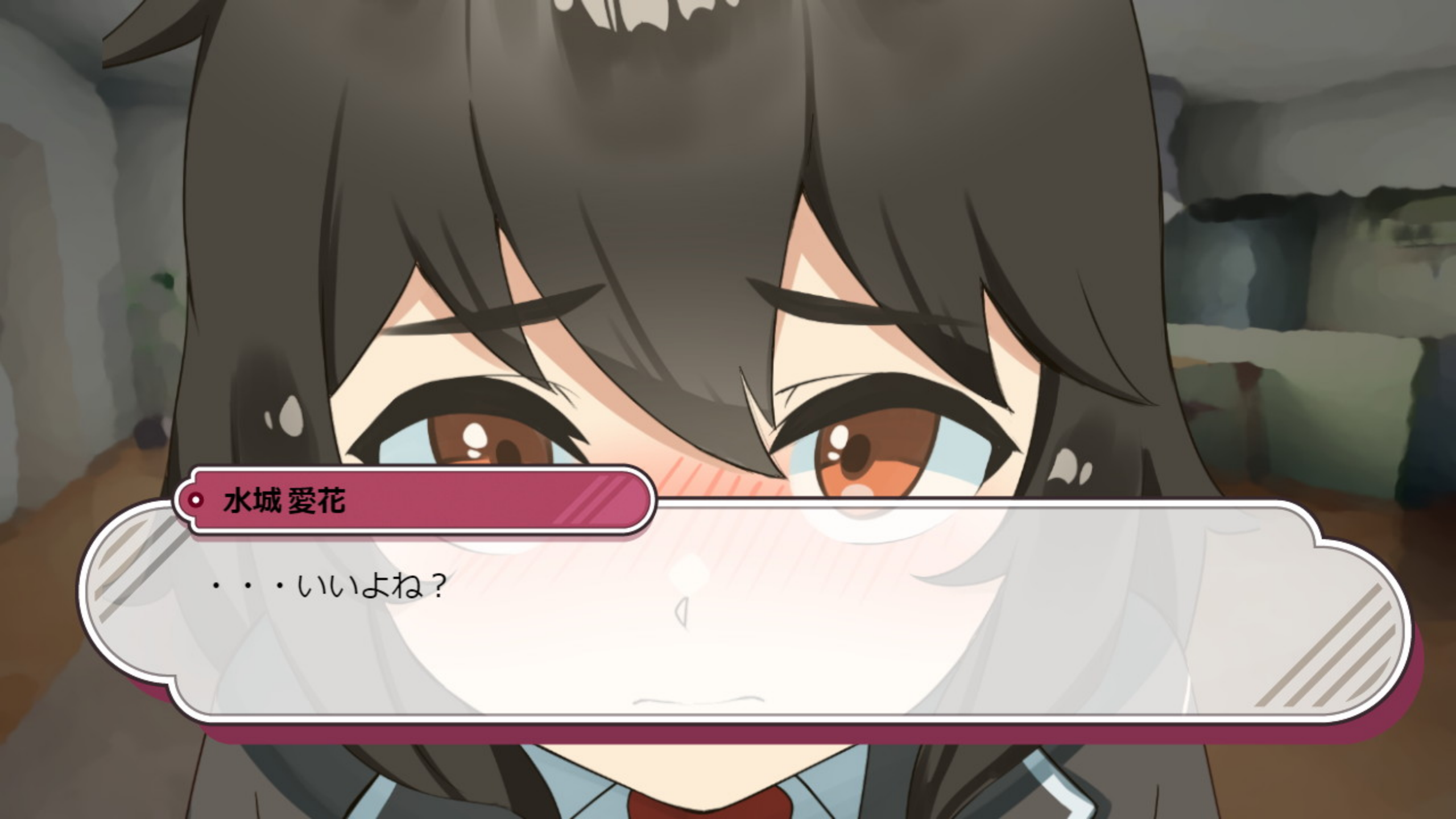

水城 愛花
・・・ふ～ん

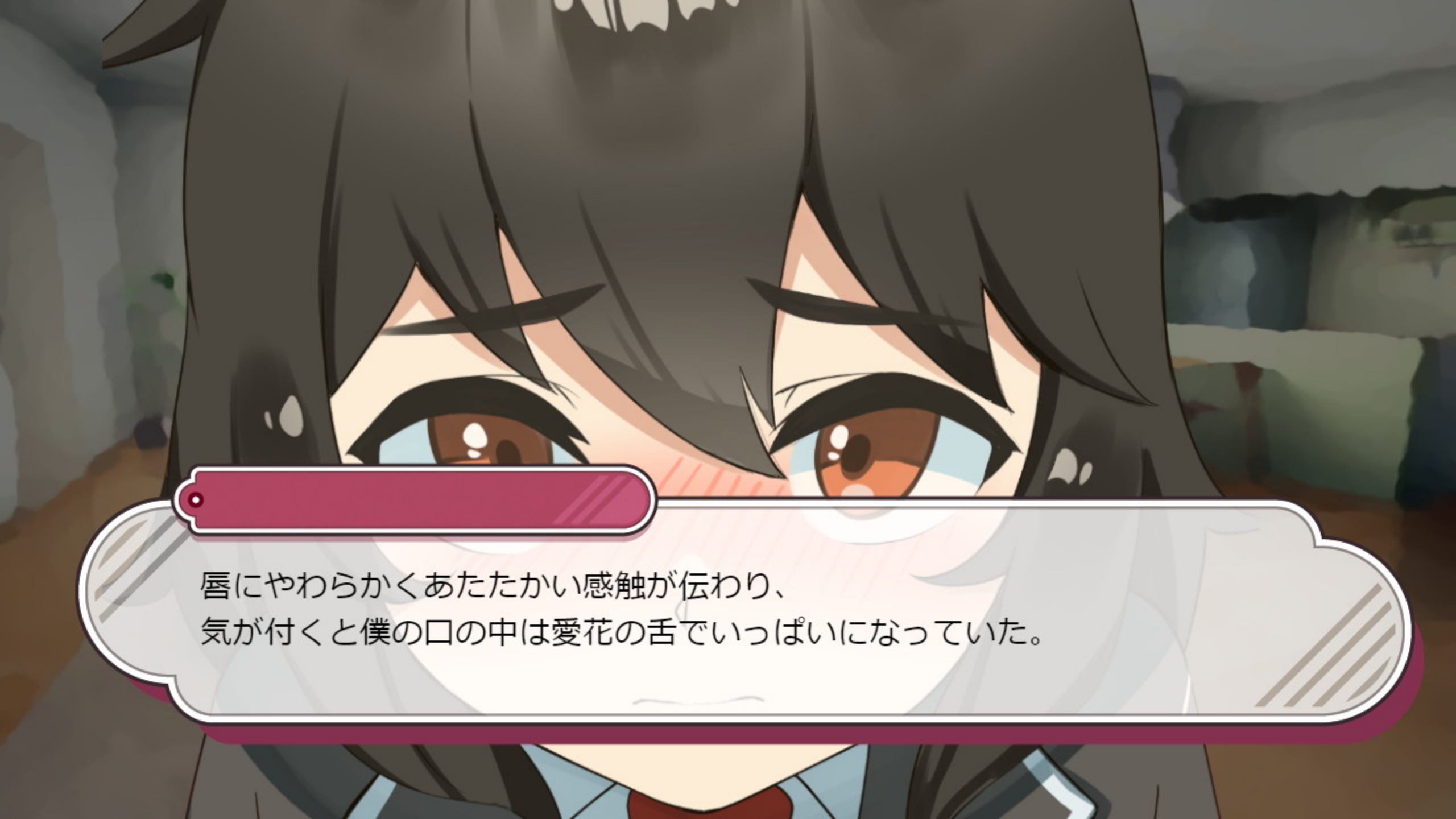

僕はなんとなく、何かをごまかすようにお茶を一口飲んだ。

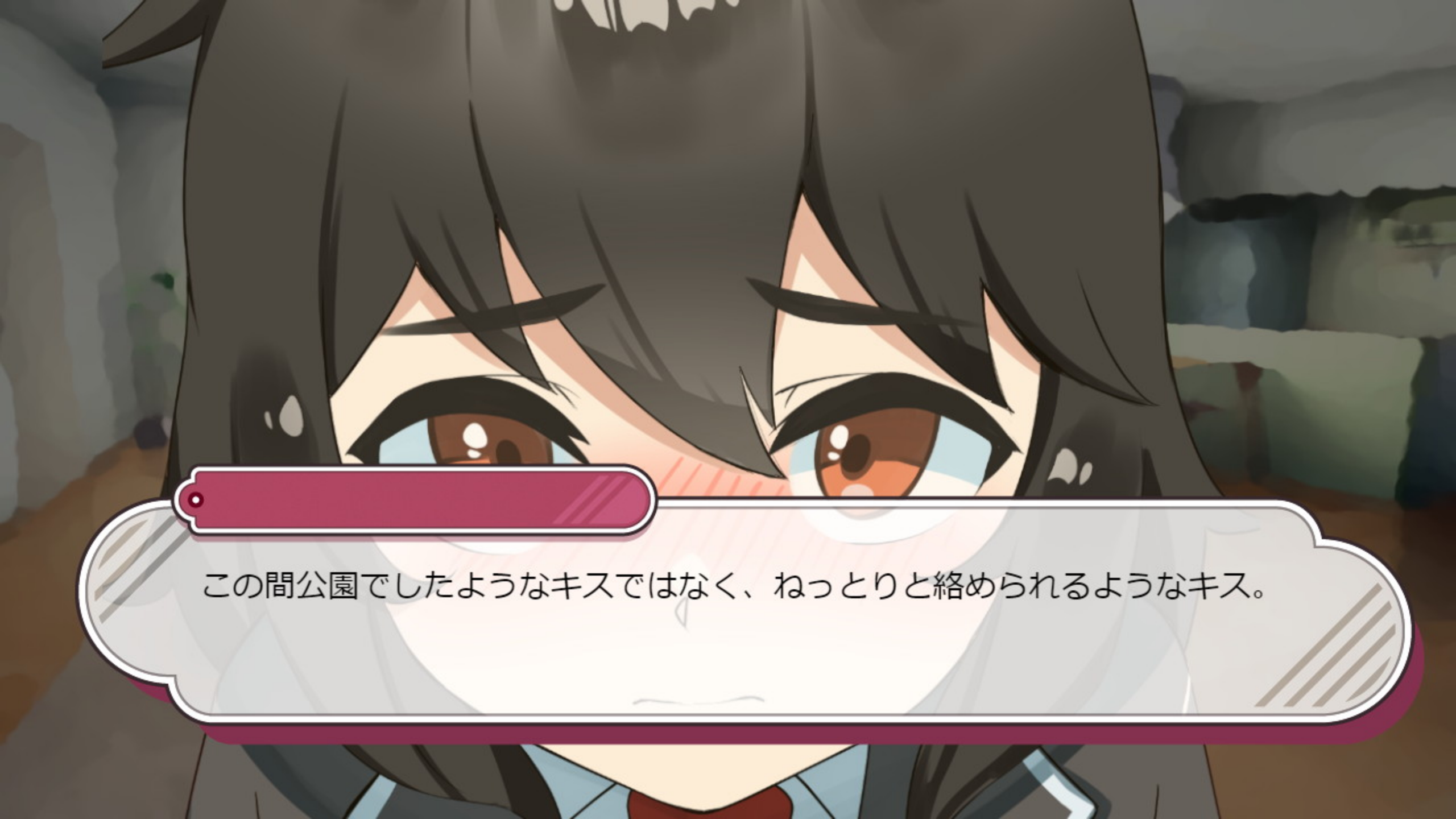

グラスを下ろしたときには愛花が目の前に迫っていた。


水城 愛花
ねぇ、まこちゃん・・・

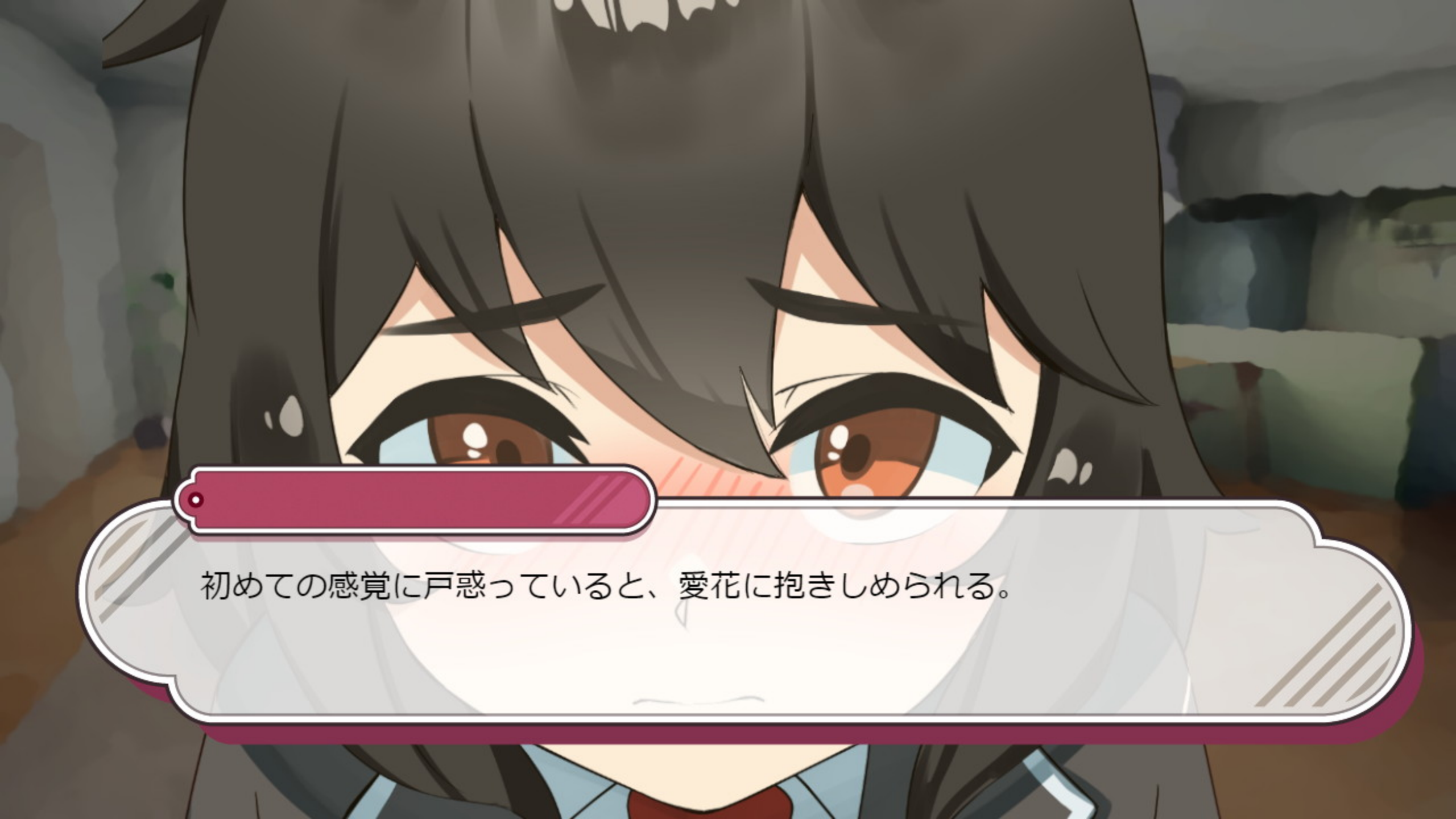

真
な、なに？


水城 愛花
・・・いいよね？

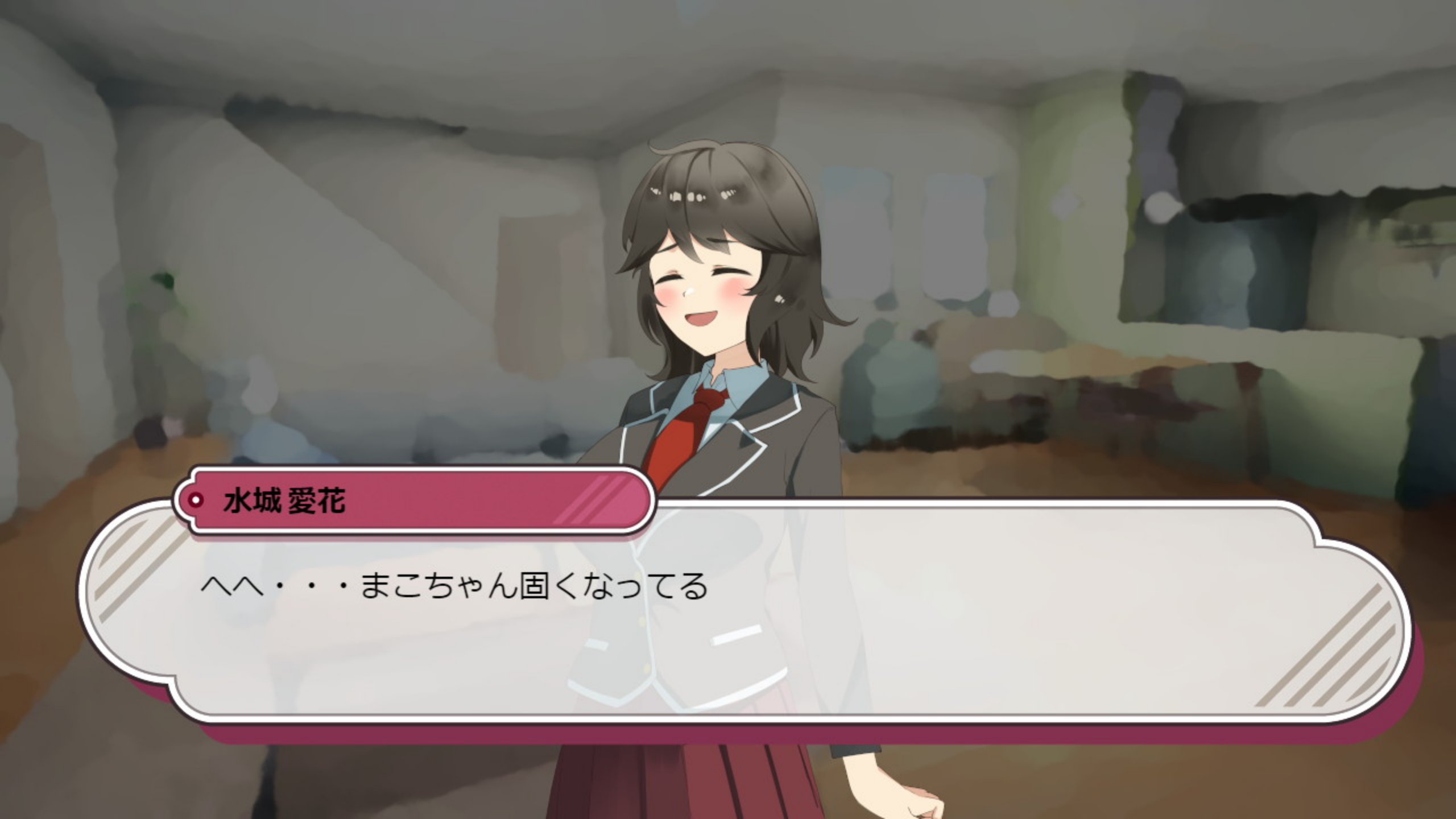

唇にやわらかくあたたかい感触が伝わり、
気が付くと僕の口の中は愛花の舌でいっぱいになっていた。

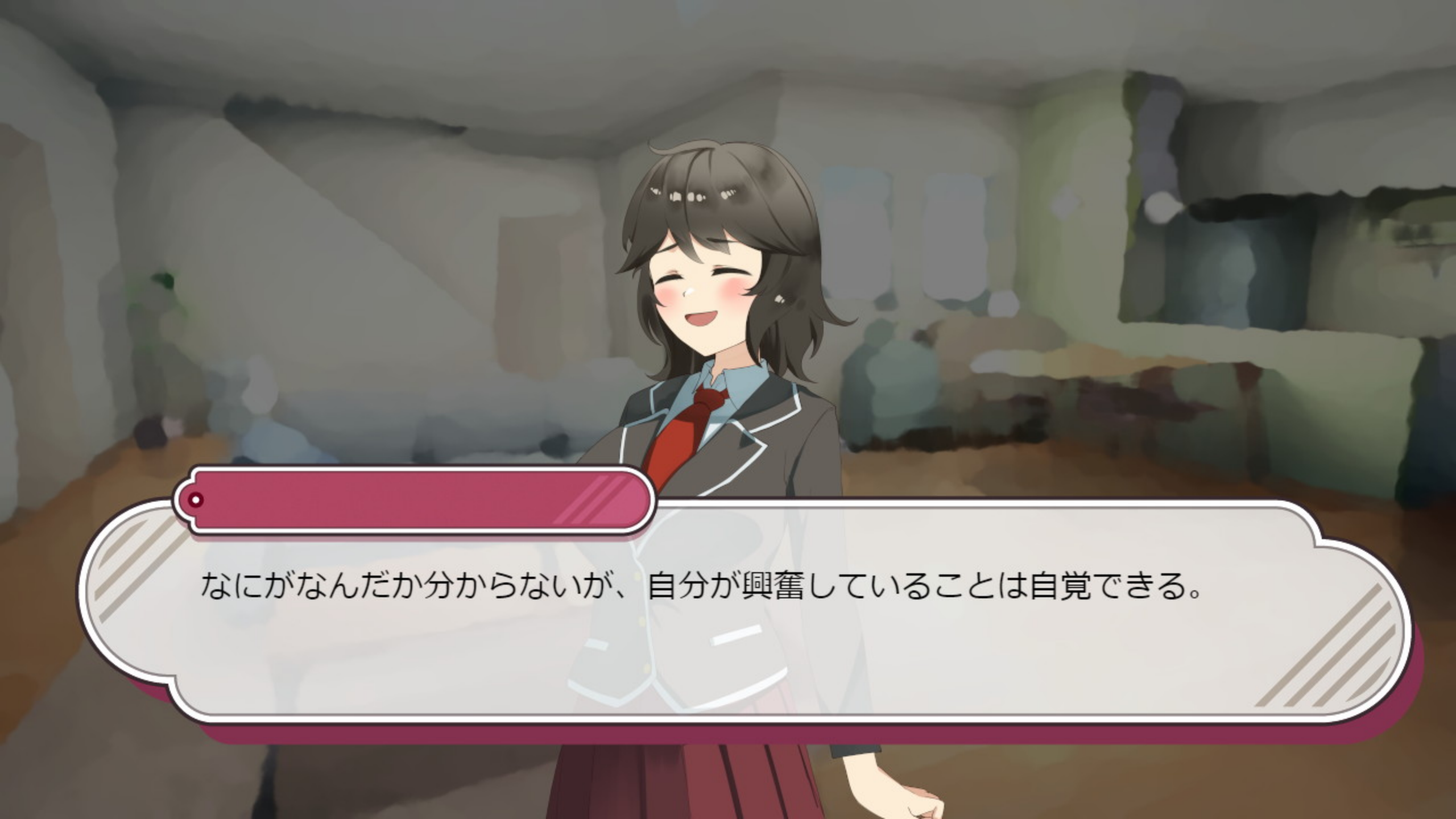

この間公園でしたようなキスではなく、ねっとりと絡められるようなキス。

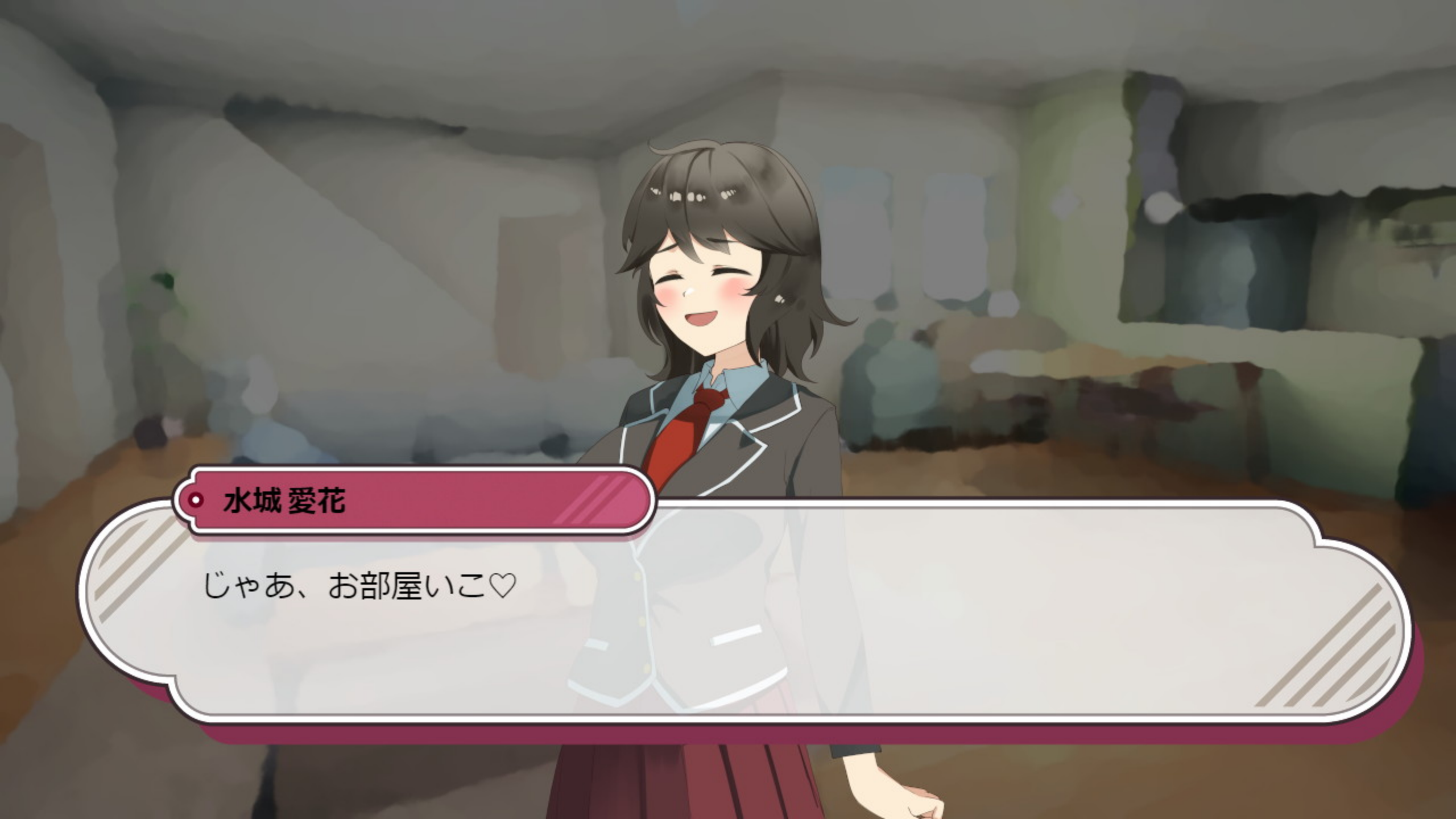
前戯としてのキスだ。

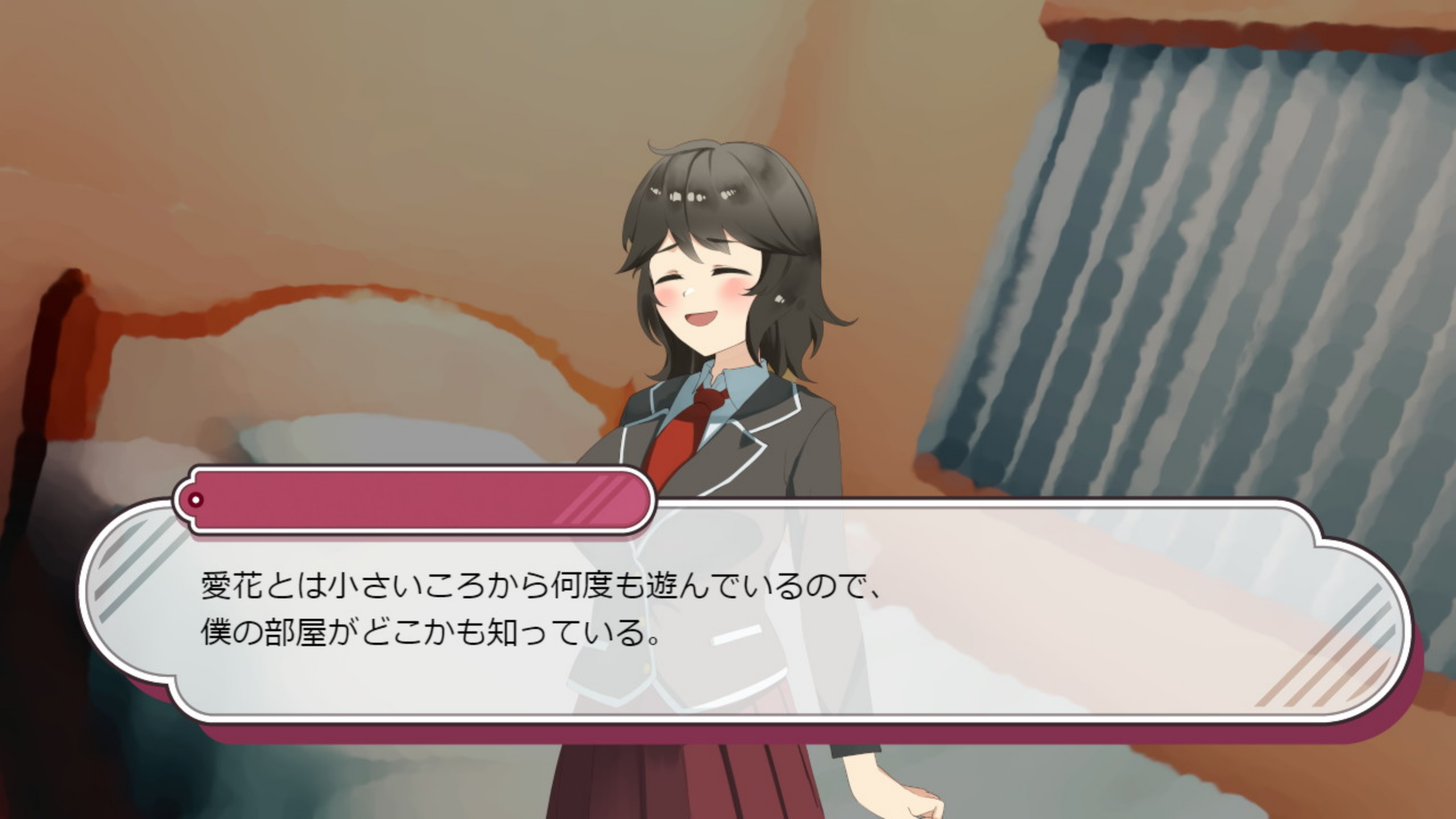

初めての感覚に戸惑っていると、愛花に抱きしめられる。

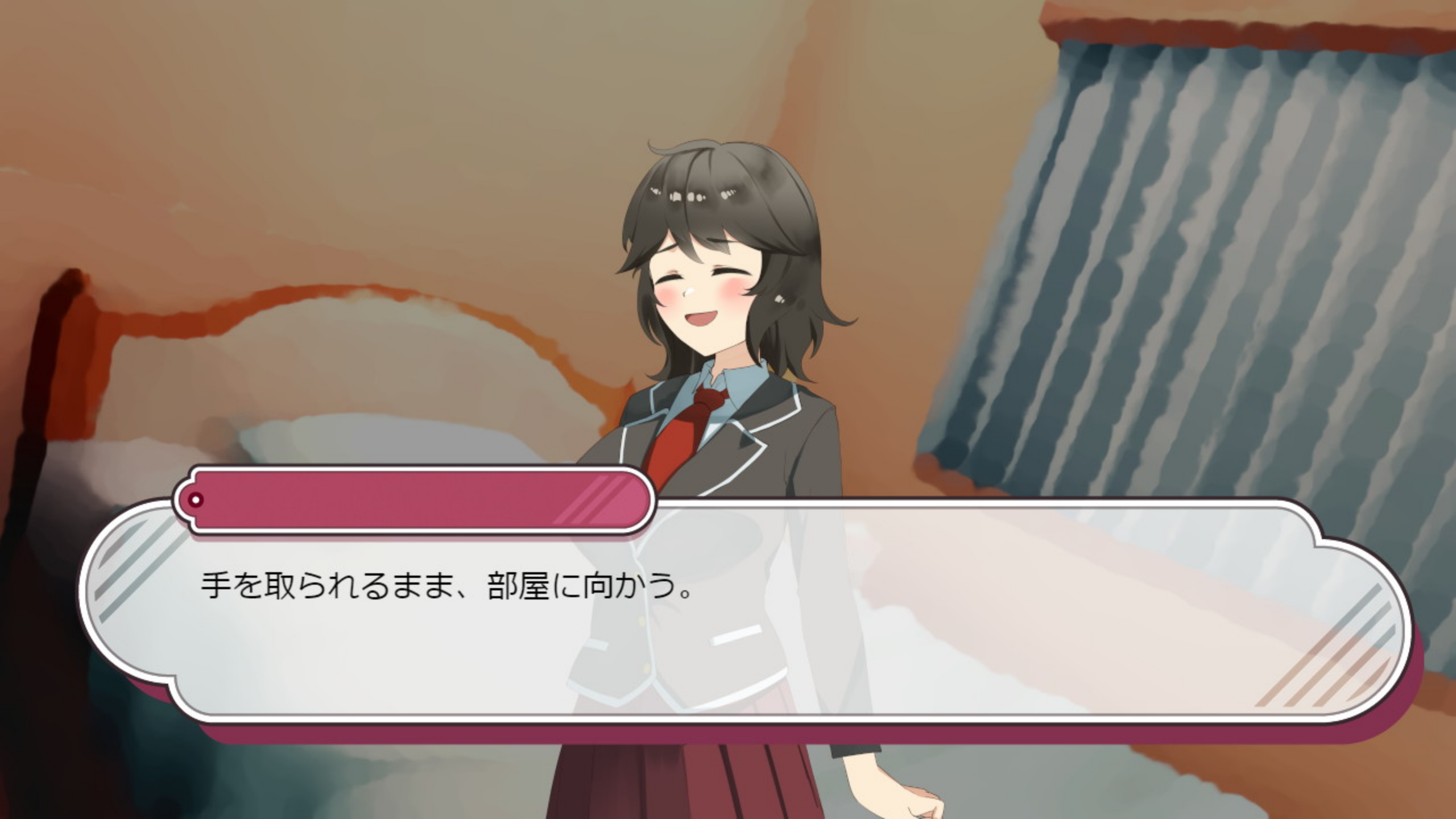
胸に柔らかいものが当たり、興奮の波が押し寄せる。

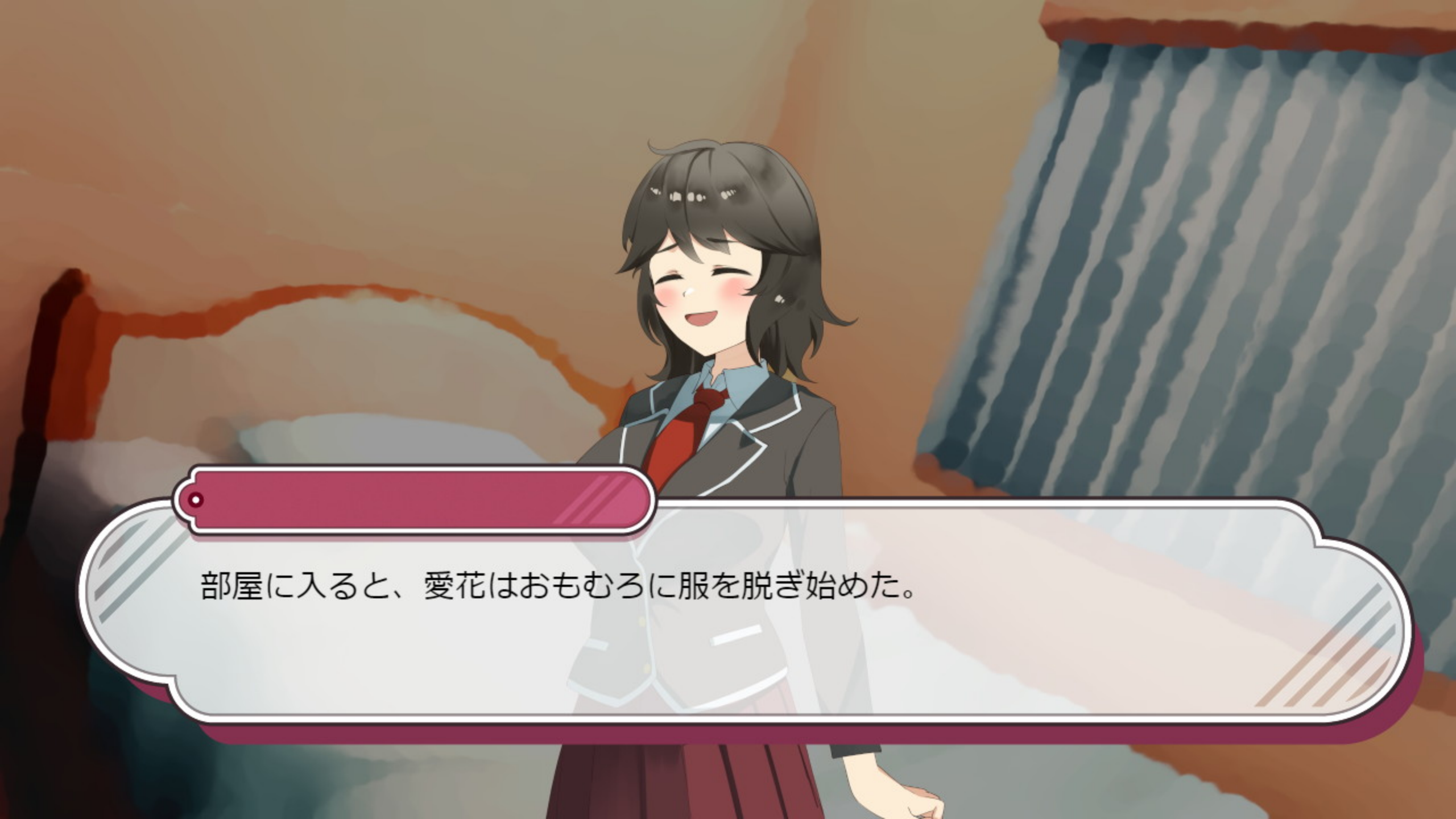

水城 愛花
へへ・・・まこちゃん固くなってる

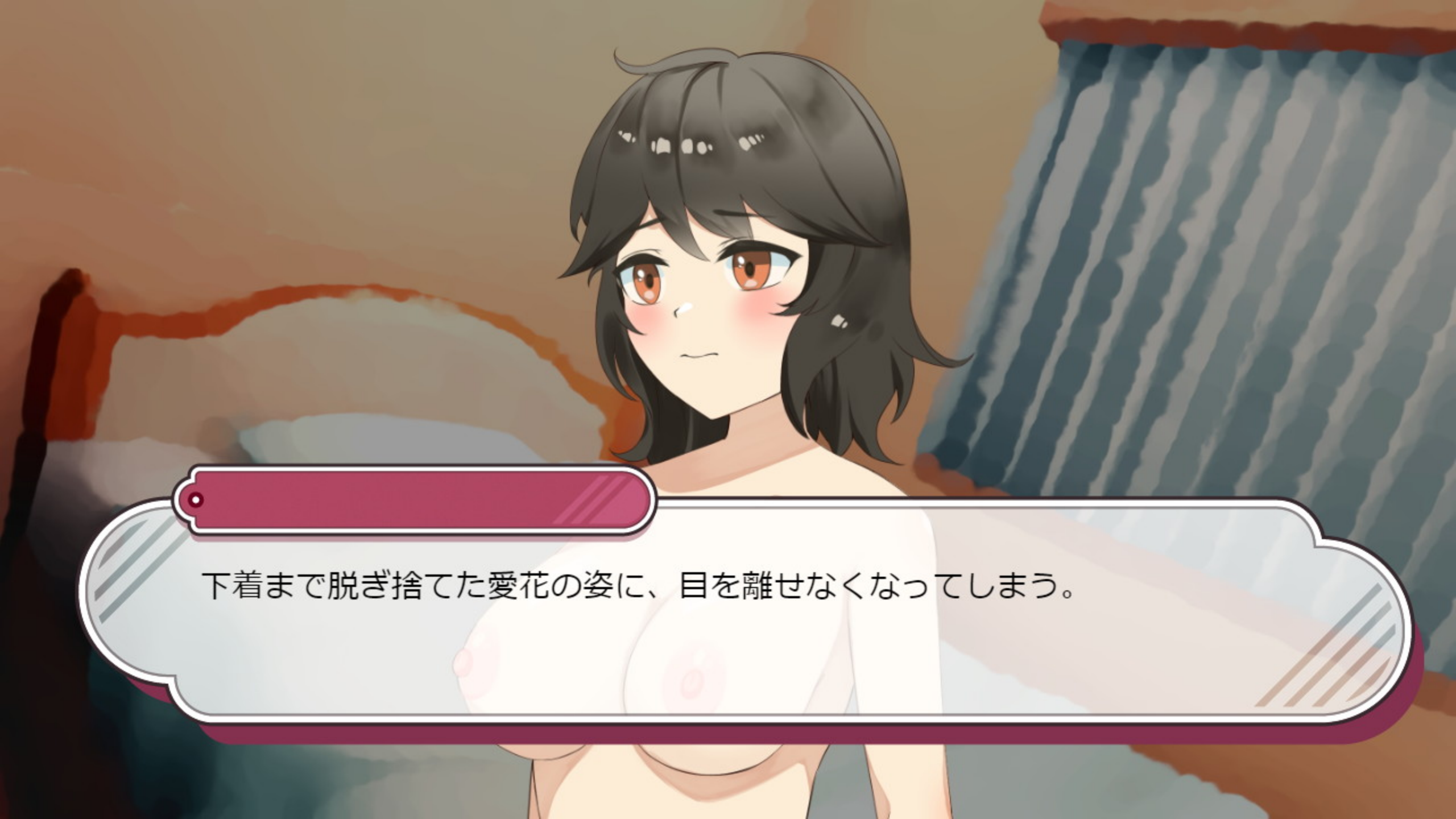

なにがなんだか分からないが、自分が興奮していることは自覚できる。


水城 愛花
じゃあ、お部屋いこ♡


愛花とは小さいころから何度も遊んでいるので、
僕の部屋がどこかも知っている。

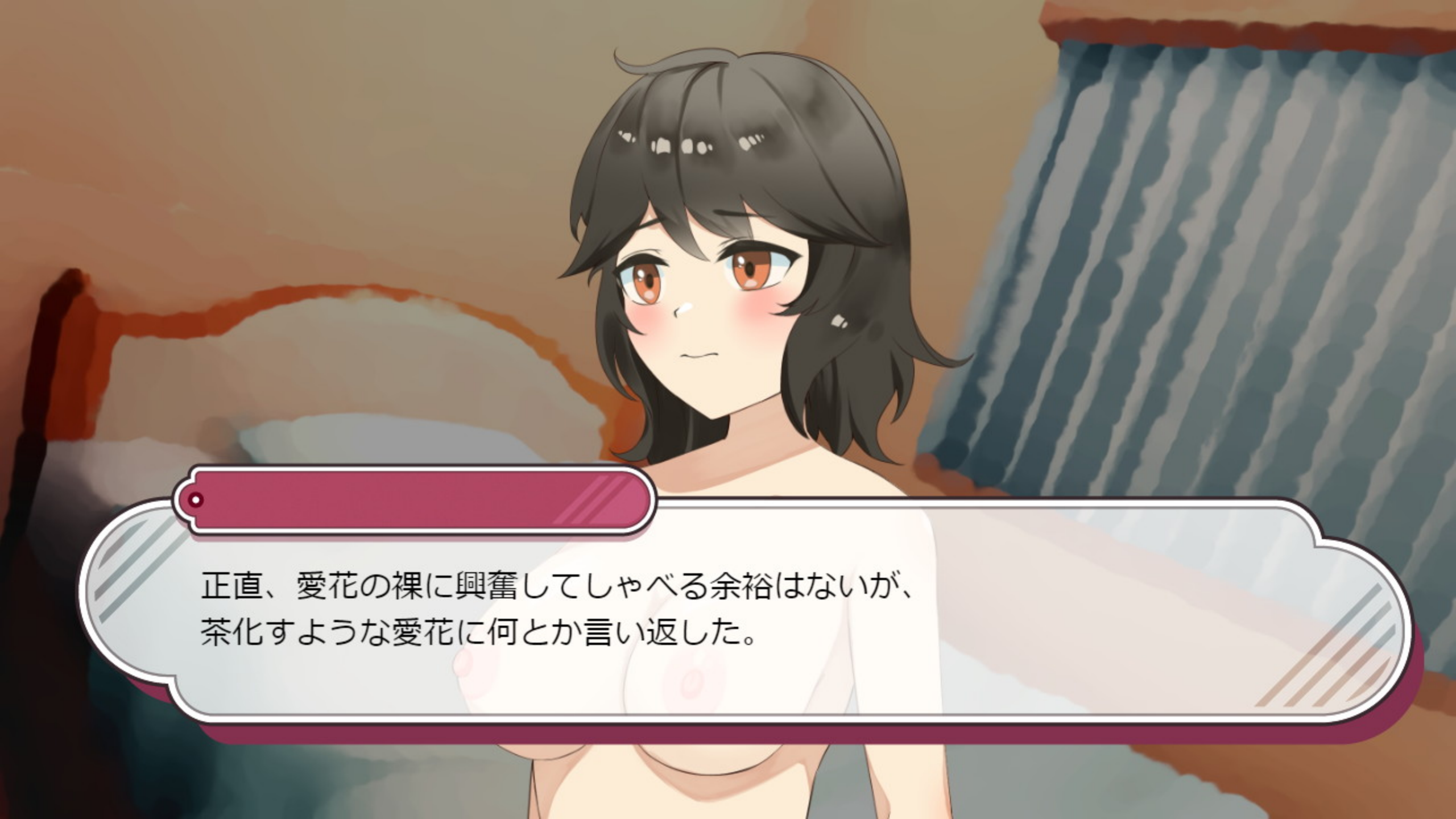

手を取られるまま、部屋に向かう。

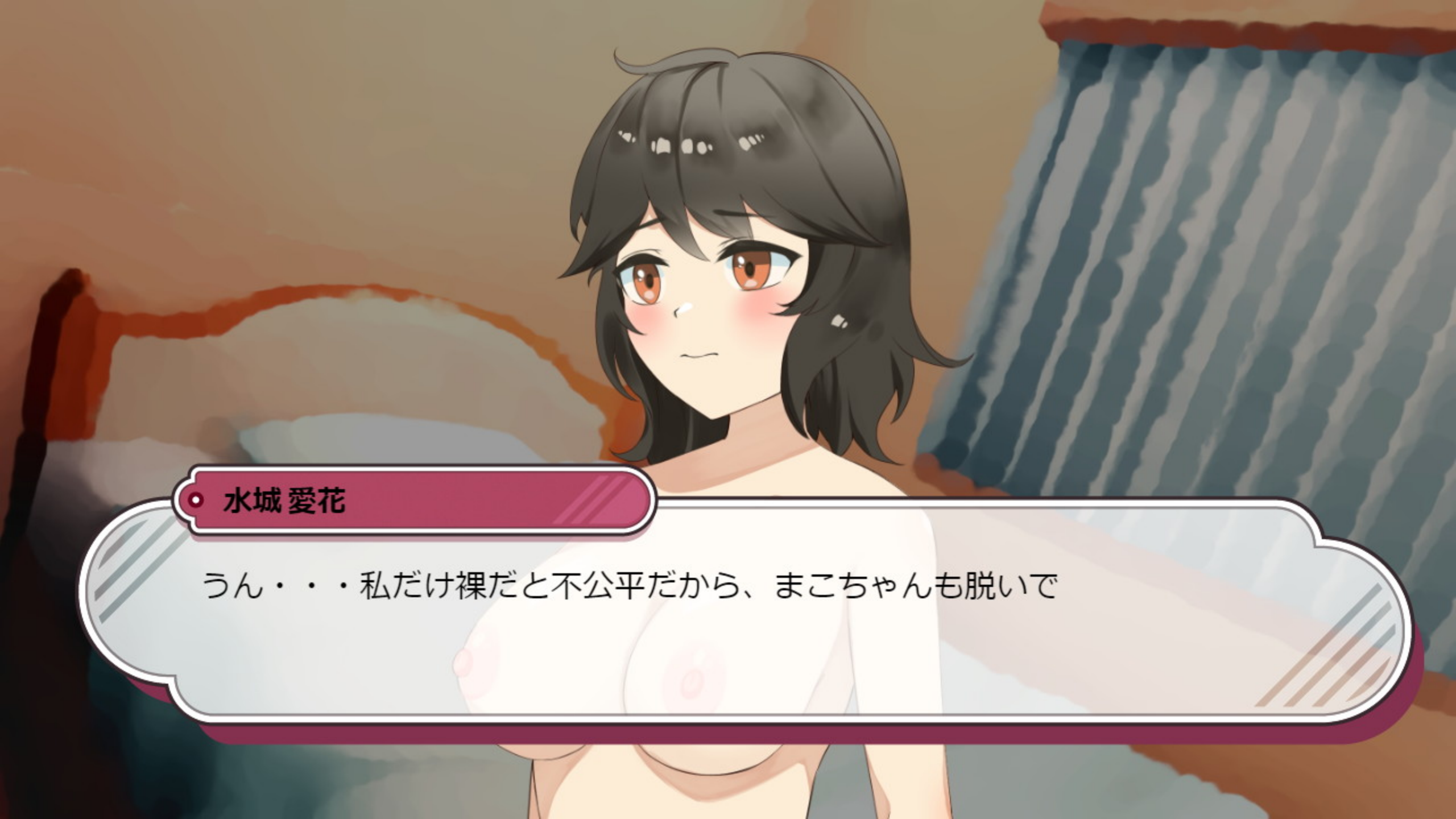

部屋に入ると、愛花はおもむろに服を脱ぎ始めた。

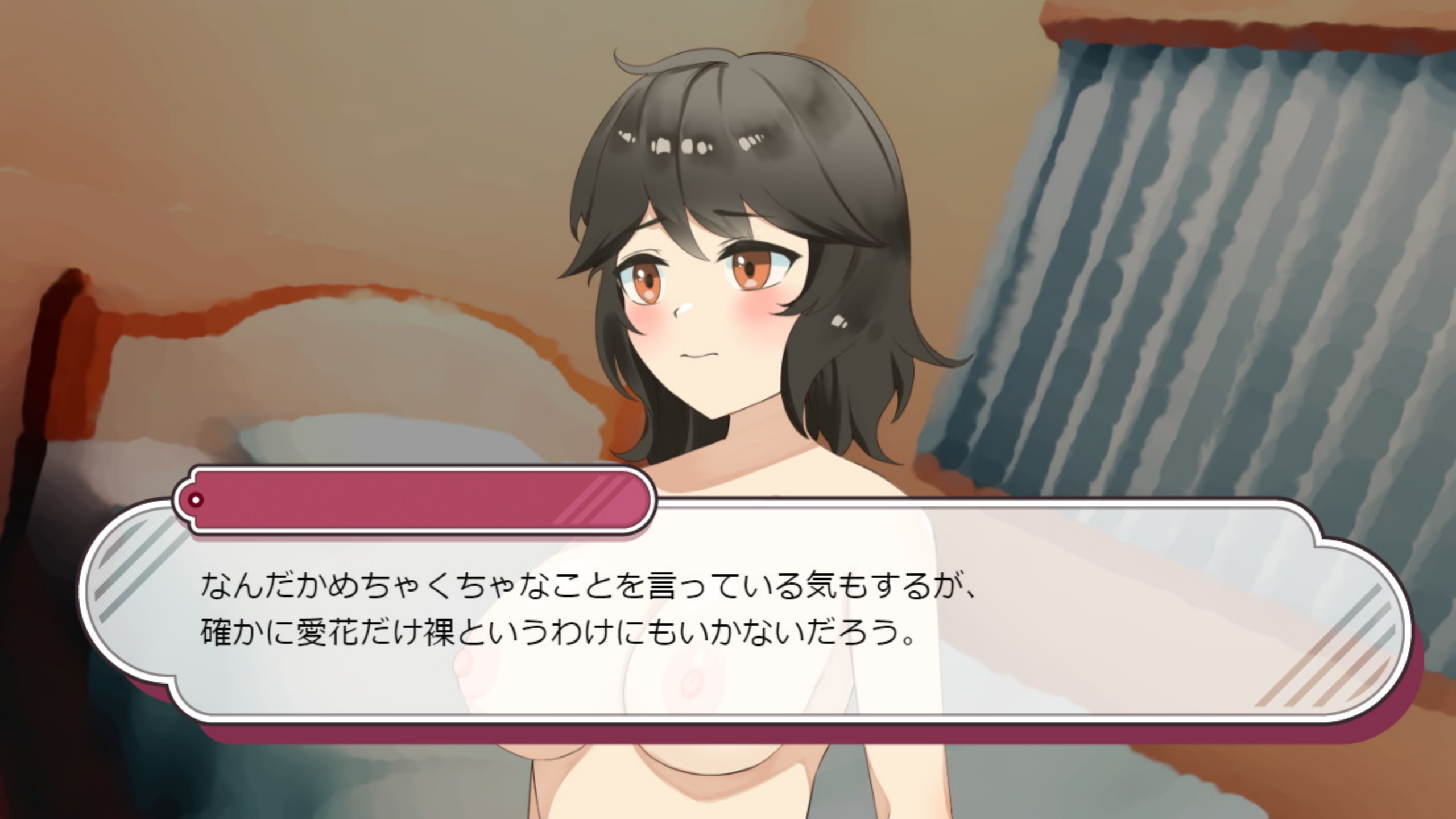

下着まで脱ぎ捨てた愛花の姿に、目を離せなくなってしまう。

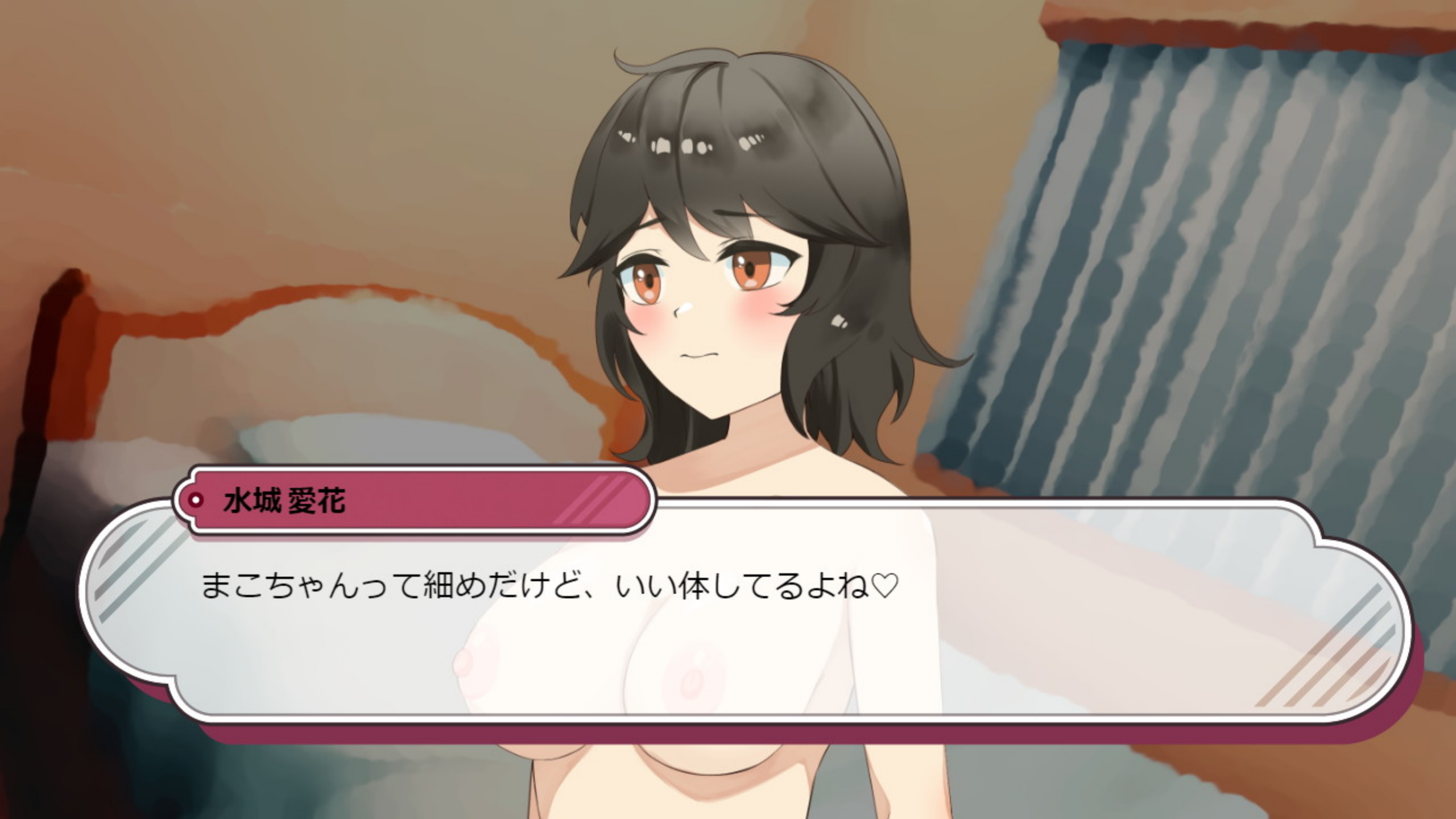
水城 愛花
・・・まこちゃんのえっち

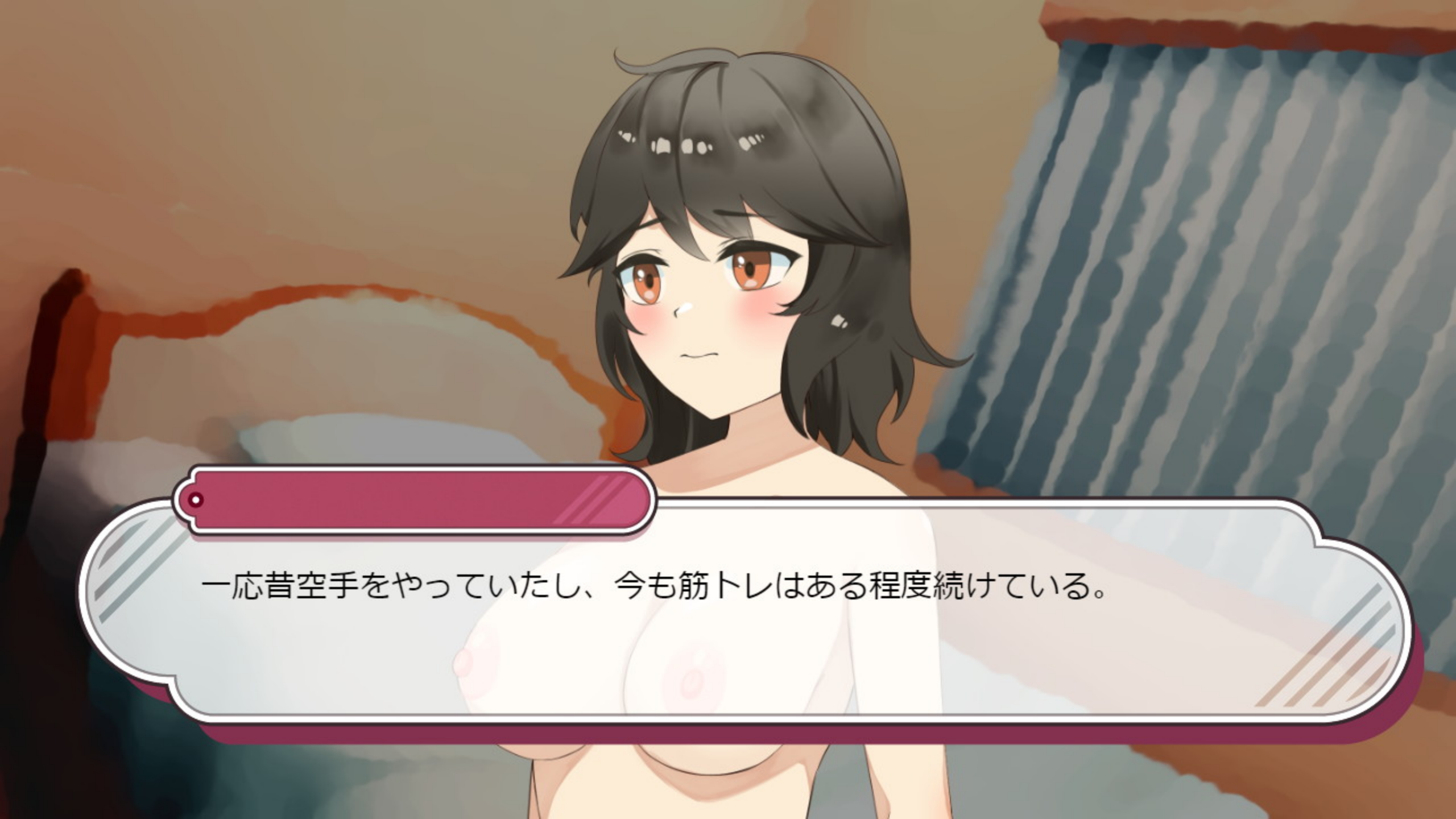
真
脱いだのはそっちでしょ

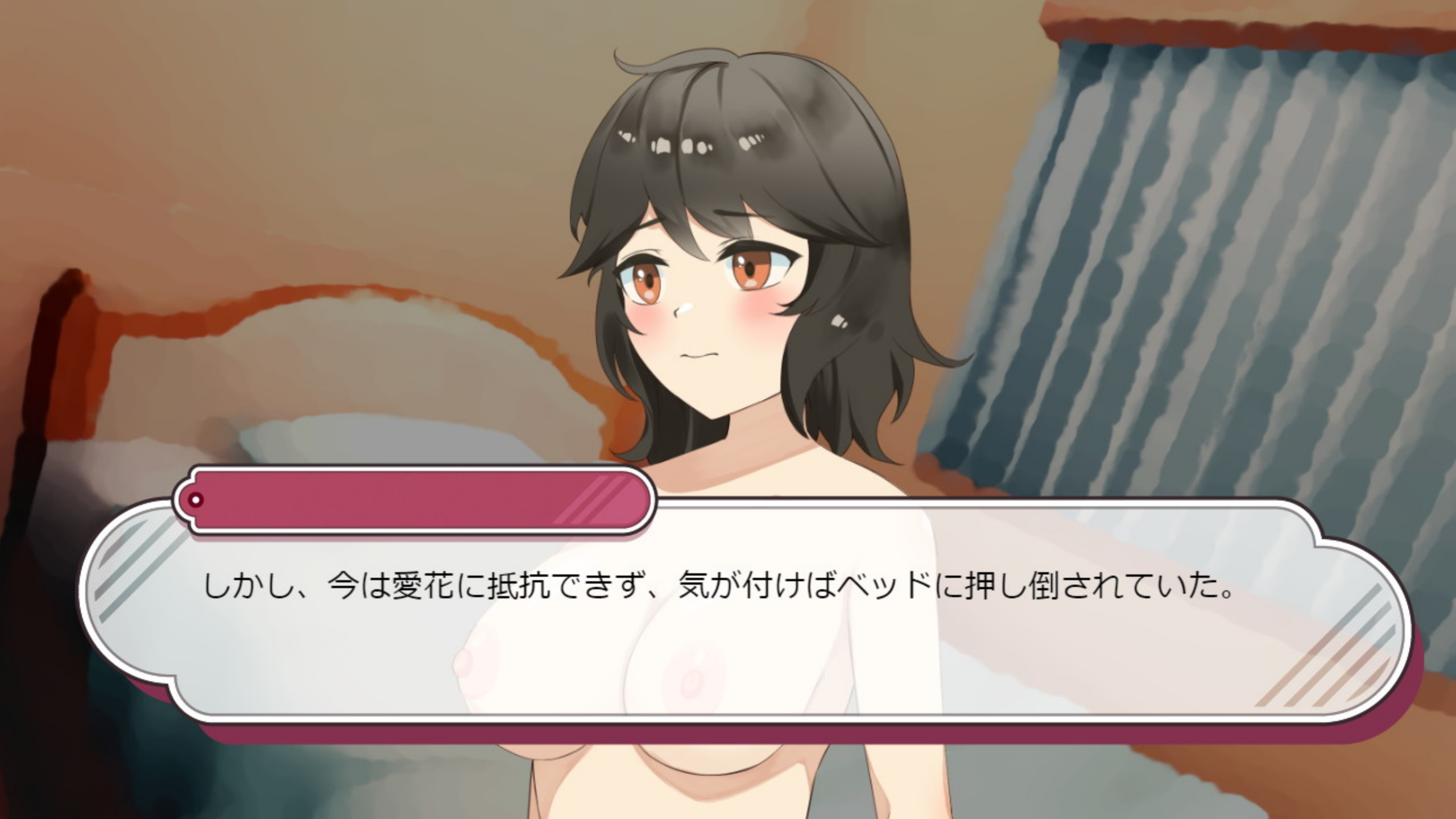

正直、愛花の裸に興奮してしゃべる余裕はないが、
茶化すような愛花に何とか言い返した。


水城 愛花
うん・・・私だけ裸だと不公平だから、まこちゃんも脱いで


なんだかめちゃくちゃなことを言っている気もするが、
確かに愛花だけ裸というわけにもいかないだろう。

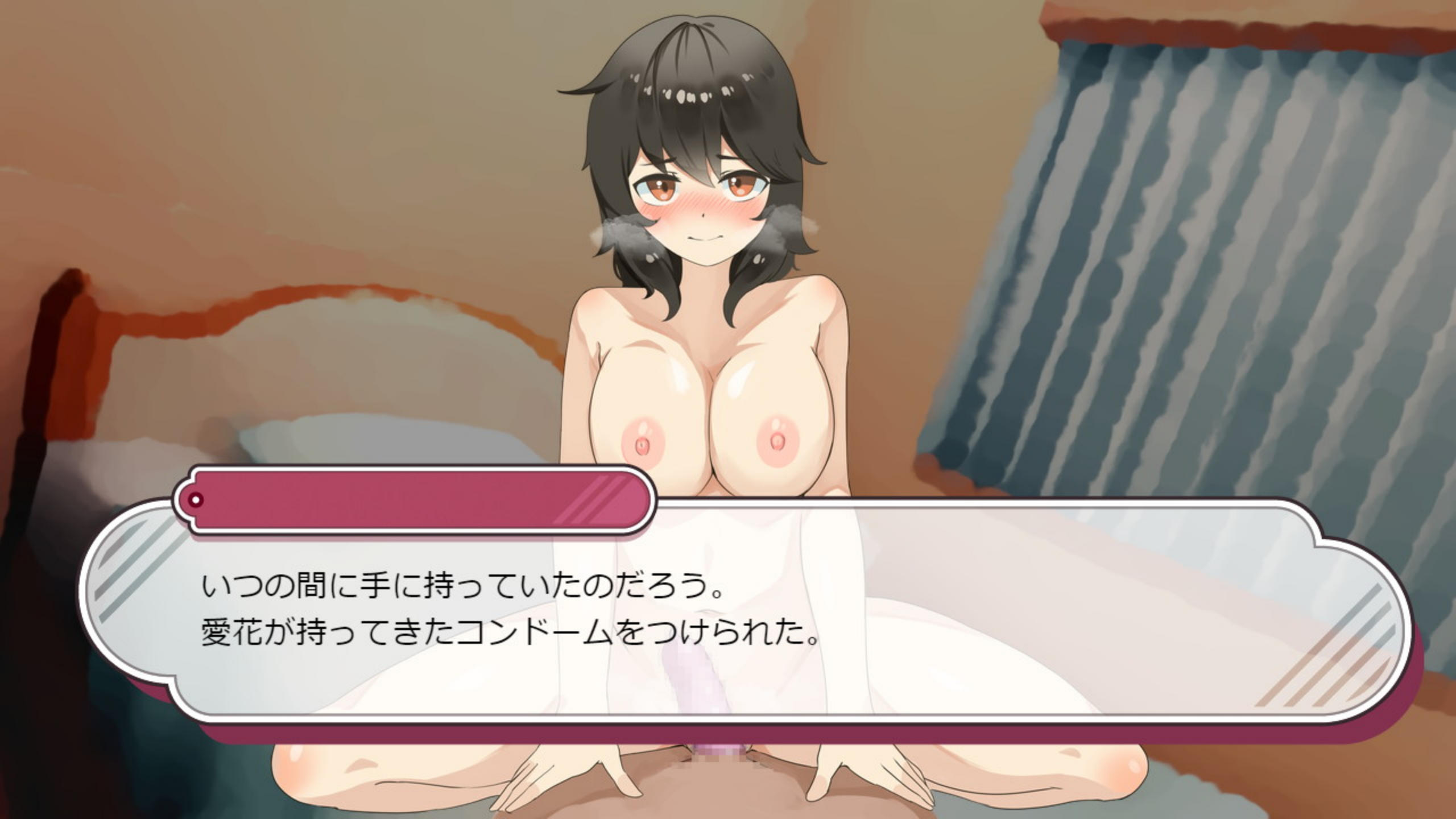

水城 愛花
まこちゃんって細めだけど、いい体してるよね♡

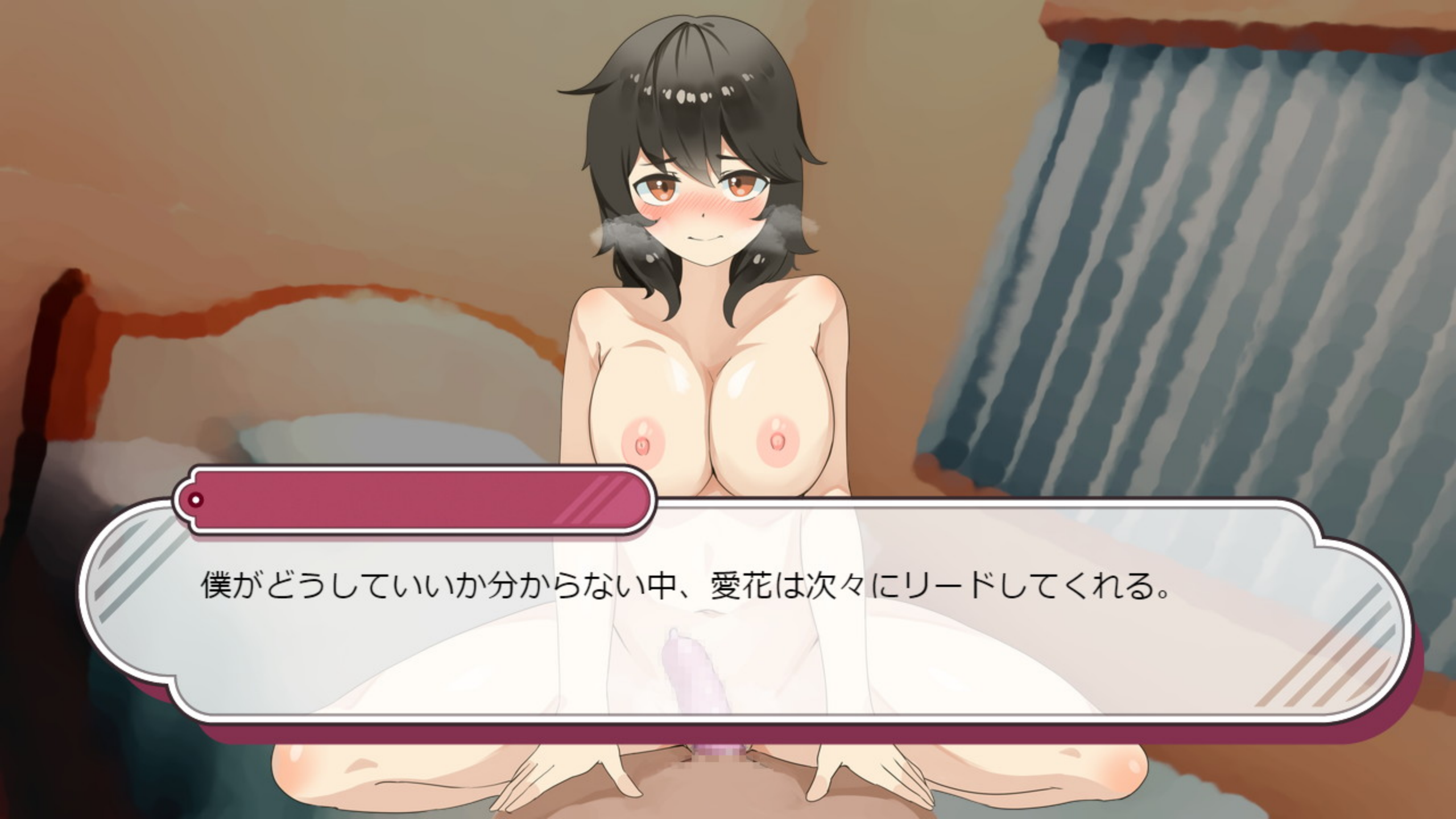

一応昔空手をやっていたし、今も筋トレはある程度続けている。

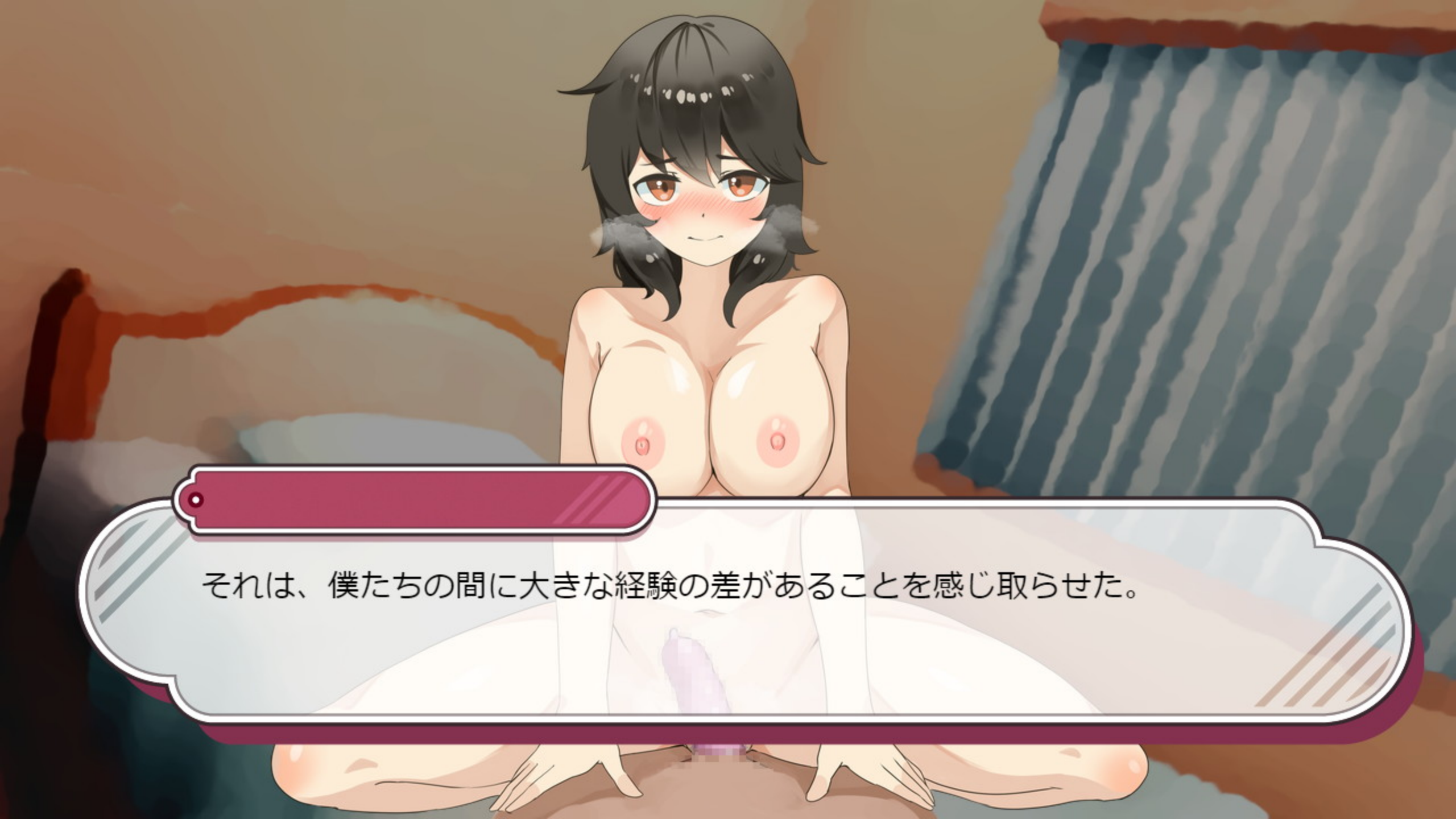

しかし、今は愛花に抵抗できず、気が付けばベッドに押し倒されていた。

水城 愛花
ゴムつけるね・・・

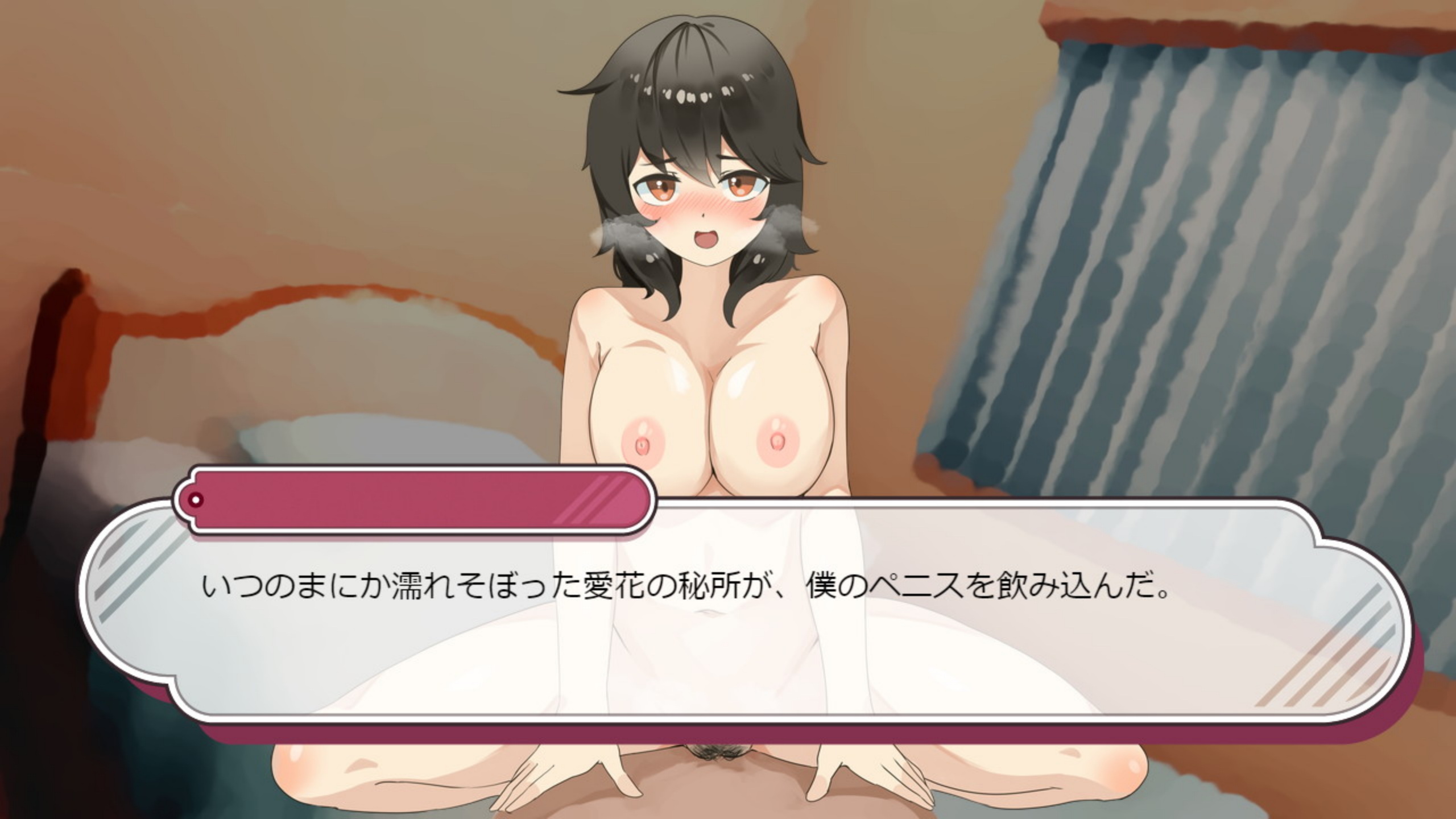
真
う、うん・・・

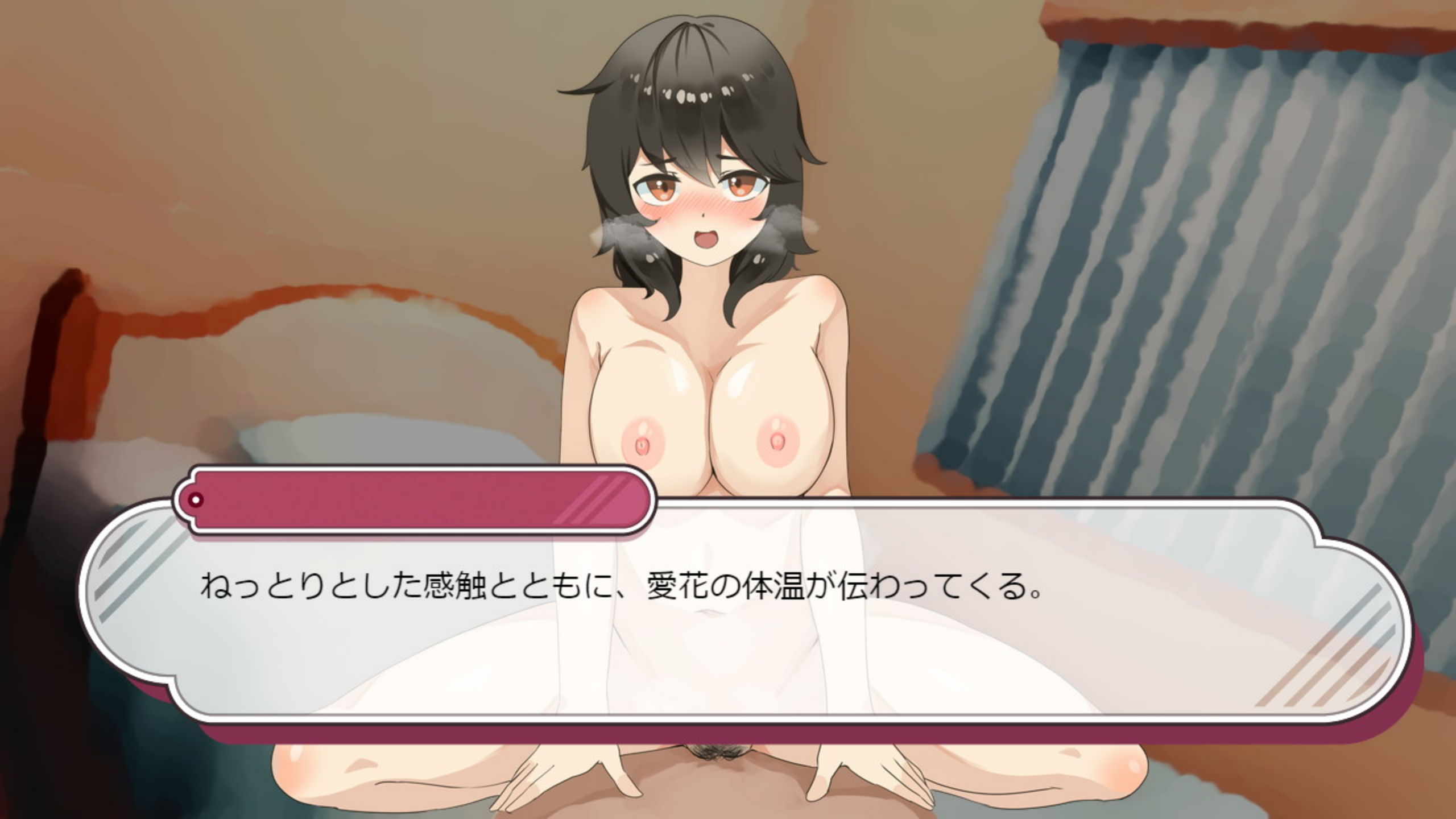

いつの間に手に持っていたのだろう。
愛花が持ってきたコンドームをつけられた。


僕がどうしていいか分からない中、愛花は次々にリードしてくれる。

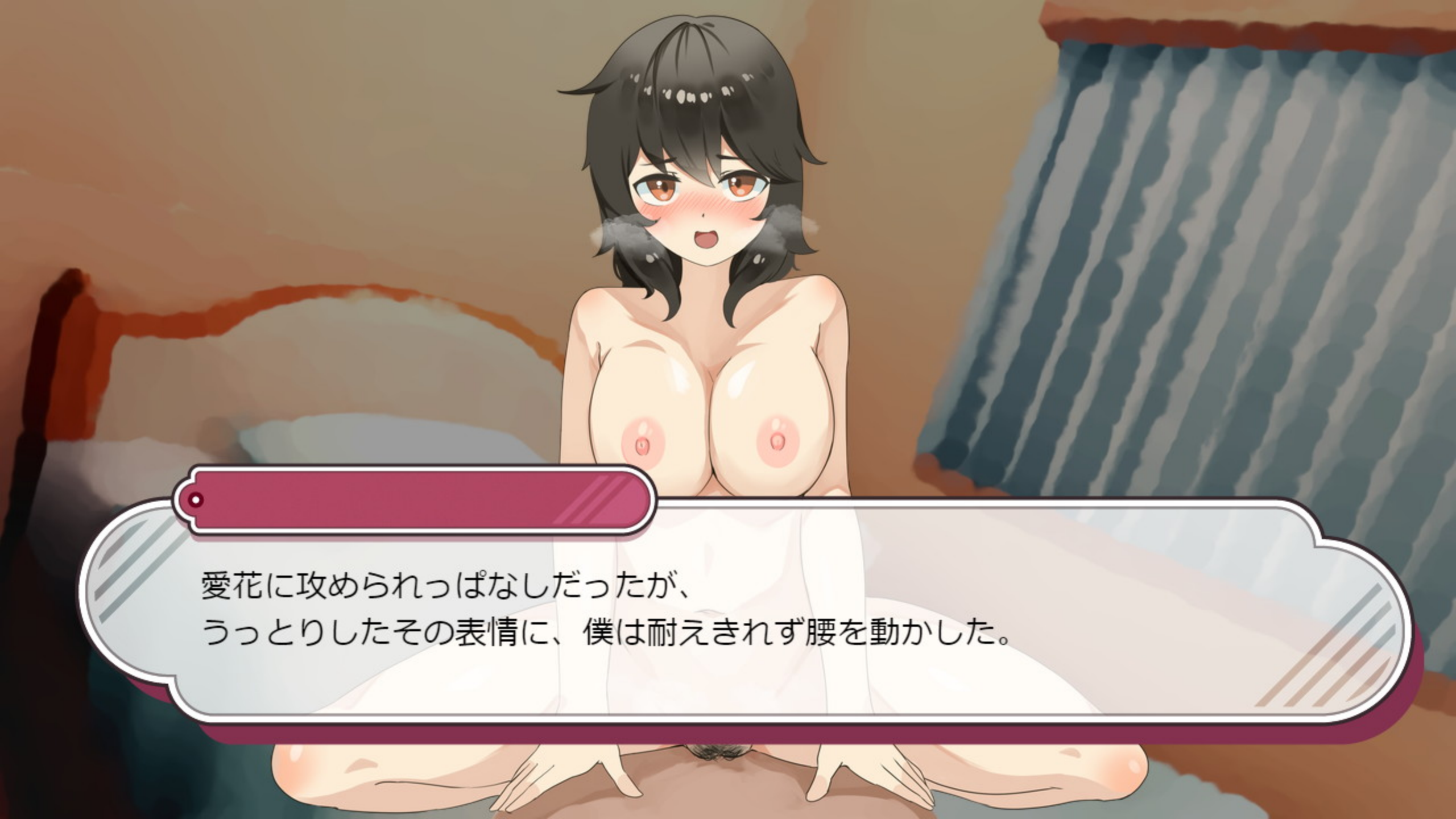

それは、僕たちの間に大きな経験の差があることを感じ取らせた。

水城 愛花
もう、いれちゃうね・・・

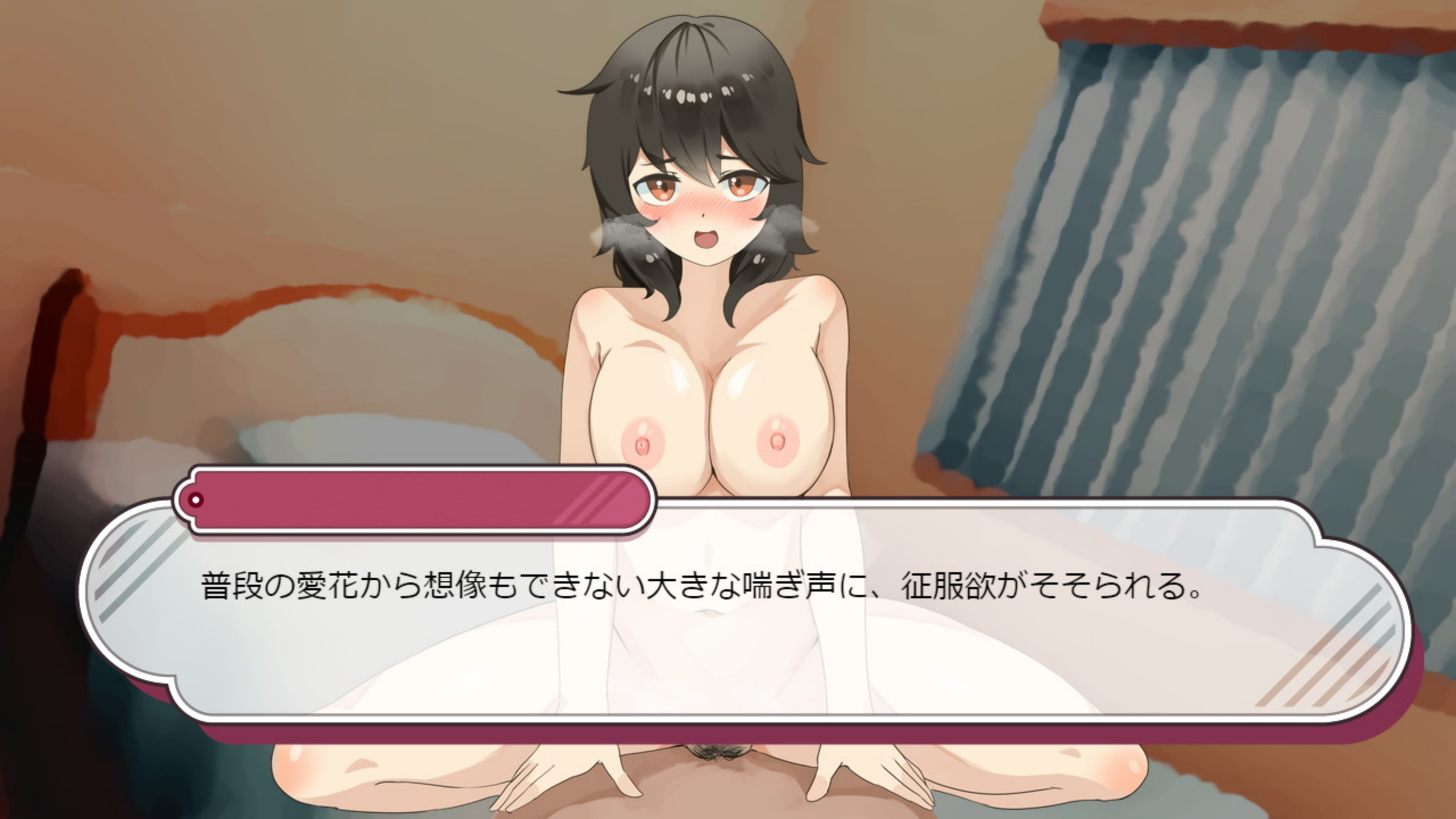

いつのまにか濡れそぼった愛花の秘所が、僕のペニスを飲み込んだ。

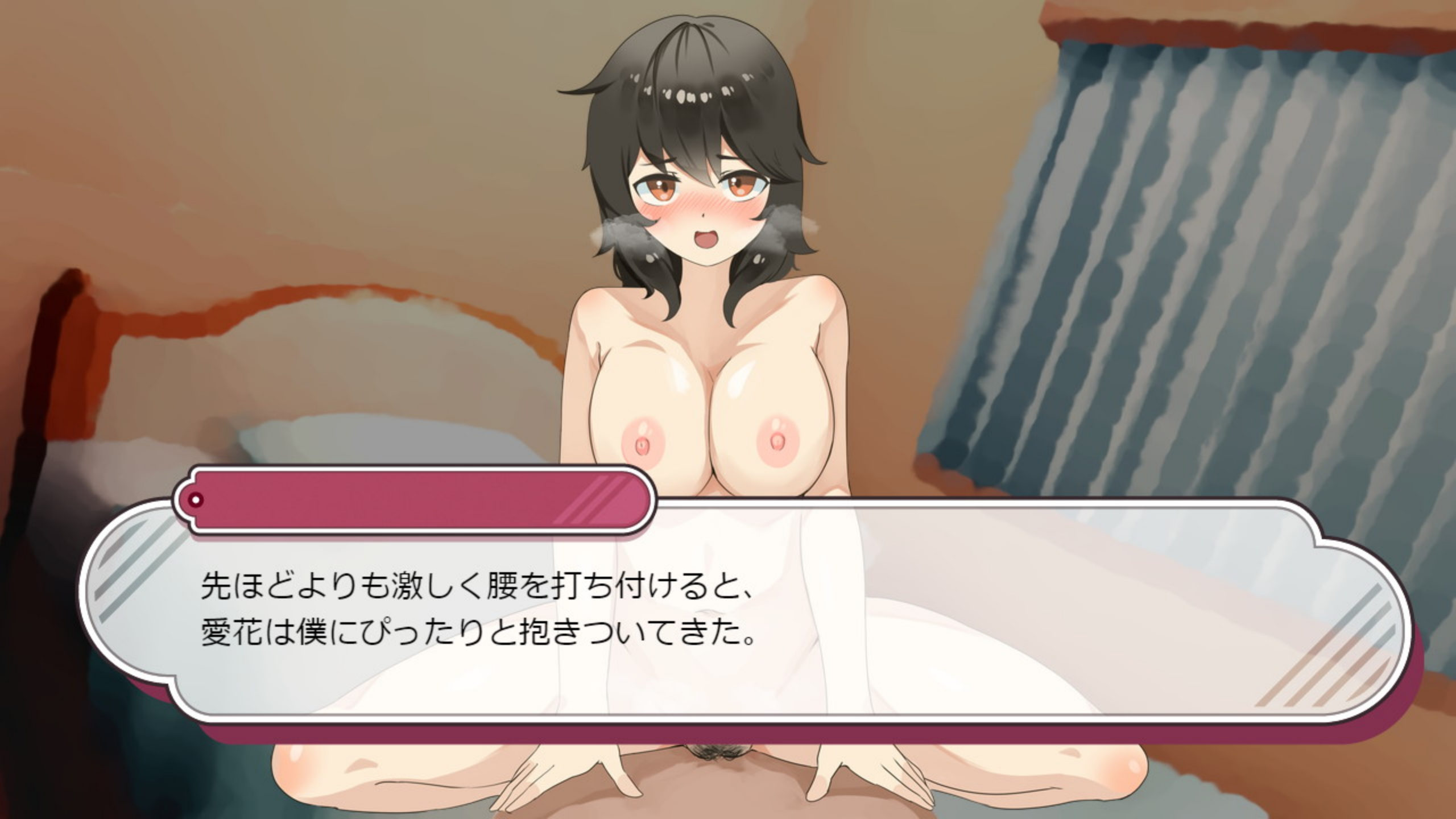

ねっとりとした感触とともに、愛花の体温が伝わってくる。

水城 愛花
あ、これ、奥まで入る・・・♡


愛花に攻められっぱなしだったが、
うっとりしたその表情に、僕は耐えきれず腰を動かした。

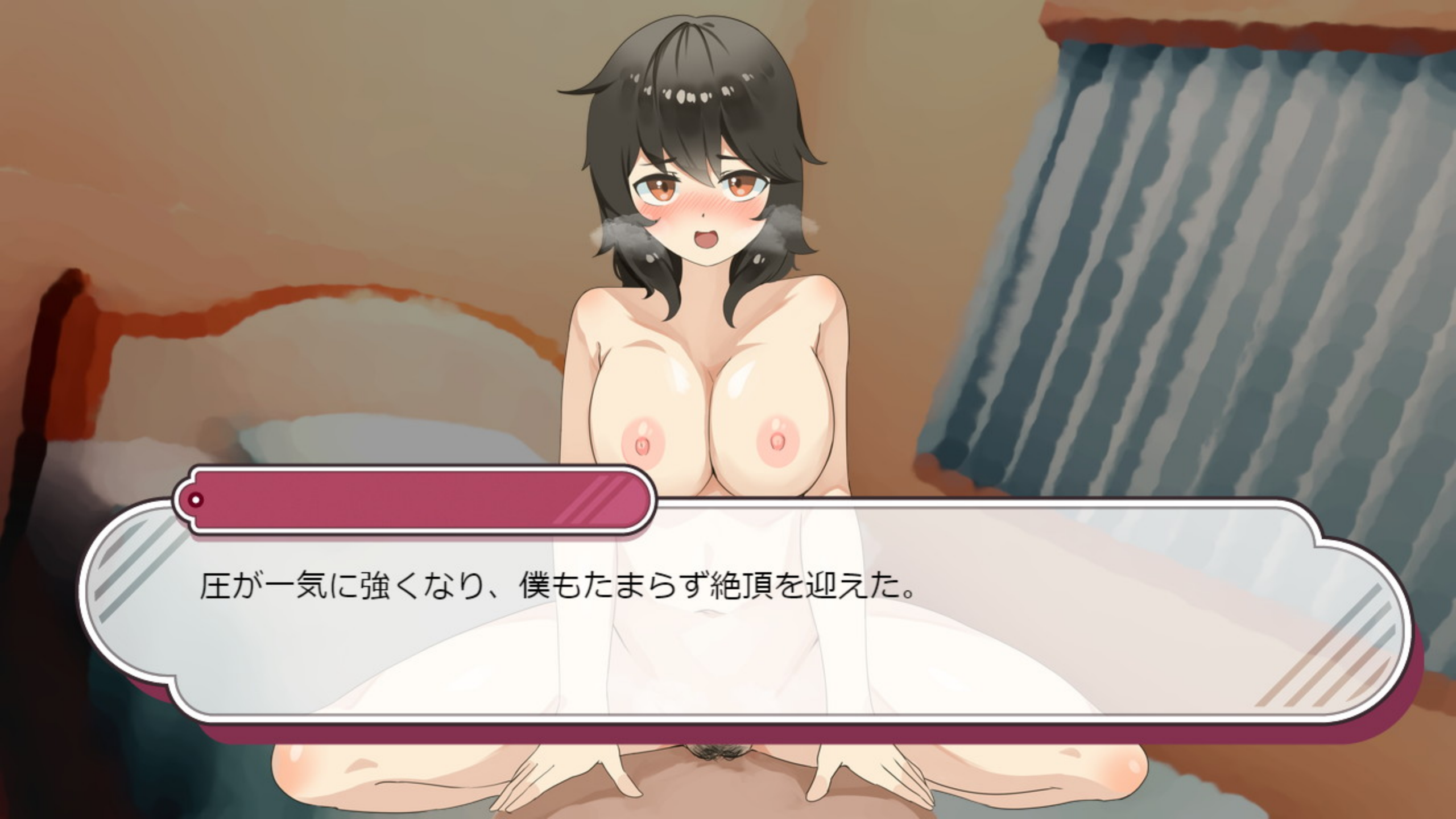
水城 愛花
あっ♡ それ、やばい♡


普段の愛花から想像もできない大きな喘ぎ声に、征服欲がそそられる。


先ほどよりも激しく腰を打ち付けると、
愛花は僕にぴったりと抱きついてきた。

水城 愛花
イク・・・イっちゃう♡

ぎゅうぎゅうと愛花の中が僕のペニスを締め上げる。


圧が一気に強くなり、僕もたまらず絶頂を迎えた。

水城 愛花

・・・はぁ、はぁ

二人で力なくベッドに横たわる。

初体験の興奮、今まで知らなかった愛花の表情を見られた満足、
いろんなものがないまぜになって、疲労と充足感に包まれる。

水城 愛花

まこちゃん・・・すごくよかったよ

真

うん、僕もすごく気持ちよかった・・・

愛花との行為はとても気持ちよかった。
それは嘘ではない。

ただ、行為中に見た愛花の表情・・・
あれが僕だけのものではないというのも気になっていた。

それに、愛花が時折見せる、
罪悪感があるような、物憂げな雰囲気も。

僕は本心から大丈夫だと伝えたが、
愛花は、自分だけ初めてではないことがまだ気にかかっているのだろうか。

. . .

考えが整理できていないまま、僕はある提案をしてしまった。

真

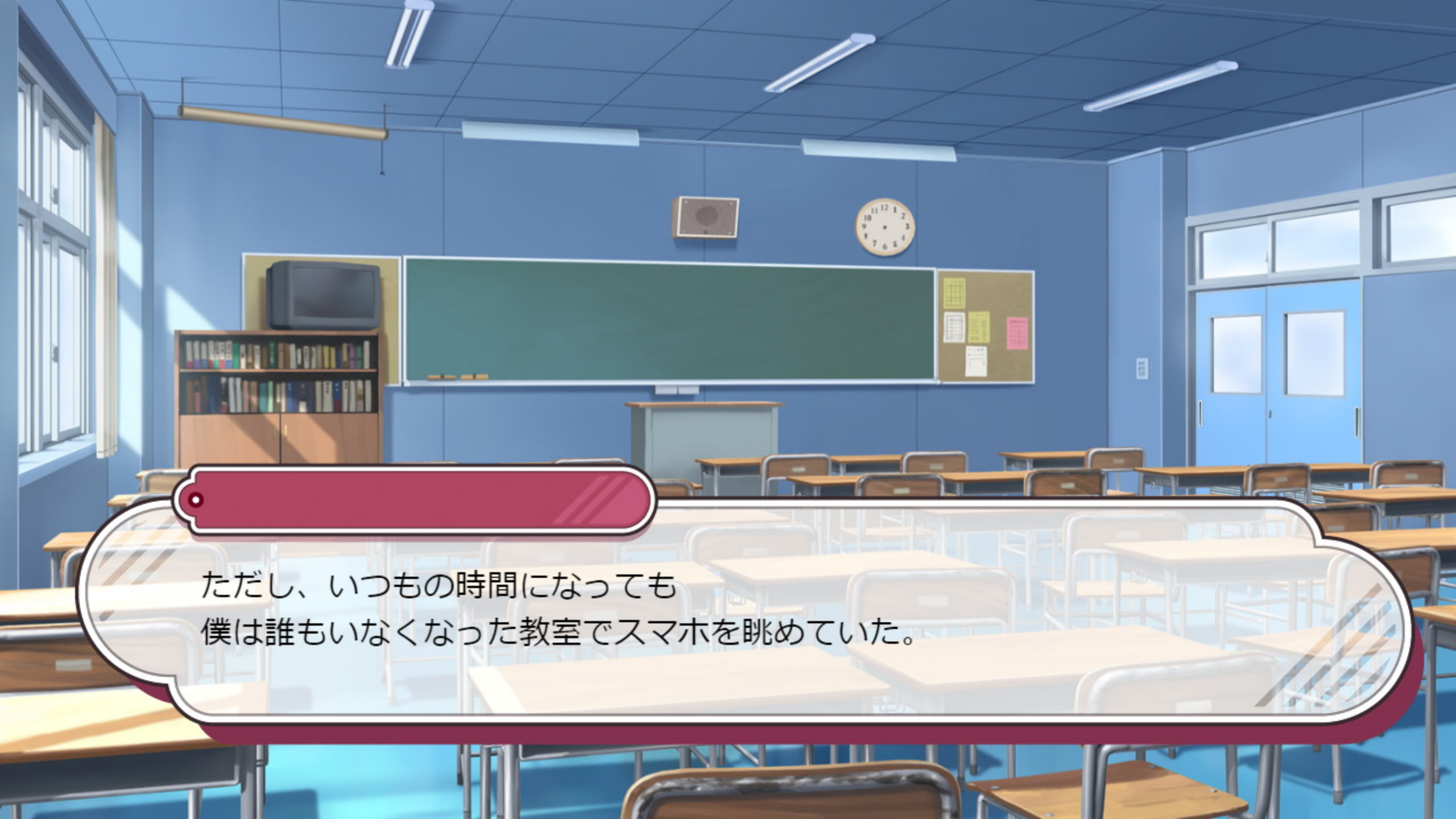
あのさ・・・
もし愛花がいやじゃなければなんだけど・・・

隠れビッチ彼女

頼んだら誰とでも寝取らせHしてくれる幼馴染

数日後。

今日も、愛花と帰る約束をしている。


ただし、いつもの時間になっても
僕は誰もいなくなった教室でスマホを眺めていた。

愛花からメッセージだ。

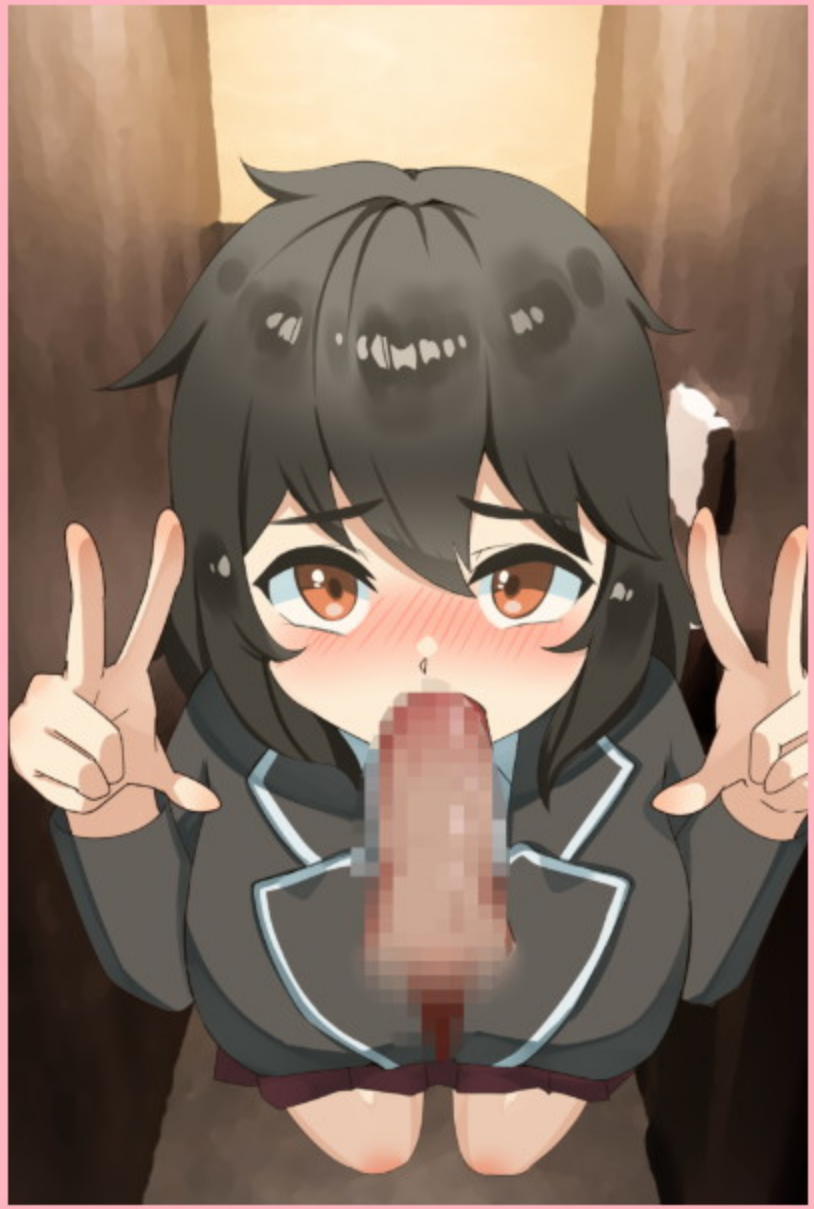
ほんとにいいんだよね？

ほんとにいいんだよね？

うん

ほんとにいいんだよね？

うん

じゃあ、始めるね

じゃあ、始めるね